

江道横穴墓群調査報告

— 平成8年度、江道地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査 ——

1998年3月

高岡市教育委員会

序

「江道横穴墓群」は高岡市街地の西側、岡吉地区江道の通称「高の宮」と呼ばれている所にあります。ここは砂質混岩の山が谷部に迫る急傾斜となっており、この崖面に構築された一群の横穴墓です。

宮永正運の近世隨筆文学の名作『越の下草』に「人穴」として記載されており、早くから注目されていたことが伺えます。

この横穴墓群については、荒堀が進みつつあったことと高岡市史の資料を得ることもあり、昭和30、31年に現地踏査と発掘調査が実施されました。これにより11基の横穴墓が確認されると共に、一つの横穴墓から13個体分の人骨の出土、全国的に珍しい骨角器の出土や特異な葬門の確認がなされました。昭和36年にはこれらの内の4基が市の指定史跡になりました。

この度、当地に急傾斜地崩壊対策工事が実施されることになり、一部の横穴墓が擁壁で覆われたり、景観も変わることから発掘調査を実施しました。今回の発掘調査では、新たに9基の横穴墓を確認しました。また馬の線刻画の発見等注目すべき成果もありました。

当市におきましては、昭和57・58年の頭川城ヶ平横穴墓群、平成7年の院内東横穴墓の発掘調査があり、この形態の墳墓の様相が判明しつつあります。

最後になりましたが、この調査に御協力頂きました、関係各位、地元のみなさまに感謝の意を表します。

平成10年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例　　言

1. 本書は、江道地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う、江道横穴墓群発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡土木事務所の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は富山県高岡市江道である。
4. 発掘調査は、平成8年6月3日から同年11月30日までである。
5. 報告書作成作業は、平成9年度事業として実施した。
6. 調査関係者は次のとおりである。

文化財課長；田村靖彦

〔埋蔵文化財係〕

主幹兼係長；石浦正雄

係員；山口辰一、荒井隆、根津明義、太田浩司（平成9年4月～）

7. 現地調査及び整理・報告書作成作業は、山口と荒井が担当した。

8. 現地調査及び報告書作成においては以下の各氏から指導・協力を得た。

（順不同、敬称略）

池上悟、大野究、京田良志、藏持大輔、小島俊彰、塚原二郎

寺山正雄、中谷ふみ、中山晋、西井龍儀、服部久美、服部敬史

林寺嚴州、藤田富士夫、古岡英明、細川信二、松崎元樹、水上信好

水谷徳次郎、邑木順亮、森浩一

9. 人骨については、森沢佐蔵氏（富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室助教授）に鑑定及び執筆していただいた。

10. 本書の執筆は、山口が担当した。

高岡市埋蔵文化財調査報告第3冊

江道横穴墓群調査報告

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査概観	9
第2章 遺 構	15
第1節 上段の横穴墓群	15
【第1号墓～第6号墓】	
第2節 下段東側の横穴墓群	20
【第11号墓～第15号墓】	
第3節 下段西側の横穴墓群	24
【第21号墓～第29号墓】	
第3章 遺 物	33
第1節 土器類	33
第2節 その他の遺物	37
第4章 人 骨	43
第5章 結 語	67

図面目次

- 図面1 遺跡実測図 岡面配置図 (1/600)
- 図面2 遺跡実測図 横穴墓群全体平面図 (1/400)
- 図面3 遺跡実測図 横穴墓群全体正面図 (1/400)
- 図面4 遺跡実測図 横穴墓群東側平面図 (1/200)
- 図面5 遺跡実測図 横穴墓群東側正面図 (1/200)
- 図面6 遺跡実測図 横穴墓群西側平面図 (1/200)
- 図面7 遺跡実測図 横穴墓群西側正面図 (1/200)
- 図面8 遺構実測図 第1号墓全休図 [1] (1/40)
- 図面9 遺構実測図 第1号墓全休図 [2] (1/40)
- 図面10 遺構実測図 第2号墓全休図 (1/40)
- 図面11 遺構実測図 第3号墓全休図 (1/40)
- 図面12 遺構実測図 第4号墓全休図 (1/40)
- 図面13 遺構実測図 第5号墓全休図 [1] (1/40)
- 図面14 遺構実測図 第5号墓全休図 [2] (1/40)
- 図面15 遺構実測図 第6号墓全休図 (1/40)
- 図面16 遺構実測図 第11号墓全休図 (1/40)
- 図面17 遺構実測図 第12号墓全休図 (1/40)
- 図面18 遺構実測図 第12号墓遺物出土状態図 (1/20)
- 図面19 遺構実測図 第13号墓全休図 (1/40)
- 図面20 遺構実測図 第14号墓全休図 (1/40)
- 図面21 遺構実測図 第14号墓遺物出土状態図 (1/20)
- 図面22 遺構実測図 第15号墓全休図 (1/40)
- 図面23 遺構実測図 第15号墓遺物出土状態図 [1] (1/20)
- 図面24 遺構実測図 第15号墓遺物出土状態図 [2] (1/20)
- 図面25 遺構実測図 第21号墓全休図 (1/40)
- 図面26 遺構実測図 第21号墓土壙断面図 (1/40)
- 図面27 遺構実測図 第21号墓遺物出土状態図 (1/20)
- 図面28 遺構実測図 第22号墓全休図 (1/40)
- 図面29 遺構実測図 第22号墓上層断面図 (1/40)
- 図面30 遺構実測図 第22号墓遺物出土状態図 [1] (1/20)
- 図面31 遺構実測図 第22号墓遺物出土状態図 [2] (1/20)
- 図面32 遺構実測図 第23号墓全休図 (1/40)
- 図面33 遺構実測図 第23号墓上層断面図 (1/40)
- 図面34 遺構実測図 第23号墓遺物出土状態図 [1] (1/20)
- 図面35 遺構実測図 第23号墓遺物出土状態図 [2] (1/20)
- 図面36 遺構実測図 第23号墓遺物出土状態図 [3] (1/20)
- 図面37 遺構実測図 第23号墓遺物出土状態図 [4] (1/20)

- 図面38 遺構実測図 第24号墓全体図 (1/40)
 図面39 遺構実測図 第24号墓土層断面図 (1/40)
 図面40 遺構実測図 第24号墓遺物出土状態図 [1] (1/20)
 図面41 遺構実測図 第24号墓遺物出土状態図 [2] (1/20)
 図面42 遺構実測図 第24号墓遺物出土状態図 [3] (1/20)
 図面43 遺構実測図 第27号墓全体図 (1/40)
 図面44 遺構実測図 第27号墓遺物出土状態図 (1/20)
 図面45 遺構実測図 第28号墓全体図 (1/40)
 図面46 遺構実測図 第29号墓全体図 (1/40)
 図面47 遺構実測図 第29号墓遺物出土状態図 (1/20)
 図面48 遺構実測図 第29号墓線刻図 (1/10)
 図面49 遺物実測図 土器類 (1/3)
 図面50 遺物実測図 土器類 (1/3)
 図面51 遺物実測図 上器類 (1/3)
 図面52 遺物実測図 上器類 (1/3)
 図面53 遺物実測図 土器類 (1/3)
 図面54 遺物実測図 鉄製品 (1/2)
 図面55 遺物実測図 鉄製品 (1/2)
 図面56 遺物実測図 鉄製品 (1/2)
 図面57 遺物実測図 石製品 (1/2)
 図面58 遺物実測図 ガラス製品 (1/2)
 図面59 遺物実測図 銅製品、骨角製品 (1/2)
 図面60 遺物実測図 骨角製品 (1/2)

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 1. 遺蹟 (東)
 2. 遺蹟 (西)
 図版 2 遺跡 1. 下段地 [<×全景 (西)
 2. 下段地区全景 (南)
 図版 3 遺跡 1. 下段地区近景 (南西)
 2. 下段地区近景 (南東)
 図版 4 遺跡 1. 第2～5号墓全景 (南東)
 2. 第2～5号墓全景 (南西)
 図版 5 遺構 1. 第11号墓全景 (南東)
 2. 第12号墓全景 (南)
 図版 6 遺構 1. 第13号墓全景 (南)
 2. 第14号墓全景 (南)

- 図版 7 遺構 1. 第15号墓遺物出土状態（南西）
2. 第15号墓掘り上げ状態（南）
- 図版 8 遺構 1. 第21号墓掘り上げ状態（南西）
2. 第22号墓掘り上げ状態（南西）
- 図版 9 遺構 1. 第22号墓遺物出土状態（南西）
2. 第22号墓遺物出土状態（南南西）
- 図版 10 遺構 1. 第23号墓土層堆積状態（南西）
2. 第23号墓掘り上げ状態（南）
- 図版 11 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態（西）
2. 第23号墓遺物出土状態（東）
- 図版 12 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態（南）
2. 第23号墓遺物出土状態（南東）
- 図版 13 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態（南）
2. 第23号墓遺物出土状態（南東）
- 図版 14 遺構 1. 第24号墓遺物出土状態（南）
2. 第24号墓遺物出土状態（南東）
- 図版 15 遺構 1. 第27号墓検出状態（南東）
2. 第27号墓掘り上げ状態（南西）
- 図版 16 遺構 1. 第29号墓入口部近景（南）
2. 第29号墓縫刻面近景（南）
- 図版 17 遺跡 1. 造景（南東）
2. 造景（南西）
- 図版 18 遺跡 1. 全景（西南西）
2. 全景（東）
- 図版 19 遺跡 1. 下段地区全景（南西）
2. 下段地区全景（南西）
- 図版 20 遺跡 1. 下段地区全景（南）
2. 下段地区全景（東南東）
- 図版 21 遺跡 1. 調査開始時の状態（南東）
2. 調査開始時の状態（南東）
3. 調査開始時の状態（南）
- 図版 22 遺跡 1. 調査風景、樹木の伐採（南西）
2. 調査風景、樹木の伐採（南西）
3. 調査風景、樹木の伐採（南西）
- 図版 23 遺跡 1. 調査風景、覆土の除去作業（南西）
2. 調査風景、覆土の除去作業（南西）
3. 調査風景、覆土の除去作業（南西）
- 図版 24 遺跡 1. 調査風景、開口している横穴墓の清掃（南西）
2. 調査風景、埋もれている横穴墓の検出（南西）
3. 調査風景、埋もれている横穴墓の検出（南西）
- 図版 25 遺跡 1. 調査風景、写真のための清掃（南西）

2. 調査風景、写真撮影（南西）
3. 調査風景、写真撮影（南西）
- 図版 26 遺跡 1. 第1～5号墓全景（南西）
2. 第2～5号墓全景（南東）
- 図版 27 遺構 1. 第1号墓全景（南）
2. 第1号墓全景（南西）
- 図版 28 遺構 1. 第2号墓全景（南）
2. 第2号墓全景（南西）
- 図版 29 遺構 1. 第3号墓全景（南）
2. 第3号墓全景（南西）
- 図版 30 遺構 1. 第4号墓全景（南）
2. 第4号墓全景（南西）
- 図版 31 遺構 1. 第5号墓全景（南）
2. 第5号墓全景（南西）
- 図版 32 遺構 1. 第6号墓全景（南）
2. 第6号墓調査風景（南西）
3. 第6号墓調査風景（南東）
- 図版 33 遺構 1. 第11号墓全景（南西）
2. 第12号墓全景（南東）
- 図版 34 遺構 1. 第13号墓全景（南）
2. 第14号墓全景（南）
- 図版 35 遺構 1. 第13号墓調査風景（南）
2. 第14号墓遺物出土状態、須恵器・环身（南西）
3. 第14号墓調査風景（南）
- 図版 36 遺構 1. 第15号墓検出状態（南西）
2. 第15号墓検出状態、前壁付近（南西）
- 図版 37 遺構 1. 第15号墓遺物出土状態、上層（南西）
2. 第15号墓遺物出土状態、上層（南）
- 図版 38 遺構 1. 第15号墓遺物出土状態、下層（南西）
2. 第15号墓遺物出土状態、最下層（南西）
- 図版 39 遺構 1. 第15号墓遺物出土状態、耳環・刀子等（南西）
2. 第15号墓遺物出土状態、人骨（南西）
- 図版 40 遺構 1. 第15号墓掘り上げ状態（南東）
2. 第15号墓掘り上げ状態（南西）
- 図版 41 遺構 1. 第15号墓調査風景（西）
2. 第15号墓調査風景（南西）
3. 第15号墓調査風景（南西）
- 図版 42 遺構 1. 第21号墓検出状態（南）
2. 第21号墓遺物出土状態、耳環（南西）
- 図版 43 遺構 1. 第21号墓掘り上げ状態（南）
2. 第21号墓掘り上げ状態（南西）

- 図版 44 遺構 1. 第21号墓調査風景（南東）
2. 第21号墓調査風景（南西）
3. 第21号墓調査風景（南西）
- 図版 45 遺構 1. 第22号墓検出状態（南）
2. 第22号墓土層堆積状態（南西）
- 図版 46 遺構 1. 第22号墓遺物出土状態、上層一銅鏡（北西）
2. 第22号墓遺物出土状態、上層一玄室右奥側（南）
3. 第22号墓遺物出土状態、上層一玄室右中央（南）
- 図版 47 遺構 1. 第22号墓遺物出土状態、須恵器等（南西）
2. 第22号墓遺物出土状態、須恵器等（南西）
3. 第22号墓遺物出土状態、須恵器等（南西）
- 図版 48 遺構 1. 第22号墓遺物出土状態、須恵器（西）
2. 第22号墓遺物出土状態、須恵器（西）
3. 第22号墓遺物出土状態、須恵器（西）
- 図版 49 遺構 1. 第22号墓遺物出土状態、直刀（南）
2. 第22号墓遺物出土状態、直刀（南東）
- 図版 50 遺構 1. 第22号墓掘り上げ状態（南）
2. 第22号墓掘り上げ状態（南東）
- 図版 51 遺構 1. 第22号墓調査風景（南）
2. 第22号墓調査風景（南西）
3. 第22号墓調査風景（南西）
- 図版 52 遺構 1. 第23号墓検出状態（南西）
2. 第23号墓土層断面（南西）
- 図版 53 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態、上層（南西）
2. 第23号墓遺物出土状態、上層（南東）
- 図版 54 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態、上層（南）
2. 第23号墓遺物出土状態、上層（南東）
3. 第23号墓遺物出土状態、上層（南）
- 図版 55 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態、下層（南）
2. 第23号墓遺物出土状態、下層（南西）
- 図版 56 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態、最下層（西）
2. 第23号墓遺物出土状態、最下層（南西）
- 図版 57 遺構 1. 第23号墓遺物出土状態、最下層一耳環・切子玉等（南）
2. 第23号墓遺物出土状態、最下層一丸玉等（南）
- 図版 58 遺構 1. 第23号墓掘り上げ状態（東）
2. 第23号墓掘り上げ状態（西）
- 図版 59 遺構 1. 第23号墓調査風景（南西）
2. 第23号墓開発風景（南東）
3. 第23号墓調査風景（南東）
- 図版 60 遺構 1. 第23号墓調査風景（南）
2. 第23号墓調査風景（南）

3. 第23号墓調査風景（南西）
- 図版 61 遺構 1. 第24号墓検山状態（南）
2. 第24号墓十層堆積状態（南）
- 図版 62 遺構 1. 第24号墓遺物出土状態、須恵器鋗鉗（南東）
2. 第24号墓遺物出土状態、須恵器鋗鉗（南東）
- 図版 63 遺構 1. 第24号墓遺物出土状態（南）
2. 第24号墓遺物出土状態（南東）
- 図版 64 遺構 1. 第24号墓遺物出土状態、須恵器杯蓋等（北西）
2. 第24号墓遺物出土状態、須恵器杯蓋等（南）
3. 第24号墓遺物出土状態、須恵器杯蓋等（西）
- 図版 65 遺構 1. 第24号墓遺物出土状態、人骨等（北西）
2. 第24号墓遺物出土状態、人骨等（南）
3. 第24号墓遺物出土状態、人骨等（南）
- 図版 66 遺構 1. 第24号墓掘り上げ状態（南）
2. 第24号墓掘り上げ状態（南東）
- 図版 67 遺構 1. 第24号墓調査風景（南）
2. 第24号墓調査風景（南西）
3. 第24号墓調査風景（南西）
- 図版 68 遺構 1. 第24号墓調査風景（南）
2. 第24号墓調査風景（南）
3. 第24号墓調査風景（南）
- 図版 69 遺構 1. 第25号墓検出状態（南西）
2. 第25号墓検出状態（南東）
- 図版 70 遺構 1. 第26号墓検山状態（南）
2. 第26号墓検出状態（南東）
- 図版 71 遺構 1. 第27号墓検出状態（南東）
2. 第27号墓検出状態（南西）
- 図版 72 遺構 1. 第27号墓遺物出土状態（南）
2. 第27号墓遺物出土状態（南東）
- 図版 73 遺構 1. 第27号墓遺物出土状態、耳環等（南西）
2. 第27号墓遺物出土状態、耳環等（南西）
- 図版 74 遺構 1. 第27号墓遺物出土状態、短剣（北東）
2. 第27号墓遺物出土状態、ドブ貝（南東）
- 図版 75 遺構 1. 第27号墓掘り上げ状態（南東）
2. 第27号墓掘り上げ状態（南）
- 図版 76 遺構 1. 第27号墓調査風景（南東）
2. 第27号墓調査風景（南）
3. 第27号墓調査風景（南東）
- 図版 77 遺構 1. 第28号墓全景（南）
2. 第28号墓調査風景（南西）
3. 第28号墓調査風景（南西）

- 図版 78 遺構 1. 第29号墓検出状態（南）
2. 第29号墓線刻画近景（南）
- 図版 79 遺構 1. 第29号墓全景（南）
2. 第29号墓全景（東南東）
- 図版 80 遺構 1. 第29号墓遺物出土状態（南）
2. 第29号墓遺物出土状態（南東）
3. 第29号墓遺物出土状態（南西）
- 図版 81 遺構 1. 第29号墓見返り（北）
2. 第29号墓玄室前壁付近（北）
3. 第29号墓玄室前壁付近（北）
- 図版 82 遺構 1. 第29号墓調査風景（南）
2. 第29号墓調査風景（南東）
3. 第29号墓調査風景（南）
- 図版 83 遺物 土器類
- 図版 84 遺物 十字頸
- 図版 85 遺物 土器頸
- 図版 86 遺物 上器頸
- 図版 87 遺物 土器頸
- 図版 88 遺物 土器頸
- 図版 89 遺物 鉄製品
- 図版 90 遺物 鉄製品
- 図版 91 遺物 鉄製品、銅製品
- 図版 92 遺物 1. ガラス製品
2. 石製品
- 図版 93 遺物 1. 銅製品
2. 骨角製品
- 図版 94 遺物 1. 骨角製品
2. 骨角製品
- 図版 95 人骨 第15号墓出土人骨
- 図版 96 人骨 第15号墓出土人骨
- 図版 97 人骨 1. 第21号墓出土人骨
2. 第22号墓出土人骨
- 図版 98 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版 99 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版100 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版101 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版102 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版103 人骨 第23号墓出土人骨（頭蓋骨）
- 図版104 人骨 第23号墓出土人骨（下顎骨）
- 図版105 人骨 第23号墓出土人骨（下顎骨）
- 図版106 人骨 第23号墓出土人骨（A群出土人骨）

- 図版107 人骨 第23号墓出土人骨（B群出土人骨）
- 図版108 人骨 第23号墓出土人骨（B群出土人骨）
- 図版109 人骨 1. 第23号墓出土人骨（C群出土人骨）
2. 第23号墓出土人骨（D群出土人骨）
3. 第23号墓出土人骨（E群出土人骨）
- 図版110 人骨 第23号墓出土人骨（E群出土人骨）
- 図版111 人骨 第24号墓出土人骨
- 図版112 人骨 第27号墓出土人骨

挿 図 目 次

第1図 道路位置図〔1〕(1/15万)	2
第2図 道路位置図〔2〕(1/5万)	3
第3図 横穴古墳分布図(1/600)	5
第4図 道路地図〔1〕(1/1万5千)	6
第5図 道路地図〔2〕(1/1万5千)	7
第6図 工事区域位置図(1/7,500)	9
第7図 調査地区位置図(1/5,000)	10
第8図 横穴古墳分布図(1/1,000)	12
第9図 第23号墓木棺配置推定図(1/20)	27
第10図 第23号墓玉類等出土状態図(1/10)	28
第11図 横穴墓分布区分図(1/500)	68
第12図 横穴墓平面形一覧図(1/200)	72
第13図 須恵器変遷図(1/6)	78

挿 表 目 次

第1表 横穴墓名称一覧表	13
第2表 ガラス丸玉一覧表	41
第3表 横穴墓構造一覧表	70
第4表 人骨個体別一覧表	74

別 表 目 次

別表 鑑定人骨一覧表 58

調査参加者名簿

発掘

上田工、尾山久美子、垣地慶子、小林央、佐野寛、新谷晴紀子、杉本広政、高田えみ子、田中明、田辺幸代
寺井久子、土合良子、道谷美奈子、中村恭子、橋真理子、林浩謙、広沢隆太郎、藤城典紀子、前田武蔵、前田浩美
水外一郎、宮下奈津子、山城一夫

整理

池田宏子、池守凡子、大庭真起子、大田欣和、岡田一広、岡本真由美、小形理香、小竹由紀子、尾山久美子
折恵美子、垣地慶子、加治勘子、河内由夏、木原和美、京田直子、小島善雄、小林央、式上曉子、新谷晴紀子
杉村いく子、高木麻里、高田えみ子、竹腰優子、橋英公子、田辺幸代、谷内桜子、寺井久子、寺下晶子、土合良子
道谷美奈子、中村恭子、西本真山美、畠田朋江、荻原京、幡薫、皇后暉美、針原美佳、水見智子、福澤雪、藤木麗
放生干鶴、塚田月子、三浦千秋、三國世理子、三島幸代、水谷祐子、宮田洋子、明前雅江、向井美江、村井和佳子
村中由加利、森亞希、矢出美千尋、山田宮子、山本好美、芳川ちひろ

事務

片岡千賀子

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 環境

江道

西山丘陵より発して開析谷をなし、小矢部川へ流れ込んでいる河川の一つに広谷川がある。この河川の形成する谷部が平野部へ出る手前の左岸に江道横穴墓群のある江道集落が位置している。この谷の山裾を縫うように県道高岡羽咋線が走り江道集落の奥の高岡市西広谷地区や水見町を通り、宝達丘陵の尾根を貫き、石川県志賀町を経て羽咋市へと達している。

江道地区は江戸時代から明治22年までの江道村であり、その後は国吉村に所属した。昭和26年に国吉村が高岡市と合併することに伴い、高岡市の大字となり現在に至っている。東側すなわち平野部側は笹八口（旧笹八口村）で、西側すなわち山側は境（旧境村）である。

国吉

明治22年に成立した国吉村は、高辻・笹八口・五十辻・江道・月野谷・手洗野・上八ヶ新・広川新・答野出・佐加野・加島新・鳥崎・細池・頭川・岩坪・境の16箇村と四日市村・八口村・答野島村・内島村の各一部を合併して成立したものである。昭和26年に高岡市と合併し、旧村はその大字となっている。国吉村は国吉郷に所属する村々が一つになったものであり、国吉の名は「国古名」として鎌倉～戦国時代の文献に見えるものである。国吉郷、国吉村は砺波郡、郡の分割後は西砺波郡に含まれてきた地域である。高岡市において北西地域の小矢部川左岸地域の一つである。この北東側は旧射水郡守山村の地域であり、南西側は旧砺波郡（西砺波郡）石堤村の地域である。北西側は西山丘陵が走り尾根筋の向う側は水見市域である。

国吉地内の北東部は、頭川川が流れる頭川谷であり、旧頭川村、旧岩坪村が位置する。古代の郡界もこの付近と推定され、ここまでが砺波郡とされている。この北東側は射水郡となり、近くには東大寺領紅葉園須加莊の比定地とされる所がある。南西部は広谷川が流れる付近まであり、旧境村・旧江道村・旧笹八口村・旧答野島村等が位置する。この南西側が石堤地域（旧石堤村）である。

北西側の丘陵地帯と南東側の田園地帯とかなる当國古地域は、北東側・南西側は丘陵を刻む主要な開析谷に挟まれ、南東側は小矢部川に面されている。このような地帯を古代以来いくつかの主要な道が通っていた。丘陵側部の山根道は古代北陸道以来の系譜をもつとされている。近世北陸道は小矢部川寄りの平野部を通っていたとされる。当地域の中核的村落である佐加野村は近世に宿駅とされていた。また、水量豊かな小矢部川は水運として大いに利用されてきた。

小矢部川

小矢部川は、石川県と富山県との境の大門山に発し、福光町網掛で平野部へ出る。砺波平野とこれに続く射水平野の西側を緩やかに曲流した後、二上山の南麓から東麓方向へ走り、高岡市伏木より富山湾へと注い

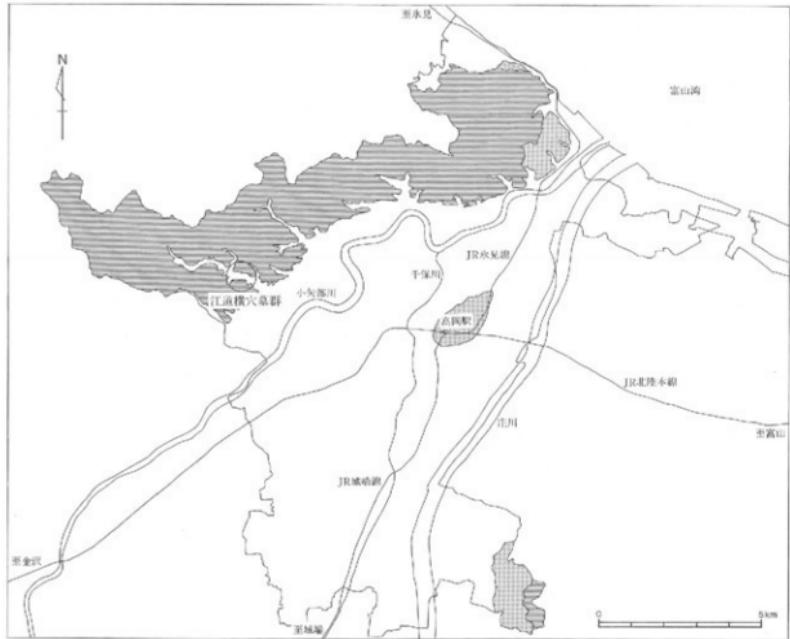
でいる。合流する大小の河川も多く、水量豊かな排水河川となっている。

国吉地域における小矢部川は、東側へ大きく蛇行している。すなわち平野部が大きく東側へ張り出す形となっており、丘陵部と川に挟まれた小矢部川左岸では比較的大きな平坦地が形成されている。旧佐加野村は河原の開拓によってできたとされている。

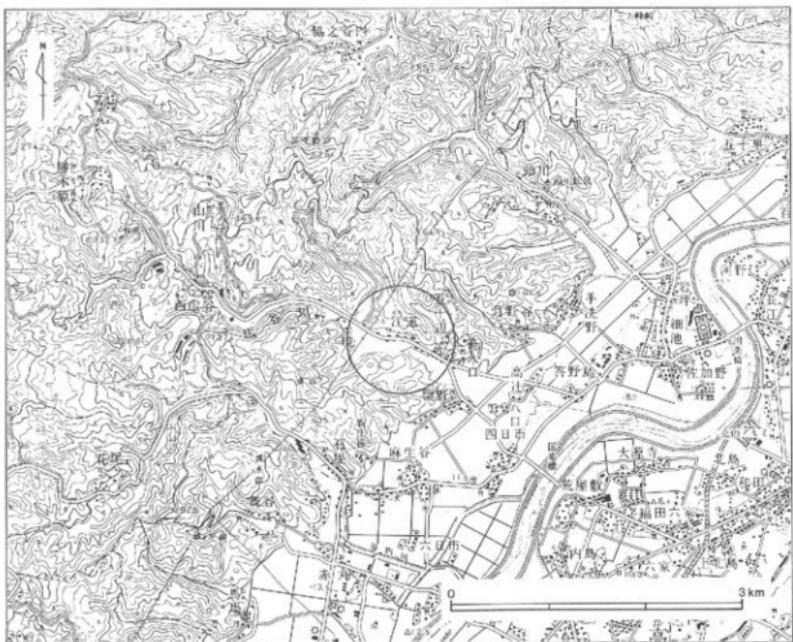
西山丘陵

高岡市の北西方の丘陵は「西山丘陵」と称されている。北東側は海老坂の断層崖を経て二上丘陵へと続き、南西側は福岡町や小矢部市内の丘陵、西砺波丘陵（石動丘陵）へと続いている。これらの丘陵は石川県境にある宝達山（637.4m）を取りまく宝達丘陵の南東側へ派生してきた丘陵と言いうことができる。国吉地域にある三千防山（264.2m）はこの丘陵の尾根筋にあるが、ここを通る尾根筋が高岡市域と氷見市域との行政界になっている。

西山丘陵は、新生代第三紀層の中新世、鮮新世の地層が主体をなしている。これを構成している土層の内、上層のものとして、泥岩層の谷内層があり、これを不整合に石灰質砂岩の頭川層が覆っている。江道横穴墓群や頭川城ヶ平横穴墓群はこれを基盤として構築されている。



第1図 遺跡位置図 [1] (1/15万)



第2図 遠時位置図〔2〕(1/5万)

2. 従来の知見

江道横穴墓群

江道横穴墓群は、昭和30・31年の現地踏査、発掘調査によって11基の横穴墓から構成されている横穴墓群であることが確認され、さらに今回の発掘調査によって新たに9基の横穴墓が検出され合計20基の横穴墓群であることが判明した。その存在については江戸時代から知られているものである。

江戸時代の認識

宮永正運（1732年生まれ、1803年没）は、江戸時代の農学者で高い教養人であった。農書の他に見聞録、俳句集を著している。『越の下草』はこの宮永正運の隨筆で、射水郡、砺波郡の地誌を始め、加越能各地の伝承や風物が記されている。数々の加筆を経て1786年（天明6年）に完成している。3巻の流布本と6巻の稿本がある。この中に「江道横穴墓群」の記述がある。

流布本には次のように記されている。「人穴（同郷境村山中にあり。）山中の壁を掘たるものか洞の如し。此處拾五人計安坐するほどの穴なり。凡山中处处如此ものありて、世皆穴ぐらといふ。乱世時の宝物・食物をかくせしものならん。又石墨郷西勝寺村山中には方僅か六尺計の正円なる穴三つも五も並ぶものあり。

是は往古の墓所ならんか。まれにはいろいろの磁器の壺・瓶などを掘り出せり。其にまたまつは（曲玉塗）といふ。内に曲玉又は品々の物あるも稀にはありといふ。」

稿本には次のように記されている。「人穴（境村領）山中に廟有。拾五人斗安置せるよし也。」

木倉豊信氏は、1951年（昭和26年）の流布本刊行の解説で興味の深いものとして上記のことと触れられ、「恐らく横穴占墳のことと見られる」と評価されている。

昭和31年の発掘調査

三木文雄氏は東京国立博物館在職中の1955年（昭和30年）10月17日に高岡市を訪問され、高岡市史料編纂委員会主任の利田一郎氏の案内で江道横穴墓群を視察された。三木氏は後に第4号墳と命名される横穴墓の入り口の石組を表門の遺構とされ、武藏台地南部に見られるものと同様なものと評価された。同年11月15日に高岡市史料編纂委員会に須恵器の瓶1点がもたらされた。後に第2号墳と命名される横穴墓の玄室入り口から出土したものである。一方、当時かなりの横穴墓が汚損されてしまっている上に、荒廃の度を増しつつあったので、市史編纂の詳しい史料を得る目的からも、発掘調査が計画された。

富山大学教授高瀬軍雄氏と同講師林大門氏を発掘担当者、和田一郎氏が発掘責任者となり、富山大学文学部日本史研究室の関係者の協力を得て発掘調査が昭和31年（1956年）に実施された。7月13日と7月18日の2日間で予備調査が実施され、確認されている横穴墓に対して番号が与えられた。

昭和8～9年（1933～1934年）に江道地区で林道工事が実施された。集落の背後の横穴墓のある崖面の小道を拡幅するもので、東側から西側へかけてすなわち山側へ向かって右側から左側にかけて登り背後の丘陵上に達するものである。横穴墓はこの林道の上方と下方に分布しており、上方（上段）のものには1号から始まる1桁の番号を、下方（下段）のものには11号から始まる2桁の番号が与えられた。それぞれ東側（向かって右側）に一番若い番号を与えられ、西側へ向かって順次命名された。これはこれより東側には横穴墓が存在しないとの判断によるものである。

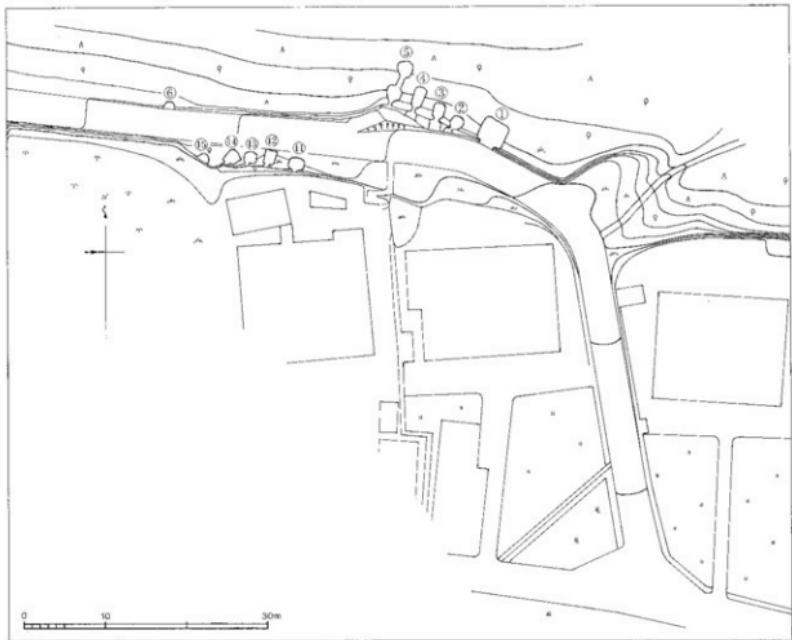
この作業によって、上段には第1号墳から第6号墳の6基の横穴墓の確認と命名、下段には第11号墳から第15号墳の5基の横穴墓の確認と命名がなされた。総計11基の横穴墓の確認である。

発掘調査は8月21、22日の両日になされ、計画等はその後も引き続いて実施された。実際の発掘は第2号墳と第3号墳で実施された。この2基を含め当時得られた知見で、形態や規模以外のものについては以下のとおりである。

第1号墳：拡大されての貯蔵庫。第2号墳：かなりの覆土があり、人骨の破片が露出して散在。出土遺物は、須恵器瓶1点、骨角器1点。人骨は13個体分、内男性11個体分、女性2個体分。第3号墳：荒廃したありさま。出土遺物は、刀子1点、鉄製円筒1点、鉄製円棒1点。人骨は2個体分。第4号墳：甘藷の貯蔵庫として使用されている。第5号墳：奥にもう一つ部屋が新設されて、甘藷の貯蔵庫として使用されている。第6号墳：盛芥の捨て場。第11号墳：乱掘されている。第12号墳：乱掘されている。第13号墳：乱掘されている。第14号墳：乱掘されている。須恵器の破片を表面採取。第15号墳：乱掘されている。若干の人骨を表面採取。

昭和31年の発掘調査は成果として次の点が注目された。

1. 石柱を組み合わせて作られた表門の遺構の所在で、從来関東地方にのみ認められたもので、北陸地方としては、初めての事例である。
2. 2号墳より13個体分の人骨が出上した。
3. 2号墳より出土した骨角器はめずらしいもの。



第3図 横穴古墳分布図 (1/600)

(『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』掲載の図面より、一部改変)

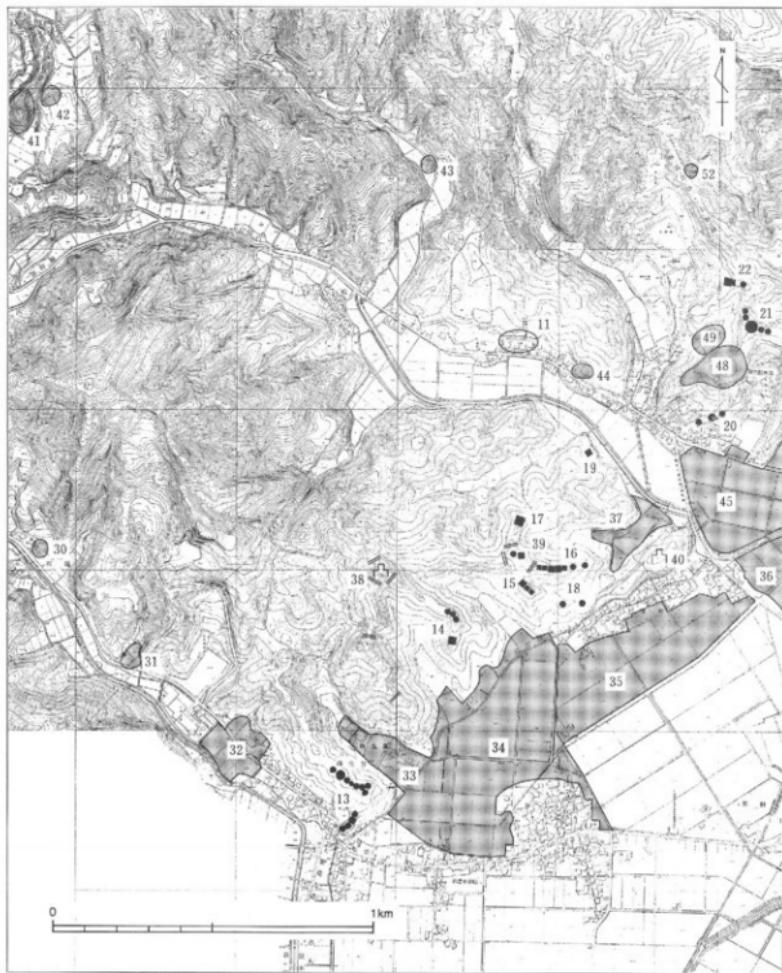
報告書の刊行

この昭和31年の発掘調査についての報告書は、『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』として、高瀬重雄編、高岡市史料編纂委員会刊として、昭和32年3月15日付けで発行されている。また昭和34年9月3日発行の『高岡市史・上巻』にも同様なことが記載されている。

第3図として『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』に掲載されている分布図を小した。この横穴墓群に触れた多くの著作にも引用されている図である。上側に第1～6号墳、下側に第11～15号墳がある。標高については今回の調査のものと比べると、約8m高くなっている。これは当時近くの道路上を仮原点として計測したもので、この仮原点が実際のものより高かったためである。横穴墓の番数については15番が一番大きい数字となっている。このため当横穴墓群が15基から構成されているものとの誤解を一部に生じた。

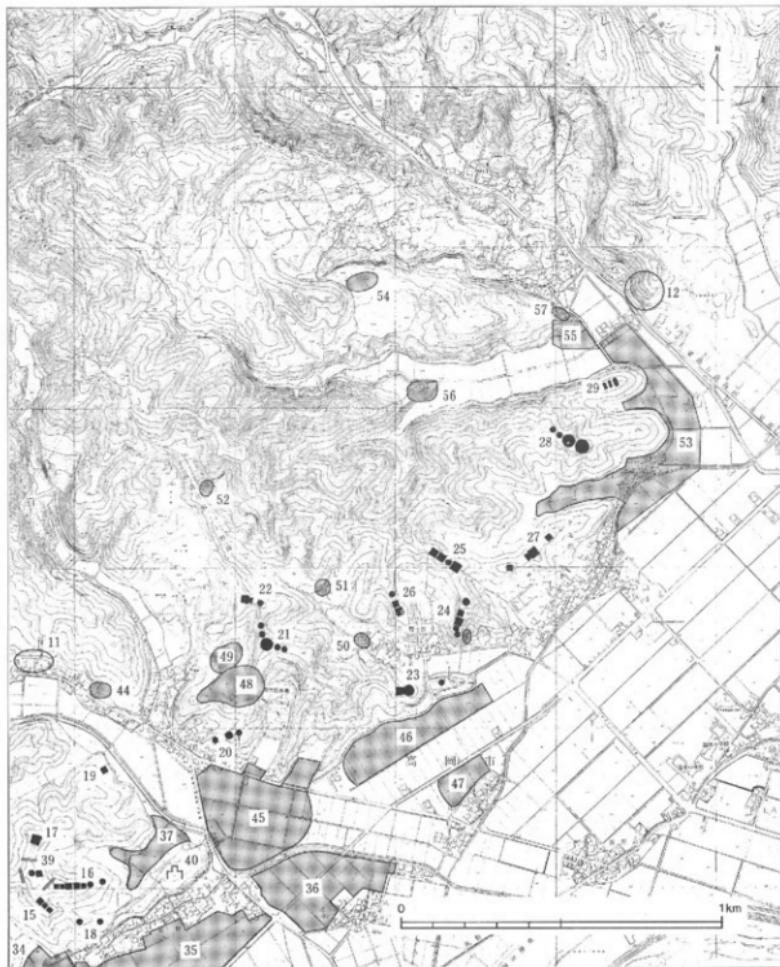
市の指定史跡

当時11基確認された江道横穴墓群の内4基、第2、3、4、5号墳は、昭和36年3月27日付けで市の指定史跡になり、今日に至っている。



第4図 遺跡地図 [1] (1/1万5千)

- 11. 江道横穴墓群、13. 石堤柏堂古墳群、14. 麻生谷殿谷内古墳群、15. 柴野口割Ⅰ古墳群、16. 柴野口割Ⅱ古墳群
- 17. 柴野口割Ⅲ古墳群、18. 宋野口割青古墳群、19. 柴野春日古墳、20. 船道堂古墳群、21. 男根古墳群、22. 笹八口谷内古墳群
- 23. 石堤谷内C遺跡、31. 石堤谷内A遺跡、32. 石堤炎光寺遺跡、33. 麻生谷新生園遺跡、34. 麻生谷遺跡、35. 柴野遺跡
- 36. 八口遺跡、37. 宋野守善寺遺跡、38. 麻生谷殿谷内城跡、39. 柴野ヶ平城跡、40. 柴野高の宮城跡、41. 大寺A遺跡
- 42. 大寺B遺跡、43. 境久寺遺跡、44. 円通庵遺跡、45. 笹八口遺跡、46. 篠八口砦跡、49. 船道堂遺跡、52. 月界谷石飛演跡



第5図 遺跡地図 [2] (1/1万5千)

11. 江道横穴墓群
12. 頸川城ヶ平横穴墓群
13. 梶野口削Ⅰ古墳群
14. 梶野口削Ⅱ古墳群
15. 梶野口削Ⅲ古墳群
16. 梶野口削Ⅳ古墳群
17. 梶野口削Ⅴ古墳群
18. 梶野口削Ⅵ古墳群
19. 梶野春日古墳群
20. 船越堂古墳群
21. 男傍古墳群
22. 笹八口谷内古墳群
23. 立山古墳群
24. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群
25. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群
26. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群
27. 倉谷古墳群
28. 四十九古墳群
29. 安居山古墳群
30. 麻生谷遺跡
31. 梶野遺跡
32. 八口遺跡
33. 梶野守善寺遺跡
34. 梶野城ヶ平城跡
35. 梶野高の宮城跡
36. 円酒坂遺跡
37. 榎八口遺跡
38. 宮田遺跡
39. 高辻遺跡
40. 梶野八口遺跡
41. 月野谷千草遺跡
42. 月野谷大谷内遺跡
43. 月野谷石飛遺跡
44. 開尽遺跡
45. 明田Ⅰ遺跡
46. 道ヶ谷内Ⅰ遺跡
47. 道ヶ谷内Ⅱ遺跡
48. 道ヶ谷内Ⅲ遺跡
49. 梶野口遺跡
50. 梶野口削Ⅰ遺跡
51. 梶野口削Ⅱ遺跡
52. 梶野口削Ⅲ遺跡
53. 梶野口削Ⅳ遺跡
54. 梶野口削Ⅴ遺跡
55. 梶野口削Ⅵ遺跡
56. 梶野口削Ⅶ遺跡
57. 梶野口削Ⅷ遺跡

3. 遺跡の分布状況

江道横穴墓群周辺の遺跡

江道横穴墓群は、広谷川が南東方向に流れている開析谷の左岸丘陵崖面に位置している。谷間を山側へ約1km入った所で、江道集落の北西側である。ここより平野部側へ約200m、集落の東側の丘陵抱部に円通庵遺跡がある。この遺跡は、空海が建立したとの伝承を有する寺院跡である。現在当地には、石仏・石塔が多い散乱し、崖面には、円輪窟が認められる。石仏は阿弥陀仏・地藏仏である。石塔は五輪塔・肩塔・板石塔婆である。これらは、室町～江戸時代初期のものである。崖崖の円輪（円相・月輪）は、中心軸と環状の窓みを有するもので、円輪の中に梵字があった可能性がある。当地の性格として、密教系の石窟寺院的なものであった可能性がある。江道集落の西側が旧境村である。この開析谷の支谷に境久寺遺跡があり、古代・中世の遺物が出土している。江道横穴墓群からは北西へ約600mの所である。

国吉地域の遺跡

国吉地域は、北西側は丘陵・山地で、南東側が小矢部川に臨む平野部となっている。丘陵地には開析谷が発達している。この開析谷で主要なものは、この地域の北西側にある頭川谷であり、頭川川が南東方向に流れ、主要地方道高岡水見線が通っている。国吉地域は江戸時代の砺波郡に所属していたが、古代の砺波郡と射水郡の境もこの付近と推定されている。この谷部左岸、丘陵の南西側崖面にあるのが、頭川城ヶ平横穴墓群で、所在地は岩坪である。昭和57年に土取り工事中に発見された遺跡である。この年と翌年に発掘調査され、20基の横穴墓が確認されている。この遺跡の対岸、頭川川の右岸の丘陵上には、安眉山古墳群と四十九古墳群がある。四十九古墳群は大型の円墳2基を基幹とするものである。これらの古墳群を取り巻くように山麓の平野部には岡塚遺跡があり、北側の頭川地区から南側の手洗野地区まで拡がっている。弥生時代から中世にかけての遺跡であり、7世紀末頃の瓦が出土しており注目されている。

手洗野地区からさらに南西側の月野谷地区にかけての丘陵地には4群の古墳群がある。手洗野信光寺の背後の丘陵上には倉谷古墳群があり、月野谷集落の背後の丘陵上には、道ヶ谷内I～III古墳群が所在している。月野谷集落の南側の小丘陵上には立山古墳群がある。この中の第1号墳は全長67mの前方後円墳になる可能性がある。この小丘陵の南東側平野部には宮田遺跡があり、さらに南西側には高辻遺跡がある。

江道横穴墓群があり、広谷川が流れ主要地方道高岡羽止線が通る谷部は、国吉地域の南西側を画するものである。谷部の入り口、宮田遺跡の南西側には笹八口遺跡が拡がっている。北側の丘陵上には笹八口谷内古墳群、男撰古墳群、梨迦堂古墳群がある。

石堤地域の遺跡

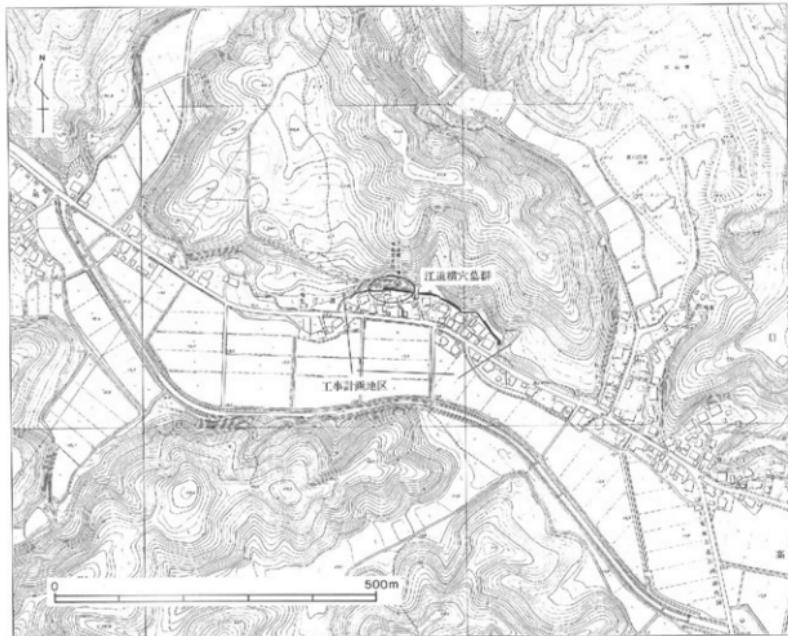
石堤地域も国吉地域同様、北西側は丘陵・山地で、南東側が小矢部川に臨む平野部となっている。丘陵地には開析谷が発達している。この地域の北西側にあり、国吉地域との境になっているのが、江道横穴墓群がある開析谷である。この谷の南西側を流れる広谷川の右岸に接して、平野部から山麓にかけて、八口遺跡や柴野遺跡が拡がっている。広谷川に臨む小さな谷部には守善寺遺跡がある。柴野遺跡の南西側、山麓から平野部にかけて古代北陸道「川人駆」との関連が注目される麻生谷遺跡や麻生谷新生園遺跡がある。これらの集落跡・一般包蔵地の背後の丘陵上には、いくつかの古墳群が見られる。北東側から南西側に柴野春日古墳、柴野口湖I～IV古墳群、柴野殿谷内古墳群、石堤柏堂古墳群である。石堤地域の南西側を画すると共に、高岡市と福岡町との境になっているのが、谷内川が流れ一般地方道小野上渡線が通る開析谷である。谷部の入口には石堤柏堂古墳群があり、谷部をやや進んだ所に土器や墨書き土器が出土した石堤長光寺遺跡がある。

第2節 調査概観

1. 調査に至る経緯

工事計画

江道地区は、斜面の高さが10~35m、勾配が30~40度の崖下に人家が連携しており、地山の風化が進行していることから、豪雨時等には斜面崩壊による人的被害の発生が懸念されていた。このためコンクリート擁壁工を施工することにより崩壊を防止し、もって民生の安定と県上の保全を計ることを目的として、この江道地区急傾斜地崩壊防止工事が計画された。工事は県高岡土木事務所が担当で、平成4年度から平成9年度に亘り実施するものであり、総延長は277mを計るものである。埋蔵文化財包蔵地については、工事計画区域の東端部に円通庵遺跡があり、西部に江道横穴墓群が位置しており、工事計画は江道横穴墓群のさらに西側にまで達するものであった。



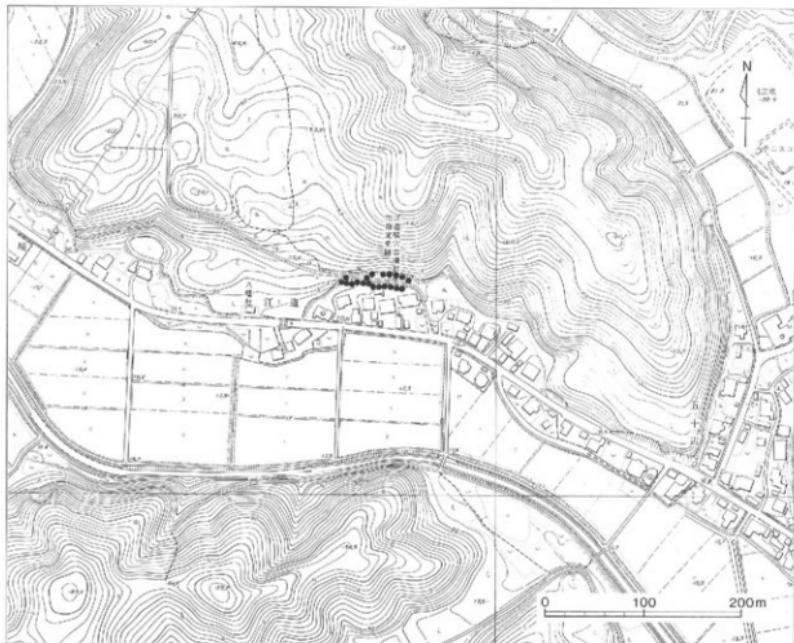
第6図 工事区域位置図 (1/7,500)

協議

この件について高岡市教育委員会社会教育課（当時の文化財主管課、平成7年度より組織改正により、文化財課）への問い合わせが地元から平成3年度の末にあった。

平成4年度に入り、年度当初から関係者との協議を開始した。江道様穴薙群のこの時の知見では、上段に6基、下段に5基の横穴墓があり、上段の6基については工事計画と直接関係しないが、下段の5基については、工事計画区域に含まれている内容であった。

平成4年6月4日に現地で遺跡の確認と協議を実施した。県埋蔵文化財センター、県高岡土木事務所、市の担当課である土木維持課、市社会教育課の各担当者と地元の関係者が出席した。この時県埋蔵文化財センターから次のような指導があった。1. 試掘調査の必要性。2. 高岡市が調査すべきであること。高岡市の指定史跡になっていることが示すように、高岡市にとって極めて貴重な文化財である。県の方針としては、工事にあたっては当該の市町村が調査を担当することにしている。現在、県の埋蔵文化財担当者が極めて多忙なため、今年度はもとより来年度以降も担当するゆとりがない。3. 順序として県高岡土木事務所より、市教育委員会へ照会文を提出したらよい。また、地元の関係者の話として、開口していく所在が明確な下段



第7図 調査地区位置図 (1/5,000)

の 5 基の横穴墓の西側に、土砂に埋もれて数基の横穴墓が所在しているとのことであった。

この協議を受けて、6月24日に県土木部砂防課から、市教育委員会へ江道地区の埋蔵文化財についての照会があった。7月4日には県高岡土木事務所との協議をした。ここでは平成4年度から工事にかかりたいとの要望等が出された。7月8日には県埋蔵文化財センターとの協議があり、県教育委員会が調査を担当することがあり得ないことを再度告げられた。また一部の工事地区を「立ち会い」とすることで了解を得た。7月13日に黒砂防課に対する回答を行った。ここでは、1. 埋蔵文化財の概要、2. 埋蔵文化財の取り扱い、3. 調査を実施する場合の計画内容を回答した。この2では、江道横穴墓群に対する調査の必要性と、その他の地区を「立ち会い」とすることを内容とするものである。

平成5年度に至り、市土木維持課を通じて、県高岡土木事務所より平成5年度の調査実施を再度要請された。また、県高岡土木事務所と市の関係各課との協議がもたれ、改めて調査の実施を要請された。このような経過の中で、高岡市教育委員会が調査を実施することになり、平成5・6年度の実施は困難であるが、平成7年度に調査を実施する方向で検討することになった。その後、平成8年度に実施することで協議が整い、発掘調査の実施になった。

2. 発掘調査の経過

発掘調査の計画

発掘調査にあたっては以下のようない計画を立てた。

上段の6基（第1号墳～第6号墳）：第2・3号墳が発掘調査済みであること、他の横穴墓も乱掘されていること、工事に直接かからないこと等から、実測と写真撮影を計画した。

下段東側の5基（第11号墳～第15号墳）：乱掘されていること、直接遺跡を破壊する工事計画ではないことから、実測と写真撮影を計画した。遺構の清掃は実施しても、発掘調査といえる程の作業は必要がないと判断していた。

下段西側の数基：第11号墳～第15号墳の西方にある埋もれている横穴墓については、土砂を除去して検出し、発掘調査することを計画した。調査開始時には、崖に向かって最も左側（西側）に1つの横穴墓が開口していた。後に第27号墓とするものである。

発掘調査の開始

発掘調査は高岡市教育委員会の文化財課の担当で、平成8年6月3日から実施した。準備等に手間取ったため、実際の掘削は7月9日からとなった。調査はまず、下段西側に予想される一群を対象とした。樹木・草を伐採した段階で、下段西側の横穴墓群では最も上方に位置する1基の横穴墓を確認した。後に第28号墓としたものである。下段西側の一群を覆っている土砂は、昭和8～9年に実施された林道工事によるものが主体であった。これらは小型のバックフォーを使って排除した。この作業で比較的上方に位置する、後に第29号墓とする横穴墓が検出された。この時点で当初予想した数を上回ることが確実となった。

その後は手作業で、横穴墓を覆っている比較的新しい土砂を除去する作業を実施した。これによってさらに3基の横穴墓を確認した。後に第21、22、24号墓としたものである。さらにやや下方に位置する3基、第23、25、26号墓も確認するに至った。現地調査での横穴墓の命名は、この群で一番高く、中央東寄りに位置した小型の横穴墓を第205号墓（後の第28号墓）とした。これより東側には4基以上存在しないとの観点か



第8図 横穴墓群分布図 (1/1,000)

らで、ここより東側へ204、203と逆上り、西側へは、206、207と順次命名していった。これと平行して、下段東側地区の横穴墓の清掃を実施したが、遺物が残っている横穴墓があり、これも予想を越えるものであった。上段地区の横穴墓は予想通りであった。

発掘調査の展開

既述のように新たに9基の横穴墓（第21～29号墓）が発見され、下段東側も予想を越える内容であったので、当初は2～3箇月程度の調査期間と見越していたが、これを越えることが確実となつた。この段階で問題になったのは、下段西側で確認され残存状態が良いと判断される第25、26号墓の調査の件と、遺跡の保護の問題であった。第25、26号墓については、調査中である第23号墓と同等かこれ以上に良好な遺存状態のものと推定され、発掘にあたってはかなりの期間を要するものと予想された。そこで急いで調査することを避けた方が賢明であり、掩壁の後ろに埋もれた形でもこのまま残した方が良いと判断した。そしてこのようなことをするためには、掩壁を民家側に張り出す形にせねばならず、地元の了解が必要であった。また工事一般も横穴墓にできるだけ影響しない工法が必要となったので、県高岡土木事務所や地元関係の理解を得て、遺跡をできるだけ保護する工法となった。また第29号墓の表道部外壁に馬の線刻画が確認されたが、この横穴墓も問題となつた。現状のまま放置したら風化してしまうので取り敢えず土をかけて保護することになつたが、この線刻画についてはレプリカを作成して記録することにした。

10月11日には記者発表をした。12・13の両日には現地説明会を実施し、市内はもとより、県内各地から多数の人が来聴された。この時点では、まだ第23、24号墓は遺物や人骨が出土している状態であったので、調査はこの後も続いた。

調査の終了

遺跡の保存の問題の協議が続いている中で、発掘調査の最終段階を迎えた。特に手数がかかるのが第23号墓で、下層の方からも玉類等の出土遺物があり取り出しに時間がかかった。遺跡の全景写真の撮影は11月に入ってからとなった。資材の撤去等を経て、11月30日に現地での作業が終了した。

整理作業

整理作業は平成8年度にも一部実施したが、主に平成9年度事業として実施した。平成9年6月には、この江道横穴墓群出土遺物を中心とした展示会を市内の公民館（高岡市立二上公民館）で実施し、馬の線刻画のレプリカも公開した。また関連行事として横穴墓に関する講演会や発掘調査の報告会も行った。

No	名 称	記 号	旧 名 称	位 置	確 認 年 度	備 考
01	第1号墓	S Z01	第1号墳	上段	昭和31年度	
02	第2号墓	S Z02	第2号墳	上段	昭和31年度	市指定史跡
03	第3号墓	S Z03	第3号墳	上段	昭和31年度	市指定史跡
04	第4号墓	S Z04	第4号墳	上段	昭和31年度	市指定史跡
05	第5号墓	S Z05	第5号墳	上段	昭和31年度	市指定史跡
06	第6号墓	S Z06	第6号墳	上段	昭和31年度	
07	第11号墓	S Z11	第11号墳	下段東側	昭和31年度	
08	第12号墓	S Z12	第12号墳	下段東側	昭和31年度	
09	第13号墓	S Z13	第13号墳	下段東側	昭和31年度	
10	第14号墓	S Z14	第14号墳	下段東側	昭和31年度	
11	第15号墓	S Z15	第15号墳	下段東側	昭和31年度	
12	第21号墓	S Z21	S Z203	下段西側	平成8年度	
13	第22号墓	S Z22	S Z204	下段西側	平成8年度	
14	第23号墓	S Z23	S Z206	下段西側	平成8年度	
15	第24号墓	S Z24	S Z207	下段内側	平成8年度	
16	第25号墓	S Z25	S Z208	下段西側	平成8年度	未発掘
17	第26号墓	S Z26	S Z211	下段西側	平成8年度	未発掘
18	第27号墓	S Z27	S Z210	下段西側	平成8年度	
19	第28号墓	S Z28	S Z205	下段西側	平成8年度	
20	第29号墓	S Z29	S Z209	下段西側	平成8年度	馬の線刻画

第1表 横穴墓名称一覧表

地元の人の話

発掘調査の期間中、地元の人に当遺跡のことについていろいろ話を伺うことができた。また調査終了後も改めて話を伺った。その内容は以下のようのことである。

昭和8～9年の林道工事は、それまでの幅1mにも満たない山道の拡幅工事として行われたものである。この山道は、上方に当時あったこの地区的墓地へと続くものであった。この工事前までは、上段の第2～5号墓については穴があるとの認識があった程度であり、下段の第11～14号墓の方が地元の人々との関係が深かったものである。第11～14号墓については、多くの人骨が入っており遺物も出土した。そして、この第11～14号墓で当時の子供達が遊んでいたものである。第1号墓の所には穴は聞いていないく、太平洋戦争頃に割木（薪）の貯蔵のために開けられたものである。第4号墓入り口の石柱については、太平洋戦争頃の食糧難の時代に甘藷の貯蔵に横穴墓を利用するのに伴い、入り口を狭くして中の湿度を一定に保つために設置したものである。

今回調査の第21～29号墓において前方が削られていることについては、林道工事以前に、宅地の整備（盛り土等）のために削り取った可能性が大きいとのことである。また、地元に伝わるものとして、大正年間に東京の大学の先生が来訪され、遺物を大学の方へ持て行かれたとの話もあった。

3. 調査の概要

横穴墓という名称

横穴墓の名称については、昭和31年の発掘調査の報告では当時の研究状況を反映して「横穴古墳」と称して第何号墳との名称にされ、その後もこれが踏襲されてきた。近年では「横穴墓」とするのが一般的であり、高岡市で昭和57、58年に調査を実施した「頭川城ヶ平横穴墓群」でも第何号墳ではなく、横穴墓とし第何号墓としている。この報告でも、以前に確認されたものを含めて「横穴墓」とし「第何号墓」としておく。

横穴墓の号数

新たに検出したものは横穴墓9基であり、以前から確認されていた11基と合わせて、当江道横穴墓は20基の横穴墓が確認されることになる。名称については、第1号墳～第6号墳と第11号墳～第15号墳はそれぞれ第1号墓～第6号墓と第11号墓～第15号墓と読み替え、新たに確認したものは、21番から始め第21号墓～第29号墓とした。なお記号として墳墓を表している「S Z」を使い、S Z01等の表現も併用しておく。

検出遺構

これまで確認されていたものや、今回の調査で検出されたものをまとめると以下のようになる。

上段：6基、第1号墓～第6号墓（S Z01～06）

下段東側：5基、第11号墓～第15号墓（S Z11～15）

下段西側：9基、第21号墓～第29号墓（S Z21～29）

出土遺物

出土した遺物は副葬品と判断されるものである。下記した人工遺物以外に、自然遺物のドブ貝の貝殻も出土している。また葬られた人骨も多数出土した。

土器類：土師器、須恵器

銅製品：耳環、馬具

ガラス製品：丸玉

鉄製品：直刀、鐵鎌等

石製品：砥石、切子玉

骨角製品：骨鎌等

第2章 遺構

第1節 上段の横穴墓群

上段地区としている所は、昭和30・31年の調査で確認された横穴墓群の内、林道より上側に立地している一群である。向かって右側、すなわち東側より西側にかけて番号が付けられ、第1号墓から第6号墓までの6基の横穴墓が存在している。以前より開口しており、その位置は明確なものであった。

1. 第1号墓

遺構図面・図版

図面8・9、図版27。

概観

上段地区の最も東側に立地している。林道が山の斜面に向かって直交する形で進み、斜面に当たりここに平行する方向に向きを変える曲がり角に位置している。上段の横穴墓では最も低い位置である。標高は約23～26mを計る。主軸は北20度東を向き、南南西方向に開口するものである。

以前より入口部が開口している横穴墓である。かつては薪の貯蔵庫として使われ、近年も薺芥の捨て場所等となっていたため、玄室内の清掃の作業を主とする調査を実施した。

横穴墓である可能性は少ないが、これに合わせて形状等を記述する。

構造

両袖式の横穴墓。矩形平面の玄室に羨道が付く形態である。残存全長は4.01mである。玄室は大きく改変されていると推定される横穴墓である。

玄室床面は、長さ3.31m、幅は、奥壁側で3.85m、中央部で3.60m、前壁側で3.44mを計る。隅部は角張る。周溝は認められない。標高は、奥壁側で23.0m、中央部で23.0m、前壁側で23.1mを計る。内壁は内傾して直線的に立ち上がり、箱形の天井部へと続く。天井部の床面からの高さは、奥壁側で3.14m、中央部で3.18m、前壁側で3.32mを計る。天井部の前壁側は段をなして高くなる。

羨道部は玄室の中央に付く短いものである。長さ0.70m、幅約1.82mを計る。床面は玄室よりやや高くなり、登った形となっている。

墓前域は確認できない。

人骨

出土していない。

遺物

出土していない。

2. 第2号墓

遺構図面・図版

図面10、図版28。

概観

上段地区的東側に立地している。ここより向かって左側（西側）へ連続して4基続く横穴墓群の、最も右側のものである。右側の第1号墓と比べて標高は高くなり、約26~27mを計る。主軸は北35度東を向き、南北方向に開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。昭和31年に発掘調査されている。

構造

両袖式の横穴墓。矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は2.56mである。

玄室床面は、長さ1.60m、幅は、奥壁側で1.50m、中央部で1.66m、前壁側で1.38mを計る。隅部は丸くなり、胸部が張った形態となる。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で26.2m、中央部で26.1m、前壁側で26.1mを計る。奥壁側がやや産み、中央部がやや高くなり、羨道部へ向かって下方へ傾斜して行く。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で0.80m、中央部で0.88m、前壁側で0.82mを計る。

羨道部は玄室の中央に付く。長さ0.20m、幅約0.62m、高さ約0.90mを計る。天井部は玄室側天井部から窄ることなくそのまま開口部へと向う。後世の崩落や削除の可能性もある。

墓前域はコの字形を呈している。長さ0.76m、幅約1.02m、側壁の高さ約0.32mを計る。

人骨

今回の調査では出土していない。昭和31年の調査では13個体分出土している。内訳は男性11個体分、女性2個体分である。当時の状況について、報告書から引用しておく。

われわれが発掘に着手した当初、玄室の内部にはかなりの覆土があったけれども、しかしその覆土の表面には、あちらこちらに人骨の破片が露出して散在するのが認められ、すでに相当の攪乱があるものようであった。表面より深さ約10cmの攪乱された表土を除去すると、むかって左側の奥に眼窓部の明らかな頭骨を有する一体が発見され、これを第1号人骨と名づけることにした。さらにその左側背部、すなわち奥壁に密着して第2号人骨の頭骨があらわれた。また第1号人骨の腹側腹部に第3号人骨の頭骨を、さらにその腹側頭頂方向に第5号人骨の頭骨を見出した。また第3号人骨の腹側腹部に第4号人骨の頭骨を見出した。かくして5体分の頭骨が、ほとんど同時にあらわれてきたわけである。これらの頭骨はいずれも、その顔面を南または東南にむけ、頭部は西向きを示し、下肢をのばしたいわゆる仰臥伸展の葬法を以て埋葬されたものと判断された。しかしこれらの人骨の軀幹骨部及び四肢骨部などは、相互に重疊錯綜しており、従って個体別掘上げ作業は、ほとんど不可能であると感じられた。のみならず発掘調査予定の日股の関係などもあって、不本意ながら一括法による掘上げを行うの他なかった。作業が進むにつれて、これら人骨群の間から、さらに数個の別個体に属すると思われる頭骨の破片を、相当数見出すにいたって、人骨の錯綜はいよいよ加劇した。かくして発掘の当時確認することできた個体数は、9個体を数えた。

発掘の後人骨水洗の結果、さらに4例を加えることとなり、13個体が確認された。なおその他に木棺櫛の入骨が2乃至3個体分存するかと思われる。要するに第2号墳は、日下確認されているだけでも13個体の人骨を包含していたことになる。なお人骨の水洗中に、骨角器を一例見出したが、この骨角器の出土状態を窺知し得なかったのは遺憾であった。

(中略)

次に第2号墳の玄室内における遺体配置の状態について一言したい。玄室の奥壁に接して置かれた遺体は、横穴の主軸に対して直角に横たわっていた。これに反して玄室の中央部の遺体は、横穴の主軸に併行位をとるように配置されていた。すべての人骨が、遺体の仰臥伸展の状態を示しており、頭蓋の位置は、奥壁にむかって主軸の左側にあり、顔面は葬道に面していた。(中略)後続して行われた遺体の搬入に際して、先に占位していた遺体を奥壁の方向に押しやるようなことが行われたのではないかろうか。遺体配置の状況は、そのような想像を行わせるに十分であった。

遺物

今回の調査では出土していない。昭和31年の調査では骨角器(骨鐵)が1点出土している他、須恵器瓶が1点確認されている。この瓶は本書で細頸瓶として図示したもの(図面53-0201)である。

3. 第3号墓

遺構図面・図版

図面11、図版29。

概観

上段地区の東側に立地している。連続して4基続く横穴墓群の、向かって右側(東側)から2番目のもので、東側は第2号墓、西側は第4号墓である。標高は約26~27mを計る。主軸は北15度東を向き、南南西方に向かって開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。昭和31年に発掘調査されている。

構造

両袖式の横穴墓。縦長矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は3.58mである。

玄室床面は、長さ1.84m、幅は、奥壁側で1.24m、中央部で1.50m、前壁側で1.44mを計る。隅部は丸くなり、梅円形に近い形となる。周溝は認められない。右側側壁前壁側の外方への拡張は後世のものである。床面の標高は、奥壁側で25.9m、中央部で25.9m、前壁側で25.9mを計り、ほぼ水平である。奥壁は前傾した後、丸くなつて天井部へ移行する。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で0.80m、中央部で1.00mを計る。前壁側天井部の上方への穴は後世のものである。

羨道部は玄室の中央に付く。長さ0.20m、幅約0.74mを計る。天井部は玄室側天井部から擦ることなく開口しているが、崩落や後世の改変を受けているようである。羨道部と言える部分は僅かであり、玄室が玄門部を介して墓前域へと移行する形態とも言える。

墓前域はやや縱長のコの字形を呈している。上部は改変を受けている。長さ1.84m、前方での幅は、上部で1.68m、床面で1.18mを計る。

人骨

今回の調査では出土していない。昭和31年の調査では2個体分出土している。

遺物

今回の調査では出土していない。昭和31年の調査では、刀子1点、鉄製円筒1点、鉄製円棒1点が出土している。刀子は小型の直刀とした方がよいものである。

4. 第4号墓

遺構図面・図版

図面12、図版30。

概観

上段地区の東側に立地している。連続して4基続く横穴墓群の、向かって右側（東側）から3番目のもので、東側は第3号墓、西側は第5号墓である。標高は約26～28mを計る。主軸は北18度東を向き南南西方向に開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。昭和30年以降、澳門に切り石が積まれていることで注目されてきた横穴墓である。

玄室において後世の改変を受けていることが明白である。玄室床面が約35cm下げられ、澳道部床面より低くなっているが、本来澳道部と同じ高さの床面であったと推定される。

構造

両袖式の横穴墓。縦長矩形平面の玄室に短い澳道が付く形態である。残存全長は3.22mである。

玄室床面は、長さ2.41m、幅は、奥壁側で1.48m、中央部で1.60m、前壁側で1.38mを計る。奥壁側崩部は丸くなり、胴部がやや張る。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で25.9m、中央部で25.9m、前壁側で25.9mを計り、ほぼ水平になる。ただし改変後の数値である。奥壁は直立した後、丸くなつて天井部へ移行する。天井部は変形ドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で1.08m、中央部で1.42m、前壁側で1.18mを計る。中央奥壁寄りが最も高く、澳道部に向かって高さを減していく。

澳道部は、玄室の中央部に付く短いものである。長さ約0.70m、幅0.60～0.70m、高さ約0.85mを計る。床面は、玄室との間に段をなして高くなる。澳道の入口部、すなわち澳門に切り石が積まれている。

墓前域は左側にそれを伺わせるものがある。

人骨

鱗片が僅かに出土している。

遺物

出土していない。

5. 第5号墓

遺構図面・図版

図面13・14、図版31。

概観

上段地区の西側に立地している。連続して4基続く横穴墓群の、向かって右側（東側）から4番目のもの、すなわち左端のものである。東側は第4号墓である。標高は約28～29mを計る。主軸は北18度東を向き南南西方向に開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。後世の改変を大きく受けている。玄室の後方に通路と室が構築され、一見複室構造の横穴墓の形態となっている。玄室、澳道部も改変を受けている。

玄室床面は20cm近く掘り下げられている。中軸線の部分はやや浅く掘り下げられているので通路のようになっている。左側奥壁から左側側壁にかけては10~15cm程拡張されている。右側側壁も幾分拡張されている。天井部は、奥壁側は本来の形態を残しているが、渡道側は拡張されている。また玄室の渡道側は岩盤が崩落している。渡道部は、床面、右側側壁、天井部は本來の形態を残しているが、左側側壁は拡張されている。

構造

両袖式の横穴墓。縦長矩形平面の玄室に短い渡道が付く形態である。残存全長は2.95mである。

玄室床面は、長さ2.50m、幅約2.10mと推定される。本来の形態を残している右側の奥壁側隅部は角張っている。床面の標高は渡道側で27.6mを計る。奥壁側へやや下がって行くようである。奥壁はやや外方へ傾くようである。天井部はドーム形と推定される。床面からの高さは、中央部で約1.50mと推定される。

渡道部は、玄室の中央部に付く短いものである。長さ約0.40m、幅約0.60m、高さ約1.10mを計る。床面は、墓前域側へやや下がって行く。渡道の入口部、すなわち渡門に切り石が積まれている。

墓前域は左側にそれを伺わせるものがある。

人骨

細片が僅かに出土している。

遺物

出土していない。

6. 第6号墓

遺構図面・図版

図面15、図版32。

概観

上段地区の西側に立地している。東側の第1~5号墓から大きく離れて、単独で位置している。周辺に他の横穴墓は認められない。標高は約28mである。主軸は北5度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。盛芥の捨て場所となってきており、今回の調査時も盛芥の捨て場所となっていた。玄室内の清掃作業を主とする調査を実施した。

構造

比較的小型の横穴墓である。前側が消失し、玄室の奥壁側のみ残存している。残存全長は1.46mである。

玄室奥壁側のみの残存であり、玄室の残存長は1.46mである。幅は、入口側で1.50m、奥壁側で1.22mを計る。奥壁側隅部は丸くなる。周溝は認められない。床面の標高は奥壁側で27.5mを計り、ほぼ水平に入口側へ続いている。奥壁は直立した後、丸くなつて天井部へ移行する。天井部は変形ドーム形である。天井部の床面からの高さは0.68mを計る。

渡道部、墓前域については、該当する部分が破壊されていて不明である。

人骨

出土していない。

遺物

出土していない。

第2節 下段東側の横穴墓群

下段東側地区としている所は、昭和30・31年の調査で確認された横穴墓群の内、林道より下側に位置している一群である。向かって右側、すなわち東側より西側にかけて番号が付けられ、第11号墓から第15号墓までの5基の横穴墓が存在している。以前より開口しており、その位置は明確なものであった。

1. 第11号墓

遺構図面・図版

図面16、図版5-1・33-1。

概観

下段東側地区の最も東側に立地している。ここより向かって左側（西側）へは、第12号墓、第13号墓と続いて行く。標高は約19~20mで、全体のなかで最も下部に位置しており、前方にある民家の庭先とあまり違わない所に立地している。主軸は真北を向き、南側へ開口するものである。

主要な横穴の左側に小さな横穴（副室）が付属的に見られる。

以前より入口部が開いている横穴墓である。玄室内の清掃的作業を主とする調査を実施した。

玄室

左片袖式の横穴墓。隅丸矩形平面の玄室に短い狭道が付く形態である。残存全長は1.80mを計る。

玄室床面は、長さ1.34m、幅は、奥壁側で1.10m、中央部で1.74m、前壁側で1.40mを計る。胸部が丸くなり、精円形に近い平面形になる。周溝は左側奥壁から左側側壁を通り左側前壁近くまでと、右側側壁前壁側と右側側壁前壁部近くに廻ぐっている。床面の標高は、奥壁側で19.20m、中央部で19.20m、前壁側で19.20mを計り、ほぼ水平となる。奥壁と両側壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部は箱形となる。天井部の床面からの高さは、奥壁側で1.00m、中央部で1.10m、前壁側で1.10mを計る。

狭道部は短い。長さ0.40m、幅0.60m、高さ1.10mを計る。狭道部というより玄門的なものとなっている。天井は玄室よりそのまま続きやや上方へ開くように続く。床面は框状に一段高くなる。框状の部分の前に段が付くが、蓋前域的なものはない。

副室

狭道部の左側（西側）に接して穿たれている穴である。南側に開口しており、主軸方向は真北となる。平面形は横長の楕円形で、長さ0.60m、幅0.82mを計る。床面の標高は、中央部で19.35mである。天井部はドーム形である。

人骨

細片が僅かに出土している。

遺物

出土していない。

2. 第12号墓

遺構図面・図版

図面17・18、図版5-2・33-2。

概観

下段東側地区の東側に立地している。東側は第11号墓で西側は第13号墓である。標高は約21~22mである。主軸は北6度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。やや堆積土があり、これを掘り下げて調査を実施した。

構造

両袖式の横穴墓。矩形平面の玄室に短い狭道が付く形態である。残存全長は4.12mを計る。

玄室床面は、長さ2.16m、幅は、奥壁側で1.80m、中央部で2.06m、前壁側で1.78mを計る。狭道側がやや狭くなる矩形平面で、奥壁側の両脚部は丸くなる。前壁側の両隅部は角張る。周溝は認められないが、溝状のものが2組ある。床面の標高は、奥壁側で21.20m、中央部で21.10m、前壁側で21.00mを計り、前壁側へ傾斜している。奥壁は玄室内へやや倒れて内窓して立ち上がる。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で0.76m、中央部で0.98m、前壁側で1.08mを計り、奥壁側からやや膨らんだ形で、狭道部へ移行する。

狭道部は玄室の中央に付く短いものである。長さ0.40m、幅約0.64m、高さ約1.20mを計る。床面は2つの段をなして墓前域へと移行する。天井部は窄まることなくそのまま開口する。

墓前域はコの字形の明確なものである。長さ1.50m、幅は、狭道側で1.20m、入り口側で1.40mを計る。前方へ緩く傾斜して行く。

人骨

細片が僅かに出土している。

遺物

骨謹が4点（図面60-7001~7004）出土している。7001と7002は玄室の右奥壁側に位置していた。7003と7004は土を籠にかけて取り出したものである。

3. 第13号墓

遺構図面・図版

図面19、図版6-1・34-1・35-1。

概観

下段東側地区の中央部に立地している。東側は第12号墓で西側は第14号墓である。標高は約21~22mである。主軸は北10度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。玄室の清掃的作業を主とする調査を実施した。

構造

両袖式の横穴墓。不正矩形平面の玄室に短い狭道が付く形態である。残存全長は2.92mを計る。

玄室床面は、長さ1.66m、幅は、奥壁側で1.76m、中央部で1.78m、前壁側で1.56mを計る。丸くなかった

り、折れ曲がったりする形態で、略方形となる。周溝は認められないが溝状のものが4箇所付く。床面の標高は、奥壁側で21.5m、中央部で21.3m、前壁側で21.2mを計り、明確に前壁側へ傾斜している。奥壁は玄室内へ倒れて直線的に立ち上がる。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で0.74m、中央部で0.94m、前壁側で0.94mを計り、奥壁側からやや膨らんだ形で、羨道部へ移行する。

羨道部は玄室の中央に付く短いものである。長さ0.48m、幅約0.70mを計る。床面はやや傾斜して墓前域へと移行する。天井部は窄まることなくやや拡張した形で閉口する。

墓前域はコの字形の明確なものである。長さ0.78m、幅は、羨道側で上面が1.50m、底面が0.60m、人口側で上面が1.85m、底面が0.30mを計り、やや傾斜している。

人骨

細片が僅かに出土している。

遺物

形態・用途不明鉄製品1点(図面55-3028)が出土している。

4. 第14号墓

造構図面・図版

図面20・21、図版6-2・34-2・35-2・35-3。

概観

下段東側地区の西側に立地している。東側は第13号墓で西側は第15号墓である。民家の土蔵が横穴墓のある背後の崖面に一番迫っている所である。標高は約21~22mである。主軸は北4度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。玄室内には削り取られた大きい石が2個横たわっていた。外部から羨道部を通じて搬入するには困難であり、横穴墓構築時に置かれたとも思われない。玄室内が2次的に削られている。特に玄室右側側壁が大きく削られている。このことより後世のものと判断される。玄室内には堆積土が見られた。

構造

両袖式の横穴墓。横長矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は3.66mを計る。

玄室床面は、長さ2.20m、幅は、奥壁側で2.20m、中央部で2.40m、前壁側で2.20mを計る。隅部は丸くなる。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で20.90m、中央部で20.85m、前壁側で20.90mを計り、僅かに中央部が低くなる。奥壁は玄室内へ倒れて直線的に立ち上がる。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、奥壁側で1.12m、中央部で1.12m、前壁側で1.22mを計る。奥壁側に段が付く。

羨道部は玄室の中央左寄りに付く短いものである。長さ0.36m、幅0.38~0.54m、高さ1.10mを計る。床面は傾斜して墓前域へと移行する。

墓前域はコの字形の明確なものである。長さ1.10m、幅は、羨道側で上面が1.30m、底面が0.70m、人口側で上面が1.40m、底面が1.20mを計り、やや傾斜している。

人骨

細片が僅かに出土している。

遺物

須恵器杯 2 点（図面49-1401・1402）、耳環 1 点（図面59-4007）、ソケット状骨角製品 1 点（図面59-7011）が出上している。須恵器杯は玄室の右前壁側である。耳環とソケット状骨角製品は上を筋にかけて取り出したものである。なお、昭和31年の調査では、須恵器片が出土している。現在高岡市博物館が所蔵している須恵器杯蓋はこれに該当する。

5. 第15号墓

遺構図面・図版

図面22~24、図版 7・36~41。

概観

下段東側地区の西端に立地している。東側は第14号墓で西側は下段西側地区とした所である。標高は約21~22mである。主軸は北5度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

以前より入口部が開いている横穴墓である。玄室中程より前側の上部が削除されている。奥壁側の天井部が壘呈し、下部には土砂が堆積している状態が、今回の調査時の様相である。土砂の堆積状態は、上方には明らかに新しい黄褐色の山土砂が堆積しており、その下には切り石の破片を多く含む比較的古い土砂が見られた。

構造

両袖式の横穴墓。円形に近い隅丸矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は3.10mを計る。玄室の中程より羨道部の上部が削除されており、基底部のみの残存である。

玄室床面は、長さ2.40m、幅は、奥壁側で1.80m、中央部で2.32m、前壁側で2.08mを計る。隅部は丸くなる。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で20.80m、中央部で20.75m、前壁側で20.80mを計り、僅かに中央部が低くなる。奥壁は玄室内へ倒れて立ち上がる。天井部はドーム形となる。床面からの高さは、中央部奥壁寄りで1.20mを計る。奥壁側に段が付く。

羨道部は玄室の中央に付く短いものである。長さ0.40m、幅0.45~0.60mを計る。床面は段をなして墓前域へ移行する。

墓前域はコの字形の明確なものである。長さ0.35m、幅は、羨道側で上面が1.55m、下面が1.40m、入口側で上面が1.65m、下面が1.45mを計り、ほぼ水平である。

閉塞に使われたと推定される切り石が、羨道部から玄室前壁側を中心に見られた。また切り石の断片も散在していた。この切り石の分布状態については、図面24を参照されたい。

人骨

集積された状態で検出された。この集骨は、玄室中央前壁寄りと玄室中央奥壁寄りの2箇所が主要なものであり、玄室左側奥壁隅部にも集骨が認められる。図面23で上層の人骨とこれ以外の遺物を示し、図面24でこれに表現できない下層の人骨等と切り石を示した。

遺物

刀子 4 点（図面56-3016・3017・3019・3021）、耳環 1 点（図面59-4003）、砥石 1 点（図面57-5002）が出土している。刀子及び耳環は玄室中央奥壁寄りに位置していた。

第3節 下段西側の横穴墓群

下段西側地区としている所は、昭和30・31年の調査で確認された下段東側地区、すなわち東より第11号墓から第15号墓までの5基の横穴墓のある所の西側地区である。この地区が今回の調査の主要な調査対象地区となった所である。今回の調査で第21号墓から第29号墓とした9基の横穴墓が確認された地区である。

1. 第21号墓

遺構図面・図版

図面25～27、図版8-1・42～44。

概観

下段西側地区の最も東側に立地している。下段東側地区の西端の第15号墓の西側約3mの所で確認された。標高は約21～22mである。主軸は北5度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

調査開始前は埋没していたが、斜面部の表土を除去したところ、玄室奥壁側の天井部や、玄室入口側の基底部が確認された。玄室奥壁側の堆積土と天井部との間には、僅かに空隙が見られた。

構造

両袖式の横穴墓。継長矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は2.52mを計る。玄室の中程より羨道部の上部が削除されており、基底部のみの残存である。

玄室床面は、長さ2.10m、幅は、奥壁側で1.70m、中央部で1.62m、前壁側で1.38mを計る。床面の幅が、奥壁側に比べて前壁側が狭くなる逆台形となり、縦して羽子板形となる。右側奥壁側と右側前壁側の隅部は丸くなる。左側奥壁側の隅部は角張る。左側前壁から左側側壁にかけて垂んでおり、明確な袖部を形成していないが、後世の削平によるものである。周溝は認められない。標高は、奥壁側で21.70m、中央部で21.80m、前壁側で21.60mを計り、ほぼ水平である。奥壁は玄室内へ倒れ気味に立ち上がる。天井部は変形ドーム形である。床面からの高さは、奥壁側で0.80m、中央部で0.98mを計り、上方へ藤らむ。

羨道部は玄室の中央右寄りに付く。基底部のみの残存で、墓前域側の途中から削除されている。残存長0.38m、幅は、玄室側で0.50m、墓前域側で0.50mを計る。

墓前域は、羨道部前側が削除されていることもあり、不明である。

人骨

玄室奥壁側にやや集積した部分があり、玄室右側にも一応まとまった所がある。また玄室左側からも若干出土している。玄室奥壁側を中心に散乱した状態と言える。出土量は少ない。

遺物

刀子1点（図面56-3018）、耳環1点（図面59-4006）が出土している。耳環は玄室の左奥壁側からの出土である。

2. 第22号墓

遺構図面・図版

図面28~31、図版8-2・9・45~51。

概観

下段西側地区の東側に立地している。下段西側地区の東端の第21号墓の西側約3.5mの所で確認された。この横穴墓の左側（東側）上方には、第28号墓が、左側のやや下方には第23号墓が立地している。標高は約22~23mである。主軸は北2度西を向きほぼ南側へ開口するものである。

調査開始前は埋没していたが、斜面部の表土を除去したところ、玄室奥壁側の天井部や、玄室入口側の基底部が確認された。玄室奥壁側の堆積土と天井部との間に、僅かに空隙が見られた。

構造

両袖式の横穴墓。縦長矩形平面の玄室に短い狭道が付く形態である。残存全長は3.48mを計る。玄室の中程より狭道部の上部が削除されており、基底部のみの残存である。

玄室床面は、長さ2.84m、幅は、奥壁側で2.58m、中央部で2.63m、前壁側で2.53mを計る。隅部は丸くなり、奥壁側もやや膨らんでいる。側壁は直線的である。周辺は認められない。標高は、奥壁側で21.80m、中央部で21.75m、前壁側で21.70mを計り、前壁側へ傾斜している。奥壁は外膨らみして玄室内へ倒れて立ち上がる。天井部はドーム形である。床面からの高さは、奥壁側で1.34m、中央部で1.51mを計る。中央部付近は水平となっている。

狭道部は玄室の中央に付く。基底部のみの残存で、墓前域側の途中から削除されている。残存長0.64m、幅は、玄室側で0.80m、墓前域側で0.68mを計る。

墓前域は、狭道部前面が削除されていることもあり、不明である。

人骨

小さな骨がほとんどを占めている。玄室前半分右側が主要な出土地であるが、散乱していると言った方がよいであろう。

遺物

人骨以外の遺物の出土状態は、図面30に示した。出土遺物は次のとおりである。

須恵器：杯7点（図面49-2201~2207）、杯蓋7点（図面49-2208~2214）、長頸瓶1点（図面49-2215）。

鉄製品：直刀1点（図面54-3001）、鉄鎌5点（図面55-3003~3006・3010）、馬具1点（図面55-3011）、刀子1点（図面56-3022）、形態・用途不明鉄製品2点（図面55-3026・3027）。

銅製品：耳環1点（図面59-4009）。

骨角製品：骨櫛4点（図面60-7005~7008）、貝製環状品1点（図面59-7013）。

出土位置からこれらの遺物を3つに区別できる。

1. 玄室奥壁際中央寄り：直刀・馬具

2. 玄室右側奥壁側兩部：須恵器

3. 玄室中央部に散在：鉄鎌・刀子・耳環・骨櫛・貝製環状品

直刀は奥壁と平行する位置で出土し、須恵器はまとまった状態で出土している。

3. 第23号墓

遺構図面・図版

図面32～37、図版10～13・52～60。

概観

下段西側地区の中央東寄りに立地している。右側（東側）の第22号墓と左側（西側）の第24号墓とに挟まれた形で位置している。右側上方には第28号墓がある。標高は21～22m前後である。主軸は北5度東を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

位置的に下方に立地し、土砂で完全に埋まり、岩盤の大きなブロックも覆いかぶさっている状態であった。隣接する第22・24号墓を確認しているなかで、この横穴墓の存在にも気づいた。

構造

両袖式の横穴墓。縦長矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は4.08mを計る。玄室と羨道部の上部が全体的に削平されているため、下部のみの検出である。

玄室床面は、長さ2.38m、幅は、奥壁側で1.87m、中央部で1.99m、前壁側で1.70mを計る。床面の幅が、奥壁側に比べて前壁側が狭くなる逆台形となり、そして羽子板形となる。兩部は丸くなる。周溝は認められない。標高は、奥壁側で20.90m、中央部で20.90m、前壁側で20.80mを計り、僅かに前壁側へ傾斜している。奥壁は直立した後、内傾して天井部へ移行するようである。天井部と言える部分は、奥壁側で僅かに残存しているに過ぎないが、ドーム形と思える。

羨道部は玄室の中央に付く。天井部は残存していない。長さ0.68m、幅は、玄室側が0.66m、中央部で0.66m、羨前域側で、0.80mを計り、羨前域側がやや広がる形である。側壁はほぼ直立し、約0.80m残存している。

羨前域は縦長のコの字形を呈する明確なものである。床面は、長さ1.07m、幅は、羨道側で1.54m、入口側で1.55mを計る。長さについては計測した中央部が抉れる形で最も短くなってしまっており、左側を参考にすれば1.42m以上の長さと言える。両壁での最大高は0.70mで、上幅は、羨道側で1.68m、入口側で1.74mを計る。

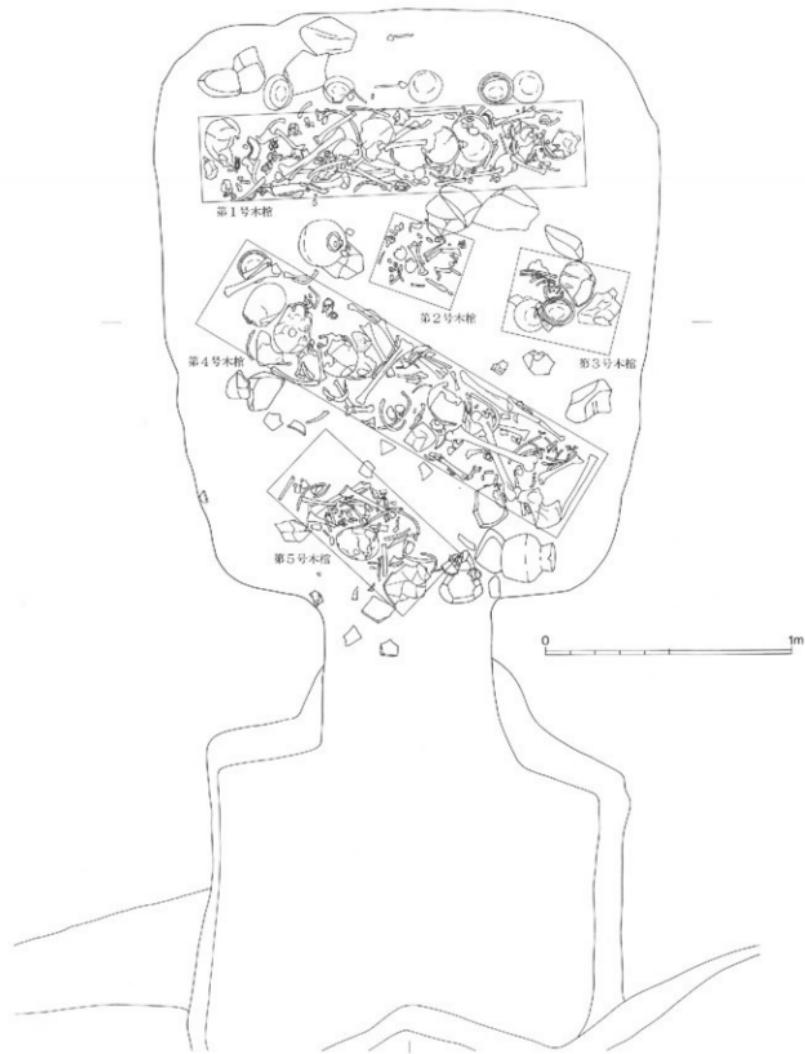
人骨

多量に出土している。今回調査した横穴墓では最大である。人骨の出土状態図は、図面35～37の3つの図面で示した。図面35は玄室の上層から出土したものと羨道部から出土したものを見ている。上層での主要なものは奥壁側から出土した頭蓋骨2点である。床面からの高さは0.70mで、堆積土の上方からの出土である。羨道部からの人骨は床面近くからの出土である。図面36と37は関連したもので床面近くからの出土である。図面36で示し得なかった最下部のものを図面37で示した。ここで示したこの横穴墓の主要な人骨は、5つの群に分かれしており、出土状態より木棺に入れられていたものと推定される。奥壁側より第1号木棺から第5号木棺としておく。それぞれの内容は次の通りである。規模は5cm単位で推定したものである。

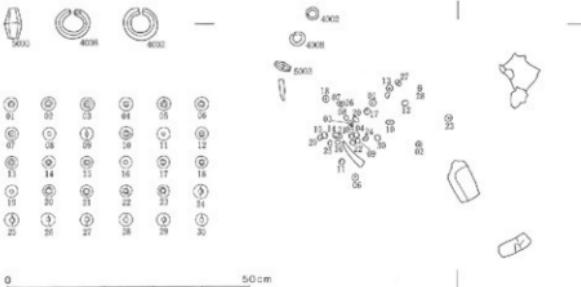
第1号木棺：奥壁近くに奥壁とはほぼ平行して位置している。頭蓋骨は西端部にある。長さ1.55m、幅0.35mを計る。

第2号木棺：中央奥壁寄りに位置している。主軸ラインとは北70度西の傾きを持っている。長さ0.35m、幅0.30mを計る。

第3号木棺：中央右側側壁寄りに位置している。主軸ラインとは北77度西の傾きを持っている。長さ0.45m、幅0.35mを計る。



第9回 第23号墓木棺配置推定図 (1/20)



第10図 第23号墓
玉頭等出土状態図
(1/10)

第4号木棺：中央前壁寄りに位置している。頭蓋骨は北西側端部にあり、主軸ラインとは北59度西の傾きを持っている。長さ1.70m、幅0.40mを計る。

第5号木棺：前壁近くの中央やや左寄りに位置している。主軸ラインとは北47度西の傾きを持っている。長さ0.75m、幅0.35mを計る。

遺物

人骨以外の遺物の出土状態は、図面34に示した。出土遺物は次のとおりである。

土師器：瓶1点（図面50-2301）。

須恵器：杯6点（図面50-2302～2307）、杯蓋2点（図面50-2308・2309）、直口盃1点（図面50-2310）、平瓶1点（図面50-2311）。

鉄製品：鉄鎌2点（図面55-3008・3009）、刀子4点（図面56-3012・3014・3015・3020）。

銅製品：耳環2点（図面59-4002・4008）。

石製品：砥石1点（図面57-5001）、切子玉1点（図面57-5003）。

ガラス製品：丸玉30点（図面58-6001～6030）。

出土遺物は完形品かこれに近いものがほとんどで遺存状態は良好であった。土師器瓶のみは割れて小破片となり、漢道から玄室前側にかけて散在していた。前述の通り、人骨は木棺に入れられて葬られたようであつて、遺物もそれぞれの木棺と関連すると推定される。

第1号木棺関連：木棺内に刀子1点（3012）、木棺の奥壁側に須恵器杯3点（2304～2306）、須恵器杯蓋2点（2308・2309）、鉄鎌1点（3008）、やや奥壁側に離れて鐵鎌1点（3009）。

第2号木棺関連：木棺内に刀子1点（3020）。

第3号木棺関連：木棺内に須恵器杯2点（2302・2307）。またドブ貝の貝殻が2点出土している。

第4号木棺関連：木棺内に須恵器杯1点（2303）、刀子1点（3015）、耳環2点（4002・4008）、切子玉1点（5003）、丸玉30点（6001～6030）。木棺の付近に須恵器直口盃1点（2310）、須恵器平瓶1点（2311）。人骨との関連では北西側に頭蓋骨が置かれていたが、耳環・玉頭はこの付近からの出土である。

第5号木棺関連：付近に土師器瓶（2301）の一部。

4. 第24号墓

遺構図面・図版

図版38~42、図版14・61~68。

概観

下段西側地区の中央部に立地している。右側（東側）やや下方には第23号墓が、左側（西側）やや下方には第25号墓が立地している。標高は約22~23mである。主軸は北15度東を向き、南南西方向へ開口するものである。

調査開始前は埋没していたが、草木や表土を除去したところ、玄室奥壁側の大井部が表れ、確認された。玄室内には土砂が堆積していたが、上方には明らかに新しい黄褐色の山土砂が堆積していた。その下に見られた比較的古い堆積土は約20cm程度であった。

構造

両袖式の横穴墓。矩形平面の玄室に短い表道が付く形態である。残存全長は4.52mを計る。大きく削除されている。玄室の奥壁側約3分の1は天井部が残存しているが、これより前壁側は床面近くの基底部のみの残存である。

玄室床面は、長さ2.50m、幅は、奥壁側で2.20m、中央部で2.38m、前壁側で1.98mを計る。隅部は丸くなり、右側側壁は外張りする。直んだ矩形平面となっている。周溝は認められない。標高は奥壁側で21.80m、中央部で21.80m、前壁側で21.70mを計り、前壁側へ傾斜している。奥壁側は直立している。天井部は変形ドーム形である。床面からの高さは、奥壁側で1.33m、中央部で1.50mを計り、奥壁側から中央へは、やや膨らむ形である。

表道部は玄室の中央に付く。基底部のみの残存で、特に右側側壁はほとんど削平されている。長さ0.40m、幅は推定値で、玄室側で0.98m、墓前域側で1.02mを計る。床面は、玄室側が溝状に陥み、墓前域側は瓶状に削り残されている。

墓前域は、左側のみ残存している。中軸線からの幅は約1.10~1.20mを計る。単純に折り返すと幅2.20~2.40mの墓前域となる。

人骨

集積された状態で出土している。6つの群に分けることができ、木棺に入っていた可能性がある。この場合中央より奥壁側で3棺、中央より前壁側で3棺である。前者は大型のもの2棺とやや小型のもの1棺、後者は小型のもの3棺となる。図版41で上層の人骨等を、図版42で下層のものを示した。

遺物

人骨以外の遺物の出土状態は、図版40に示した。出土遺物は次のとおりである。

土師器：鉢1点（図版51-2401）、壺1点（図版51-2402）。

須恵器：杯1点（図版51-2403）、杯蓋7点（図版51-2404~2410）、蓋口縁部1点（図版51-2411）、細頸瓶1点（図版51-2412）、提瓶2点（図版51-2414・図版52-2413）。

鉄製品：鉄鏃1点（図版55-3007）、刀子2点（図版56-3013・3024）、形態・用途不明鉄製品1点（図版55-3025）。

銅製品：耳環1点（図版59-4005）、馬具2点（図版59-4010・4011）。

骨角製品：ペン先状骨角製品1点（図版59-7012）。

須恵器杯と杯蓋と提瓶2413は完形ないしこれに近いもので、玄室内前壁寄りからの出土である。土師器鉢・甕と須恵器細頸瓶・提瓶2414は、割れて玄室内に散在していた。鉄製品と耳環は玄室の中央から奥壁にかけて位置していた。銅製品の馬具は杯蓋付近からの出土である。

5. 第25号墓

概観（図版69参照）

下段西側地区の中央西寄りに立地している。右側（東側）の第24号墓と左側（西側）の第26号墓とに挟まれた形で位置している。左側上方には第29号墓がある。位置的に下方に立地しており、土砂で完全に埋まっていたものである。墓前域の一部のみ確認したもので、発掘調査は実施していない。標高は21m前後である。

6. 第26号墓

概観（図版70参照）

下段西側地区の東側に立地している。第25号墓の左側（西側）に位置している。上方には第29号墓があり左側やや上方には第27号墓がある。位置的に下方に立地しており、土砂で完全に埋まっていたものである。墓前域の一部のみ確認したもので、発掘調査は実施していない。標高は21m前後である。

7. 第27号墓

遺構図面・図版

図面43・44、図版15・71～76。

概観

下段西側地区の東端部に立地している。右側（東側）の上方には第29号墓が、同じく下方には第26号墓が位置している。標高は約23～24mである。主軸は北2度西を向き、ほぼ南側へ開口するものである。

この横穴墓は、今回の調査開始時の数箇月前に確認したもので開口しているものである。西側からの擁壁工事が当横穴墓近くまでなされ、このために樹木等が伐採されたことにより、確認し易くなつたためである。樹木に覆われていたが、土砂に埋もれていたわけではないので、詳細に調べればこれ以前に確認できたものと判断される。

構造

両袖式の横穴墓。隅丸矩形平面の玄室に短い羨道が付く形態である。残存全長は3.68mである。玄室の内部は改変を受けているものであり、羨道付近も改変を受けている。

玄室床面は、長さ2.26m、幅は、奥壁側で1.76m、中央部で2.40m、前壁側で2.02mを計る。隅部が丸くなり、全体的に外張りしている。すなわち円形に近い形態となっている。周溝は認められない。床面の標高は奥壁側で22.60m、中央部で22.55m、前壁側で22.50mを計り、前壁側へ僅かに傾斜している。奥壁は現

状では直立した後、外方（後側）へやや倒れるように立ち上がっているが、これは後世の改変によるもので、構築当時のものは直立している下部のみである。これより上は丸くなつて天井部へ移行するものと推定される。天井部も中央部は構築当時のものだが、周囲は改変を受けている。天井部の形態は、ドーム形と推定される。天井部の床面からの高さは、中央部で1.38mを計る。

羨道部は玄室の中央に付く。床面と側壁の基底部のみ残存している。長さ0.50m、幅は、玄室側で0.60m、墓前域側で0.70mを計る。床面の墓前域側は樋状にやや高くなり、段をなしてやや低い墓前域へ移行する。

墓前域はコの字形のものである。主軸方向に対して、左側へ振れている。左側の前方は削られている。長さは1.10mまで確認できる。上舖は、羨道部側で0.09m、中央部で1.52mであり、下舗は、羨道部側で1.25m、中央部で1.30mである。墓前域床面の標高は、羨道部側で22.45mを計り、前側へやや傾斜している。

人骨

散乱した状態で出土している。右側側壁際の前壁寄りにやや集積している。

遺物

出土遺物は次のとおりである。

土師器：杯4点（図面52-2701～2704）。

鉄製品：短剣1点（図面54-3002）。

銅製品：耳環2点（図面59-4001・4004）。

骨角製品：ヘアピン状骨角製品1点（図面59-7009）、円筒状骨角製品1点（図面59-7010）。

土師器杯4点の内2704以外の3点は、割れて玄室内に散在していた。短剣と耳環4004は玄室左側前壁寄り、耳環4001は玄室右側中央部からの出土である。

8. 第28号墓

遺構図面・図版

図面45、図版77。

概説

下段西側地区の中央西寄りに立地している。第23号墓のはば上方に位置している。右側（東側）下方には第22号墓が位置している。当第28号墓はこれらの第22・23号墓の2～3m上方にある。標高は約25mである。主軸は北15度西を向き、南南東方向へ開口するものである。

入り口部が開いている横穴墓である。樹木・草に覆われていたが、土砂に埋まっていたわけではなく、これらを除去することによって確認することができた。

構造

小型の横穴墓である。前側が消失し、玄室の奥壁側のみ残存している。残存全長は0.94mである。

玄室奥壁側のみの残存であり、玄室の残存長は0.94mである。軸は、入口側で0.92m、奥壁側で1.07mを計る。奥壁側隅部が角張り、右側側壁が長くなる台形を呈する。周溝は認められない。床面は中央がやや低くなる弧状を呈する。床面の標高は、奥壁側で24.8m、入口側で24.7mを計り、水平に移行した後、前側へ傾斜している。奥壁は直立した後、角張って天井部へ移行する。天井部はアーチ形である。天井部の床面からの高さは、奥壁側で0.66m、入口側で0.72mを計る。

狭道部、墓前域については、該当する部分が破壊されていて不明である。

人骨

出土していない。

遺物

出土していない。

9. 第29号墓

遺構図面・図版

図面46～48、図版16・78～82。

概観

下段西側地に西側に立地している。下方約4mには第26号墓が立地している。標高は約24～25mである。主軸は真北を向き、南側へ開口するものである。

狭道外壁の約3分の2あたりまで土砂に埋もれていたが、上部には空隙部分があり、開口している横穴墓である。上部も樹木・草に覆われていたので、今回これらを除去することによって確認できた。

構造

比較的小型の両袖式の横穴墓である。隅丸矩形平面の玄室に短い狭道が付く形態である。残存全長は3.14mを計る。

玄室床面は、長さ1.94m、幅は、奥壁側で1.60m、中央部で1.88m、前壁側で1.50mを計る。隅部は丸くなる。特に前壁側隅部の丸みが強く、側壁も外張りする。稍円形に近い平面形となる。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で24.20m、中央部で24.20m、狭道側で24.20mを計り、ほぼ水平である。奥壁は内方に倒れて立ち上がる。天井部は変形ドーム形である。天井部の床面からの高さは、奥壁側で1.14m、中央部で1.36m、狭道側で1.22mを計る。

狭道部は玄室の中央に付く。床面は、長さ0.50m、幅は、玄室側で0.70m、墓前域側で0.56mを計る。床面の標高は一番高い所で24.1mを計り、傾状にやや高くなっている。玄室床面とは弱い段をなす。狭道部の人井部の高さは、床面から1.20mを計る。

墓前域はコの字形の明確なものである。床面での長さ0.74m、幅は約1.40mを計る。上部幅は1.74～2.14mとなり、狭道側が広くなっている。床面の狭道側は溝状に窪み、狭道部とは明確な段をなす。

線刻画

狭門部の右側（東側）の外壁から馬の線刻画が検出された。調査前は土砂に覆われていた所である。線刻画は墓前域床面から、60～75cm上方である。線刻画の規模は、高さ10.2cm、幅23.6cmを計る。左側を向いている馬の側面像である。

人骨

集積された状態で3群に分かれている。奥壁際、左側側壁際、中央右寄りの3箇所である。

遺物

刀子1点（図面56～3023）、貝製円形有孔品1点（図面59～7014）が出土している。刀子は玄室左側前壁寄りに位置していた。貝製円形有孔品は土を節にかけて取り出したものである。

第3章 遺物

第1節 土器類

1. 第14号墓出土土器

須恵器

杯H 図面49-1401・1402。立ち上がりと受け部をもつ杯身である。底部はヘラ切りのまま無調整である。立ち上がりと受け部は小さいものである。1401は小さな受け部が水平に延び、立ち上がりは上方へ小さく上がる。口径11.2cmを計る。1402は小さな受け部が外上方へ延び、立ち上がりは内上方へ小さく上がる。受け部の上端と立ち上がりの上端との差は僅かである。口径11.0cmを計る。色調は両者とも明青灰色を呈する。両者とも受け部を僅かに欠損している。

2. 第22号墓出土土器

須恵器

杯H 図面49-2201～2207。立ち上がりと受け部をもつ杯身である。立ち上がりは内傾して立ち上がる。受け部は外上方ないし外方へ短く延びる。底部外縁の調整によって4者に区分できる。1. 底部全体をヘラ削りするもの、2201。2. 底部中央を削り残したように底部外縁を大きくヘラ削りするもの、2202・2203。3. 底部外縁を幅狭くヘラ削りするもの、2204～2206。4. 底部をヘラ削りしないもの、2207。底部内面は2201・2202・2206に2次的ナデが見られる。口径は10.2cm～11.1cmを計る。色調は灰色を呈する。2207が口縁・受け部を僅かに欠損している以外、完形品である。

杯H蓋 図面49-2208～2214。杯Hと組み合う椀形の蓋である。丸い天井・体部より、口縁部はやや外反して外下方へ拵がるものが多い。天井部は外周をヘラ削りしている。2214のみヘラ削りをしていない。天井部内面のナデは2208～2210・2214に見られる。なお、2213の天井部にはヘラ記号状のものが付く。口径11.7cm～12.8cmを計る。色調は灰色を中心にして、青灰色・明灰色・暗灰色を呈する。2209は口縁部3分の2、体部2分の1を欠損する。2210・2211は口縁部少量を欠損する。これら以外は完形品である。

長颈瓶 図面49-2215。台付の長颈瓶である。口部は外反して上方へ延びる。中程に2条の沈線があり、その間は横書き列点文で飾られている。胴部は純い縦をなすことにより、胴上部と胴中央・下部とが区別された形となっている。胴上部には弱い沈線が廻る。胴中央・下部はヘラ削りされている。台部は比較的大きく、外下方に延び縮ん張るものである。方形の透かしが3箇所に付く。口径10.0cm、胴部最大径18.7cm、器高29.3cmを計る。色調は灰色を呈するが、胴上部には黄灰色の自然釉がやや厚く付いている。また自然釉は口縁上部内面にも見られる。完形品である。

3. 第23号墓出土土器

土師器

瓶 図面50-2301。大型で単孔の瓶。口縁部は外反して外上方へ拡がる。体部は直線的に内下方へ延び底部へと続く。体上部に把手が2箇所付く。外面の調整は刷毛目状のナデを綴に施している。内面は横にナデしている。口径28.3cm、底径14.0cm、高さ25.1cmを計る。色調は明褐色を呈する。3分の2残存している。

須恵器

杯H 図面50-2302～2307。立ち上がりと受け部をもつ杯身である。立ち上がりは内傾して立ち上がる。受け部は外上方へ短く延びる。底部外面はヘラ削りしていない。底部内面の2次的ナデは、2302～2305に認められる。口径は10.9cm～11.6cmを計る。色調は、2304が黄白色、2306が黄灰色を呈する。これ以外の4点は明青灰色である。2304が受け部少量を欠損している以外、完形品である。

杯H 瓢 図面50-2308・2309。杯Hと組み合う碗形の瓢である。丸い天井・体部より、口縁部は直線的に下方へ拡がるものである。天井部はヘラ削りしていない。天井部内面の2次的ナデは、2308に認められるが、2309には認められない。口径は、2308が12.8cm、2309が12.4cmである。2308は青灰色を呈し、完形品である。2309は、明黄灰色を呈し、口縁部4分の1を欠損している。

直口盃 図面50-2310。球形の胴部にやや短い口頸部が付く。口頸部は直線的に外上方へ拡がる。体部はやや偏球形となる。底部は丸く不安定である。胴上・中央部はカキ目による調整である。底部は中央部以外ヘラ削りしている。口径11.6cm、胴部最大径20.0cm、高さ20.4cmを計る。色調は灰色を呈する。胴部には全体的に自然釉が付いている。口縁部少量を欠損している。

平瓶 図面50-2311。偏球形の胴部に環状の把手が付く形態である。口頸部はやや拡がり気味で上方へ延びる。胴上・中央部はカキ目調整を施している。体下部はヘラ削りである。口径7.8cm、胴部最大径19.3cm、高さ15.7cmを計る。色調は明灰色を呈する。口縁部少量を欠損している。

4. 第24号墓出土土器

土師器

鉢 図面51-2401。小型の鉢。口縁部はくの字状に折れた後、直上方へ短く立ち上がる。口端部はつまみ上げたように終わっている。体部は丸みをもって底部へと移行する。底部は欠損している。口径21.6cm、残存器高9.0cmを計る。色調は明赤褐色を呈する。口縁・体部3分の2が残存している。

甕 図面51-2402。小型の甕。口頸部はくの字状に折れた後、やや内上方へ短く立ち上がる。口縁部は1箇所片口状に押さえられている。胴部は肩の張りもなく、やや下ぶくれの胴下部へ移行する。底部は平底であげ底気味になる。胴部外面はカキ目調整を施している。口径13.0cm、胴部最大径12.0cm、器高11.0cmを計る。色調は赤灰褐色を呈する。2分の1残存している。

須恵器

杯H 図面51-2403。立ち上がりと受け部をもつ杯身である。底部はヘラ切りのまま無調整である。立ち上がりと受け部は小さなものである。受け部は口端部より下方の位置で止まっている。口径10.3cm、高さ2.6cmを計る。色調は暗青灰色を呈する。受け部が僅かに欠損している。

杯G蓋 図面51-2404～2410。天井頂部に宝珠形つまみをもち、口縁部内面にかえりをもつ、小型の蓋。口縁部のかえりは口端部より下方へ出ることはない。天井部はヘラ削りしている。天井部内面は2次のナデが付く。口径8.6～9.2cm、高さ2.65～3.2cmを計る。色調は明灰色を呈する。光形品である。

蓋口縁部 図面51-2411。蓋の口縁部と考えた小破片である。焼成炎燒成の黄褐色を呈している。口径10.4cmを計る。越や瓶類の口縁部と想定されるが、他のものになる可能性もある。

細胴瓶 図面51-2412。口頭部の茎底部と胴部のみ確認できる。肩のやや張る胴部に細い口頭部が付く形態と推定される。胴上部に沈線が3条廻り、この間に横擋列点文が付く。胴部最大径18.0cmを計る。色調は灰色を呈する。胴上部には自然釉が付いている。胴上部4分の3、胴中央・下部2分の1が残存している。

提瓶 図面51-2414、図面52-2413。大型の2413と小型の2414である。2413は扁球形の胴部に短い口頭部が付く。口頭部は短く外上方へ開き、口端部は上下に稜をもつ。この下に断面三角形の突唇が付く。胴部は前面と背面の膨らみの差は少ない。前面にはカキ目調整を施している。背面はナデであり、内面には円盤の充填が確認できる。肩部には環状の把手が2箇所付く。また側面に沿って弱い沈線が2条廻っている。口径12.8cm、胴部の幅径26.2cm、厚さ20.2cm、高さ31.5cmを計る。2414は球形に近い胴部に長い口頭部が付く。口頭部は漏斗状になり、外反して延びた後、内弯して終わっている。口端部近くと頸部にそれぞれ2条の弱い沈線が廻っている。胴部はやや偏平になる球形であり、前面にはカキ目調整を施している。肩部には2つボタン状の小さな把手が付く。口径7.0cm、胴部の幅径13.6cm、厚さ11.4cm、高さ20.1cmを計る。色調は灰色を呈する。4分の3残存している。

5. 第27号墓出土土器

土師器

杯 図面52-2701～2704。椀形の杯で内里上器である。平底の底部より体部は内窵して立ち上がる。口縁部はやや外反する。内面はヘラ磨き・ナデである。外面は、口縁部が横ナデ、体・底部がナデである。内面との口縁部外面を黒色化している。口径13.2～14.6cmを計る。色調は灰褐色・褐色を呈する。口縁部を6分の1から2分の1程欠損している。

6. 表土出土土器

須恵器

杯H 図面53-0011・0012。立ち上がりと受け部をもつ杯身である。立ち上がりと受け部は小さいものである。0011は小さな受け部が水平にのび、立ち上がりはほぼ上方へ小さく上がる。口径11.5cmを計る。0012は小さな受け部が外上方へ延び、立ち上がりは内上方へ小さく上がる。受け部の上端と立ち上がり部の上端との差は僅かである。口径8.9cmを計る。色調は灰色を呈する。

杯H蓋 図面53-0013・0014。杯Hと組み合う椀形の蓋で小破片である。0013は天井部としたが杯身か杯蓋か明確ではなく、底部になる可能性もある。0014は口縁部片である。口縁部と天井部との境に極めて弱い段が付く。口径約13.0cmを計る。色調は、0013が明黄灰色、0014が灰色を呈する。

杯口縁部 図面53-0015・0016。杯Aないし杯Bとされている杯の口縁部である。いずれも小破片である。0015は小型の杯としたが明確ではない。器壁は薄い。口径は9.0cmを計る。0016は大型の杯である。口径は18.8cmを計る。色調は、0015が明灰色、0016が灰色を呈する。

杯蓋口縁部 図面53-0017。大型の蓋の口縁部で、小破片である。天井部が欠損しているが、宝珠形のつまみが付くものと推定される。口縁部は下方へ短く折れる。口径19.8cmを計る。色調は灰色を呈する。

7. 個人所蔵土器

土師器

甕 図面53-0001。小型の甕である。球形の胴部にくの字形に短く折れる口縁部が付く。肩部の張りがなく、やや下膨らみの形をとっている。底部は残存していない。磨滅しているため調整手法は明確ではない。口径11.0cm、胴部最大径11.2cm、残存器高7.4cmを計る。色調は赤褐色を呈する。

須恵器

高杯 図面53-0002・0003。無蓋の高杯。0002は長い脚部をもつ高杯である。口縁部は外側に稜をなした後、直線的に外上方へ拡がる。脚部は外下方へ延び、末端部は内方へ折れるようにして終わる。脚部のやや上方に2条の沈線が廻っている。口径10.2cm、高さ11.2cmを計る。0003は短い脚部をもつ高杯である。口縁部は外側に稜をなした後、直線的に外上方へ拡がる。脚部は外下方へ延び、末端部は段をなして終わっている。脚部のやや下方には極めて弱い沈線が2条廻っている。口径9.6cm、高さ6.6cmを計る。0002は、灰色を呈する。口端部と脚端部を僅かに欠損している。0003は、暗灰色を呈する。口端部少量を欠損している。

杯G蓋 図面53-0004・0005。天井頂部に宝珠形つまみをもち、口縁部内面にかえりをもつ、小型の蓋。口縁部のかえりは口縁部より下方に出ることはないが、口縁部に近い高さである。天井部をヘラ削りしている。0004は、口径9.25cm、器高2.8cmを計る。0005は、口径9.2cm、残存器高2.5cmを計る。色調は明灰色を呈する。0004は完形品である。0005はつまみ部少量を欠損している。

鉢 図面53-0006。小型の鉢。楕円形の胴部にくの字状に折れる口縁部が付く。胴部は外側をヘラ削りしている。口径8.6cm、胴部最大径8.4cm、器高3.9cmを計る。色調は明灰色を呈する。口縁部8分の7、体部3分の2を欠損している。

壺 図面53-0007。球形の胴部に外上方に開く口縁部をもつ。底部はヘラ削りしている。口径10.6cm、胴部最大径13.0cm、器高13.5cmを計る。色調は青灰色を呈する。口縁部6分の5を欠損している。

半瓶 図面53-0008。丸い胴部に漏斗状に開く口頭部が付く。把手は付かない。口径8.7cm、器高17.3cmを計る。色調は青灰色を呈する。完形品である。

細頸瓶 図面53-0201。第2号墓出土品。細長の球形胴部に細い頸部が付く形態。胴部の器壁は計れないので、図面の断面図の内、白抜きの部分は推定線である。口頭部は緩く外反して上方に延び、口縁部は外上方へ開く。胴部は球形だがやや縱に長くなる。5条の沈線が廻っている。底部はやや平らになり、底部外縁から胴下部にかけてヘラ削りしている。口径7.7cm、胴部最大径15.8cm、器高27.2cmを計る。色調は灰色を呈する。完形品である。

第2節 その他の遺物

1. 鉄製品

直刀

図面54-3001。平穂平造の直刀である。全長48.9cm、刀身長約39cm、茎長約9.9cmを計る。フクラ切先で、刀身の先幅は約2.4cm、元幅は2.7cmである。刃は錐と鐔に隠れて見えない。鐔は楕円形である。茎は偏りなく真っ直ぐに延びている。茎尻近くに目釘孔が付く。足金物が2つ付く。3001-Aと3001-Bである。倒卵形の貴金属に環状の吊手孔が付く形態で、横断面はかまぼこ形となる。金銅製で、吊手孔と貴金属とが一体の铸造となっている。吊手孔の位置が直上から僅かだが側面に寄っている。3001-A：全長4.3cm、全幅2.0cm、貴金属内寸長3.4cm、幅1.8cm。3001-B：全長4.2cm、全幅1.9cm、貴金属内寸長3.2cm、幅1.6cm。刀身部、茎部共に木質部が付着している。第22号墓出土。

短剣

図面54-3002。劍であるが短いので短剣と表現した。完存品である。全長27.4cmを計る。劍身部は長さ19.5cm、元幅2.6cm、先幅1.8cmを計る。断面は菱形となり中央に稜が通る。厚さは元側で3.5mm、先側で2.5mmを計る。茎部は長さ7.8cmで、劍身側が幅1.8cmと最も広く、茎尻にかけてすぼまっていく。茎は偏りなく真直ぐに延びている。茎尻は丸くなっている。茎尻から劍身側0.8cmの所に目釘が付く。劍身部、茎部共に木質部が付着している。第27号墓出土。

鉄鎌

図面55に鉄鎌を8点図示した。完存品ないし大部分残存していて形態等が判明する8点(3003~3010)である。これらはすべて有茎式で、短頭鎌4点と長頭鎌4点とに区分される。

短頭鎌

3003 鎌身の一部と茎尻が欠損している。茎部には木質部が付いている。現存長8.95cm、鎌身長3.8cm、鎌身幅(推定)2.9cm、頸部長2.15cm、茎部残存長3.0cmを計る。鎌身は長三角形の形態で、脇挟は持たず直角闇である。鎧被部は棘笠被となる。第22号墓出土。

3004 鎌身の一部と茎部が途中から欠損している。現存長8.2cm、鎌身長3.55cm、鎌身幅2.9cm、頸部長2.6cm、茎部残存長2.15cmを計る。鎌身は長三角形の形態で、脇挟を持つ。第22号墓出土。

3005 茎部が途中から欠損している。現存長7.75cm、鎌身長3.7cm、鎌身幅4.0cm、頸部長3.3cm、茎部残存長1.25cmを計る。鎌身は三角形の形態で、脇挟を持つ。鎧被部は棘笠被となる。第22号墓出土。

3006 鎌身の一部が欠損している。全長7.65cm、鎌身長3.45cm、鎌身幅(推定)2.7cm、頸部長2.25cm、茎部長2.05cmを計る。鎌身は長一角形の形態で、脇挟を持つ。第22号墓出土。

長頭鎌

3007 完存品である。茎部には木質部が付いている。全長14.2cm、鎌身長2.35cm、鎌身幅1.65cm、頸部長6.95cm、茎部長5.2cmを計る。鎌身は長三角形の形態で、脇挟を持つ。鎧被部は棘笠被となる。第24号墓出土。

3008 鎌身の一部が欠損している。茎部には木質部が付いている。全長13.8cm、鎌身長2.6cm、鎌身幅(推定)1.8cm、頸部長7.0cm、茎部長5.0cmを計る。鎌身は長三角形の形態で、脇挟を持つ。鎧被部は棘笠

被となる。第23号墓出土。

3009 鎌身の一部と茎部が途中から欠損している。茎部には木質部が付いている。全長10.5cm、鎌身長(推定)2.35cm、鎌身幅(推定)1.85cm、頭部長6.3cm、茎部残存長2.3cmを計る。鎌身は長三角形の形態で、腸抉を持つ。鎌被部は棘笠被となる。第23号墓出土。

3010 鎌身が折れ曲がっているが、このようにして再利用した可能性があるもの。また頭部の途中から欠損している。現存長は8.65cmを計るが、鎌身を延ばした推定値は10.85cmとなる。鎌身長は約2.5cm、頭部残存長は約8.0cmとなる。片闊片刃箭型式の鎌である。第22号墓出土。

馬具

鞍 図面55-3011。鞍の金具の部分である。第22号墓出土。

刀子

図面56-3012。全長22.35cm、刀身長13.55cm、茎長8.8cmを計る。ほぼ完存している。平棟平造でフクラ切先である。刀身と茎を分ける区は下側に僅かに見られる。刀身の先幅は1.3cm、元幅は1.8cmである。第23号墓出土。

図面56-3013。全長16.2cm、刀身長11.55cm、茎長4.65cmを計る。木質部以外ほぼ完存している。木質部は茎に付着する形で僅かに残存している。平棟平造でフクラ切先である。刀身の先幅は0.7cm、元幅は1.3cmである。茎は偏りなく真っ直ぐ伸びている。第24号墓出土。

図面56-3014。全長約12.0cm、刀身長6.8cm、柄長5.2cmを計る。ほぼ完存している。平棟平造でフクラ切先である。刀身の先幅は0.7cm、元幅は1.25cmである。茎は柄の木質部で覆われて確認できない。第23号墓出土。

図面56-3015。現存長8.9cm、刀身長6.7cm、茎長2.2cmを計る。茎の途中から欠損している。木質部は茎に付着する形で僅かに残存している。平棟平造でフ克拉切先である。刀身の先幅は0.7cm、元幅は1.4cmである。第23号墓出土。

図面56-3016。現存長8.65cm、刀身長7.7cm、茎長0.95cmを計る。茎の途中から欠損している。平棟平造でフ克拉切先である。刀部は刃こぼれ状に欠損している。刀身は先近くの幅で1.0cm、元幅で1.3cmである。第15号墓出土。

図面56-3017。現存長8.55cm、刀身長4.1cm、茎長4.45cmを計る。刀身の先側が欠損している。茎は僅かに刃背側に偏って伸びていて、木質部が若干付着している。刀身は元幅で1.2cmを計る。第15号墓出土。

図面56-3018。現存長3.2cmを計る。刀身の先端のみ残存している。フクラ切先である。第21号墓出土。

図面56-3019。現存長3.1cmを計る。刀身の一部のみ残存している。第15号墓出土。

図面56-3020。現存長11.0cm、刀身長5.1cm、柄長5.9cmを計る。刀身は先端側が欠損している。茎は茎尻が欠損している。茎は木質部で覆われているが、5.4cmほどである。刀身の幅は中央で0.8cm、元で1.5cmを計る。第23号墓出土。

図面56-3021。現存長6.7cm、刀身長2.3cm、柄長4.4cmを計る。刀身は先端側が欠損している。茎は茎尻が欠損している。茎は木質部で覆われている。刀身の幅は先寄りで0.7cm、元で1.2cmを計る。第15号墓出土。

図面56-3022。現存長4.5cm、刀身長1.3cm、柄長2.6cmを計る。刀身は先端側が欠損している。茎は茎尻が欠損している。茎は木質部で覆われている。刀身の幅は先寄りで1.0cm、元で1.3cmを計る。第22号墓出土。

図面56-3023。現存長6.0cm、刀身長2.7cm、柄長3.3cmを計る。刀身は先端側が欠損している。茎は茎尻が欠損している。茎は木質部で覆われている。刀身の幅は先寄りで0.9cm、元で1.1cmを計る。第29号墓出土。

図面56-3024。現存長7.7cm、刀身は基部のみ残存し、茎尻が欠損している。区は明確ではない。第24号墓出土。

形態・用途不明鉄製品

形態、用途等が不明なもの、図面55-3025~3028。3025は方形の薄い鉄板で、小孔が2つ穿たれている。第24号墓出土。3026~3028は棒状のもので、鉄錆の一部を構成する可能性もある。3026・3027は第22号墓出土。3028は第13号墓出土。

2. 銅製品

耳環

金鍍金ないし銀鍍金された耳環（金環、銀環）で、図面59で示した4001~4009の9点である。地金はすべて青銅である。

4001 径2.8~3.0cm、幅約6mm、厚さ約8.5mm、切れ目幅1.5~3mmを計る。完存品で表面の金の残存状態は良好である。第27号墓出土。

4002 径2.7~2.9cm、幅約5.5~7mm、厚さ約8.5mm、切れ目幅1.5~3mmを計る。完存品で表面の金の残存状態は良好である。第23号墓出土。

4003 径2.7~2.85cm、幅約4.5~6mm、厚さ約8mm、切れ目は幅2~3mmを計る。完存品で表面の金の残存状態は良好である。第15号墓出土。

4004 径2.55~2.85cm、幅4.5~5.5mm、厚さ約9mm、切れ目は幅1~2mmを計る。切れ目部分の所に僅かにキズがあり欠損しているが、ほぼ完存品である。表面の銀は多く剥落している。第27号墓出土。

4005 径2.5~2.8cm、幅5.5~6.5mm、厚さ約9mm、切れ目は幅2.5~3.5mmを計る。完存品で表面の金の残存状態は比較的の良好である。第24号墓出土。

4006 径2.7~2.9cm、幅5.5~6mm、厚さ約7.5mm、切れ目幅約3mmを計る。完存品で表面の金は多く剥落している。第21号墓出土。

4007 径2.45~2.7cm、幅4.5~5.5mm、厚さ約8.5mm、切れ目幅2.5~3.5mmを計る。完存品である。表面の金の残存状態は比較的良好である。第14号墓出土。

4008 径2.45~2.9cm、幅5~5.5mm、厚さ約8.5mm、切れ目幅2.5~3.5mmを計る。切れ目近くに僅かにキズがあり欠損しているが、ほぼ完存品である。表面の銀の残存状態は比較的良好である。第23号墓出土。

4009 径2.3~2.4cm、幅4~5mm、厚さ約6.5mm、切れ目幅約1.5mmを計る。完存品である。表面の金は剥落している。第22号墓出土。

馬具

帶先金具 図面59-4010・4011。全鍛製の方形の金具で、帶先金具としたものである。4010は3鉢の金具で鉢は取れて存在しない。毛彫りされている。第24号墓出土。4011は3鉢の金具で鉢も付着している。第24号墓出土。

3. 石製品

砥石

図面57-5001・5002の2点である。

5001 砂岩製の砥石。長さ18.9cm、幅6.2～7.7cm、厚さ4.5～5.4cmを計る。長側面の大きい1面が主要な使用面である。他の大きい1面は一部使用されているが、整形面的なものである。完存品と判断される。第23号墓出土。

5002 泥岩製の砥石。残存長12.3cm、幅2.6～2.8cm、厚さ約1.6cmを計る。長側面の大きい2面が使用面で、他の小さい2面が整形面である。短側面は1面が切断面で、他の1面が欠損面である。第15号墓出土。

切子玉

水晶製の切子玉である。図面57-5003の1点である。側面は胴上半と下半それぞれ6面ずつ面取りされている。長さ2.6cm、中央部での幅（稜から棱まで）1.5cm、厚さ（面から面まで）1.35cmを計る。孔径は2～4mmを計る。完存品である。図面58-6001～6030のガラス丸玉と組み合うものである。第23号墓出土。

4. ガラス製品

丸玉

ガラス製の丸玉である。図面58-6001～6030の30点である。表面には金粉が付着している。これらについては、第2表を参照されたい。第23号墓出土。

5. 骨角製品

骨髄

鹿の長骨で作った鎌である。図面60-7001～7008の8点である。

7001 ほぼ完存品である。茎尻の一部が欠損しているものと推定される。残存全長は16.85cmを計る。鎌身は偏平な半円形断面となり、先端は鋭く三角形状になる。凸面側に切れ込みが2箇所入る。長さ6.8cm、基部幅1.0cm、基部厚0.45cmを計る。頭・茎部は残存長9.05cmを計る。最大幅は0.8cmで、ここで頭部と茎部を区別すると頭部長4.2cm、茎部長5.05cmとなる。頭部はやや丸味を持つ半円形断面となる。茎部は梢円形断面となる。鎌身の基部から頭部にかけて、凹面側には自然の骨髓腔がみられる。第12号墓出土。

7002 鎌身の大部分と頭部の一部が残存している。鎌身は先端が僅かに欠損していると推定される。残存全長は8.0cmを計る。鎌身は偏平な半円形断面となり、残存長7.0cm、基部の幅1.0cm、厚さ0.5cmを計る。頭部は偏平な半円形断面となり、残存長1.0cm、幅0.7～0.8cmを計る。鎌身の中央より先端寄りから頭部にかけて、凹面側には自然の骨髓腔がみられる。第12号墓出土。

7003 鎌身の一部分が残存している。先端側、基部側とも欠損している。残存全長は6.95cmを計る。鎌身は偏平な半円形断面となり、基部側の幅は0.95cmを計る。凹面側には自然の骨髓腔がみられる。第12号墓出土。

図面番号	長さ	幅	厚さ	孔 様	図版	色 調	備 考
図面58-6001	1.20	1.18	0.83	0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6002	1.20	1.15	0.80	0.3~0.35	図版98-1	緑?	
図面58-6003	1.15	1.18	0.80	0.2強~0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6004	1.15	1.18	0.83	0.3	図版98-1	緑?	
図面58-6005	1.15	1.18	0.75	0.25~0.3	図版98-1	緑?	
図面58-6006	1.15	1.13	0.85	0.25~0.3強	図版98-1	風化変色	
図面58-6007	1.18	1.10	0.80	0.25~0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6008	1.10	1.08	0.85	0.3弱~0.3	図版98-1	緑	
図面58-6009	1.15	1.10	0.80	0.2~0.25	図版98-1	風化変色	
図面58-6010	1.10	1.10	0.80	0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6011	1.10	1.10	0.78	0.2~0.25	図版98-1	風化変色	
図面58-6012	1.10	1.10	0.73	0.2強~0.25	図版98-1	緑?	
図面58-6013	1.10	1.08	0.75	0.25~0.3	図版98-1	緑	
図面58-6014	1.10	1.05	0.75	0.25~0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6015	1.05	1.05	0.85	0.2~0.3弱	図版98-1	緑	
図面58-6016	1.05	1.07	0.80	0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6017	1.05	1.03	0.80	0.3~0.3強	図版98-1	風化変色	
図面58-6018	1.05	1.03	0.78	0.25~0.3	図版98-1	緑?	
図面58-6019	1.00	1.05	0.83	0.25~0.3	図版98-1	緑	
図面58-6020	1.00	1.05	0.73	0.25~0.4	図版98-1	風化変色	
図面58-6021	1.03	1.03	0.73	0.35~0.4	図版98-1	緑	
図面58-6022	1.03	1.00	0.75	0.25強~0.3	図版98-1	風化変色	
図面58-6023	1.00	1.00	0.75	0.3~0.35	図版98-1	緑	
図面58-6024	1.20	0.70	0.80	0.25~0.35	図版98-1	風化変色	約半分残存
図面58-6025	1.18	0.60	0.80	0.3~0.35	図版98-1	風化変色	約半分残存
図面58-6026	1.10	0.60	0.80	0.2~0.3	図版98-1	風化変色	約半分残存
図面58-6027	1.10	0.60	0.78	0.3~0.35	図版98-1	緑	約半分残存
図面58-6028	1.10	0.55	0.75	0.35	図版98-1	緑	約半分残存
図面58-6029	1.05	0.60	0.75	0.25~0.3	図版98-1	風化変色	約半分残存
図面58-6030	1.05	0.50	0.75	0.3~0.35	図版98-1	緑	約半分残存

第2表 ガラス丸玉一覧表

7004 基部と推定される破片である。残存全長は5.8cmを計る。幅が0.55～0.85cm、厚さが0.5～0.6cmを計る。凹面には骨頭腔がみられる。第12号墓出土。

7005 完成品である。全長は17.4cmを計る。鎌身部は偏平な半円形断面となる。平面的には基部に最大幅があり、僅かづつ幅を減じて直線的に延び、三角形状の先端部に至る。長さ10.4cm、基部幅1.1cm、基部厚0.5cmを計る。鎌身部と頭部との境は、側縁部からの1.0mm程の切れ込みで区分されている。頭部は丸味ある半円形断面である。長さ3.0cm、幅0.9cm～1.0cm、厚さ0.5cmを計る。頭部と茎部との境は、凸面側の僅かな高まりと、側縁部からの0.5mm程の切れ込みで区分されている。茎部は長さ4.0cm、最大幅0.9cmを計る。凹面の骨頭腔は、鎌身部の基部側と頭部、茎部にみられる。第22号墓出土。

7006 鎌身と頭部の一部が残存している。残存全長は12.6cmを計る。全体的に内反りしている。鎌身は偏平な半円形断面となる。平面形態は基部に最大幅があり、順々に細くなって先端部に至る。長さ10.6cm、基部幅1.0cm、茎部厚0.5cmを計る。鎌身と頭部との境は、0.5～1.0mm程の切れ込みを入れている。頭部は偏平な半円形断面となり、残存長は2.0cmで、幅は0.75～0.8cmを計る。凹面の骨頭腔は、鎌身中央から頭部にみられる。第22号墓出土。

7007 茎部が途中から欠損しているが、大部分残存しているものと推定される。残存全長は16.8cmを計る。鎌身は偏平な半円形断面となる。平面形態は基部よりやや外張りして三角形状の先端へ至る。長さ10.15cm、基部幅0.75cm、中央部最大幅0.85cmを計る。基部側が最も厚く0.5cmで、先端に向かって尖っていく。鎌身と頭部との境は、0.5mm程の切れ込みを入れている。頭部はやや丸味を持つ半円形の断面である。長さは3.0cmで、基部側が最大となり、幅8.5cm、厚さ0.5cmを計る。頭部と茎部との境は、1mm程の切れ込みを両側から入れている。茎部は、残存長3.2cm、最大幅0.7cmを計る。凹面の骨頭腔は頭著に残り、鎌身先端部以外全体的にみられる。第22号墓出土。

7008 鎌身先端側が途中から欠損しているが、相当量残存しているものと推定される。残存全長は16.7cmを計る。鎌身は偏平な半円形断面となる。残存長は8.1cm、幅は、基部で1.05cm、中央部で0.95cmを計る。鎌身と頭部との境は、1～1.5mm程の切れ込みを凸面側全体に入れている。頭部は横円形気味の半円形断面である。長さは3.4cmで、中央での幅が0.8cm、厚さが0.5cmを計る。頭部と茎部との境は、削り残すことにより、極広くなり厚くなり彼をなしている。茎部は、残存長5.4cm、中央部幅6.5cmを計る。凹面の骨頭腔は、鎌身中央部と茎部付近にみられる。第22号墓出土。

その他の骨角製品

ここでは、骨鎌以外の骨角製品及び貝製品を取り上げる。図面59～7009～7014の6点である。

ヘアピング状骨角製品、7009。まさかりのような形態に加工されたもの。基部に小孔が1つ穿たれている。長さ(斧の柄に当る所)7.0cm、高さ(斧の刀部から基部まで)1.1cmを計る。第27号墓出土。

円筒状骨角製品、7010。狭端径約1.2cm、広端径約1.5cm、長さ2.1cmを計る。第27号墓出土。

ソケット伏骨角製品、7011。狭端径約0.7cm、広端径約1.4cm、長さ2.9cmを計る。ヘラ削り状の跡がついている。第14号墓出土。

ベン先状骨角製品、7012。骨鎌の一部の可能性もあるが、これの茎尻とするにはあまりにも薄く、他の部分とも考えられないので、別のものとした。第24号墓出土。

貝製環状品、7013。大型のイモガイ類の殻頂部を輪切りにしたものと思われる。径約3.85cm、幅7～7.5mm、厚さ約4.5mmを計る。第22号墓出土。

貝製円形有孔品、7014。2枚貝、ことにドブ貝を円形に加工して穿孔したものと思われる。第29号墓出土。

第4章 人骨

富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室 森沢佐蔵

平成8年度の江道横穴墓群（所在：富山県高岡市園吉地区江道字高の宮地内）の調査は高岡市教育委員会が主体となり、平成8年6月3日～同年11月30日にわたって行われ、第15号・21号・22号・23号・24号・27号・29号墓の合計7基の横穴墓よりいずれも多数個体の人骨が散乱状態で発見された。各横穴墓人骨は主に層位により上層の散乱群（S）と下層の集積群（I）とに分けられる。さらに下層人骨群（I）の分布域により、第15号・21号の下層群は渡道側の玄室床面から奥壁の床面に向かって順にA～Cの3群に、第22号・23号はA～Eの5群に、第24号はA～Dの4群に、第27号・29号はA～Cの3群の集積群にはば分かれ出土している。これらの出土人骨は大部分大小の骨片群であり、完形をなすもの（◎）が少ないが、骨表面の性状よりいずれも生骨である。骨片間で連結可能な骨片（=）もある。

この人骨の調査を主体者より依頼されたので、観察個数および人骨所見より各横穴墓の最小個体数を以下に検討する。なお、人骨の個体数は性や年令に伴う人骨の特徴について、重複する部位の比較、左右側の個体識別などにより推したが、左右側の鑑定可能な人骨所見は原則として左側のみ記載する。また、出土骨には原則として本文中の鉤括弧内に出土番号（人骨群・出土地点）を記した。

1. 第15号墓出土人骨

出土位置

上層群15Sは玄室の奥壁近くより散乱状態で出土する。下層群15Iは玄室の渡道側から奥壁の床面に向かって順に人骨群15A～人骨群15Cの3集積群となっている。そのうち、15A [A795～A800、A806、A1005～A1018、A1027～A1028、A1266～A1273] は玄室の最前の床面上に東西方向に連なる群と、南北に広がる厚い人骨群がある。15B [B1018～B1027、B1049～B1050、B1273～B1276] は玄室中央より北東に広がる人骨群である。15C [C1028～C1034、C1276～C1287] は玄室の北西隅より奥壁に平行して東側へ連なる人骨群である。

埋葬様式

15Aのうち、玄室の墓前域側の床面で、前壁にはほぼ平行して左右の下肢骨 [A1008-31=A1008-39、◎A101-65、◎A1005-09、A1006-13、A1008-32、◎A1005-05、A1005-08、A1006-18] がほぼ生理的位置関係を保ち出土しており、埋葬当時の姿勢は左右下肢伸展位で足底を西に向けていたと思われる。また、頭蓋2個 [B1049、B1050] は後頭骨と頭頂骨左右により構成される。他の人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身骨が多数出土する。その種別の個体数は腐蝕があるいは何らかの機序により欠損している。距骨右は最も小9個体分 [A1272-65、B1274-87、C1033-286、C1277-118、◎S027、S072、S818、S947-01、◎S1082-I79] あり、腕骨、下界甲介、添骨、鼻骨、鎖骨、口蓋骨、小菱形骨は観察できない。6個以上観察可能な種別を列記すると、脛骨遠位端右は10個、大腿骨近位端左右、膝蓋骨右、踵骨左は9個、胫骨遠位端左、距骨左、第一中足骨左は8個、下顎骨正中、仙骨、外側楔状骨右、第一中足骨右は7個、鎖骨胸骨端左右、橈骨遠位端右、寛骨脇骨翼左、膝蓋骨左、足の舟状骨左右は6個、の16種である。

下層の集積層について観察個数の多い（2個以上）順にあげると、15A：肩甲骨関節窩は右4個 [A795-03、A795-04、A806-116、A1014-92] でもっとも多く、大腿骨近位端は右2個 [◎A806-119=A1014-93、◎A1011-65]、同左は3個 [◎A1005-05、◎A1016-113、◎C1284-189] あり、胸骨、前椎、仙骨、尾椎、鎖骨右、上腕骨左右、頭骨左右、尺骨左、第一中手骨左、寛骨左、脛骨右、膝蓋骨右、踵骨左右、立方骨右、第一中足骨左の部分骨はいずれも2個出土する。15B：側頭骨錐体は左3個 [B1019-147、B1020-152、B1273-80] で多く、後頭骨、頭頂骨左右、鎖骨左、上腕骨左、桡骨右、寛骨左、大腿骨左右、踵骨左、足の舟状骨右、外側楔状骨右、第一中足骨右の部分骨はいずれも2個出土する。15C：脛骨遠位端は右3個 [C1034-294、C1034-297、C1279-131]、同左3個 [C1033-289、C1034-295、C1284-183] 出土し、距骨左右・踵骨右の部分骨は2個出土する。

人骨所見

頭蓋、下顎骨、上腕骨、寛骨、大腿骨の順に所見を述べる。頭蓋は2個 [B1049、B1050] 出土している。頭蓋2個 [B1049、B1050] は後頭骨と頭頂骨左右により構成される。頭蓋 [B1049]：頭頂骨左右と後頭鱗の各一部である。頭蓋骨の断面は厚い。頭頂骨左右の前頭縁・矢状縫・後頭縁は隣接骨から遊離している。頭蓋 [B1050]：頭頂骨左右と後頭鱗の各一部である。頭蓋骨の内板・外板は薄い。主要結合のうち、観察可能なラムダ縫合の施着はみられないが、矢状縫合の内・外板は癒着完了している。外後頭結節の突出度はプロカの1~2度である。外耳道骨瘤は側頭骨右2個 [S811-169、S816-211] でみられ、左1個 [B1019-147] ではみられない。下顎骨正中部は7個 [A795-06=A1010-51、S123、S124、S951、C1028-239=S819-248、S807-125、S947-02] ある。下顎骨4個 [A795-06=A1010-51、S123、S124、S951]：いずれも頑丈であり、齒槽中に残存する大臼歯の咬耗度はマルチンの2~3度である。そのうち2個 [A795-06=A1010-51、S951] は第三大臼歯は崩出し、歯の周囲に歯石が付着している。残存する大臼歯の咬耗度はマルチンの1度である。下顎骨 [S807-125]：下顎体は低く（オトガイ高 28.5mm）、正中部に下顎結合の痕跡がみられる。下顎骨 [S947-02]：下顎体は特に低く（オトガイ高 16mm）、下顎体は下顎結合で左右に遊離する。上腕骨遠位端左は5個 [◎A1005-04、S816-215、◎A806-120、B1027-225、B1275-93] 出土している。上腕骨左2個 [◎A1005-04、S816-215]：いずれも大きく（上腕骨最大長 304mm、302mm）、骨幹も太い（骨体最小周 63mm、64mm）。上腕骨左 [◎A806-120]：小さく（上腕骨最大長 264mm）、骨幹は細い（骨体最小周 56mm）。上腕骨左 [B1027-225]：骨幹は細く（骨体最小周 55mm）、滑車上孔がみられる。上腕骨左 [B1275-93]：骨幹は特に細く（下端径 34mm）、遠位骨幹端が骨端より遊離している。寛骨脇骨翼左は5個 [A1008-32、◎A1012-73、C1282-163、C1031-263、S332] 出土している。寛骨左2個 [A1008-32、◎A1012-73]：腸骨枝の骨端が鶲骨翼と完全に融合している。そのうち、前者 [A1008-32] の大坐骨切折は狭く、後者 [◎A1012-73] のそれは広い。寛骨左2個 [C1282-163、C1031-263]：腸骨翼の周縁に骨端線の一部の痕跡が骨表面よりみられ

る。寛骨左〔S332〕：腸骨体は寛骨臼部で恥骨体・坐骨体より遊離している。大腿骨近位端左は8個〔◎C1 284-189、◎A1005-05、S801-68、B1021-161、S814-199、◎A1016-113、S807-122、B1019-145〕出土している。大腿骨左2個〔◎C1 284-189、◎A1005-05〕：いずれも大きく（大腿骨最大長 449mm、426mm）、太い（骨幹中央周 99mm、84mm）。大脛骨左2個〔S801-68、B1021-161〕：いずれも太い（骨幹中央周 85mm、80mm）。大腿骨左〔S814-119〕：近位端は大きい（上端幅 92mm）。大腿骨左〔◎A1016-113〕：小さく（大腿骨最大長 384mm）、細い（骨幹中央周 83mm）。大腿骨左2個〔S807-122、B1019-145〕：いずれも近位骨幹端が骨端より遊離し、そのうち1個〔B1019-145〕は特に小さく（骨幹最大長 87mm）、細い（中央周 20mm）。

第15号墓出土人骨には距骨右が9個ある。上層の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群A・B・Cの年齢構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、磨耗から、性別について推定年齢に相当する骨の大きさ、形状、乳様突起の大きさ、肩間・外後頭頸節の鈍隆度、寛骨の大坐骨切痕の形態などの所見から総合判断すると、青年人期以降の成人骨は8個体：熟年男性骨4個体〔A×1、S×3〕、壮年男性骨1個体〔B〕、熟年女性骨1個体〔B〕、年齢不詳女性骨1個体〔A〕、年齢不詳男性骨1個体〔C〕、青年期末溝の未成人骨4個体：不詳未成人骨1個体〔A〕、小兒期骨1個体〔B〕、少年期骨1個体〔C〕、幼年期骨1個体〔S〕の合計12個体分と思われる。そのうち、玄室入りより左右下肢伸展位〔A〕で出土の人骨は熟年男性骨、玄室中央の頭蓋2個〔B1049、B1050〕は壮年男性骨1個体〔B〕、熟年女性骨1個体〔B〕と思われる。

特記事項

第15号墓出土人骨には、縫合骨（B1019-147）、外耳道骨瘤（S811、S816、B1273-80）、口蓋隆起（S122）、下顎隆起（A1010-51、S819、S124）、歯石（C1028-239 他4個）、腰椎骨軸（A1009-49 他4個）、第5腰椎の仙骨化（A1028-231）、アレン窓窓（C1282-167）、滑車上孔（B1027-225）、船直線（B1020-151）が観察される。

2. 第21号墓出土人骨

出土位置

上層群21Sは玄室入口（南）側に広く散布する。下層群21Iは玄室の狭道側から奥壁の床面に向かって順に人骨群21A～人骨群21Cの3集積群となっている。そのうち、21A〔A230～A238、A473～A480、A518、A528～A531〕は玄室の狭道側の人骨群である。21B〔B229、B271、B337～B348、B481～B507、B532～B557〕は玄室奥壁の西側の人骨群である。21C〔C394、C468～C472、C508～C517、C519、C521〕は玄室奥壁の北東隅の人骨群である。

埋葬様式

上層群・下層群の人骨はいずれも散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身骨が出土する。21号墓より上腕骨遠位端右〔B507、S048-01、S070、S286〕は4個あり、蝶骨、下鼻甲介、涙骨、鼻骨、鎗骨、II・III蓋骨、舌骨、仙骨、足の第一基節骨は観察できない。上腕骨の他に約半数以上（3個）の観察可能な種別を列記すると、後頸骨外側部、肩甲骨関節窓右、鎖骨体右、上腕骨遠位端左、

有鈎骨右、大腿骨近位端右、脛骨遠位端左、膝蓋骨右、距骨左の9種ある。

下層の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、21A：小菱形骨右1個〔A477-01〕、有頭骨右1個〔A477-02〕、第一中手骨左1個〔A238〕、寛骨腸骨翼右1個〔◎A233〕は各1個出土する。21B：鎖骨体右は3個〔B486-01、B503、◎B555〕出土し、脛骨遠位端左〔B506、B557〕、中間楔状骨左〔B539、B542〕は2個出土する。21C：胸椎、腰椎、第一肋骨頸左〔C512〕、上腕骨遠位端左〔C394〕、中手骨左右、膝蓋骨右〔◎C471〕、距骨左〔◎C513〕、中足骨左右、他趾の基節骨が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。

人骨所見

頭蓋骨、上腕骨、寛骨、大腿骨の順に所見を述べる。後頭骨外側部左は2個〔S057、S395〕出土している。後頭骨外側部左〔S395〕は基部および後頭縫から遊離し（最大前後径 42mm）、〔S057〕は癒着合している。側頭骨錐体右〔A477-03〕は小さい（内・外耳孔間距離 29mm）。上顎骨齒槽突起左は2個〔S117、◎B486-02〕出土している。上顎骨齒槽突起左〔◎B486-02〕は小さく（前後径 25mm、幅径 26mm、高径 39mm）、この齒槽中には第2乳臼歯の歯冠が齒槽中に埋伏している。上顎骨齒槽突起左〔S117〕の第三大臼歯は萌出し、歯の咬耗度はマルテンの1度である。下顎骨体左〔S118〕の体部は高く（下顎体高 30mm）、下顎枝は大きい（最小枝高 50mm、最小枝幅 41mm）。上腕骨遠位端右は4個〔S070、B507、S048-01、S286〕ある。上腕骨遠位端右〔B507〕は大きく（上腕骨最大長 283mm、骨体最小周 60mm）、上腕骨遠位端右〔S070〕の骨幹も太い（骨体最小周 66mm）。上腕骨遠位端右2個〔S048-01、S286〕の骨幹は骨端より遊離し、骨幹は細い（骨幹周 54mm、27mm）。寛骨腸骨翼右は2個〔B497、◎A233〕出土する。寛骨腸骨翼右〔B497〕の体部は骨端と癒合し、大坐骨切痕は広い（腸骨幅 152mm、寛骨臼最大径 52mm）。また、この恥骨枝は細く、恥骨結合面に数条の低い横棱をみる。寛骨腸骨翼右〔◎A233〕の体部は隣接の恥骨体・坐骨体より遊離している（腸骨幅 55mm、腸骨翼高 50mm）。大腿骨近位端右は3個〔S092、B544、S048-02〕ある。大腿骨近位端右〔S092〕の骨幹は太く（骨体中央周 80mm）、大腿骨近位端右〔B544、S048-02〕の骨幹はいずれも細い（骨体中央周 55mm、54mm）。

第21号墓出土人骨には上腕骨右が最小限4個体分ある。上腕の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群A・B・Cの年齢構成について、性別および年齢に関する所見から総合判断すると、青年期以降の成人骨は2個体：壮年女性骨1個体〔B〕、青年男性骨1個体〔C〕、青春期未満の未成人骨3個体：幼年期骨3個体〔A×1、B×2〕の最小5個体分と思われる。

特記事項

第21号墓出土人骨には、歯石〔S117 他 6個〕、齶歯〔S118〕、焼痕〔脛骨右B532〕が観察される。

3. 第22号墓出土人骨

出土位置

上層群22Sは玄室内に広く散乱状態で出土する。下層群22Iは玄室の渓道側から奥壁の床面に向かって順に人骨群22A～人骨群22Eの集積群となっている。そのうち、22A〔A141、A142、A152～A170、A307～A314、A366～A372、A397～A408、A421～A448〕は玄室の南東側に広く散布する人骨群である。22B〔B132～B140、B143～B151、B300～B304〕は玄室の中央部を南西隅より北東方向に広がる人骨群である。22C〔C628～C63

4] は玄室の奥壁近くの中央に広く散布する人骨群である。22D [D626~D628, D652~D654, D713, D714, D923~D925] は玄室の奥壁近くで北西隅に広く散布する人骨群である。22E [E692, E715~E764, E786~E791, E854~E860, E920~E923] は玄室の奥壁近くで北東隅に広く散布する人骨群である。

埋葬様式

人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身の部分骨が多数出土する。完形をなすものがさくない。22号墓より側頭骨錐体左は12個体分 [A366-02、A398-16、E855-13、E859-53、E923-40、E921-19、S055-01、S068-01×2、S675、S778-01×2] あり、節骨、下鼻甲介、涙骨、鼻骨、鋸骨、口蓋骨、豆状骨、手の第一基節骨・末節骨、足の中節骨・末節骨は観察できない。上述の1種の他に約半数以上（7個以上）の観察可能な種別を列記すると、側頭骨錐体右 [D627-13、E786-04、E790-46、E921-13、S293、S055-02、S702、S844-01×2、S902]、前頭骨頸骨突起右 [A163、A367-18、D627-17、E786-05、S068-02、S378、S590、S613、S778-02×2] は10個、肩甲骨関節窩右、鎖骨肩峰端右、上腕骨遠位端左、寛骨腸骨翼右、蹠骨遠位端左右は8個、上顎骨齒槽突起左、下顎骨体正中、環椎外側塊左、仙骨、上腕骨遠位端右、橈骨遠位端左、内側楔状骨右は7個、の14種である。

下巻の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、22A：上顎骨齒槽突起左 [A157、A158、A309-86]、鎖骨肩峰端右 [A308-74、A406-97、A446-26]、距骨左 [A312-117、A368-29、A427-07] はいずれも各3個出土する。次いで側頭骨錐体左、頭頂骨蝶形骨角左、前頭骨頸骨突起右、上顎骨齒槽突起右、肩甲骨関節窓右、上腕骨遠位端右、寛骨腸骨翼右、蹠骨左、足の舟状骨左右、内側楔状骨右はいずれも2個出土する。22B：下顎骨体正中 [B139、B144、B300-07] は3個、上腕骨遠位端右、第一肋骨頭左は2個出土する。22C：脱落永久歯 [C×4]、腰椎 [C×3]、仙骨 [C628-29]、第一肋骨頭右 [C628-27]、肩甲骨肩甲棘左 [C632-67]、橈骨遠位端右 [C633-72=E786-09]、第一中手骨右 [C630-49]、他の中手骨合計右 [C×1]、膝蓋骨左 [C631-52]、足の舟状骨右 [C629-33]、他の中足骨合計 [C×1] などが観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。22D：後頭骨外側部右 [D652-04]、側頭骨錐体右 [D627-13]、前頭骨頸骨突起右 [D627-17]、脱落永久歯 [D×1]、他の頸椎 [D×2]、胸椎 [D×4]、仙骨 [D628-22]、第一肋骨頭右 [D626-10]、橈骨遠位端左 [D923-38]、人軀骨体中央部左 [D924-45]、膝蓋骨右 [D628-25]、距骨右 [D713-01]、同左 [D626-02]、立方骨右 [D628-23]、中足骨右 [D×1] などが観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。22E：胫骨遠位端左 [E756、E787-19、E857-37、E921-11、◎E922-27] は5個出土する。次いで側頭骨錐体左、寛骨腸骨翼右、蹠骨遠位端右は4個、側頭骨錐体右、大腿骨近位端右、膝蓋骨右、距骨右は3個出土する。

人骨所見

頭蓋骨、上腕骨、寛骨、脛骨の順に所見を述べる。後頭骨外側部左は4個 [S792-01、S845、A368-27、S569] 出土する。後頭骨外側部2個 [S792-01、S845]：基底部および後頭鱗と融合する。後頭骨外側部左2個 [A368-27、S569]：基底部および後頭鱗から遊離する。側頭骨錐体左は12個 [A366-02、A398-16、E923-40、S055-01、S675、E855-13、E859-53、S068-01×2、S778-01×2、E921-19] 出土する。そのうち7個 [E855-13、E859-53、S068-01×2、S778-01×2、E921-19] は小さい（内・外耳孔間距離 20mm-27mm）。下顎骨正中部は7個 [B139、A312-114、S778-03、B300-07、B144-13、E854-10、E921-12] 出土する。下顎骨正中部 [B139]：第三人臼歯は萌出（咬合度 マルチンの1度）、下顎体は頸丈である（オトガイ高 40mm）。下顎骨正中部 [A312-114]：第二大臼歯が萌出する（オトガイ高 33mm）。下顎骨正中部2個 [S778-03、B

300-07] : 第二乳臼歯遠位側に第一大臼歯が萌出する (オトガイ高 30mm、28mm)。下頸骨正中部 2 個 [B1 44-13、E854-10] : 第二乳臼歯が萌出し、正中部内側面に下歫結合の痕跡が認められる (オトガイ高 25 mm)。下頸骨正中部 [E921-12] : 第一乳臼歯が萌出し、第二乳臼歯が未萌出である (オトガイ高 20mm)。上腕骨遠位端左は 8 個 [A307-63、S049、◎D626-07、S840-01、B150、E854-08、E786-01、S844-02] 出土する。上腕骨遠位端左 2 個 [A307-63、S049] : 骨幹は太い。上腕骨遠位端左 2 個 [◎D626-07、S840-01] : 骨幹はいずれもやや太く、前者の骨幹は遠位骨端より遊離する (骨幹長 285mm、最小周 64mm)。上腕骨遠位端左 4 個 [B150、E854-08、E786-01、S844-02] : 骨幹は細い (最小周 48mm-30mm)。寛骨腸骨翼右は 8 個 [E786-07、A159、E790-45、E858-43、E789-38、A307-69、S792-02、S778-04] 出土する。寛骨腸骨翼右 [E786-07] : 耳状面を含む部位であり、骨端は癒着完了している。寛骨腸骨翼右 [A159] : 関節線の骨端線が骨表面より一部分認められる。寛骨腸骨翼右 [E790-45] : 耳状面および腸骨稜の骨端はいずれも遊離している。寛骨腸骨翼右 2 個 [E858-43、E789-38] : 棘骨体や坐骨体から遊離する (腸骨体幅 43mm、28mm)。寛骨腸骨翼右 3 個 [A307-69、S792-02、S778-04] : 棘骨体はさらに小さい (腸骨体幅 24mm-17mm)。脛骨遠位端左は 8 個 [E857-37、E756、E921-11、◎S934、S840-02、E787-19、E738、◎E922-27] 出土する。脛骨遠位端左 [E857-37] : 遠位骨端線の一部を骨表面から認める。脛骨遠位端左 2 個 [E756、E921-11] : 遠位骨端は骨幹から完全に遊離している。脛骨遠位端左 4 個 [◎S934、S840-02、E787-19、E738] : 骨幹はやや細い (骨幹長 100mm、最小周 35-34mm)。脛骨遠位端左 [◎E922-27] : 小さい (骨幹長 95 mm、最小周 31mm)。

第22号墓出土人骨には側頭骨錐体左が 12 個ある。上層の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群 A・B・C・D・E での年齢構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、腐耗から、青年期以降の成人骨は 5 個体：牡年期骨 2 個体 [A、B]、青年期骨 2 個体 [A、E]、年齢詳細不明骨 1 個体 [B]、青年期未満の未成人骨 9 個体：少年期～小児期骨 1 個体 [B]、少年期骨 4 個体 [A、B、E×2]、幼年期骨 4 個体 [A、E×3] の合計 14 個体分と思われる。これらの人骨片群は完形をなすものが少なく、人骨の性別はいずれも不明である。

特記事項

第22号墓出土人骨には、歯石 (B304-50 他 6 例)、下顎隆起 (A399-28)、大腿骨上骨幹前後扁平 (A406-9 5)、扁平胫骨 (A408-115)、焼痕 (肩甲骨左 A399-26 他 6 例) が観察される。

4. 第23号墓出土人骨

出土位置

上層群 23 S は玄室内より一括出土する。下層群 23 I は玄室の葬道側から奥壁の床面に向かって順に入骨群 23 A～入骨群 23 E の 5 集積群となっている。そのうち、23 A [A1132、A1133、A1146-01～A1152-66、A1369-01～A1375-62、A1462-42～A1462-50] は玄室の入り口近くに集積する。23 B [B1134～B1137、B1152-67～B1165-197、B1375-63～B1391-229、B1458-01～B1462-41、B1463-51～B1469-15] は玄室中央で南東より北西方向に細長く集積する。23 C [C1165-198～C1168-229、C1391-230～C1393-244] は玄室の中央よりやや奥壁近くに集積する。23 D [D1131、D1168-230～D1171-251] は玄室の中央よりやや奥壁近くで東側に集積する。23 E [E834、E838、E1139、E1204、E1207、E1171-252～E1183-384、E1393-245～E1403-348] は玄室の最も

奥壁近くで東西方向に長く集積する。

埋葬様式

人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。上層群として頭蓋 2 個 [◎S834、◎S838] 及び下層群として頭蓋は 10 個 [A1132、A1133、B1134、◎B1135、◎B1136、B1137、D1131、◎E1139、B1204、E1207] 出土するが、いずれも他の骨と生理性の位置関係はない。

出土人骨

ほぼ全身骨が多数出土する。第23号墓より頭蓋 [A×2、B×4、D×1、E×3、S×2] は 12 個あり、舌骨、尾椎、手足の第一基節骨は観察できない。上述の他に約半数以上（7 個）の観察可能な種別を列記すると、橈骨遠位端右 [◎A1146-08、A1369-06、A1374-51、B1378-93、◎B1390-213、B1469-13、E1176-308、◎E1177-315、◎E1398-293、◎S1235] は 10 個、下顎骨、上腕骨遠位端右、大脛骨近位端右、腓骨遠位端右は 10 個、第一肋骨頭左、人軸骨近位端左、腰骨遠位端左は 9 個、鎖骨胸骨端左右、尺骨近位端右、寛骨腸骨翼左右、腓骨遠位端体右は 8 個、仙骨、肩甲骨関節窓左右、上腕骨遠位端左、尺骨近位端左、蹠骨右は 7 個、の 17 種ある。

下層の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、23A：肩甲骨関節窓右 [◎A1147-17、◎A1151-60、A1374-55]、橈骨遠位端右 [◎A1146-08、A1369-06、A1374-51] は 3 個出土し、脛骨遠位端は右 2 個 [◎A1149-31、◎A1369-01]・左 1 個 [◎A1375-61] 出土する。頭蓋、下顎骨、尺骨近位端左、腓骨遠位端体左、大脛骨近位端右 [◎A1149-37、◎A1151-57] は 2 個出土する。23B：頭蓋 [◎B1136、◎B1135、◎B1134、B1137]、下顎骨 [B1159-134、B1162-169、◎B1162-170、◎B1165-192]、肩甲骨関節窓左 [B1158-125、B1160-148、B1165-196、B1375-64]、尺骨近位端右 [◎B1160-143、B1162-167、B1390-214、B1458-03]、大脛骨近位端右 [◎B1153-75、B1155-91、◎B1156-103、B1157-114]・同左 [B1152-69、◎B1155-94、◎B1164-186、◎B1165-191]、胫骨遠位端左 [◎B1154-90、B1159-139、B1163-175、B1163-179] は 4 個出土する。第一肋骨頭右、鎖骨胸骨端左右、上腕骨遠位端左、橈骨遠位端右、寛骨腸骨翼左、胫骨遠位端右は 3 個出土する。23C：第一肋骨頭右 [◎C1166-210、◎C1167-211] は 2 個出土する。他の頸椎、腰椎、仙骨、第一肋骨頭右、上腕骨遠位端左、橈骨遠位端左、月状骨左、寛骨腸骨翼左右、人軸骨近位端右、腓骨遠位端左右、距骨左が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。23D：頭蓋 [D×1]、下顎骨 [◎D1169-231]、頸椎 [D×1]、胸椎 [D×2]、第一肋骨頭左 [◎D1168-229]、上腕骨遠位端右 [D1169-235]、尺骨近位端右 [D1169-238]、寛骨腸骨翼右 [D1168-230] が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。23E：大脛骨近位端左は 4 個 [◎E1176-302、◎E1180-350、◎E1397-287、◎E1399-304] で、もっとも多く出土する。頭蓋、仙骨、橈骨遠位端右、寛骨腸骨翼左右、腓骨遠位端左右は 3 個出土する。

人骨所見

頭蓋、下顎骨、上腕骨、寛骨、大脛骨の順に所見を述べる。頭蓋は 12 個 [◎S834、◎B1136、◎E1139、◎S838、◎B1135、A1132、◎B1134、E1204、B1137、A1133、B1207、D1131] 出土する。頭蓋 [◎S834]：全体に頑丈であり、主要頭蓋縫合の内、冠状・ラムダの肉縫合の癒着度はマルテン 1 度、矢状縫合のそれは 4 度である。前頭隆起の膨隆は弱く、眉間および眉上弓の膨隆は強い。外後頭結節の膨隆度はプロカの 3 度である。歯槽中に残存する上顎第二小白歯、第一大臼歯の咬耗度は 2 度である。これらの永久歯の周囲には歯石が付着しているが、う触は認められない。頭蓋 [◎B1136]：脳頭蓋の内・外板は厚い。主要頭蓋縫合内板の癒着度はマルテン 4 度、外板のそれは 3 度である。眉間の膨隆度はプロカ 3 度である。側頭骨乳突起は大きく、外方への膨隆も強い（内・外耳道孔間距離 28mm）。頭蓋 [◎E1139]：脳頭蓋の内外板が厚い。

主要頭蓋縫合内板の癒着度はマルチン 0 度である。肩回の膨度は強い（プロカ 3 度）。側頭骨左右の外耳道前後壁には骨瘤が認められる。頭蓋 [◎S838]：脳頭蓋の内外板が厚い。主要頭蓋縫合内板の癒着度はマルチン 1 度である。肩回の膨隆度は強い。前頭結節は中等度である。外後頭結節の膨隆度はプロカの 1 度である。側頸骨乳様突起は大きく、外方への膨隆も強い（内・外耳道孔間距離 32mm）。蝶後頭軟骨結合が一部分認められる。左右の第三大臼歯は未萌出であるが歯槽中に残存する他の大・小臼歯の咬耗度はマルチン 1 度である。頭蓋 [◎B1135]：脳頭蓋の内外板が厚い。主要頭蓋縫合の癒着は内・外板とも認められない。眉間の膨度は強い。外後頭結節の膨隆度はプロカの 1 度である。蝶後頭軟骨結合が遊離している。左右の第一・二大臼歯は未萌出であるが歯槽中に残存する他の大・小臼歯の咬耗度はマルチン 1 度である。頭蓋 2 個 [AI 132, ◎B1134]：脳頭蓋の内外板が薄い。眉間の膨隆が弱い。側頭骨乳様突起は小さい（内・外耳道孔間距離 28.5mm）。前後頭内軟骨結合は遊離する。第一・第二乳臼歯は萌出するが、第一大臼歯および中・側切歯はいずれも未萌出である。頭蓋 2 個 [E1204, B1137]：脳頭蓋の内外板が薄い（4mm-5mm）。前頭縫合は癒着している（両眼窓間幅 95mm）。眉間の膨隆が弱い。側頭骨乳様突起は小さい（内・外耳道孔間距離 32mm-24mm）。前・後後頭内軟骨結合はいずれも遊離する。第一・第二乳臼歯は萌出するが、第一大臼歯は歯根の 1/4、中切歯は歯冠のみ形成している。歯蓋 3 個 [A1133, E1207, D1131]：歯根部に前頭縫合の痕跡が認められる（大前頭幅 96mm）。小泉門（ラムダ部）は閉鎖完了するが、大泉門（ブレグマ部）は未閉鎖である。側頭骨の鼓室輪は遊離している（内・外耳道孔間距離 21mm）。第一・第二乳臼歯は歯根 1/3 ~ 1/5 を形成している。下顎骨は 10 個 [◎B1162-170, ◎E1139, ◎B1165-192, ◎AI1371-29, ◎E1175-292, B1162-169, B1159-134, ◎D1169-231, A1147-13, E1399-303] 出土する。下顎骨 [◎B1162-170]：下顎体はやや低く（オトガイ高 31mm）、下顎枝は小さい（最小枝 41mm、最小枝幅 32mm）。下顎枝の傾斜が強い。左大臼歯部の歯槽は萎縮・閉鎖している。残存する小臼歯の咬耗度はマルチンの 2 度である。下顎骨 [◎E1139]：頭蓋 [◎E1139] とともに出土する。この下顎骨は大きい（オトガイ高 37mm、関節突起幅 130mm、最小枝高 53mm、最小枝幅 42mm）。第二大臼歯が萌出し、歯槽中に残存する他の大臼歯の咬耗度はマルチンの 1 ~ 2 度である。下顎骨 3 個 [◎B1165-192, ◎AI1371-29, ◎E1175-292]：オトガイ結合は癒着している（オトガイ高 30-25mm、関節突起幅 116-106mm）。第三大臼歯未萌出で、残存する歯槽中の臼歯の咬耗度はマルチンの 1 度である。下顎骨 5 個 [B1162-169, B1159-134, ◎D1169-231, A1147-13, E1399-303]：下顎体正中部にオトガイ結合の痕跡が認められる（オトガイ高 25-21mm）。第一大臼歯は未萌出（歯根形成 1/2 から歯冠のみ）であり、第二乳臼歯未萌出のものもある（オトガイ高 19.5mm、前下顎幅 35mm）。上腕骨遠位端左は 8 個 [◎E1181-352, ◎B1160-145, B1380-120, ◎AI1374-54, B1155-93, ◎E1173-275, ◎C1167-212, S1215] 出土する。上腕骨遠位端左 2 個 [◎E1181-352, ◎B1160-145]：骨幹は遠・近の両骨端と融合し、骨端線は骨表面から認められない。前者は大きく、頑丈である（上腕骨最大長 283mm、骨幹最小周 63mm）。後者は華奢である（上腕骨最大長 268mm、骨幹最小周 60mm）。上腕骨遠位端左 [B1380-120]：遠位骨端線の一部が骨表面より認められる（骨幹最小周 50mm）。上腕骨遠位端左 3 個 [◎AI1374-54, B1155-93, ◎E1173-275]：骨幹部は遠・近両骨端より遊離している（骨幹最大長 194-168mm、骨幹最小周 45-37mm）。上腕骨遠位端左 2 個 [◎C1167-212, S1215]：骨幹部は遠・近両骨端より遊離している（骨幹最大長 107mm、骨幹最小周 30mm）。寛骨腸骨翼左は 8 個 [◎E1174-287, ◎B1152-68, ◎AI149-39, E1173-277, B1156-105, B1162-165, ◎C1166-206, ◎E1400-313] 出土する。寛骨腸骨翼左 2 個 [◎E1174-287, ◎B1152-68]：腸骨体は恥骨体・坐骨体および骨端と融合している。前者は大きく（腸骨幅 142mm、腸骨高 127mm）、大坐骨切痕は狭く、寛骨臼は広い（寛骨臼最大径 55mm）。後者は大き

いが（腸骨幅 144mm、腸骨高 128mm）、大坐骨切痕は広く深く、寛骨臼は狭い（寛骨臼最大径 50mm）。寛骨脛骨翼左 3 個 [◎A1149-39、E1173-277、B1156-105]：腸骨体は恥骨体・坐骨体および骨端より遊離している（腸骨幅 101-80mm、腸骨高 91-70mm）。寛骨脛骨翼左 3 個 [B1162-165、◎C1166-206、◎E1400-313]：腸骨体は恥骨体・坐骨体および骨端より遊離している（腸骨幅 67-53mm、腸骨高 60-46mm）。大腿骨近位端は左 10 個 [◎E1180-350、◎B1155-94、B1152-69、◎E1176-302、◎B1165-191、◎B1164-186、A1370-15、◎E1397-287、◎E1399-304、A1151-59] 出土する。大腿骨近位端左 2 個 [◎E1180-350、◎B1155-94]：骨幹は遠・近の両骨端と密着し、骨端線は骨表面から認められない。前者はやや小さいが、骨幹は太い（大腿骨最大長 387mm、骨幹中央周 85mm）。後者は大きく、骨幹は細い（大腿骨最大長 402mm、骨幹中央周 79mm）。大腿骨近位端左 [B1152-69]：骨幹部は遠・近両骨端より遊離している（大腿骨最大長 約321mm、骨幹中央周 72mm）。大腿骨近位端左 2 個 [◎E1176-302、◎B1165-191]：骨幹部は遠・近両骨端より遊離している（大腿骨最大長 247-184mm、骨幹中央周 51-47mm）。大腿骨近位端左 4 個 [◎B1164-186、A1370-15、◎E1397-287、◎E1399-304]：骨幹部は遠・近両骨端より遊離している（大腿骨最大長 140-119mm、骨幹中央周 41-32mm）。

第23号墓出土人骨には頭蓋が12個ある。上顎の散乱人骨片群と下顎の集積人骨片群 A・B・C・D・E の年齢構成について、性別および年齢に関する所見から総合判断すると、青年期以降の成人骨は 5 個体：熟年女性骨 1 個体 [B]、熟年男性骨 1 個体 [S]、壮年男性骨 2 個体 [E×1、S×1]、性別不詳青年期骨 1 個体 [B]、青年期末満の未成人骨 10 個体：少年期骨 3 個体 [A×1、B×1、E×1]、幼年期骨 7 個体 [A×1、B×2、C×1、D×1、E×2] の合計 15 個体分と思われる。

特記事項

第23号墓出土人骨には、縫合骨 [◎B1135]、下頸隆起 [◎E1139]、歯石 [◎B1162-170 他 4 個]、歯齒 [B1387-183、B1463-58、-63]、頸椎融合 [S1235]、胸腰椎の辺縁増殖 [B1164-189、B1390-217、-219]、前腕骨右コリースの骨折 [B1390-213、-214]、第三大軸子 [B1155-94、E1177-318、E1180-350]、鉈直線 [E1179-334]、蹲踞小面 [E1179-334]、咬痕 [S838] が観察される。

5. 第24号墓出土人骨

出土位置

上唇群 24 S は玄室内に広く散乱状態で出土する。下唇群 24 I は玄室の淡青側から奥壁の床面上に向かって順に人骨群 24 A へ入骨群 24 D の 4 集積群となっている。そのうち、24 A [A1067-25～A1079-142、A1301-01～A1307-65] は玄室の最前の床面上に東西方向に連なる群である。24 B [B1965-01～B1067-24、B1307-66～B1308-76] は玄室西壁近くに散乱する人骨群である。24 C [C1079-143～C1099-349、C1308-78～C1321-203、C1415-01～C1416-21] は玄室の中央部を東西方向に広く集積する。24 D [D1099-350～D1106-421、D1321-204～D1322-224] は玄室の奥壁近くで東西に集積する。

埋葬様式

人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身骨が出土する。第24号墓より大腿骨近位端右 [A1069-45、A1076-114、B1307-67、◎C1085-206、

◎C1086-218、C1090-255、C1095-309、C1097-330、◎C1309-87、C1309-89、D1101-365、S900、S989-01】は13個あり、節骨、下鼻孔介、涙骨、鼻骨、口蓋骨、舌骨、豆状骨、手の第一-基節骨は観察できない。大腿骨右の他に約半数以上（7個）の観察可能な種別を列記すると、上腕骨遠位端左【◎A1069-44、A1079-142、C1084-196、◎C1086-211、C1096-313、C1099-348、C1318-177=C1318-180、S936、D1105-407、◎D1106-420、S989-02、◎S1250】は12個、桡骨遠位端右、尺骨近位端右、脛骨遠位端左は9個、下顎骨体正中、頸椎横椎外側塊左、軸椎、肩甲骨関節窓右、脛骨遠位端右、蹠骨右は8個、鎖骨胸骨端右、寛骨腸骨翼左、大脚骨近位端左、腓骨遠位端体左、距骨左、第一中足骨左は7個出土する。

下脛の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、24 A：仙骨【◎A1068-35、A1073-90】、上腕骨遠位端左【◎A1069-44、A1079-142】、寛骨腸骨翼右【A1069-41、A1077-123】、大腿骨近位端右【A1069-45、A1076-114】、脛骨遠位端右【A1074-91、A1075-107=A1075-108】・同左【A1069-43、A1069-47】、距骨左【A1302-19、A1304-38】、踵骨右【◎A1067-25、◎A1069-46】は各々2個で、もっとも多く出土する。24 B：肩甲骨関節窓右【B1065-01=1065-03、B1077-122】は2個でもっと多く出土する。24 C：大腿骨近位端右は7個【◎C1085-206、◎C1086-218、C1090-255、C1095-309、C1097-330、◎C1309-87、C1309-89】でもっと多く出土する。上腕骨遠位端左、掩骨遠位端右、第一中足骨左は5個、尺骨近位端右、寛骨腸骨翼左、大腿骨近位端左は4個、鎖骨胸骨端右、上腕骨遠位端右、寛骨腸骨翼右、脛骨遠位端左右、蹠骨右は3個出土する。24 D：脛骨遠位端左【D1105-402、D1106-412、D1321-02】は3個でもっとも多い。次いで、上腕骨遠位端左【D1105-407、◎D1106-420】、尺骨近位端右【D1103-385、D1322-24】、腓骨遠位端体左【D1105-409、D1321-204】は2個出土する。

人骨所見

頭蓋骨、下頸骨、上腕骨、寛骨、人腿骨の順に所見を述べる。後頭骨外側部左は4個【C1096-318、S619、S636、S847】出土する。いずれも基底部、鶴嘴部より遊離している（前後径 43-24mm）。側頭骨錐体左は3個【A1068-31、D1103-387、S931-01】出土する。側頭骨錐体左【A1068-31】：やや大きく（内外耳孔間距離 30mm）、側頭骨錐体左2個【D1103-387、S931-01】：は小さい（内外耳孔間距離 26-25mm）。下頸骨体正中は8個【A1078-137、C1090-259、S931-02、◎C1083-190、S1229、D1106-417、S989-03、B1308-74】出土する。下頸骨体正中【A1078-137】：下頸体は頸丈である（オトガイ高 33mm、前下頸幅 48mm）。第三・第二大臼歯は脱落し、その窩の歯槽は萎縮・閉鎖を開始している。残存する小臼歯の吸耗は強く（マルテンの3度）、歯頸部に歯石が付着している。下頸骨体正中3個【C1090-259、S931-02、◎C1083-190】：第三人人臼歯が崩出し、咬耗はやや強い（マルテンの3度）。歯槽部の萎縮は認められない（オトガイ高 30-31mm、前下頸幅 48mm）。下頸骨体正中3個【S1229、D1106-417、S989-03】：いずれも第一大臼歯は未萌出である。下頸骨体正中【B1308-74】：第二乳臼歯は根未完成、第一切歎・大臼歯は歯冠のみ歯槽中に埋伏する（オトガイ高 21mm）。上腕骨遠位端左は12個【◎C1086-211、D1105-407、◎A1069-44、C1096-313、C1099-348、S936、◎D1106-420、C1318-177=C1318-180、◎S1250、C1084-196、S989-02、A1079-142】出土する。上腕骨遠位端左2個【◎C1086-211、D1105-407】：これらの大腿骨は大きく、太い（上腕骨最大長 291mm、骨幹最小周 70-65mm）。上腕骨遠位端左4個【◎A1069-44、C1096-313、C1099-348、S936】：骨幹はやや細く（上腕骨最大長 286-283mm、骨幹最小周 55-51mm）、遠位骨端と適応完了している。上腕骨遠位端左6個【◎D1106-420、C1318-177=C1318-180、◎S1250、C1084-196、S989-02、A1079-142】：骨幹は遠位骨端より遊離している（上腕骨最大長 143-99mm、骨幹最小周 43-24mm）。寛骨腸骨翼左は7個【◎C1089-243、A1077-29、C1093-283、C1098-339、D1099-350、C1317-67、B1066-16】出土する。寛骨腸骨翼左5個【◎C1

089-243、A1077-29、C1093-283、C1098-339、D1099-350】：腸骨体は恥骨体・坐骨体と施着完了している。前3者【◎C1089-243、A1077-29、C1093-283】の大坐骨痕狭く、寛骨臼は広い（寛骨臼最大径 55-53mm）。後2者【C1098-339、D1099-350】の大坐骨痕広く、寛骨臼は狭い（寛骨臼最大径 50-48mm）。寛骨鶲骨翼左2例【C1317-67、B1066-16】：腸骨体は恥骨体・坐骨体より遊離している（腸骨幅 56mm、腸骨体幅 33-26mm）。大腿骨近位端右は13例【◎C1309-87、C1090-255、D1101-365、A1076-114、C1095-309、A1069-45、C1309-89、◎C1085-206、C1097-330、S900、◎C1086-218、B1307-67、S989-01】出土する。大腿骨近位端右6個【◎C1309-87、C1090-255、D1101-365、A1076-114、C1095-309、A1069-45】：骨幹が近位骨端と融合している（大腿骨最大長 404、402、377mm、骨幹中央周 92-73mm）。大腿骨近位端右7例【C1309-89、◎C1085-206、C1097-330、S900、◎C1086-218、B1307-67、S989-01】：骨幹が近位骨端より遊離している（大腿骨最大長 210、207mm、骨幹中央周 48-36mm）。

第24号墓山土人骨には大腿骨近位端右は13個あり、上層の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群A・B・C・Dの年齢構成について、性別および年齢に関する所見から総合判断すると、青年期以降の成人骨は6個体：熟年男性骨1個体【A】、壮年男性骨1個体【C】、壮年女性骨2個体【A×1、D×1】、青年性別不詳骨2個体【C×2】、青年未満の未成人骨7個体：幼年期骨7個体【B×1、C×4、D×1、S×1】の合計13個体分と思われる。

特記事項

第24号墓出土人骨には、外耳道骨瘤【A1068-31】、下頸隆起【A1078-137】、前切痕【C1083-190】、歯石【A1077-125 他8例】、骨増殖【C1096-320 他7例】、傍溝【A1077-123】、第三転子【A1069-45】、廠筋稜【A1076-114、C1090-256】、転子窩【C1090-256】、鉛直線【A1069-47 他4個】、蹲踞小面【A1069-43、A1074-91】が観察される。

6. 第27号墓出土人骨

出土位置

上層群27Sは玄室の奥壁近くより散乱状態で出土する。下層群27Iは玄室の羨道側から奥壁の床面に向かって順に人骨群27A～人骨群27Cの3集積群となっている。そのうち、27A【A868-58、A870-71～80、A892-2、A1003-01～A1004-17、A1241～A1248】は玄室の南東隅に広がる人骨群である。27B【B867-41～B869-70、B871】は玄室の中央部を南北に横切って広がる人骨群である。27C【C863-01～C866-40、C1004-18、C1288】は玄室の北西隅に広がる人骨群である。

埋葬様式

人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身の部分骨が多数出土する。完形をなすものが少くない。27号墓より、頭蓋【S884、◎A892、S894-01、B868-53、B868-59、C864-11、C866-34】は7個あり、寰椎、軸椎、尾椎、手の舟状骨、豆状骨、大菱形骨、小菱形骨、第一中手骨、手の第一基節・末節骨、中間楔状骨、足の中節・末節骨の13種は観察できない。頭蓋の他に約半数以上（3個）の観察可能な種別を列記すると、蹠骨右【B869-61、B869-67、S937-01】、第一中足骨左【S287、S937-02、S1222】の2種は3個、下頸骨体正中、胸骨柄、仙骨、第一肋骨頭左、

肩甲骨関節窩左、鎖骨胸骨端左、上腕骨遠位端左右、橈骨近位端右、三角骨左、有頭骨右、腓骨遠位端体左、外側楔状骨左、立方骨右の13種は2個である。その他は1個のみ確認できる。

下層の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、27A：肩甲骨関節窩左〔A870-76、A1004-14〕は2個出土する。その他、頭蓋、下頸骨体正中、頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、第一肋骨頭左右、肩甲骨関節窓右、鎖骨胸骨端右1個左右、上腕骨遠位端左右、橈骨近位端左右、尺骨近位端左右、有頭骨右が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。27B：頭蓋〔B868-53、B868-59〕、胸骨柄〔B867-48、B869-63〕、蹠骨右〔B869-61、B869-67〕は2個出土する。その他、頸椎、胸椎、腰椎、上腕骨遠位端右、中手骨、大腿骨左右、腓骨遠位端体左、距骨左が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。27C：頭蓋は2個〔C864-11、C866-34〕出土する。その他、脱落永久歯、胸椎、腰椎、鎖骨胸骨端左、橈骨近位端右、中手骨左、距骨右、内側楔状骨左、中足骨右、足の第一基節骨、他趾の基節骨が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。

人骨所見

頭蓋、下頸骨、上腕骨、寛骨、大腿骨の頃に所見を述べる。頭蓋は7個〔@A892、S894-01、S884、B868-53、B868-59、C864-11、C866-34〕出土する。頭蓋〔@A892〕：主要頭蓋縫合内冠状・矢状縫合の外板わずかに認められ（マルチンの0-1度）、冠状・矢状・ラムダ縫合の内板では4度、3度、2度である。最上・上頸線の発達は強く、外後頭結節の膨隆度はプロカの2度である。乳様突起の膨隆度はプロカの1度である。側頭骨左右の外耳道壁には外耳道骨瘤が認められる。第一・第二犬歯は左右とも脱落し、その歯槽部は萎縮・閉鎖している。残存する永久歯の咬耗度はマルチンの2度である。頭蓋〔S894-01〕：緻密質は厚い。主要頭蓋縫合の癒着は内外板とともに認められない。外後頭結節の膨隆度はプロカの2度である。側頭骨乳様突起は大きく外方への膨隆が強い。外耳道骨瘤が認められない（内・外耳孔間距離左：31mm）。頭蓋〔S884〕：緻密質は厚い。主要頭蓋縫合の施着は内外板とともに認められない。最上頸線の発達はやや強く、外後頭結節の膨隆度はプロカの1度である。側頭骨乳様突起は小さい。側頭骨左右の外耳道壁には外耳道骨瘤が認められる（内・外耳孔間距離左：31mm）。頭蓋4個〔B868-53、B868-59、C864-11、C866-34〕：緻密質はいずれも薄い。下頸骨体正中は2個〔A870-73、S894-02〕出土する。下頸骨体正中〔A870-73〕：第二・第二犬歯左右とも脱落し、その部の歯槽は萎縮・閉鎖している。下頸骨体正中〔S894-02〕：下頸体は高く（下頸体高：33mm）、下頸枝もやや高い（最小枝高：44mm）。第二犬歯の咬耗度はマルチンの1度である。上腕骨遠位端右は2個〔A870-71=A1244、B869-65〕出土する。上腕骨遠位端右2個〔A870-71=A1244、B869-65〕：骨幹は遠近の両骨端と癒着している。前者は革張り（上腕骨最大長：274mm、骨幹最小周：57mm）、後者は頑丈である（骨幹最小周：68mm）。寛骨腸骨翼左〔S938〕：この腸骨体は恥骨体・坐骨体より遊離する。大腿骨体右1個〔@B869-70〕・同左1個〔B869-66〕出土する。大腿骨体右〔@B869-70〕：骨幹は両骨端と癒着している。この骨幹は太いが（骨幹中央周：81mm）、小さい（大腿骨最大長：375mm）。大腿骨左〔B869-66〕：骨幹は両骨端上り遊離している。この骨幹は細い（骨幹中央周：31mm）。

第27号墓出土人骨には頭蓋が最小限7個体分ある。上層の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群A・B・Cの年齢構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、磨耗から、青年期以降の成人骨は3個体：熟年骨1個体〔A〕、壮年骨2個体〔A×1、B×1〕、青年期末満の未成人骨4個体：幼年期骨4個体〔B×2、C×2〕の7個体分と思われる。これらの人骨片群は完形をなすものが少なく、人骨の性別はいずれも不明である。

特記事項

第27号墓出土人骨には、前頸縫合痕跡〔S884〕、外耳道骨瘤〔◎A892、S884〕、下顎隆起〔A870-73〕、歯石〔S894-02、C866-35〕、骨増殖〔椎骨S649 他4個〕、焼痕〔寛骨S635〕が観察される。

7. 第29号墓出土人骨

出土位置

上層群29 Sは玄室の西壁近くより散乱状態で出土する。下層群29 Iは玄室の溪道側から奥壁の床面に向かって順に人骨群29 A～人骨群29 Cの3集積群となっている。そのうち、29 A〔A905-01～A918-133、A919〕は玄室内に広く散乱する人骨群である。29 B〔B1185-01～B1187-30、B1476-03～B1479-16〕は玄室中央より南東に広がる人骨群である。29 C〔C1188-21～C1197-113、C1476-01、-02〕は玄室の中央より北西に広がる人骨群である。

埋葬様式

人骨は散乱出土しており、埋葬姿勢などの様式は出土状況から不明である。

出土人骨

ほぼ全身の部分骨が多数出土する。完形をなすものがすくない。29号墓より寛骨腸骨翼右〔C1192-65、C1197-113、S001、S258、S946-01〕、脛骨遠位端左〔A905-03、A908-32、A909-48、A912-77、S945-01〕は5個あり、節骨、下鼻甲介、涙骨、鼻骨、口蓋骨、舌骨、腰椎、尾椎、月状骨、三角骨、豆状骨、小菱形骨、有頭骨、有鈎骨、手の末節骨、足の中節骨・木節骨は観察できない。寛骨右、脛骨左の他に約半数以上（3個）の観察可能な種別を列記すると、下顎骨体正中、仙骨、上腕骨遠位端左、寛骨腸骨翼左、脛骨近位端右、腓骨体左は4個、側頭骨錐体右、頭頂骨前頭角、前頭骨鼻骨突起、頬骨前頭突起右、第一肋骨頭右、肩甲骨関節窓左、上腕骨遠位端右、横骨遠位端左、尺骨近位端左、膝蓋骨右、距骨左、外側楔形骨右、第一中足骨右は3個出土する。以上の19種ある。

下層の集積群について観察個数の多い骨部位をあげると、29 A：脛骨近位端左は4個〔A905-03、A908-32、A909-48、A912-77〕出土する。次いで、下顎骨体正中〔A907-21、A910-59、A914-100〕、脛骨近位端右〔A905-01、A909-45、A911-66〕は3個出土する。肩甲骨関節窓左、上腕骨遠位端左右、寛骨腸骨翼左、大脚骨近位端左右、腓骨体左は2個出土する。29 B：蝶形骨大翼左、側頭骨錐体右、頭頂骨前頭角右・左、前頭骨鼻骨突起、鈎骨、上腕骨前頭突起右、口蓋骨、頬骨前頭突起右、下顎骨体正中、腰椎、上腕骨遠位端右・左、横骨遠位端左、尺骨近位端左右、大菱形骨左、寛骨腸骨翼左、足の舟状骨右、第一中足骨右、他の中足骨右が観察できるが、いずれも部位の重複はみられない。29 C：仙骨〔C1191-58、C1476-02〕、鎖骨胸骨端右〔◎C1188-29、C1196-101〕、橈骨遠位端左〔C1192-70、C1194-82〕、寛骨腸骨翼右〔C1192-65、C1197-113〕は2個出土する。

人骨所見

頭蓋骨、下顎骨、上腕骨、寛骨、脛骨の順に所見を述べる。頭蓋は2個〔A919、B1185〕出土する。頭蓋〔A919〕：頭蓋冠の一部であり、頭蓋骨は軽く、筋付着部の凹凸が少ない（外後頭結節の膨隆度はプロカの0度）。頭蓋〔B1185〕：脇頭蓋骨と顎面骨が出土するが、これらの骨は脆く、連結部より遊離している。上顎人口歯の咬耗は少ない（マルテンの0～1度）。側頭骨錐体右は2個〔S945-02、A915-102〕出土する。前者は頸丈であり、後者の側頭骨乳様突起右がとくに小さい。下顎骨体正中は4個〔A907-21、A914-100、B

1476-07、A910-59] 出土する。下頸骨体止中 2 個 [A907-21、A914-100]：第三大臼歯は萌出し、第一大臼歯の咬耗度はマルテンの 2-3 度である。下頸骨体は低く（オトガイ高 27、25mm）、下頸枝は小さい（最小枝高 35mm、最小枝幅 27-31mm）。下頸骨体止中 2 個 [B1476-07、A910-59]：第三大臼歯は未萌出で、第二大臼歯の咬耗度はマルテンの 0-1 度である。前者の下頸骨体は低い（オトガイ高 29mm）。後者の下頸骨体は高く（オトガイ高 31mm）、下頸枝は広い（最小枝幅 34mm）。上腕骨遠位端左 4 個 [A909-49、A914-93、B1477-13、C1196-104] 出土する。上腕骨遠位端左 [A909-49]：骨幹は太い（骨幹最小周 57mm）。上腕骨遠位端左 2 個 [A914-93、B1477-13]：骨幹はやや太く（骨幹最小周 55mm）、前者の遠位骨端は施錠し、後者は近位骨端より遊離する。上腕骨遠位端左 [C1196-104]：骨幹は細く（骨幹最小周 22mm）、遠位骨端より遊離する。寛骨鶲骨翼左 4 個 [A915-101、A906-16、B1476-06、S946-02] 出土する。寛骨鶲骨翼左 2 個 [A915-101、A906-16]：骨端が融合完了している。前者の寛骨は円大である。寛骨鶲骨翼左 2 個 [B1476-06、S946-02]：前者の腸骨後の骨端が遊離し、後者の腸骨体は恥骨体・坐骨体より遊離している。脛骨近位端左 5 個 [A908-32、A912-77、A909-48、A905-03、S945-01] 出土する。脛骨近位端左 3 個 [A908-32、A912-77、A909-48]：骨幹はやや細いが、遠位骨端と融合している（骨幹最小周 68-63mm）。脛骨近位端左 [A905-03]：骨幹は細く（骨幹最小周 61mm）、近位骨端線の痕跡が認められる。脛骨近位端左 [S945-01]：遠・近の軌骨端より遊離している。

第29号墓出土人骨には寛骨右、脛骨左は 5 個ある。上層の散乱人骨片群と下層の集積人骨片群 A・B・C の年齢構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、磨耗から、青年期以降の成人骨は 5 個体：壮年骨 3 個体 [A×3]、青年骨 2 個体 [A×1、B×1]、青年期未満の未成人骨 3 個体：少年期骨 2 個体 [A×1、C×1]、幼年期骨 1 個体 [C] の合計 8 個体分と思われる。これらの人骨片群は完形をなすものが少なく、人骨の性別はいずれも不明である。

特記事項

第29号墓出土人骨には、縫合骨 [A919]、歯石 [B1185]、滑車上孔 [A908-34]、第三転子 [A909-44]、鉛直線 [A909-48]、橈骨右スミスの骨折 [C1191-52]、蹠頭小面 [A912-77] が観察される。

おわりに

富山県高岡市江道横穴墓群の平成 8 年度の調査の際、第15号・21号・22号・23号・24号・27号・29号墓出土の人骨の個体数について総括する。

- 1) 第15号墓出土人骨最小限 12 個体分確認される。：成人骨は 8 個体（壮年男性骨 4 個体、壮年女性骨 1 個体、熟年女性骨 1 個体、年齢不詳女性骨 1 個体、年齢不詳男性骨 1 個体）、未成人骨 4 個体（不詳未成人骨 1 個体、小児期骨 1 個体、少年期骨 1 個体、幼年期骨 1 個体）の合計 12 個体分と思われる。
- 2) 第21号墓出土人骨最小限 4 個体分確認される。：成人骨は 2 個体（壮年女性骨 1 個体、青年男性骨 1 個体）、青年期未満の未成人骨 3 個体（幼年期骨 3 個体）の合計 5 個体分と思われる。
- 3) 第22号墓出土人骨最小限 12 個体分確認される。：成人骨は 5 個体（壮年期骨 2 個体、青年期骨 2 個体、年齢詳細不明骨 1 個体）、青年期未満の未成人骨 9 個体（少年期～小児期骨 1 個体、少年期骨 4 個体、幼年期骨 4 個体）の合計 14 個体分と思われる。
- 4) 第23号墓出土人骨最小限 12 個体分確認される。：成人骨は 5 個体（熟年女性骨 1 個体、熟年男性骨 1 個体、壮年男性骨 2 個体、性別不詳青年期骨 1 個体）、青年期未満の未成人骨 10 個体（少年期骨 3 個体、幼

年期骨 7 個体) の合計 15 個体分と思われる。

- 5) 第 24 号墓出土人骨最小限 13 個体分確認される。: 成人骨は 6 個体(熟年男性骨 1 個体、壮年男性骨 1 個体、壮年女性骨 2 個体、青年性別不詳骨 2 個体)、青年期未満の未成人骨 7 個体(幼年期骨 7 個体) の合計 13 個体分と思われる。
- 6) 第 27 号墓出土人骨には頭蓋が最小限 7 個体分ある。: 成人骨は 3 個体(熟年骨 1 個体、壮年骨 2 個体)、未成人骨 4 個体(幼年期骨 4 個体) の合計 7 個体分と思われる。
- 7) 第 29 号墓出土人骨最小限 5 個体分確認される。: 成人骨は 5 個体(壮年骨 3 個体、青年骨 2 個体)、未成人骨 3 個体(少年期骨 2 個体、幼年期骨 1 個体) の合計 8 個体分と思われる。
- 8) 外耳道骨瘤(15 号、24 号、27 号)、蹠齶小面(23 号、24 号、29 号) は生活習慣に伴う変化と思われる。
- 9) 傷痕として、骨折治癒像(23 号、29 号)、病変として、歯石(15 号、21 号、22 号、23 号、24 号、27 号、29 号)、齶齒(21 号、23 号)、骨壊瘍・骨腫(15 号、23 号、24 号、27 号) が認められる。
- 10) 死後の傷痕として、小動物によると思われる咬痕(23 号)、および施痕(21 号、22 号、27 号) が認められる。
- 11) この横穴人骨群には小動物骨(22 号、24 号、27 号、29 号) が混在する。

謝辞

人骨調査の機会を与えていただきました高岡市民、主体者の各位及び富山医科薬科大学医学部解剖学教室大谷修教授に深謝申しあげます。またこの調査にあたって実際なご協力を頂いた地元考古学研究会より出土経過および出土状態について多くの資料や助言をいただきました。さらに当教室技官の押川謙氏より主に標本の写真撮影を、同窓井竹夫氏他教室員より標本移動の補助をいただきましたことを記す。

〔関連資料〕

- 大根嘉男 1931 『北陸日本人頭蓋骨の人類学的研究』其 8 金沢医科大学解剖学教室業績
節木尚 1963 『日本人の骨』(岩波新書) 岩波書店
林夫門 1957 「人骨と自然遺物」 『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』 高岡市史料編纂委員会
森沢佐歲・松田健史 1983 「頭川城ヶ平横穴墓群及び頭川古墓出土人骨について」 『頭川城ヶ平横穴墓群第 I 次緊急発掘調査概要』 高岡市教育委員会
森沢佐歲・松田健史 1984 「頭川城ヶ平横穴墓群出土人骨について」 『頭川城ヶ平横穴墓群第 II 次発掘調査報告』 高岡市教育委員会
森沢佐歲・松田健史 1985 「戸田薬師横穴墓群の出土人骨について」 『戸田薬師中世墓発掘調査報告書』 水見市教育委員会
森沢佐歲他 1989 「富山県水見市脇方横穴墓群出土人骨について」 『脇方横穴群』 水見市教育委員会

別表 鑑定人骨一覧表

No.	横穴墓	整理番号	区分	原団番号	人骨部位	備考
001	第15号墓	1501	A	1272-65	距骨右	
002	第15号墓	1502	B	1274-87	距骨右	
003	第15号墓	1503	C	1033-286	距骨右	
004	第15号墓	1504	C	1277-118	距骨右	
005	第15号墓	1505	S	027	距骨右	完形
006	第15号墓	1506	S	072	距骨右	
007	第15号墓	1507	S	818	距骨右	
008	第15号墓	1508	S	947-01	距骨右	
009	第15号墓	1509	S	1082-179	距骨右	完形
010	第15号墓	1510	A	795-03	肩甲骨関節窩右	
011	第15号墓	1511	A	795-04	肩甲骨関節窩右	
012	第15号墓	1512	A	806-116	肩甲骨関節窩右	
013	第15号墓	1513	A	1014-92	肩甲骨関節窩右	
014	第15号墓	1514	A	806-119	大腿骨近位端右(=A1014-93)	完形 図版95
015	第15号墓	1515	A	1011-65	大腿骨近位端右	完形 図版96
016	第15号墓	1516	C	1284-189	大腿骨近位端左	完形 図版96
017	第15号墓	1517	A	1005-05	大腿骨近位端左	完形 図版96
018	第15号墓	1518	A	1016-113	大腿骨近位端左	完形 図版95
019	第15号墓	1519	B	1019-147	側頭骨錐体左(縫合骨)	
020	第15号墓	1520	B	1020-152	側頭骨錐体左	
021	第15号墓	1521	B	1273-80	側頭骨錐体左(外耳道骨瘤)	
022	第15号墓	1522	C	1034-294	脛骨遠位端右	
023	第15号墓	1523	C	1034-297	脛骨遠位端右	
024	第15号墓	1524	C	1279-131	脛骨遠位端右	図版95
025	第15号墓	1525	C	1033-289	脛骨遠位端左	
026	第15号墓	1526	C	1034-295	脛骨遠位端左	
027	第15号墓	1527	C	1284-183	脛骨遠位端左	
028	第15号墓	1528	B	1049	頸蓋	
029	第15号墓	1529	B	1050	頸蓋	
030	第15号墓	1530	S	811-169	側頭骨右(外耳道骨瘤)	
031	第15号墓	1531	S	816-211	側頭骨右(外耳道骨瘤)	
032	第15号墓	1532	A	795-06	下顎骨正中部(=A1010-51)	
033	第15号墓	1533	S	123	下顎骨正中部	図版95
034	第15号墓	1534	S	124	下顎骨正中部(下顎骨隆起)	図版95
035	第15号墓	1535	S	951	下顎骨正中部	
036	第15号墓	1536	C	1028-239	下顎骨正中部(歯石=S819-248)	
037	第15号墓	1537	S	807-125	下顎骨正中部	
038	第15号墓	1538	S	947-02	下顎骨正中部	
039	第15号墓	1539	A	1005-04	上腕骨遠位端左	完形 図版96
040	第15号墓	1540	S	816-215	上腕骨遠位端左	
041	第15号墓	1541	A	806-120	上腕骨遠位端左	図版96
042	第15号墓	1542	B	1027-225	上腕骨遠位端左(前車上孔)	

No.	横穴墓	整理番号	区分	原団番号	人骨部位	備考
043	第15号墓	1543	B	1275-93	上腕骨遠位端左	
044	第15号墓	1544	A	1008-32	寛骨脇骨翼左	図版95
045	第15号墓	1545	A	1012-73	寛骨脇骨翼左	完形 図版95
046	第15号墓	1546	C	1282-163	寛骨脇骨翼左	
047	第15号墓	1547	C	1031-263	寛骨脇骨翼左	
048	第15号墓	1548	S	332	寛骨脇骨翼左	
049	第15号墓	1549	S	801-68	大腿骨近位端左	
050	第15号墓	1550	B	1021-161	大腿骨近位端左	図版95
051	第15号墓	1551	S	814-199	大腿骨近位端左	図版95
052	第15号墓	1552	S	807-122	大腿骨近位端左	図版95
053	第15号墓	1553	B	1019-145	大腿骨近位端左	
054	第15号墓	1554	C	1282-167	アレン頭窓	図版96
055	第21号墓	2101	B	507	上腕骨遠位端右	図版97-1
056	第21号墓	2102	S	048-01	上腕骨遠位端右	
057	第21号墓	2103	S	070	上腕骨遠位端右	
058	第21号墓	2104	S	286	上腕骨遠位端右	
059	第21号墓	2105	A	477-01	小菱形骨右	
060	第21号墓	2106	A	477-02	有頭骨右	
061	第21号墓	2107	A	238	第一中手骨左	
062	第21号墓	2108	A	233	寛骨脇骨翼右	図版97-1
063	第21号墓	2109	B	486-01	鎖骨体右	
064	第21号墓	2110	B	503	鎖骨体右	
065	第21号墓	2111	B	555	鎖骨体右	図版97-1
066	第21号墓	2112	B	506	胫骨遠位端左	
067	第21号墓	2113	B	557	胫骨遠位端左	
068	第21号墓	2114	B	539	中間楔状骨左	
069	第21号墓	2115	B	542	中間楔状骨左	
070	第21号墓	2116	C	512	第一肋骨頭左	
071	第21号墓	2117	C	394	上腕骨遠位端左	
072	第21号墓	2118	C	471	膝蓋骨右	完形
073	第21号墓	2119	C	513	距骨右	完形 図版97-1
074	第21号墓	2120	S	057	後蹠骨外側部左	
075	第21号墓	2121	S	395	後頭骨外側部左	
076	第21号墓	2122	A	477-03	側頭骨錐体右	
077	第21号墓	2123	S	117	上頸骨齒槽突起左(歯石)	
078	第21号墓	2124	B	486-02	上頸骨齒槽突起左	完形
079	第21号墓	2125	S	118	下頸骨体左	
080	第21号墓	2126	B	497	寛骨脇骨翼左	図版97-1
081	第21号墓	2127	S	092	大腿骨近位端右	
082	第21号墓	2128	B	544	大腿骨近位端右	
083	第21号墓	2129	S	048-02	大腿骨近位端右	
084	第22号墓	2201	A	366-02	側頭骨錐体左	
085	第22号墓	2202	A	398-16	側頭骨錐体左	
086	第22号墓	2203	E	855-13	側頭骨錐体左	

No.	横穴墓	整坪番号	区分	原図番号	人骨部位	備考
087	第22号墓	2204	E	859-53	側頭骨錐体左	
088	第22号墓	2205	E	923-40	側頭骨錐体左	
089	第22号墓	2206	E	921-19	側頭骨錐体左	
090	第22号墓	2207	S	055-01	側頭骨錐体左	
091	第22号墓	2208	S	068-01	側頭骨錐体左	
092	第22号墓	2209	S	675	側頭骨錐体左	
093	第22号墓	2210	S	778-01	側頭骨錐体左	
094	第22号墓	2211	D	627-13	側頭骨錐体右	
095	第22号墓	2212	E	786-04	側頭骨錐体右	
096	第22号墓	2213	E	790-46	側頭骨錐体右	
097	第22号墓	2214	E	921-13	側頭骨錐体右	
098	第22号墓	2215	S	293	側頭骨錐体右	
099	第22号墓	2216	S	055-02	側頭骨錐体右	
100	第22号墓	2217	S	702	側頭骨錐体右	
101	第22号墓	2218	S	844-01	側頭骨錐体右	
102	第22号墓	2219	S	902	側頭骨錐体右	
103	第22号墓	2220	A	163	前頭骨頬骨突起右	
104	第22号墓	2221	A	367-18	前頭骨頬骨突起右	
105	第22号墓	2222	D	627-17	前頭骨頬骨突起右	
106	第22号墓	2223	E	786-05	前頭骨頬骨突起右	
107	第22号墓	2224	S	068-02	前頭骨頬骨突起右	
108	第22号墓	2225	S	378	前頭骨頬骨突起右	
109	第22号墓	2226	S	590	前頭骨頬骨突起右	
110	第22号墓	2227	S	613	前頭骨頬骨突起右	
111	第22号墓	2228	S	778-02	前頭骨頬骨突起右	
112	第22号墓	2229	A	157	上顎骨齒槽突起左	
113	第22号墓	2230	A	158	上顎骨齒槽突起左	
114	第22号墓	2231	A	309-86	上顎骨齒槽突起左	
115	第22号墓	2232	A	308-74	鎖骨肩峰端右	
116	第22号墓	2233	A	406-97	鎖骨肩峰端右	
117	第22号墓	2234	A	446-26	鎖骨肩峰端右	
118	第22号墓	2235	A	312-117	距骨左	
119	第22号墓	2236	A	368-29	距骨左	
120	第22号墓	2237	A	427-07	距骨左	
121	第22号墓	2238	B	139	下顎骨体正中、下顎骨正中部	
122	第22号墓	2239	B	144	下顎骨体正中、下顎骨正中部	
123	第22号墓	2240	B	300-07	下顎骨体正中、下顎骨正中部	
124	第22号墓	2241	C	628-29	仙骨	
125	第22号墓	2242	C	628-27	第一肋骨頭右	
126	第22号墓	2243	C	632-67	肩胛骨肩甲棘左	
127	第22号墓	2244	C	633-72	橈骨遠位端右	
128	第22号墓	2245	C	630-49	第一中手骨右	
129	第22号墓	2246	C	631-52	膝蓋骨左	
130	第22号墓	2247	C	629-33	足の舟状骨右	
131	第22号墓	2248	D	652-04	後恥骨外側部右	
132	第22号墓	2249	D	628-22	仙骨	図版97-2

No.	横穴墓	整理番号	区分	原団番号	人骨部位	備考
133	第22号墓	2250	D	626-10	第一肋骨端右	
134	第22号墓	2251	D	923-38	橈骨遠位端左	
135	第22号墓	2252	D	924-45	大趾骨体中央部左	
136	第22号墓	2253	D	628-25	膝蓋骨右	
137	第22号墓	2254	D	713-01	距骨右	
138	第22号墓	2255	D	626-02	距骨左	
139	第22号墓	2256	D	628-23	立方骨右	
140	第22号墓	2257	E	756	胫骨遠位端左	
141	第22号墓	2258	E	787-19	胫骨遠位端左	
142	第22号墓	2259	E	857-37	胫骨遠位端左	
143	第22号墓	2260	E	921-11	胫骨遠位端左	
144	第22号墓	2261	E	922-27	腕骨遠位端左	
145	第22号墓	2262	S	792-01	後頸骨外側部左	
146	第22号墓	2263	S	845	後頸骨外側部左	
147	第22号墓	2264	A	368-27	後頸骨外側部左	
148	第22号墓	2265	S	569	後頸骨外側部左	
149	第22号墓	2266	A	312-114	下頷骨正中部	
150	第22号墓	2267	S	778-03	下頷骨正中部	
151	第22号墓	2268	E	854-10	下頷骨正中部	
152	第22号墓	2269	E	921-12	下頷骨正中部	
153	第22号墓	2270	A	307-63	上腕骨遠位端左	
154	第22号墓	2271	S	049	上腕骨遠位端左	
155	第22号墓	2272	D	626-07	上腕骨遠位端左	完形 図版97-2
156	第22号墓	2273	S	840-01	上腕骨遠位端左	
157	第22号墓	2274	B	150	上腕骨遠位端左	
158	第22号墓	2275	E	854-08	上腕骨遠位端左	
159	第22号墓	2276	E	786-01	上腕骨遠位端左	
160	第22号墓	2277	S	844-02	上腕骨遠位端左	
161	第22号墓	2278	E	786-07	寛骨鶲骨翼右	
162	第22号墓	2279	A	159	寛骨鶲骨翼右	
163	第22号墓	2280	E	790-45	寛骨鶲骨翼右	
164	第22号墓	2281	E	858-43	寛骨鶲骨翼右	
165	第22号墓	2282	E	789-38	寛骨鶲骨翼右	
166	第22号墓	2283	A	307-69	寛骨鶲骨翼右	
167	第22号墓	2284	S	792-02	寛骨鶲骨翼右	
168	第22号墓	2285	S	778-04	寛骨鶲骨翼右	
169	第22号墓	2286	S	934	胫骨遠位端左	
170	第22号墓	2287	S	840-02	胫骨遠位端左	完形 図版97-2
171	第22号墓	2288	E	738	胫骨遠位端左	
172	第22号墓	2289	A	408-115	偏平距骨	図版97-2
173	第23号墓	2301	A	1146-08	橈骨遠位端右	完形 図版106
174	第23号墓	2302	A	1369-06	橈骨遠位端右	
175	第23号墓	2303	A	1374-51	橈骨遠位端右	
176	第23号墓	2304	B	1378-93	橈骨遠位端右	図版107
177	第23号墓	2305	B	1390-213	橈骨遠位端右(前腕骨右骨折)	完形 図版107

No.	横穴墓	整理番号	区分	原図番号	人骨部位	備考
178	第23号墓	2306	B	1469-13	桡骨遠位端右	
179	第23号墓	2307	E	1176-308	桡骨遠位端右	図版109-3
180	第23号墓	2308	E	1177-315	桡骨遠位端右	完形 図版109-3
181	第23号墓	2309	E	1398-293	桡骨遠位端右	完形 図版109-3
182	第23号墓	2310	S	1235-01	桡骨遠位端右	完形 図版109-3
183	第23号墓	2311	S	1235-02	桡骨遠位端右(頸椎癒合)	図版109-2
184	第23号墓	2312	A	1147-17	肩甲骨関節窩右	完形 図版106
185	第23号墓	2313	A	1151-60	肩甲骨関節窩右	完形
186	第23号墓	2314	A	1374-55	肩甲骨関節窩右	
187	第23号墓	2315	A	1149-37	大腿骨近位端右	完形 図版106
188	第23号墓	2316	A	1151-57	大腿骨近位端右	完形 図版106
189	第23号墓	2317	A	1149-31	脛骨遠位端右	完形 図版106
190	第23号墓	2318	A	1369-01	脛骨遠位端右	完形 図版106
191	第23号墓	2319	A	1375-61	脛骨遠位端左	完形 図版106
192	第23号墓	2320	A	1151-59	大腿骨近位端左	図版106
193	第23号墓	2321	B	1136	頭蓋	完形 図版102
194	第23号墓	2322	B	1135	頭蓋(縫合骨)	完形 図版101
195	第23号墓	2323	B	1134	頭蓋	図版100
196	第23号墓	2324	B	1137	頭蓋	図版100
197	第23号墓	2325	B	1159-134	下顎骨	図版104
198	第23号墓	2326	B	1162-169	下顎骨	図版104
199	第23号墓	2327	B	1162-170	下顎骨(歯石)	完形 図版104
200	第23号墓	2328	B	1165-192	下顎骨	完形 図版105
201	第23号墓	2329	B	1158-125	肩甲骨関節窓左	
202	第23号墓	2330	B	1160-148	肩甲骨関節窓左	
203	第23号墓	2331	B	1165-196	肩甲骨関節窓左	図版107
204	第23号墓	2332	B	1375-64	肩甲骨関節窓左	
205	第23号墓	2333	B	1160-143	尺骨近位端右	完形 図版107
206	第23号墓	2334	B	1162-167	尺骨近位端右	
207	第23号墓	2335	B	1390-214	尺骨近位端右(前腕骨右骨折)	図版107
208	第23号墓	2336	B	1458-03	尺骨近位端右	図版107
209	第23号墓	2337	B	1153-75	大腿骨近位端右	完形 図版108
210	第23号墓	2338	B	1155-91	大腿骨近位端右	図版108
211	第23号墓	2339	B	1156-103	大腿骨近位端右	完形 図版108
212	第23号墓	2340	B	1157-114	大腿骨近位端右	図版108
213	第23号墓	2341	B	1152-69	大腿骨近位端左	図版108
214	第23号墓	2342	B	1155-94	大腿骨近位端左(第三大転子)	完形 図版108
215	第23号墓	2343	B	1164-186	大腿骨近位端左	完形 図版108
216	第23号墓	2344	B	1165-191	大腿骨近位端左	完形 図版108
217	第23号墓	2345	B	1154-90	脛骨遠位端左	完形 図版108
218	第23号墓	2346	B	1159-139	脛骨遠位端左	図版108
219	第23号墓	2347	B	1163-175	脛骨遠位端左	
220	第23号墓	2348	B	1163-179	脛骨遠位端左	図版108
221	第23号墓	2349	C	1166-210	第一肋骨頭右	完形
222	第23号墓	2350	C	1167-211	第一肋骨頭右	完形 図版109-1
223	第23号墓	2351	D	1169-231	下顎骨	完形 図版104

No.	横穴墓	整理番号	区分	原岡番号	人骨部位	備考
224	第23号墓	2352	D	1168-229	第一肋骨頭左	完形
225	第23号墓	2353	D	1169-235	上腕骨遠位端右	岡版109-2
226	第23号墓	2354	D	1169-238	尺骨近位端右	岡版109-2
227	第23号墓	2355	D	1168-230	寛骨鶲骨翼右	岡版109-2
228	第23号墓	2356	E	1176-302	大腿骨近位端左	完形 岡版110
229	第23号墓	2357	E	1180-350	大腿骨近位端左(第三大軸子)	完形 岡版110
230	第23号墓	2358	E	1397-287	大謹骨近位端左	完形 岡版110
231	第23号墓	2359	E	1399-304	大謹骨近位端左	完形 岡版110
232	第23号墓	2360	S	834	頭蓋	完形 岡版98
233	第23号墓	2361	E	1139	頭蓋=下顎骨(下顎隆起)	完形 岡版103他
234	第23号墓	2362	S	838	頭蓋(咬痕)	完形 岡版99
235	第23号墓	2363	A	1132	頭蓋	
236	第23号墓	2364	E	1204	頭蓋	
237	第23号墓	2365	A	1133	頭蓋	岡版98
238	第23号墓	2366	E	1207	頭蓋	
239	第23号墓	2367	D	1131	頭蓋	岡版102
240	第23号墓	2368	A	1371-29	下顎骨	完形 岡版104
241	第23号墓	2369	E	1175-292	下顎骨	完形岡版104
242	第23号墓	2370	A	1147-13	下顎骨	岡版104
243	第23号墓	2371	E	1399-303	下顎骨	岡版104
244	第23号墓	2372	E	1181-352	上腕骨遠位端左	完形 岡版109-3
245	第23号墓	2373	B	1160-145	上腕骨遠位端左	完形 岡版107
246	第23号墓	2374	B	1380-120	上腕骨遠位端左	岡版107
247	第23号墓	2375	A	1374-54	上腕骨遠位端左	完形 岡版106
248	第23号墓	2376	B	1155-938	上腕骨遠位端左	
249	第23号墓	2377	E	1173-275	上腕骨遠位端左	完形 岡版109-3
250	第23号墓	2378	C	1167-212	上腕骨遠位端左	完形 岡版109-1
251	第23号墓	2379	B	1215	上腕骨遠位端左	
252	第23号墓	2380	E	1174-287	寛骨鶲骨翼左	完形 岡版110
253	第23号墓	2381	B	1152-68	寛骨鶲骨翼左	完形 岡版107
254	第23号墓	2382	A	1149-39	寛骨鶲骨翼左	完形 岡版106
255	第23号墓	2383	E	1173-277	寛骨鶲骨翼左	岡版110
256	第23号墓	2384	B	1156-105	寛骨鶲骨翼左	岡版107
257	第23号墓	2385	B	1162-165	寛骨鶲骨翼左	岡版107
258	第23号墓	2386	C	1166-206	寛骨鶲骨翼左	完形 岡版109-1
259	第23号墓	2387	E	1400-313	寛骨鶲骨翼左	完形 岡版110
260	第23号墓	2388	A	1370-15	大腿骨近位端左	岡版106
261	第23号墓	2389	E	1177-318	大腿骨右(第三大軸子)	岡版110
262	第23号墓	2390	E	1179-334	脛骨左(鉛直線、蹲踞小面)	岡版110
263	第23号墓	2391	B	1164-189	胸腰椎刃緣増殖	岡版107
264	第23号墓	2392	B	1390-217	胸腰椎刃緣増殖	岡版107
265	第24号墓	2401	A	1069-45	大腿骨近位端右	岡版111
266	第24号墓	2402	A	1076-114	大腿骨近位端右(歛筋稜)	
267	第24号墓	2403	B	1307-67	大腿骨近位端右	
268	第24号墓	2404	C	1085-206	大腿骨近位端右	完形 岡版111

No.	横穴墓	整理番号	区分	原図番号	人骨部位	備考
269	第24号墓	2405	C	1086-218	大腿骨近位端右	
270	第24号墓	2406	C	1090-255	大腿骨近位端右	
271	第24号墓	2407	C	1095-309	大腿骨近位端右	
272	第24号墓	2408	C	1097-330	大腿骨近位端右	
273	第24号墓	2409	C	1309-87	大腿骨近位端右	
274	第24号墓	2410	C	1309-89	大腿骨近位端右	完形 図版111
275	第24号墓	2411	D	1101-365	大腿骨近位端右	
276	第24号墓	2412	S	900	大腿骨近位端右	
277	第24号墓	2413	S	989-01	大腿骨近位端右	
278	第24号墓	2414	A	1069-44	上腕骨遠位端左	
279	第24号墓	2415	A	1079-142	上腕骨遠位端左	
280	第24号墓	2416	C	1084-196	上腕骨遠位端左	
281	第24号墓	2417	C	1086-211	上腕骨遠位端左	完形 図版111
282	第24号墓	2418	C	1096-313	上腕骨遠位端左	
283	第24号墓	2419	C	1099-348	上腕骨遠位端左	
284	第24号墓	2420	C	1318-177	上腕骨遠位端左(=C1318-180)	
285	第24号墓	2421	S	936	上腕骨遠位端左	
286	第24号墓	2422	D	1105-407	上腕骨遠位端左	
287	第24号墓	2423	D	1106-420	上腕骨遠位端左	完形
288	第24号墓	2424	S	989-02	上腕骨遠位端左	
289	第24号墓	2425	S	1250	上腕骨遠位端左	
290	第24号墓	2426	A	1068-35	仙骨	完形
291	第24号墓	2427	A	1073-90	仙骨	完形
292	第24号墓	2428	A	1069-41	寛骨腸骨翼右	
293	第24号墓	2429	A	1077-123	寛骨腸骨翼右(傍溝)	
294	第24号墓	2430	A	1074-91	脛骨遠位端右(蹲踞小面)	
295	第24号墓	2431	A	1075-107	脛骨遠位端右(=A1075-108)	
296	第24号墓	2432	A	1069-43	脛骨遠位端左(蹲踞小面)	
297	第24号墓	2433	A	1069-47	脛骨遠位端左(鉛直線)	
298	第24号墓	2434	A	1302-19	距骨左	
299	第24号墓	2435	A	1304-38	距骨左	
300	第24号墓	2436	A	1067-25	踵骨右	完形 図版111
301	第24号墓	2437	A	1069-46	踵骨右	完形
302	第24号墓	2438	B	1065-01	肩胛骨関節窩右(=1065-03)	
303	第24号墓	2439	B	1077-122	肩甲骨関節窩右	
304	第24号墓	2440	D	1105-402	脛骨遠位端左	
305	第24号墓	2441	D	1106-412	脛骨遠位端左	
306	第24号墓	2442	D	1321-02	脛骨遠位端左	
307	第24号墓	2443	D	1103-385	尺骨近位端右	
308	第24号墓	2444	D	1322-24	尺骨近位端右	
309	第24号墓	2445	D	1322-24	腓骨遠位端体左	
310	第24号墓	2446	D	1321-204	腓骨遠位端体左	
311	第24号墓	2447	C	1096-318	後頸骨外側部左	
312	第24号墓	2448	S	619	後頸骨外側部左	
313	第24号墓	2449	S	636	後頸骨外側部左	
314	第24号墓	2450	S	847	後頸骨外側部左	

No.	横穴墓	整理番号	区分	原図番号	人骨部位	備考
315	第24号墓	2451	A	1068-31	側頭骨雛体左(外耳道骨瘤)	
316	第24号墓	2452	D	1103-387	側頭骨雛体左	
317	第24号墓	2453	S	931-01	側頭骨雛体左	
318	第24号墓	2454	A	1078-137	下顎骨体正中(下顎隆起)	
319	第24号墓	2455	C	1090-259	下顎骨体正中	
320	第24号墓	2456	S	931-02	下顎骨体正中	
321	第24号墓	2457	C	1083-190	下顎骨体正中(前切痕)	完形 図版111
322	第24号墓	2458	S	1229	下顎骨体正中	
323	第24号墓	2459	D	1106-417	下顎骨体正中	
324	第24号墓	2460	S	989-03	下顎骨体正中	
325	第24号墓	2461	B	1308-74	下顎骨体正中	
326	第24号墓	2462	C	1089-243	寛骨腸骨翼左	
327	第24号墓	2463	A	1077-29	寛骨腸骨翼左	
328	第24号墓	2464	C	1093-283	寛骨腸骨翼左	
329	第24号墓	2465	C	1098-339	寛骨腸骨翼左	
330	第24号墓	2466	D	1099-350	寛骨腸骨翼左	
331	第24号墓	2467	C	1317-67	寛骨腸骨翼左	
332	第24号墓	2468	B	1066-16	寛骨腸骨翼左	
333	第27号墓	2701	S	884	頭蓋(外耳道骨瘤、前頭縫合痕)	
334	第27号墓	2702	A	892	頭蓋(外耳道骨瘤)	
335	第27号墓	2703	S	894-01	頭蓋	完形 図版112
336	第27号墓	2704	B	868-53	頭蓋	
337	第27号墓	2705	B	868-59	頭蓋	
338	第27号墓	2706	C	864-11	頭蓋	
339	第27号墓	2707	C	866-61	頭蓋	
340	第27号墓	2708	B	869-61	踵骨右	
341	第27号墓	2709	B	869-67	踵骨右	
342	第27号墓	2710	S	937-01	踵骨右	
343	第27号墓	2711	S	287	第一中足骨左	
344	第27号墓	2712	S	937-02	第一中足骨左	
345	第27号墓	2713	S	1222	第一中足骨左	
346	第27号墓	2714	A	870-76	肩甲骨関節窩左	
347	第27号墓	2715	A	1004-14	肩甲骨関節窩左	
348	第27号墓	2716	B	867-48	腕骨柄	
349	第27号墓	2717	B	869-63	腕骨柄	
350	第27号墓	2718	A	870-73	下顎骨体正中(下顎隆起)	
351	第27号墓	2719	S	894-02	下顎骨体正中(櫛石)	
352	第27号墓	2720	A	870-71	上腕骨遠位端右(=A1244)	
353	第27号墓	2721	B	869-65	上腕骨遠位端右	
354	第27号墓	2722	S	938	寛骨腸骨翼左	
355	第27号墓	2723	B	869-70	大腿骨体右	
356	第27号墓	2724	B	869-66	大腿骨体左	
357	第29号墓	2901	C	1192-65	寛骨腸骨翼右	
358	第29号墓	2902	C	1197-113	寛骨腸骨翼右	

No.	横穴墓	整理番号	区分	原図番号	人骨部位	備考
359	第29号墓	2903	S	001	寛骨腸骨翼右	
360	第29号墓	2904	S	258	寛骨腸骨翼右	
361	第29号墓	2905	S	946-01	寛骨腸骨翼右	
362	第29号墓	2906	A	905-03	脛骨遠位端左、脛骨近位端左	
363	第29号墓	2907	A	908-32	脛骨遠位端左、脛骨近位端左	
364	第29号墓	2908	A	909-48	脛骨遠位端左、近位端左(鉛直線)	
365	第29号墓	2909	A	912-77	同上(鷲頭小面)	
366	第29号墓	2910	S	945-01	脛骨遠位端左、脛骨近位端左	
367	第29号墓	2911	A	907-21	下顎骨体正中	
368	第29号墓	2912	A	910-59	下顎骨体正中	
369	第29号墓	2913	A	914-100	下顎骨体正中	
370	第29号墓	2914	A	905-01	脛骨近位端右	
371	第29号墓	2915	A	909-45	脛骨近位端右	
372	第29号墓	2916	A	911-66	脛骨近位端右	
373	第29号墓	2917	C	1191-58	仙骨	
374	第29号墓	2918	C	1476-02	仙骨	
375	第29号墓	2919	C	1188-29	鎖骨胸骨端右	完形
376	第29号墓	2920	C	1196-101	鎖骨胸骨端右	
377	第29号墓	2921	C	1192-70	橈骨遠位端左	
378	第29号墓	2922	C	1194-82	橈骨遠位端左	
379	第29号墓	2923	A	919	頭蓋(縫合骨)	
380	第29号墓	2924	B	1185	頭蓋(齒石)	
381	第29号墓	2925	S	945-02	側頭骨錐体右	
382	第29号墓	2926	A	915-102	側頭骨錐体右	
383	第29号墓	2927	B	1476-07	下顎骨体正中	
384	第29号墓	2928	A	909-49	上腕骨遠位端左	
385	第29号墓	2929	A	914-93	上腕骨遠位端左	
386	第29号墓	2930	B	1477-13	上腕骨遠位端左	
387	第29号墓	2931	C	1196-104	上腕骨遠位端左	
388	第29号墓	2932	A	915-101	寛骨腸骨翼左	
389	第29号墓	2933	A	906-16	寛骨腸骨翼左	
390	第29号墓	2935	S	946-02	寛骨腸骨翼左	
391	第29号墓	2935	S	946-02	寛骨腸骨翼左	

※ 図版95～112に示した人骨写真は、縮尺3分の1になっている。

※ 写真に示した人骨番号は、整理番号である。

※ 図面に示した人骨番号は、整理番号の下2桁である。

※ No.233は図版103以外に、図版105も参照。

第5章 結語

1. 分布

横穴墓群の概要

江道横穴墓群は、山腹の南側斜面に東西に拡がって分布している。当横穴墓群は、20基の横穴墓で構成されている。以前から知られていた11基の横穴墓に加えて、今回9基の横穴墓を検出し、合計20基となった。ただし1基は不確定である。また20基以上存在している可能性もある。これについては、この横穴墓群の東側に所在している可能性は少ないが、西側については所在している可能性が高いと言える。

当横穴墓群は、現在のところ、盛り土のある古墳が確認されておらず、横穴墓からのみ構成される古墳群（横穴墓群）である。

東西の範囲は、東端の第1号墓から、西端の第27号墓まで、約60mを計る。また南北の幅は、約15mを計る。標高からは、一番低い第11号墓から、一番高い第5号墓まで、約10mの比高差となっている。

横穴墓群の時期については、おおよそ7世紀代を中心と考えている。

分布状態

昭和30・31年の調査によって確認されたのは11基の横穴墓群である。報告者は、これを主に垂直的な分布状態より、上段のもの：第1～6号墓の6基と、下段のもの：第11～15号墓とに区分した。今回の横穴墓は下段地区の西側一帯に拡がるものであり、「下段西側地区」と取り敢えず区分して記述してきた。今回検出された横穴墓については、第21～29号墓と命名した。ここで、今回のものも加えて改めて分布状態を検討してみる。

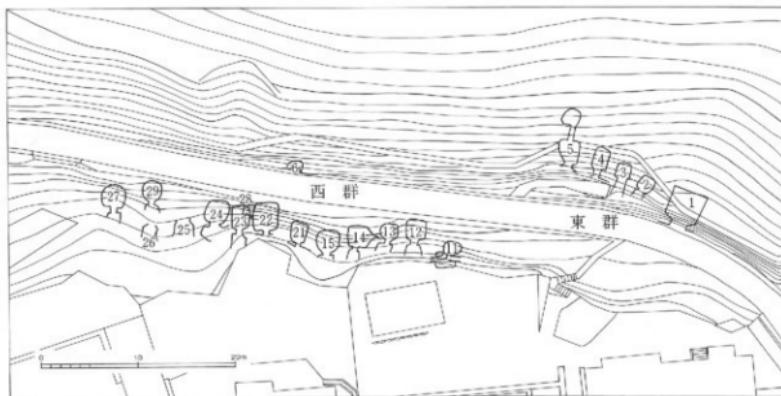
水平的な分布状態からは、東側でやや北寄りに位置する第1～5号墓の一群（東群とする）と第11号墓より西側に位置する一群、すなわち第6・11～15・21～29号墓（西群とする）とに区分される。西群は、東群と比べて西側でやや南寄りに位置する。

垂直的な分布状態からは、標高23mラインを境として、上方に位置するもの（上群とする）と下方に位置するもの（下群とする）とに区分される。上群は、第1～6・28・29号墓であり、下群は、第11～15・21～27号墓である。上群は、従来、上段とされていたものに、今回検出で、上方に位置する2つの横穴墓を加えたものとなり、下群は、従来、下段とされていたものと、この西側一帯から今回検出したものの大半を含んでいる。

東群と西群

従来の分布状態からは、上段のものと下段のものとは、明確な比高差があり、この区分は妥当性があったと言える。今回の調査ではやや高い位置に、第28・29号墓が検出されたことにより、高さのみで截然と2区別することが難しくなった。

そこで、ここでは、東側の一帯と西側の一帯とに区分する立場から、状態を検討したい。両者で一番近接しているのは、第5号墓と第11号墓である。この間隔は、垂直距離で約8m、水平距離で約15mあり、この間の懸隔が最も大きく、ここを境に東西の2群に区分するのが妥当と判断される。



第11図 横穴墓分布区分図 (1/500)

東群の横穴墓

東群とした一群は、第1～5号墓の5基の横穴墓である。この内、第1号墓は一番下位に位置すると共に改変が著しく、本来横穴墓であったかどうかも不明である。その他の4基、第2～5号墓はまとまりのある一群となっている。

西群の横穴墓

西群とした一群は、第6・11～15・21～29号墓の15基の一一群である。東端の第11号墓から西端の第27号墓まで約34mある。また比高差は、一番低い第11号墓と高い第6号墓とは約8mある。高さからは、下位の第11～15・21～27号墓、中位の第28・29号墓、上位の第6号墓と3区分できるものである。西群のなかでは、言うまでもなく第11号墓から第27号墓に至るもののが主要なものと言える。そして、中位と上位に位置する上方の第28・29・6号墓が一つのまとまりで、さらにこれらが、第28・29号墓と第6号墓とに分かれると見える。なお、下位としたものの内第11～15・21～26号墓は完めて近接して構築されている。これらに対して第27号墓はやや離れている。第27号墓はさらに西側に推定される一群の東端のものになる可能性がある。

2. 後世の改变

横穴墓の再利用

江道横穴墓群は、江戸時代からその存在が知られていたことが示すように、民家に近く、人々の生活空間に接して存在してきた。このため広く知られていると共に、再利用され、改変が加えられてきた。

林道の建設

昭和8～9年に当地区に林道が建設された。第1～5号墓の前方を横断し、さらに山に向かって行くもの

である。第6号墓はこの林道によって前半分を削られている。この第6号墓の南西側やや下方に、第28号墓があり、前方部を削られている。これらは小型の部類に入るものである。この付近に他にもこのような横穴墓があり、林道によって幾つかが破壊された可能性がある。

上段の改変

第1号墓は、東群でも最も東端部に位置している。長さ3.31m、幅3.60m、高さ3.32mと大型のものである。薪等の貯蔵庫として使われてきた。当初よりこの大きさであったかは疑問であり、横穴墓であっても、改変、拡張が行われたものと理解している。地元の人の話では当初より薪の貯蔵庫として構築されたものとされている。古い工具痕や横穴墓構築時の痕跡と思われる部位ではなく、横穴墓を同わせるものは何一つないと言ってもよい。横穴墓でない可能性が強い。

第5号墓は、東群でも最も西端部に位置している。この横穴墓の改変については、昭和30・31年の調査でもよく認識されているところである。甘藷等の貯蔵庫として使われてきたものである。玄室の奥に通路と室を設けている。玄室自体も床面を掘り下げている。当初の壁部分と改変による拡張部分とは、工具痕の跡等により容易に区分できる。また第4号墓も玄室の床面が掘り下げられている。

下段東側の改変

第11号墓は、床面が民家の庭先と変わらない所に位置している。改変や再利用を最も受け易い所と言える。副室とした遺構も、当時のものかどうか不明である。

第14号墓も玄室が後世改変されていると推定される。玄室の中に大きな基盤層のブロックがあるが、新しいものと思われる。

下段西側の改変

比較的下方に位置し、西群とした横穴墓も改変を受けているものが多い。この群の中央に位置する第15号墓とこの西側に位置する一群は、玄室の中央から前方の上部を削除されている。第15・21・22・24・28号墓において典型的に認められる。地元の人の話を参考として考えれば、宅地の山側への拡幅等に伴い削り取られた可能性が強い。林道拡幅工事に伴うと考えられる土砂が覆っていることから、これ以前の所作によるものと判断される。

峠門の遺構

峠門の遺構として、著名なのが第4・5号墓のものである。第5号墓については、後世の改変があるとしても、第4号墓の峠門の石柱は、当初からのものとして認証してきた。しかしこの峠門とされる石柱については、疑問を提示せざるを得ない。

1. 切石による峠門の分布地域と離れており、系譜を辿ることが難しい。
2. 峠門の遺構とされるものと異なり、切石を明確に鳥居状に構築していない。極めて簡単に切り石を積み重ねたものと言える。
3. 使われている切石の工具痕は、先の尖ったものである。このような工具痕は、この付近で近代のものとされる切石等に付いているものと同様である。当横穴墓群に見られる工具痕は、先の平たいものである。
4. 地元の人の話では、食糧の保存が問題となってきた太平洋戦争頃にこの切石を設けたとのことである。これによって入り口を狭くし、貯蔵している甘藷の状態を良好に保ったものである。

以上のことより、峠門の遺構とされる石柱は、横穴墓構築当初のものではなく、近代の所産にかかるものであると理解しておきたい。

横穴墓	玄室平面形等	玄室 規 模	玄室天井形	羨 道 部	墓 前 域
第1号墓	両袖式 矩形平面	長さ3.31m 奥壁幅3.85m 中央幅3.60m、前壁幅3.44m	箱形 高さ3.32m	長さ0.70m 幅1.82m	不明
第2号墓	両袖式 矩形平面	長さ1.60m 奥壁幅1.50m 中央幅1.66m、前壁幅1.38m	ドーム形 高さ0.88m	長さ0.20m 幅0.62m	コの字形
第3号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ1.84m 奥壁幅1.24m 中央幅1.50m、前壁幅1.44m	ドーム形 高さ1.00m	長さ0.20m 幅0.74m	縱長コの字形
第4号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ2.41m 奥壁幅1.48m 中央幅1.60m、前壁幅1.38m	変形ドーム 高さ1.42m	長さ0.70m 幅0.60~0.70m	一部存在
第5号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ2.50m 幅2.10m	ドーム形 高さ1.50m	長さ0.40m 幅0.60m	一部存在
第6号墓	不明 縱長矩形平面	残存長1.46m 奥壁幅1.22m 入口側の幅1.50m	変形ドーム 高さ0.68m	不明	不明
第11号墓	左片袖式 隅丸矩形平面	長さ1.34m 奥壁幅1.10m 中央幅1.74m、前壁幅1.40m	箱形 高さ1.10m	長さ0.40m 幅0.60m	なし
第12号墓	両袖式 矩形平面	長さ2.16m 奥壁幅1.80m 中央幅2.06m、前壁幅1.78m	ドーム形 高さ1.08m	長さ0.40m 幅0.64m	コの字形
第13号墓	両袖式 不正矩形平面	長さ1.66m 奥壁幅1.76m 中央幅1.78m、前壁幅1.56m	ドーム形 高さ0.94m	長さ0.48m 幅0.70m	コの字形
第14号墓	両袖式 横長矩形平面	長さ2.20m 奥壁幅2.20m 中央幅2.40m、前壁幅2.20m	ドーム形 高さ1.22m	長さ0.36m 幅0.38~0.54m	コの字形
第15号墓	両袖式 隅丸矩形平面	長さ2.40m 奥壁幅1.80m 中央幅2.32m、前壁幅2.08m	ドーム形 高さ1.20m	長さ0.40m 幅0.45~0.60m	コの字形
第21号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ2.10m 奥壁幅1.70m 中央幅1.62m、前壁幅1.38m	変形ドーム 高さ0.98m	残存長0.38m 幅0.50m	不明
第22号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ2.84m 奥壁幅2.58m 中央幅2.63m、前壁幅2.53m	ドーム形 高さ1.51m	残存長0.64m 幅0.68~0.80m	不明
第23号墓	両袖式 縱長矩形平面	長さ2.38m 奥壁幅1.87m 中央幅1.99m、前壁幅1.70m	ドーム形 高さ不明	長さ0.68m 幅0.66~0.80m	縱長コの字形
第24号墓	両袖式 矩形平面	長さ2.50m 奥壁幅2.20m 中央幅2.38m、前壁幅1.98m	変形ドーム 高さ1.50m	長さ0.40m 幅0.98~1.02m	左側のみ残存
第25号墓	不明	不明	不明	不明	墓前域を確認
第26号墓	不明	不明	不明	不明	墓前域を確認
第27号墓	両袖式 隅丸矩形平面	長さ2.26m 奥壁幅1.76m 中央幅2.40m、前壁幅2.02m	ドーム形 高さ1.38m	長さ0.50m 幅0.60~0.70m	コの字形
第28号墓	不明 縱長矩形平面	残存長0.94m 奥壁幅1.07m 入口側の幅0.92m	アーチ形 高さ0.72m	不明	不明
第29号墓	両袖式 隅丸矩形平面	長さ1.94m 奥壁幅1.60m 中央幅1.88m、前壁幅1.50m	変形ドーム 高さ1.36m	長さ0.50m 幅0.56~0.70m	コの字形

第3表 横穴墓構造一覧表

3. 構造

横穴墓の構造

当横穴墓の基本的構造は一つと理解される。玄室平面矩形、ドーム天井の単室構造、羨道及び墓前域が付設される型式である。

玄室の平面形は矩形が基本だが、角張るものではなく丸味を持つものである。玄室では複室構造のものは存在しない。羨道部は短いものである。第11号墓が左片袖式である以外、両袖式の形態である。また、基本的に墓前域を有するものと推定される。

玄室

玄室の平面形は矩形が基本であるが、以下のように区分される。

1. 矩形平面形：第1・2・12・24号墓
2. 縱長矩形平面形：第3・4・5・6（？）・21・22・23・28（？）号墓
3. 橫長矩形平面形：第14号墓
4. 圓丸矩形平面形：第11・15・27・29号墓
5. 不正矩形平面形：第13号墓

矩形・縱長矩形・横長矩形としたものも、隅部は比較的丸くなるものが多い。圓丸矩形としたものは、円形に近いものである。

玄室の規模は、長さ2mあまりで、幅2mぐらいが平均的な規模である。改変されたと推定される第1号墓が3m以上を計り最大である。また一部しか残存していないが、第28号墓が幅0.92mと最小である。

天井部は、アーチ形、ドーム形、箱型及び、ドーム形に準じるもの（変形ドーム形）である。それについて、以下のとおりである。

1. アーチ形：第28号墓
2. ドーム形：第2・3・5・12・13・14・15・22・23・27号墓
3. 変形ドーム形：第4・6・21・24・29号墓
4. 箱形：第1・11号墓

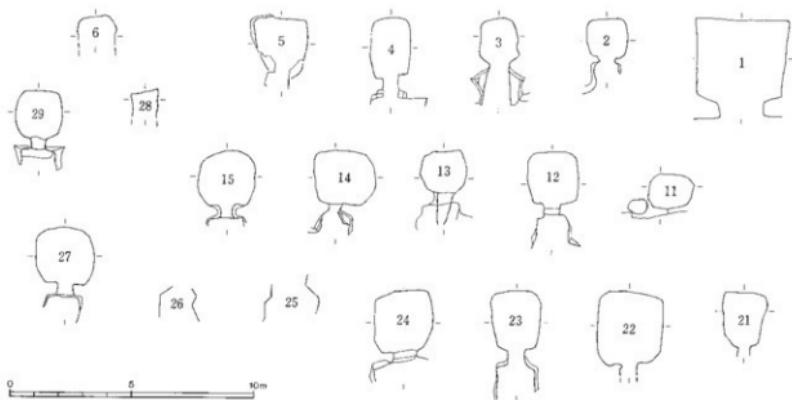
第28号墓をアーチ形としたが、この横穴墓は、全体が残存していないものである。よって明確なアーチ形のものは存在しないと言える。変形ドーム形としたものは、奥壁が一部直立したり、直線的なものをここに分類した。総じてドーム形が主体と言える。

羨道部

玄室への導入部である狭い通路部分を「羨道部」と称してきた。当横穴墓群の特徴として、この部分が短いことが上げられる。一般的には約20~70cmである。一番長い第13号墓でも78cmを計るに過ぎない。羨道部と言ふより玄門的なものと言える。

墓前域

羨道部の前に広がる平坦面である。前庭部と称されることも多い。この部分は一番外側の施設であり、土砂の流失や後世の工事等により、破壊される可能性が最も大きい部分である。当横穴墓の場合、基盤がしっかりしたものであることもあり、この墓前域は比較的残存状態の良いものであった。当横穴墓群は基本的にこの部分を付設しているものと言ってよいであろう。上方が削除されていても、基底部において確認されたものも多い。幅約80cm、長さ約60cmを計る。



第12図 横穴墓平面形一覧図 (1/200)

閉塞施設

当横穴墓群からは、入口の閉塞施設を示す直接的資料は得られていない。土層断面で痕跡が検出できたわけでもない。木製のものであった場合は残存することが難しい。

ただ、これに関するものとして、基盤層の石灰質砂岩を切り取った塊状の石が見られる。第15・23・29号墓から、目立った形で出土している。第15・29号墓については、葬道部側近くを中心に分布しており、これらについては、この石灰質砂岩の切り石によって閉塞がなされた可能性が強い。

その他の施設

周溝（側溝）は第11号墓に一部認められるのみである。第12・13号墓に轟状のものが付く。

第29号墓の外壁より、馬の線刻画が確認された。

小型の一群

第6号墓と第28号墓は、玄室の後半部のみ残存しているため、全体の形態が不明である。しかし、幅、高さについては、6号墓が幅1.50mあまり、高さが0.68m、第28号墓が幅1.07mあまり、高さが0.72mを計るに過ぎず、小型の横穴墓と言ふことができる。また、これらよりは大きいが、第2・3・11・13号墓は通有のものより小さく、中型の一派と言える。

類似した横穴墓

第15号墓と第27号墓は、間に第21～26号の6基の横穴墓を挟み、約22m離れている。しかし、この両者は類似した形態のものである。円形に近い隅丸矩形の平面形をもち、規模も似通っている。墓前域はコの字形となり、葬道部床面とは段をなし、一段低くなっている。

第24号墓と第29号墓は、前者が大型の部類に入るのに対して、後者は比較的小型のものである。しかし、玄室の平面形の類似に加えて、葬道部の床面の構造に置いて、板状に盛り上がっている点等、類似しているものである。

4. 遺物

遺物の種類

出土した遺物は副葬品と推定されるものである。今回出土した各横穴墓の遺物は、次のとおりである。

第12号墓：骨鏡 4 点。

第13号墓：形態・用途不明鉄製品 1 点。

第14号墓：須恵器 2 点、耳環 1 点、ソケット状骨角製品 1 点。

第15号墓：刀子 4 点、耳環 1 点、砥石 1 点。

第21号墓：刀子 1 点、耳環 1 点。

第22号墓：須恵器 15 点、直刀 1 点、鉄鏃 5 点、馬具 1 点、刀子 1 点、形態・用途不明鉄製品 2 点、耳環 1 点、骨鏡 4 点、貝製環状品 1 点。

第23号墓：土師器 1 点、須恵器 10 点、鉄鏃 2 点、刀子 4 点、耳環 2 点、砥石 1 点、切子玉 1 点、丸玉 30 点。

第24号墓：土師器 2 点、須恵器 12 点、鉄鏃 1 点、刀子 2 点、形態・用途不明鉄製品 1 点、耳環 1 点、馬具 2 点、ベン先状骨角製品 1 点。

第27号墓：土師器 4 点、短剣 1 点、耳環 2 点、ヘアーピン状骨角製品 1 点、円筒状骨角製品 1 点。

第29号墓：刀子 1 点、貝製円形有孔品 1 点。

土器類

当横穴墓群出土土器類については、以下のものがある。

1. 今回の発掘調査で出土したもの。

2. 地元の中谷ふみ氏が所蔵されているもの（中谷集信氏蔵品）。今回図示した 9 点である。

3. 故中谷集信氏の所蔵品で、月野谷の故清水正告氏に譲ったもの。『国吉小史』には須恵器 2 点が図示されている。須恵器提瓶と須恵器長頸瓶である。後者は口頸部を欠損している。現在西広谷小学校に所蔵されているものに類似しており、これである可能性がある。

4. 昭和 30・31 年の調査で出土した遺物 5 点は現在高岡市博物館が所蔵している。この中に須恵器杯蓋が 1 点ある。杯口蓋で、口径 12.4cm、高さ 4.0cm を計る。天井部はヘラ削りしていない。第 14 号墓出土品である。

今回出土した土器類は、土師器・須恵器である。これらが出土した横穴墓は、第 14・22・23・24・27 号墓である。特に第 22・23・24 号墓からまとまつた量が出土した。第 22・23 号墓出土品については、同一時期の副葬品と判断される。問題なのは、第 24 号墓出土品である。須恵器の杯・蓋類と、提瓶類を比較した場合、同時期とするより、提瓶類が古く、杯・蓋類が新しいと判断される。すなわち、前者は横穴墓の構築当時のもので、後者は追葬時のものと理解しておきたい。

骨鏡

骨角器類の内、中心をなすのが骨鏡である。今回の調査では、第 12 号墓と第 22 号墓から出土した。また昭和 30・31 年の調査では、第 2 号墓から出土している。

ドブ貝

自然遺物としては、ドブ貝の出土が注目を引く。第 22・23・24・27 号墓から主に出土している。単なる食料の供献ではなく、埋葬様式・埋葬儀式にかかわるものと想定したい。

横穴	個体名称	区分	横穴	個体名称	区分	横穴	個体名称	区分
第 15	熟年男性骨	A	少年期骨	E		青年性别不詳骨	C	
	熟年男性骨	S	少年期骨	E	第	青年性别不詳骨	C	
	熟年男性骨	S	幼年期骨	A		幼年期骨	B	
	熟年男性骨	S	幼年期骨	E	24	幼年期骨	C	
	壮年男性骨	B	幼年期骨	E		幼年期骨	C	
	熟年女性骨	B	幼年期骨	E	号	幼年期骨	C	
	年齢不詳女性骨	A	(計14個体)			幼年期骨	C	
	年齢不詳男性骨	C				幼年期骨	D	
	年齢不詳未成人骨	A	熟年女性骨	B	墓	幼年期骨	S	
	小兒期骨	B	熟年男性骨	S		(計13個体)		
第 21	少年期骨	C	壮年男性骨	E				
	幼年期骨	S	壮年男性骨	S		熟年骨	A	
	(計12個体)		性別不詳青年期骨	B		壮年骨	A	
	壮年女性骨	B	少年期骨	A	第	壮年骨	B	
	青年男性骨	C	少年期骨	B	27	幼年期骨	B	
	幼年期骨	A	少年期骨	E	号	幼年期骨	B	
	幼年期骨	B	幼年期骨	A	墓	幼年期骨	C	
	幼年期骨	B	幼年期骨	B		幼年期骨	C	
	(計5個体)		幼年期骨	B		(計7個体)		
			幼年期骨	C				
第 22	壮年期骨	A	幼年期骨	D		壮年期骨	A	
	壮年期骨	B	幼年期骨	E	第	壮年期骨	A	
	青年期骨	A	幼年期骨	E		壮年期骨	A	
	青年期骨	E	(計15個体)		29	青年期骨	A	
	青年期骨	E				青年期骨	B	
	年齢詳細不明骨	E	熟年男性骨	A	号	少年期骨	A	
	少年期～小兒期骨	B	壮年男性骨	C		少年期骨	C	
	少年期骨	A	壮年女性骨	A	墓	幼年期骨	C	
	少年期骨	B	壮年女性骨	D		(計8個体)		

第4表 人骨個体別一覽表

5. 人骨

人骨の出土状態

多くの横穴墓から人骨が出土した。その量について多い順に整理箱に換算して個数を記してみる。厳密な数量を示してはいないが¹、概要を知ることができると考えるからである。第23号墓=27箱、第15号墓=15箱、第22号墓=13箱、第24号墓=8箱、第29号墓=6箱、第27号墓=5箱、第21号墓=4箱となる。これら以外の横穴墓は、1箱にも満たない量である。

人骨の出土状態については、以下の4つに区分されるものである。

1. 木棺に入った状態で、多量に出土したもの：第23号墓。
2. 集積された状態で出土したもの：第15号墓、第24号墓、第29号墓。
3. 散乱した状態で出土したもの：第21号墓、第22号墓、第27号墓。
4. 僵かに出土したもの：第4号墓、第5号墓、第11号墓、第12号墓、第13号墓、第14号墓。
5. 出土しなかったもの：第1号墓、第2号墓、第3号墓、第6号墓、第28号墓。

「1」とした第23号墓は、それぞれまとまった状態で出土したので、木棺の存在を想定している。「2」としたものは、第23号墓のような明確なまとまりはないが、ブロックごとにおおまかなまとまりを指摘できるものであり、集められた状態を想定している。「3」としたものは、漫然と散在しているものである。第22号墓は、量的には多く出土したが、大きな骨が少ないことが特徴である。第21号墓は出土量は少ない。第27号墓については、開口しており、荒らされた可能性がある。「4」については、開口している横穴墓であること、後世人の出入りがあること、再利用されていること、調査されたものがあることなど、実質的に、「5」とした出土しなかった横穴墓と同様なものである。

人骨の鑑定

人骨の鑑定については、実質的に出土した、第23、15、24、29、21、22、27号墓について、森沢佐蔵氏に依頼して実施もらった。

この結果それぞれの横穴墓の埋葬された人骨の数量は以下のとおりとなった。合計は74個体である。

- 第15号墓：12個体（成人骨8個体、未成人骨4個体）
第21号墓：5個体（成人骨2個体、未成人骨3個体）
第22号墓：14個体（成人骨5個体、未成人骨9個体）
第23号墓：15個体（成人骨5個体、未成人骨10個体）
第24号墓：13個体（成人骨6個体、未成人骨7個体）
第27号墓：7個体（成人骨3個体、未成人骨4個体）
第29号墓：8個体（成人骨5個体、未成人骨3個体）

6. 埋葬状態

葬法

遺骸の処理方法としては、今回の人骨からは火葬骨が出土していないことから、すべて土葬による埋葬方法と理解される。

第15号墓

第15号墓については、前壁に沿う形で左右の下肢骨がほぼ生理的位置関係を保っていることから、仰臥位で埋葬された可能性がある。この15号墓の人骨全体としては、人骨が3つに分かれて集積された状態で確認できたものである。前半部の削除や、開口していた横穴墓ということもあり、どの程度当時の状況を伝えているかは不明である。

第23号墓

第23号墓については、骨を木棺に入れて葬られたものであるとすでに推定してきたところである。この墓からは、木棺それ自体の出土はもとより、木片や鉄釘等の出土もない。しかし、木棺の存在を推定したわけである。木棺に入っていたとしても、ブロック状にまとまって骨が出土しており、「かたづけ」に伴い骨を集めたのではなく、改葬による2次葬と断定しても良い内容である。

第23号墓の木棺の内容と設置について、推測を加えてみる。鉄釘等の金具を使用しなくとも、組み合わせ式のものであった可能性もある。この墓の玄室最下層には褐色砂質土があり、面上に敷き詰めたようになっていた。この上を敷き木棺設置の基底としたことも推定される。塊状の切り石は、木棺の側面を支えていたものである可能性もある。

森沢氏によって15個体分の人骨が指摘されているが、上方出土の2個体（2つの頭蓋骨が中心）を除けば、13個体である。各木棺ごとの個体は以下のようになる。

第1号木棺（E群）：壮年男性骨1個体、少年期骨1個体、幼年期骨2個体。

第2号木棺（C群）：幼年期骨1個体。

第3号木棺（D群）：幼年期骨1個体。

第4号木棺（B群）：熟年女性骨1個体、性別不詳青年期骨1個体、少年期骨1個体、幼年期骨2個体。

第5号木棺（A群）：少年期骨1個体、幼年期骨1個体。

主要な木棺と想定している第1号・第4号木棺からはそれぞれ4個体と5個体の人骨があり、他の小型の木棺からは、少年期～幼年期骨が1～2個体となっている。

奥壁側の第1号木棺に壮年男性骨1個体があり、これが家長的立場の人物であり、この横穴墓の構築のきっかけとなった人物と推定される。また第4号木棺からは、切子玉・丸玉・耳環が出土しているが、これに該当するのは熟年女性骨のものであった可能性が高い。

第22号墓と第23号墓

この第23号墓と対照的なのが、第22号墓である。第23号墓に隣接して位置し、出土遺物からみて、構築年代も同時期か接近した時期と推定される横穴墓である。第22号墓は、人骨も相当量出土し14個体分の人骨と鑑定されているものである。しかし、頭蓋骨・大脛骨をはじめとした、大きい骨が極めて少なく、小さな骨や骨の断片が散らばっている状態である。一方、この第22号墓からは、直刀や須恵器等多くの遺物、副葬品が出土している。単に荒らされて人骨が散逸したとは推定できない。

第23号墓は、改葬墓であり、遺骸をどこかで骨と肉とに分離し、骨化して木棺に入れて葬ったわけである。そこで、その骨化した場所が問題となってくる。

この第23号墓の人骨を骨化した場所として、第22号墓の存在を指摘しておきたい。すなわち、第22号墓と第23号墓とは組み合うもので、第22号墓は遺骸を骨化するための横穴墓であり、第23号墓は骨化した遺骸を改めて葬るための横穴墓とするものである。

そして、憶測を加えれば、第22号墓の奥壁際に残された直刀は、第23号墓第1号木棺の壮年男性に本来所

属していたものと考えられる。

第21号墓も、骨は細片のみの出土であり、荒らされたことを考慮しても、あまりにも骨が少ない。これも第22号墓同様に、遺骸を骨化するための1次葬の場所であった可能性がある。

第24号墓

第24号墓は、第23号墓程明確ではないが、木棺の存在を想定できるものである。一応6つの人骨群に分かれ、6つの木棺を想定することができる。

第1号木棺=奥壁近く東西に位置する。長さ約1.20m。第2号木棺=第1号木棺の前側で東西に位置する。長さ約0.80m。第3号木棺=第2号木棺のさらに前側で、中央やや奥壁寄りで東西に位置する。長さ約1.80m。ただし、東西の2つの木棺に分離することも可能である。これら以外に、中央より前側に3つの人骨群がある。前壁近くと、東側側壁寄り、西側側壁寄りである。これらは中央より奥壁側の3つに比べて、木棺を想定するには可能性が小さい。第1号～3号木棺としたものは、森沢氏分類のC・D群に当たるものである。このC・D群には、10個体分の人骨が推定されている。また前側のものは、森沢氏分類のA・B群に当たるが、これらは3個体分の人骨とされている。

この第24号墓については、中央より奥側の一群と、前側の一群とに分類できる可能性がある。奥側の一群は、横穴墓構築当初ないしこれに近い時期のもので、木棺に入れられていた可能性があるものである。前側の一群は、奥葬のものより新しい時期の一群で、追葬の時期とも思える。新しい時期とした土器類は、これらの周辺で出土していることも根拠と考えた。

第27号墓

第27号墓は、開口していた横穴墓であり、玄室内の壁も一部改変を受けていた。人骨については、頭蓋骨や大腿骨等大きいものも出土し、集中地点はあるものの、まとまりのない出土の仕方である。遺物も比較的多く出土したが、後世の人の出入りがあったと判断され、型葬形態については不明と言わざるを得ない。

第29号墓

第29号墓の人骨は3地点から出土している。木棺を推定し、改葬されたものとなる可能性がある。

追葬等

追葬等について、第24号墓において推定してきたところである。第23号墓については、一定度埋もれた後に、頭蓋骨が2個体置かれている。他の骨が少ないこともあります、意識的に頭蓋骨を中心に設置したものと推定される。この頭蓋骨についても、これ以外の骨が少ないこともあります、ここへ直接葬ったのではなく、別の場所に葬ったのち、ここへ改葬されたものと推定される。

小型の横穴墓

第6号墓、第28号墓と小型の横穴墓がある。一部のみの検出であるが、小型のものと推定されるものである。これらの機能や出現については、改葬のための墓であることも想定される。

成人の遺骸を葬る場合、一定量の空間が必要となり、そのために横穴墓もそれなりの大きさが必要となる。骨化した後の改葬については、コンパクトにまとめて葬ることも可能となり、改葬用の墓としては、小型の横穴墓でも可能となる。

横穴墓の組み合わせ

第22号墓と第23号墓とは、改葬のことで組み合うと推定した。改葬の場合、骨化する場所が必要となり、通常は、改葬用の横穴墓以外の横穴墓を1次葬の場所と推定されている。今回は未調査のものや荒らされている横穴墓も多く、2つ1組のことについては、これ以上不明と言わなくてはならない。

		 2201	 2205	 2208	 2212
1	第 22 号 墓	 2202	 2206	 2209	 2213
		 2203	 2207	 2210	 2214
		 2204		 2211	
2	第 23 号 墓	 2202	 2204	 2206	 2208
		 2203	 2205	 2207	 2209
3	第 14 号 墓		 1401		 1402
4	個人所藏		 0904		 0906
5	第 24 号 墓	 2403	 2405	 2407	 2409
		 2404	 2406	 2408	 2410
6	表 土		 0016		 0017

第13図 須恵器変遷図 (1 / 6)

7. 時期と変遷

出土土器の時期

出土土器の編年的位置や横穴墓の時期を知るために、歳内、特に鶴邑窯跡群における須恵器の編年に依拠して述べたい。

該当する須恵器の型式は、TK217型式である。この型式については、以前より時期の幅が相当あるものとされ、通常の1型式よりも長い期間を当てられたり、2～3期に細分されてきたものである。最近もこの型式を巡って、いくつかの論考が出されて、研究が進んでいると共に扱いが難しい型式である。ここでは、理解している編年観を提示し、依拠している根拠を明示したい。

TK217型式を古・新の2つの段階に分けておく。これに先行するTK209型式を7世紀初頭ないし第1四半世紀頃のものとする。そして7世紀の須恵器の変遷を、TK209型式→TK217・古型式→TK217・新型式(TK46型式)→TK48型式とする。それぞれには、おおまかに四半世紀を当てるものとする。

第22号墓からは、須恵器杯Hと杯H蓋がそれぞれ7点出土している。ヘラ削りしていないものは、それぞれ1点のみである。第23号墓からは、須恵器杯Hが6点、杯H蓋が2点出土している。6点ともヘラ削りしていない。第23号墓の須恵器の方が、第22号墓の須恵器よりも口径がやや大きく、この点からは第23号墓の方が古い様相をもっている。しかし、調整手法のヘラ削りのことを考慮して、時期差はあるまいが、第22号墓の須恵器のほうが古いものとしておく。

第14号墓からは、須恵器杯Hが2点出土している。受け部の立ち上がりは短く、ヘラ削りをしていない。第23号墓出土須恵器に統くものとしておく。

第24号墓からは、須恵器杯G蓋が7点出土している。口縁部内面にかえりを持つが、かえりは口端部より下方へは出ない。口径8.6～9.2cmの小型品であり、都城に当てはめれば、大津宮段階のものよりやや古い時期頃と理解される。個人所蔵品に須恵器杯G蓋が2点ある。かえりが口端部近くの高さであり、第24号墓のものと比べて古いものである。

断片的資料だが、表土出土の須恵器杯0016と杯蓋0017は、上記のものより新しく、都城に当てはめれば、藤原宮段階のものと理解される。

これら資料をまとめる以下のような順序になる。

1. 第22号墓出土須恵器、杯H、杯H蓋：TK209～TK217・古
2. 第23号墓出土須恵器、杯H、杯H蓋：TK217・古
3. 第14号墓出土須恵器、杯H：TK217・古
4. 個人所蔵須恵器、杯G蓋：TK217・古～TK217・新
5. 第24号墓出土須恵器、杯G蓋：TK217・新
6. 表土出土須恵器、杯、杯蓋：TK48ないしこれ以降

1～5は比較的連続するものと捉えられるが、5と6とはやや時間差があるものと理解される。

横穴墓構築の変遷

第22号墓や第23号墓出土土器を副葬品とし、これらが横穴墓構築の時期を示しているとの前提で記述を進める。また第14号墓についても同様に考え、第24号墓については、須恵器捉瓶を基準に考えることにする。

横穴墓の構造的なものからは、大きくて形が整っているものから、小さくなり形も不整になるとの変遷観を基準にしたい。

このように考えると、西群とした横穴墓の中央部から西側のものが古い一群となる。第22・23・24号墓は、今回の中では大型の部類である。未発掘の第25・26号墓を含めて、標高的に下方に位置し、構築し易い所にある。これらを古い段階のものと理解している。

その後に、西群でも東側に位置する第12～14号墓、東群の第2～5号墓、小型の第6・28・29号墓がくるものとしたい。

時期的には、古い段階のものとした一群は、7世紀前半、その後のものとしたグループは、7世紀中頃～後半のものと想定される。

8. おわりに

江道横穴墓群は、後世の再利用や改変を受け、残存状態のよい遺跡・遺構ではない。しかし、石灰質砂岩の基盤層に構築された横穴墓は、人骨の遺存に恵まれた条件であったし、硬い岩盤に構築されたため、通常では破壊され易い墓前域の状態を残してくれることになった。

出土遺物から、これらの横穴墓は、総じて7世紀の造営にかかるものであることが判明した。現在判明した限りでは、構築の開始は、7世紀初頭ないし第1四半紀頃と推定される。また終末の時期として、7世紀末～8世紀初頃に追葬等、横穴墓の利用が行われたと推定される。

今回発掘調査したなかで、最も残存状態が良好な第23号墓は、改葬による第2次葬がなされたものであることが判明した。

横穴墓にかかる改葬による2次葬の場所として、①通常規模の横穴墓、②小型横穴墓、③主体をなす横穴墓に付属する副室の存在が指摘されているが、第23号墓は通常規模の横穴墓が改葬墓である。これ以外に第24号墓等でも改葬墓と推定した。小型の横穴墓については第6・28号墓が該当し、副室については第11号墓付属の穴が可能性がある。通常の埋葬形態は、遺骸を伸展葬し、追葬時に先葬者の遺骨を胸に集積し、追葬者を伸展葬するものと理解されるが、当横穴墓群についてはこのような形態はないものと理解される。第2号墓については、単純に仰臥葬→集積→追葬の形態とは言えない。成人骨を伸展葬するには窮屈な規模であり、このような中型横穴墓を複数できる改葬墓として構築された可能性を指摘しておきたい。

当横穴墓群は、明確に伸展葬や追葬に伴う集骨を示すものなく、改葬による2次葬が主要な形態であった可能性が強い。改葬墓の可能性を指摘した。小型横穴墓・副室・中型横穴墓は古い段階のものとは言えず、通常規模の横穴墓を改葬墓とする様式で展開したものと言える。

改葬を前提とする1次葬の場所としては、横穴墓内とこれ以外の場所となるが、後者の場合は検出し特定することが難しい。当横穴墓群については、第22号墓を1次葬の場所とし、第21号墓も同様な可能性を指摘してきたところである。

横穴墓の改葬墓は東北南部地域に多くみられるが、当地で確立したものではなく、九州地域からの系譜が窺えるものとされている。当横穴墓群でみられる改葬墓も、ここで確立したものではなく、九州地域からの影響としたい。また渡門外墓の線刻画や骨鏡も、九州地域との関連を想定したい。

今回の調査では、当地における7世紀代の埋葬形態、墳墓のあり方として、良好な資料を提供したと言える。

参考文献

- 池上 信 1977 「東北南部における横穴初現についての一試考」 『南奥古文化』創刊号 南奥古文化研究会
- 池上 信 1980 『横穴墓』(考古学ライブラリー6) ニュー・サイエンス社
- 池上 信 1981 「横穴墓の被葬者と性格論」 『論争学說・日本の考古学』5 堺山閣
- 池上 信 1991 『東国横穴墓の型式と伝播』 『おおいた考古』第4集 大分県考古学会
- 池上 信 1993 『東北横穴墓の埋葬様式』 『立正考古』第32号 立正大学考古学研究会
- 池上 信 1993 「いわき横穴墓の埋葬様式と群構成」 『史料』第19号 新進考古学同人会
- 池上 信 1993 「東北横穴墓の一種相」 『多知波奈考古』創刊号 横考古学会
- 池上 信 1994 「東国横穴墓の型式と交流」 『日本古代史癡考』 高岩正人先生古稀祝賀論文集刊行会
- 上田 露 1993 「横穴墓」 『神奈川県の考古学の問題点とその展望』 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 大野 実 1989 『脇方横穴群』 水見市教育委員会
- 岡崎 卵一 1967 「富山市安養寺番神山の横穴」 『大境』第3号 富山考古学会
- 岡崎 卵一 1968 「富山市安養寺横穴第7号墓の調査」 『大境』第4号 富山考古学会
- 小畠幸男他 1996 『市街地横穴墓群発掘調査報告』 右津郡市考古資料刊行会
- 駒見和夫他 1988 「越の横穴墓とその背景」『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 桜村友延他 1988 「小中田横穴墓群」福島県いわき市
- 京谷 準一 1966 『国古小史』 国古小史刊行委員会
- 酒井軍洋他 1985 『富山県水見市古田堀田豪族中世豪族調査報告書』 水見市教育委員会
- 坂井誠一他 1974 『角川日本地名大辞典16・富山県』 角川書店
- 坂詮秀一他 1985 『武藏・船ヶ谷横穴墓群』 立正大学文学部考古学研究室
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1985 「年代決定論(二) -弥生時代以降-」 『岩波講座日本考古学1-研究の方法』 岩波書店
- 鎌木敏弘他 1989 「赤羽台遺跡-赤羽台横穴墓群-」 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 高瀬重雄他 1957 『高岡市江道横穴古墳調査報告書』 高岡市史料編纂委員会
- 田中 良之 1995 「古墳時代親族構造の研究-人骨が語る古代社会-』 柏書房
- 田辺 昭三 1966 『陶邑古窯址群』 平安学園考古学クラブ
- 田辺 昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 地崎 浩一 1969 「黎明期の福岡」 『福岡町史』 福岡町役場
- 中原 斎他 1987 『大塙横穴墓群』 鳥取県教育文化財団
- 新納 泉 1987 「戊辰年銘大刀と装饰付大刀の編年」 『考古学研究』第34卷第3号 考古学研究会
- 西井 龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」 『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会
- 菱田 哲郎 1986 「畿内の初期瓦平座と工人の動向」 『史林』第69卷第3号 史学研究会
- 藤田富士夫 1976 「富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書」 富山市教育委員会
- 藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡13・富山』 保育社
- 藤田富士夫 1987 「古墳時代」 『富山市史通史〈上巻〉』 富山市
- 藤田富士夫 1997 「金屋郷の穴横穴墓群」 『福中町史資料編』 福中町
- 古岡 英明 1972 「古墳時代」 『富山県史-考古編』 富山県
- 古岡 英明 1972 「城ヶ平・馬場横穴墓群」 『富山県史-考古編』 富山県
- 古岡英明他 1991 『たかおか-歴史との出会い-』 高岡市

- 逸見 謙他 1983 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第1次緊急発掘調査概報』 高岡市教育委員会
- 逸見 謙他 1984 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第1次発掘調査報告』 高岡市教育委員会
- 麻柄 幸子 1996 「古墳時代後期と横穴墓、町域の横穴」 『姫中町史通史編』 姫中町
- 麻柄 幸子 1997 「町内の横穴」 『姫中町史資料編』 姫中町
- 町田 章 1976 「環刀の系譜」 『研究論集』 奈良県立文化財研究所
- 淡 艮他 1971 「郷土のあけぼの」 『小矢部市史』 小矢部市
- 宮永 正道 1980 『越の下草』 富山県郷土史会
- 山田 邦和 1998 『須恵器生産の研究』 学牛社
- 和田 一郎 1959 『高岡市史』 上巻 青林書院新社

報告書抄録

ふりがな	えんどうよこあなばん						
書名	江道横穴墓群						
副書名	平成8年度、江道地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査						
巻次							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第3冊						
編著者名	森沢佐蔵、山口辰一						
編集機関	高岡市教育委員会						
所在地	〒933-0057 富山県高岡市広小路7番50号 TEL0766-20-1453						
発行年月日	西暦 1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
江道横穴 墓群	市町村 遺跡番号	。	。	。			
		36°	136°	1996.6.6-03			
		45'	56'	?			
		14"	47"	1996.11.30			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
江道横穴墓群	横穴墓	飛鳥時代	横穴墓20基	土師器、須恵器 直刀、馬具、耳環 切子玉、丸玉、骨繖	從来から知られて いた11基に、新たに9 基を確認した		

図 面

遺跡実測図

縮尺 1/600



平面配置図 A-図面2、B-図面4、C-図面6

縮尺 1/400

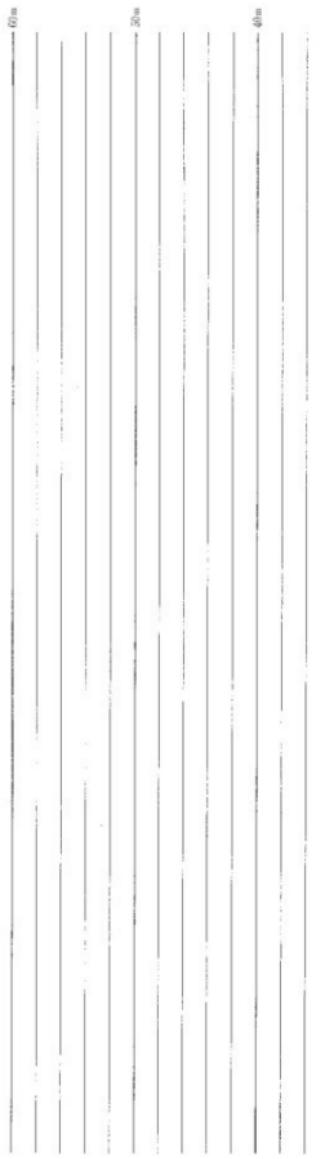
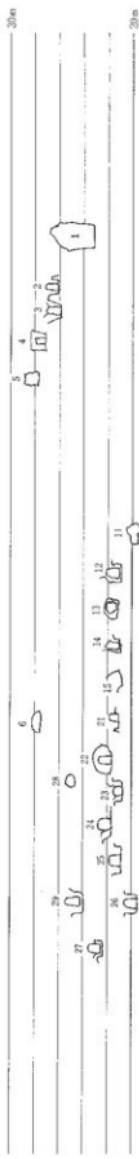
横穴墓群全体平面図



立面
遺跡実測
図

遺跡地図 川面図

横穴墓群全体正面図



縮尺 1/200

横穴墓群東側平面図

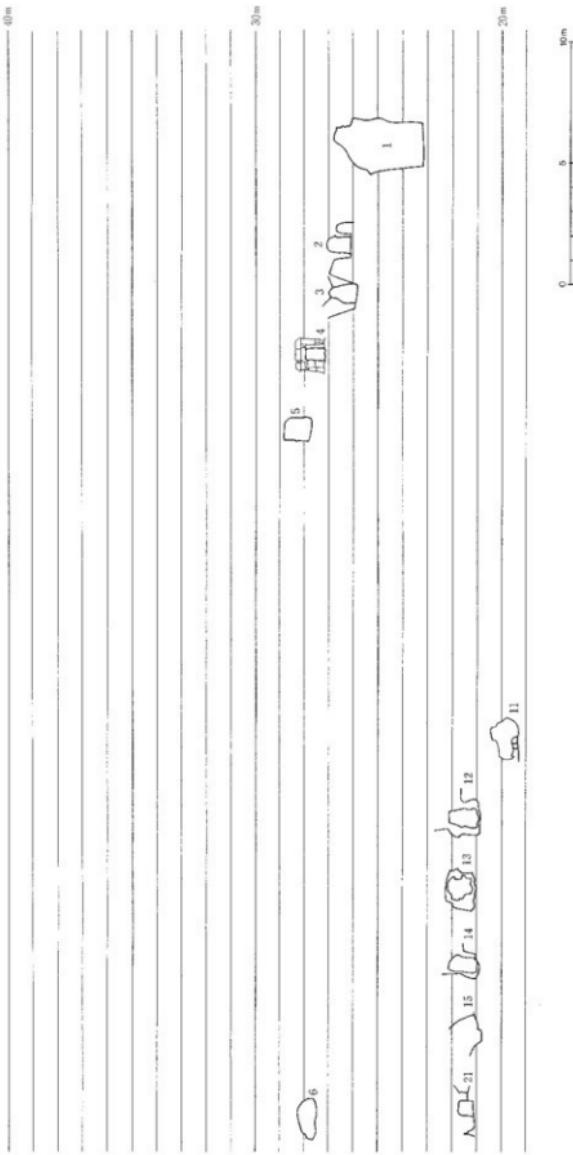


図面四
遺跡実測図

五 道路纵断面图

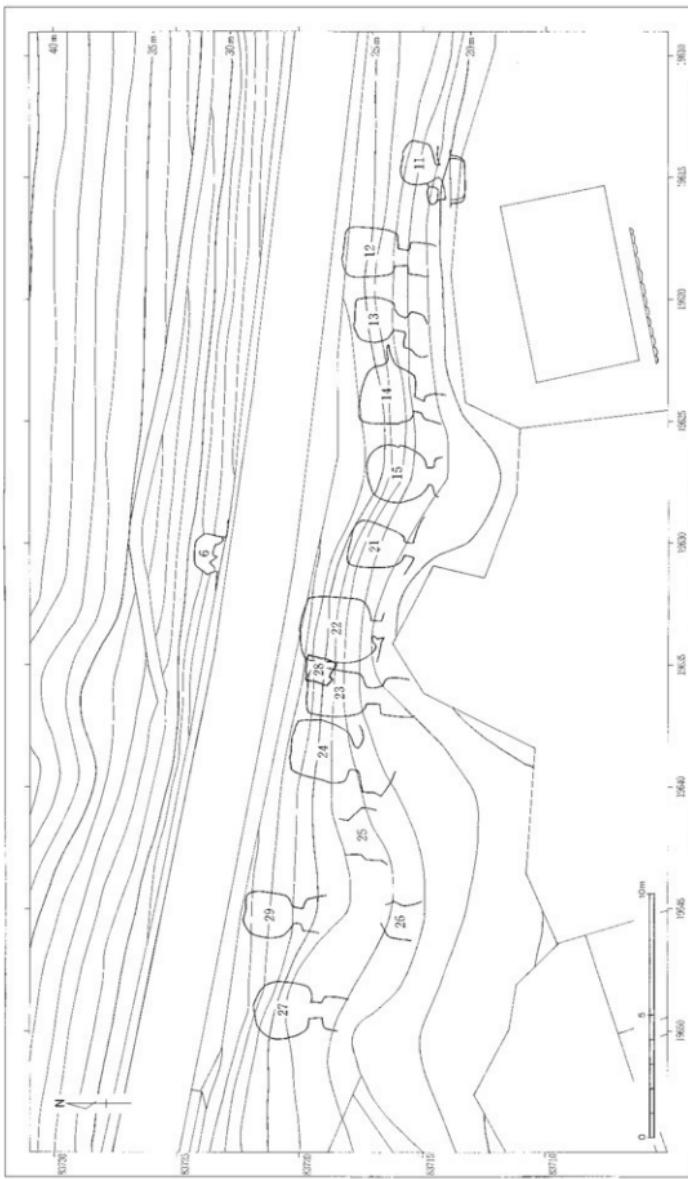
比例尺1:200

横穴墓群东侧平面图



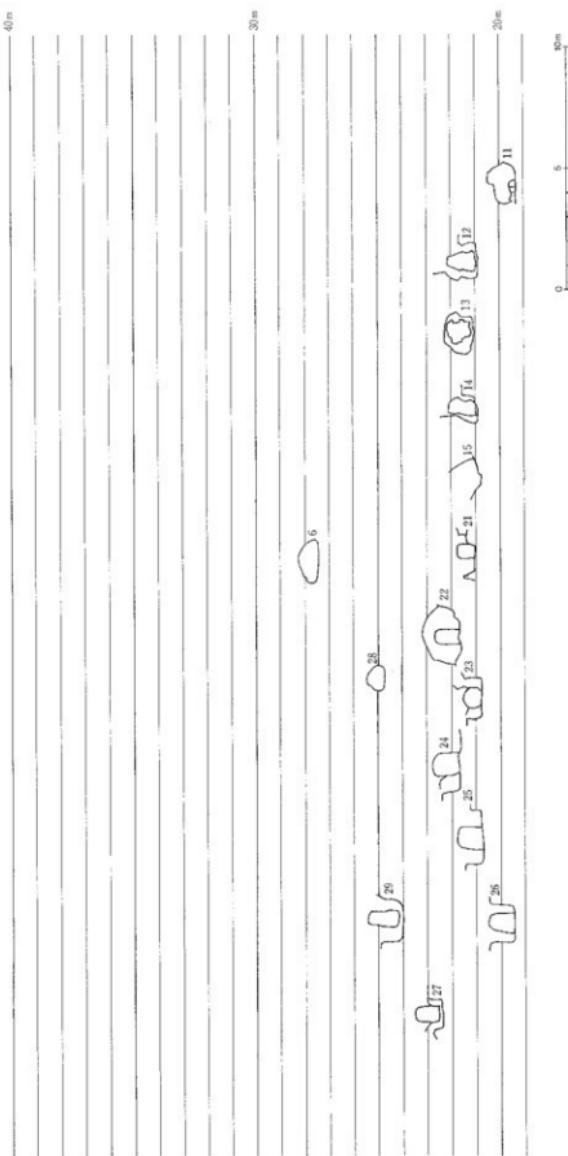
縮尺 1/200

横穴墓群平面図



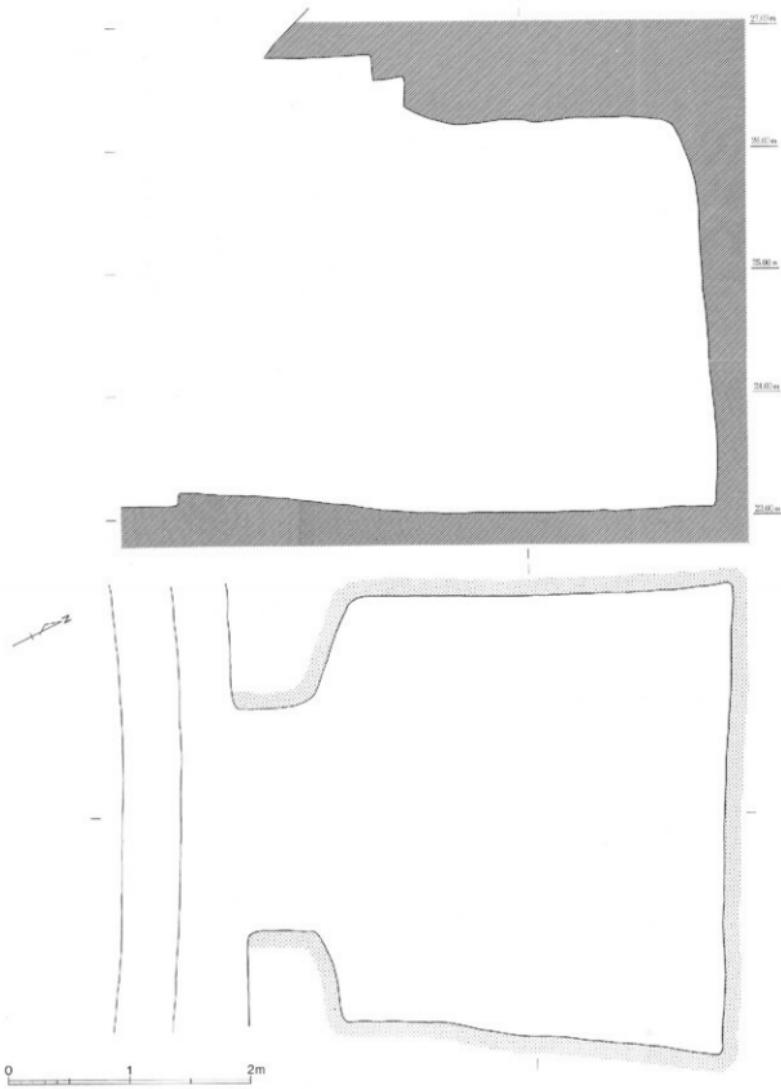
図面六
遺跡実測図

図面七 遺跡実測図



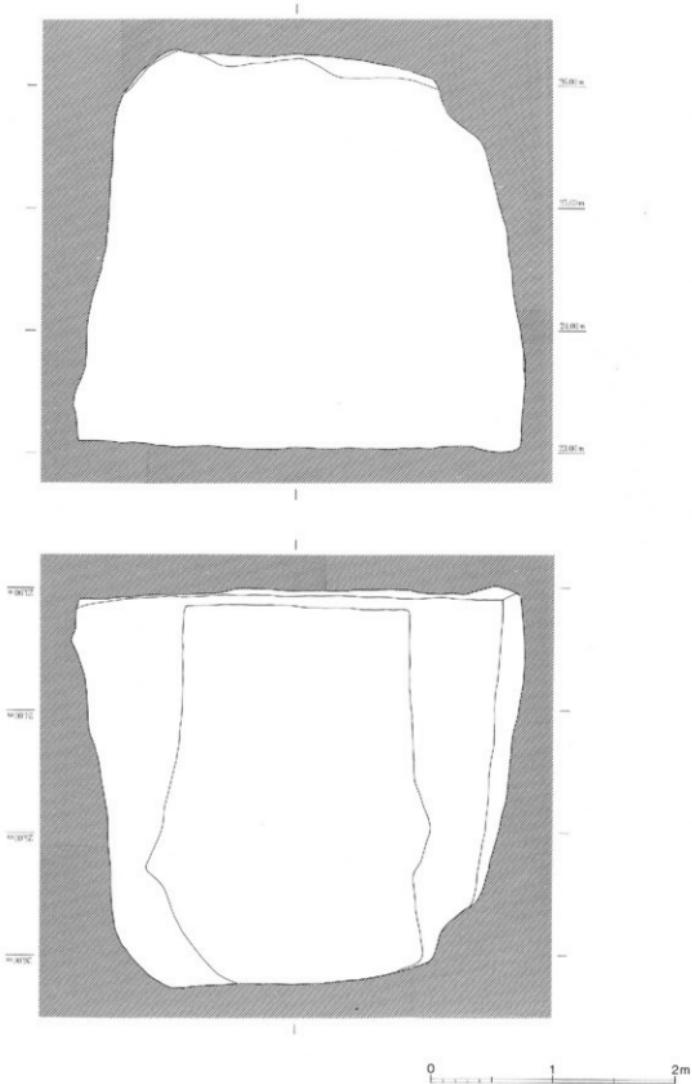
横穴墓群西側正面図

圖八
遺構実測図



第1号蒸全体図[1]

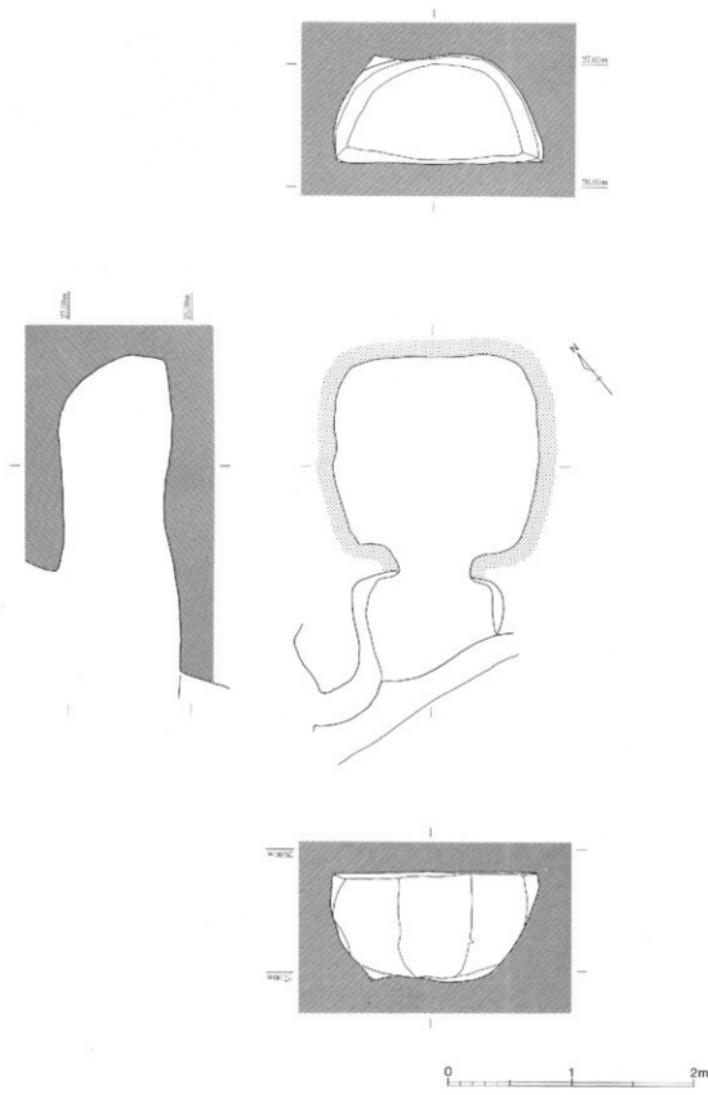
縮尺1/40



第1号墓全体図[2]

縮尺 1/40

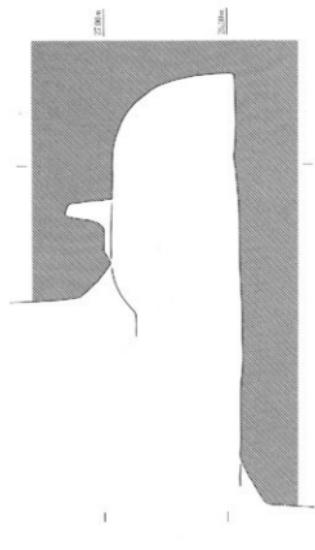
圖面一〇 遺構実測図



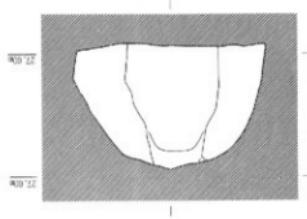
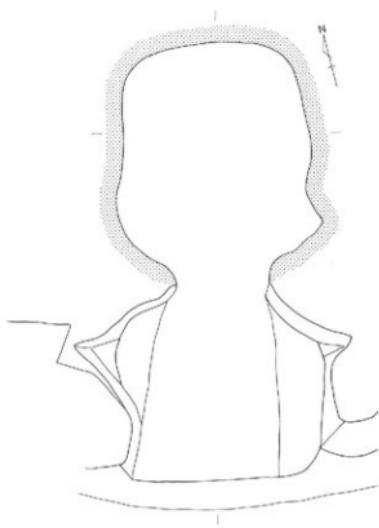
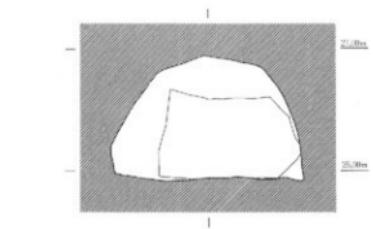
第2号墓全体図

縮尺 1/40

図面一 一 遺構実測図



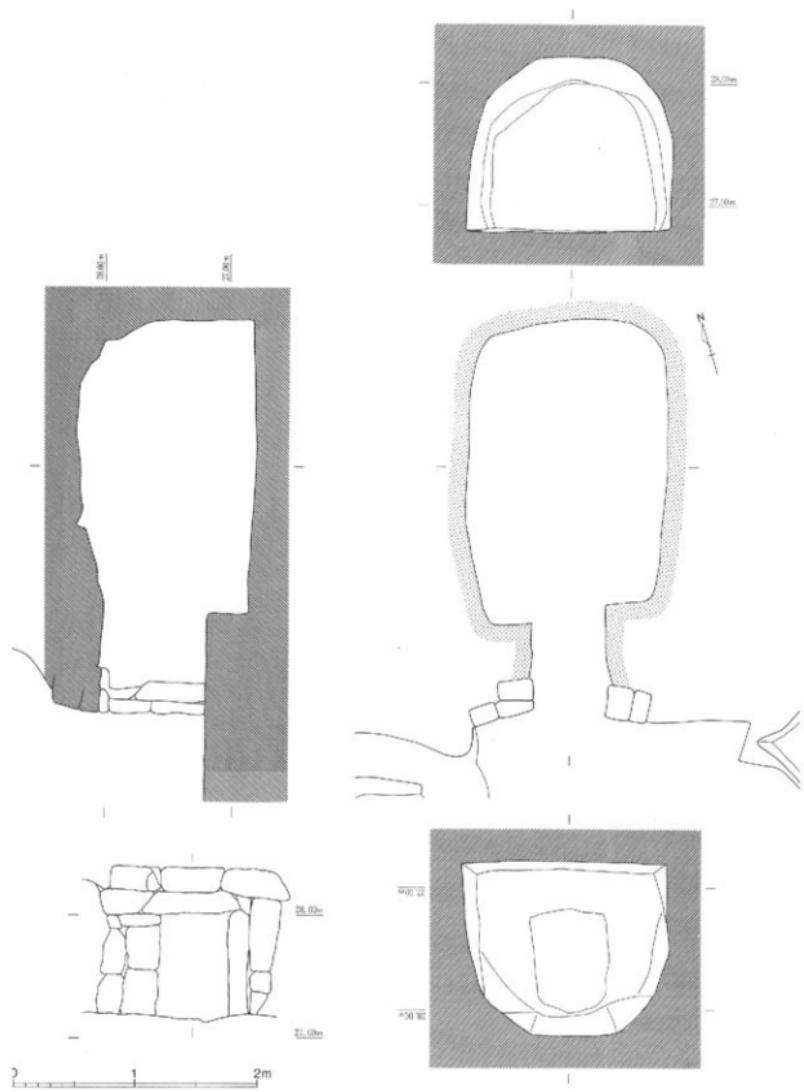
0 1 2m



第3号窯全体図

縮尺 1/40

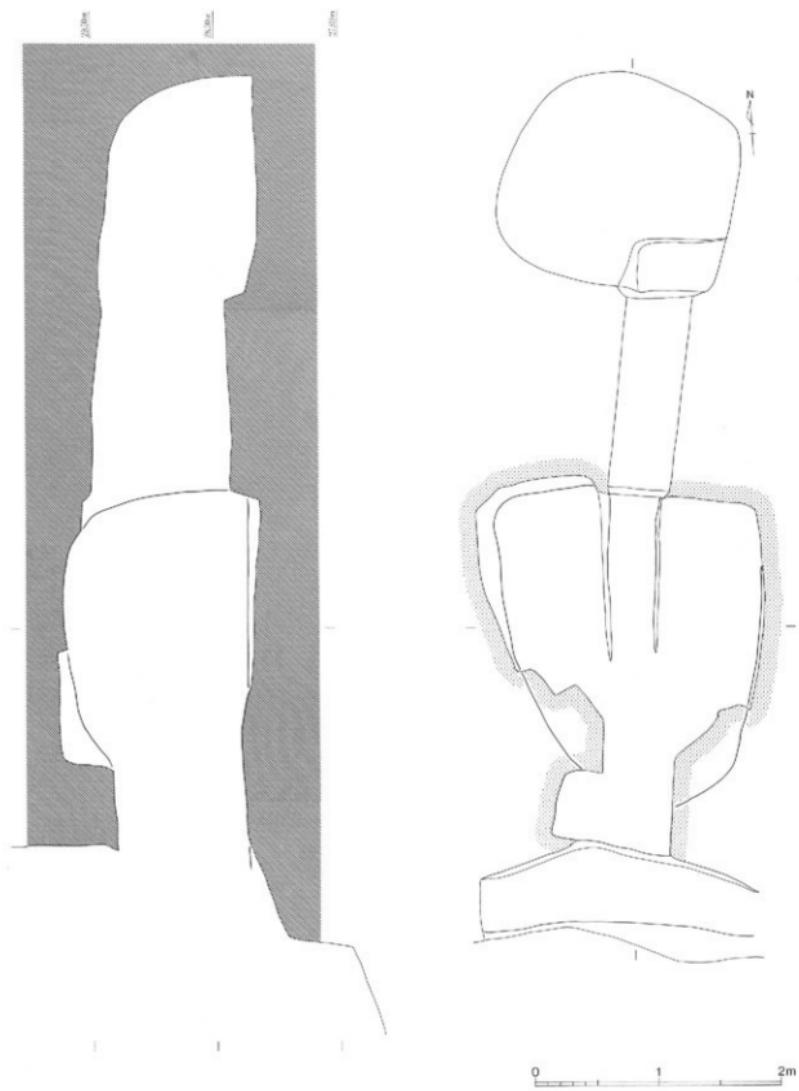
図面一二
遺構実測図



第4号墓全体図

縮尺1/40

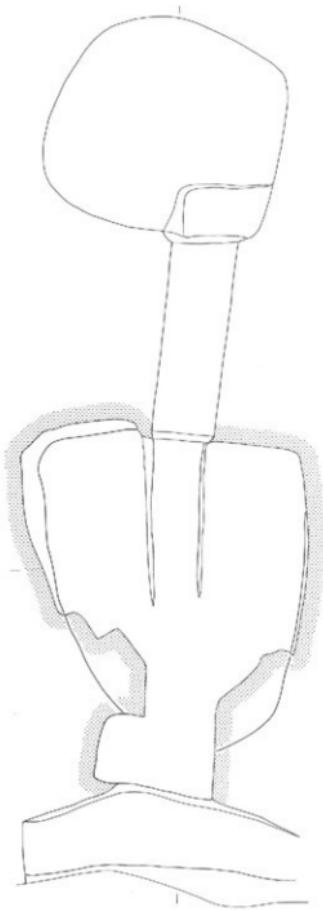
図面一三 遺構実測図



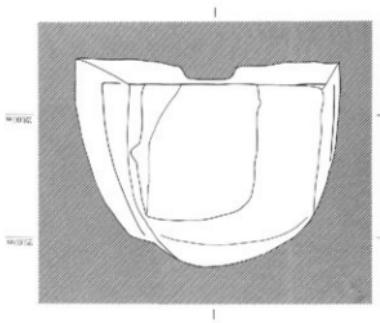
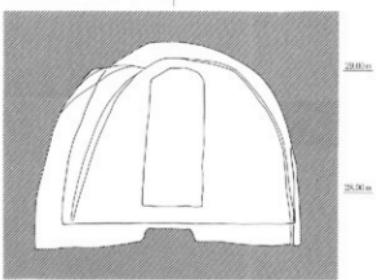
第5号塔全体図[1]

縮尺1/40

図面一四 遺構実測図



N

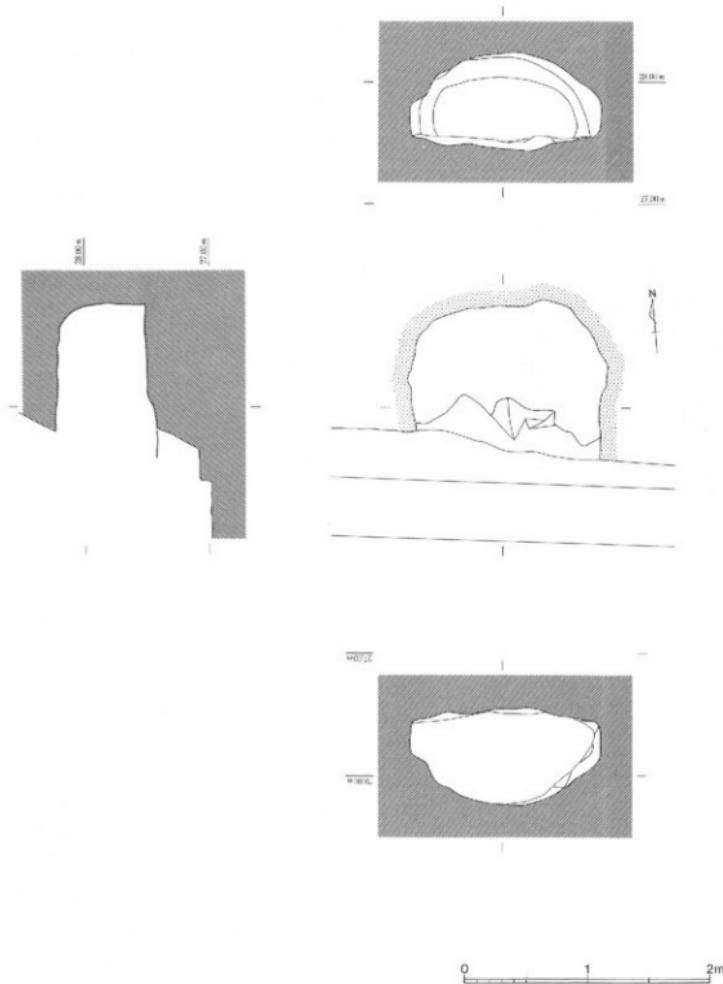


0 1 2m

第5号墓全体図[2]

縮尺1/40

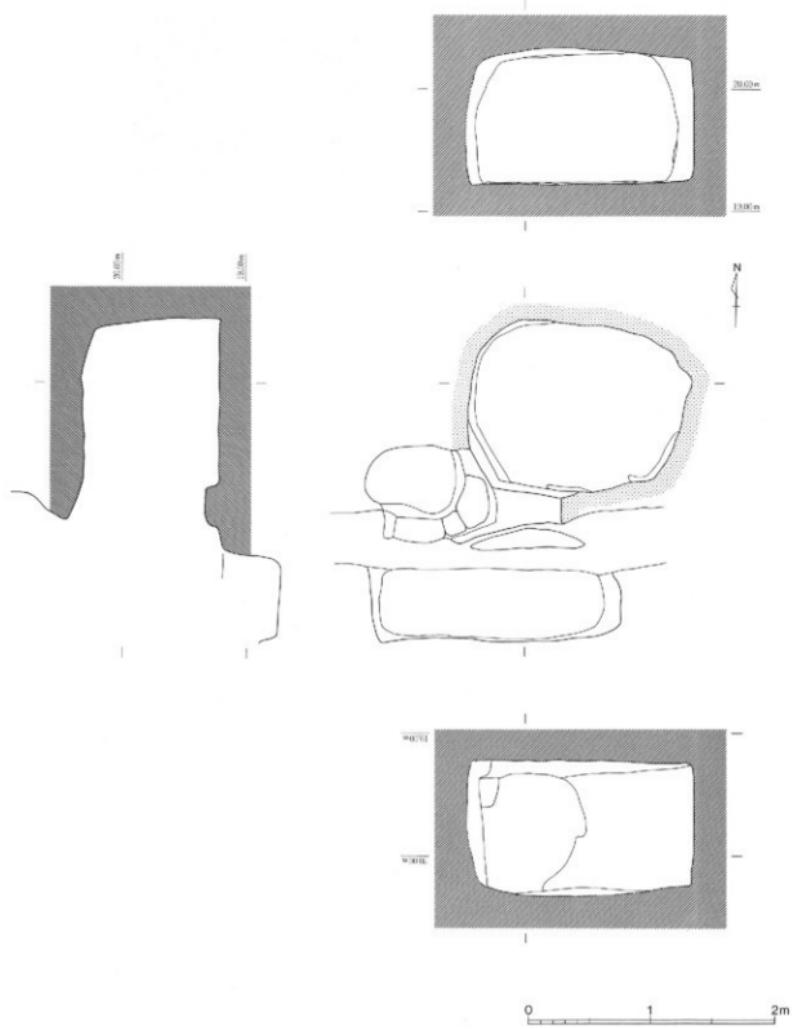
図面一五 遺構実測図



第6号塗全体図

縮尺1/40

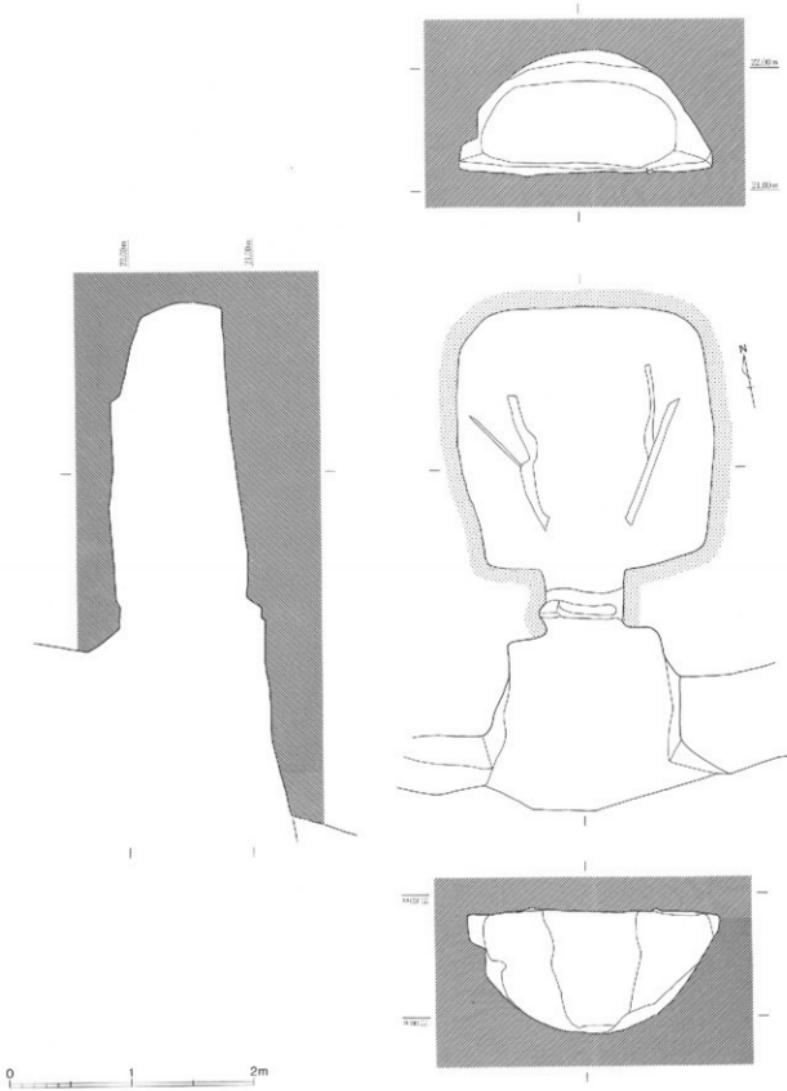
圖面一六
遺構実測図



第11号墓全体図

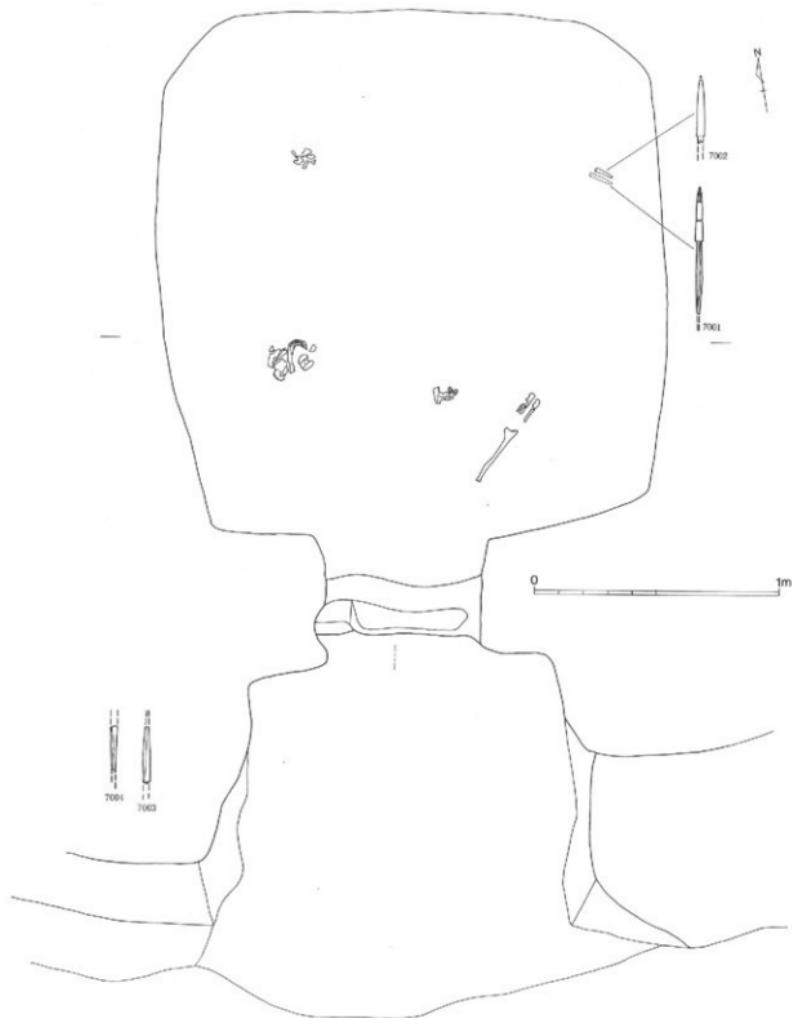
縮尺 1/40

図面一七 道筋実測図



第12号墓全休図

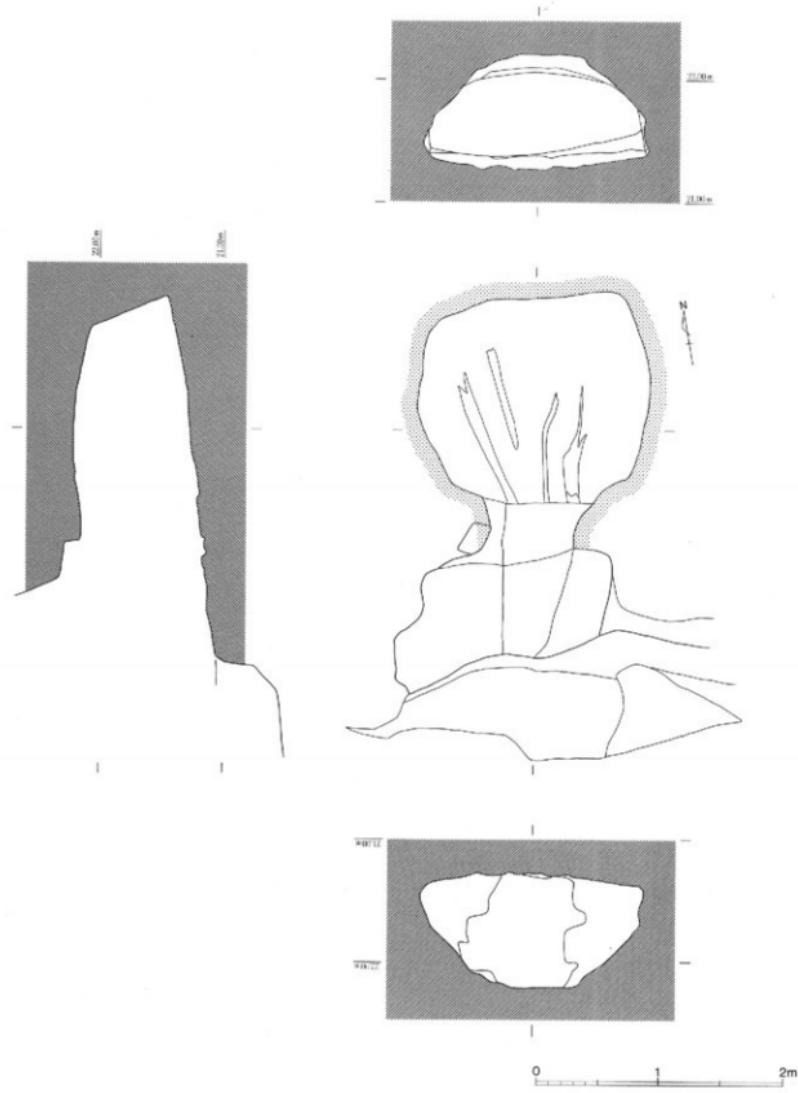
縮尺 1/40



第12号墓遺物出土状態図

縮尺 1/20

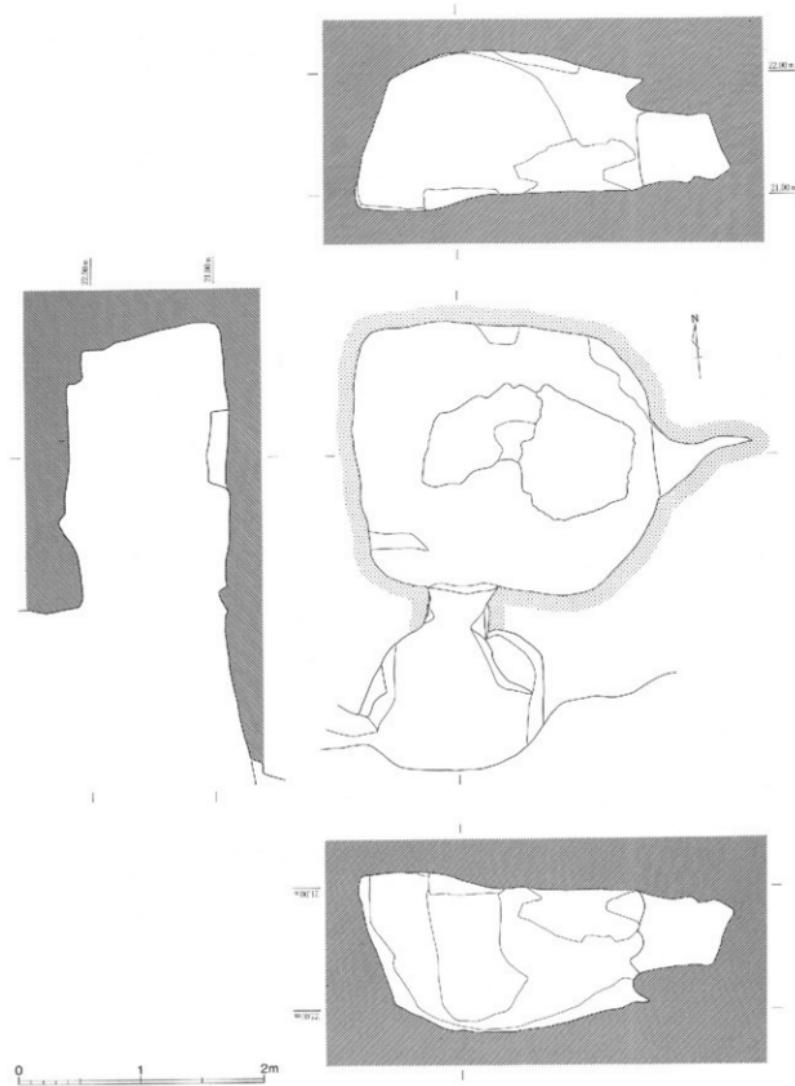
図面一九
遺構実測図



第13号墓全体図

縮尺 1/40

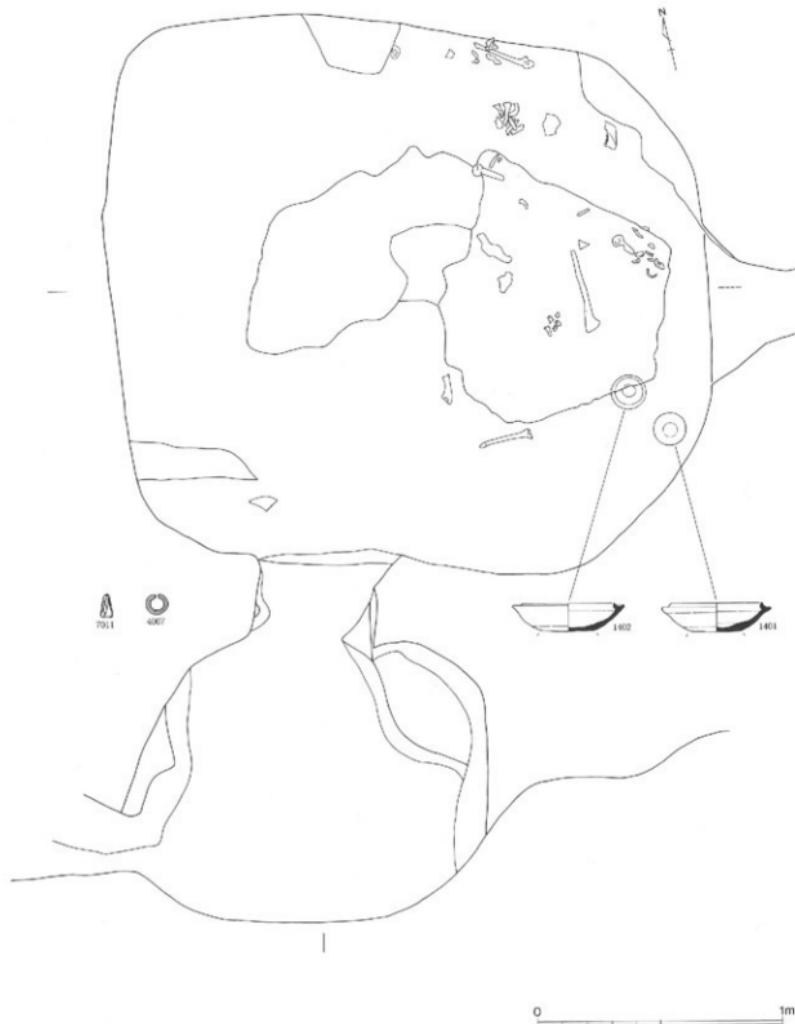
図面二〇 遺構実測図



第14号窓全体図

縮尺 1/40

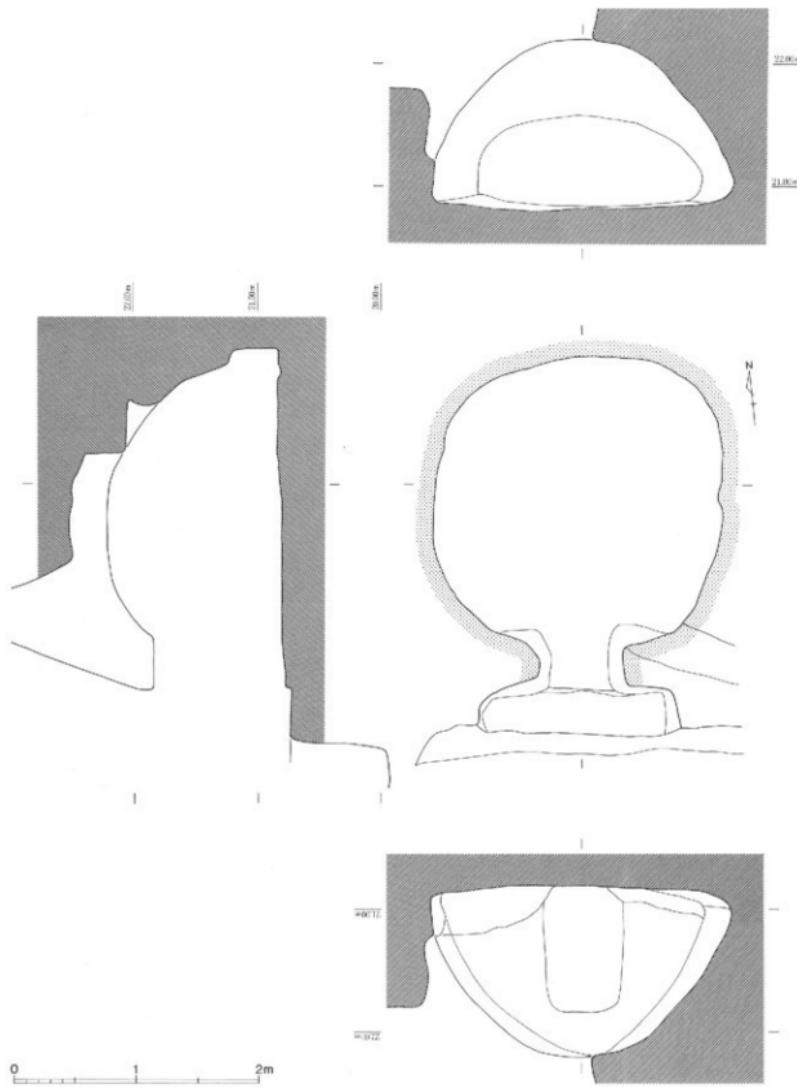
図面二
遺構実測図



第14号遺構物出土状態図

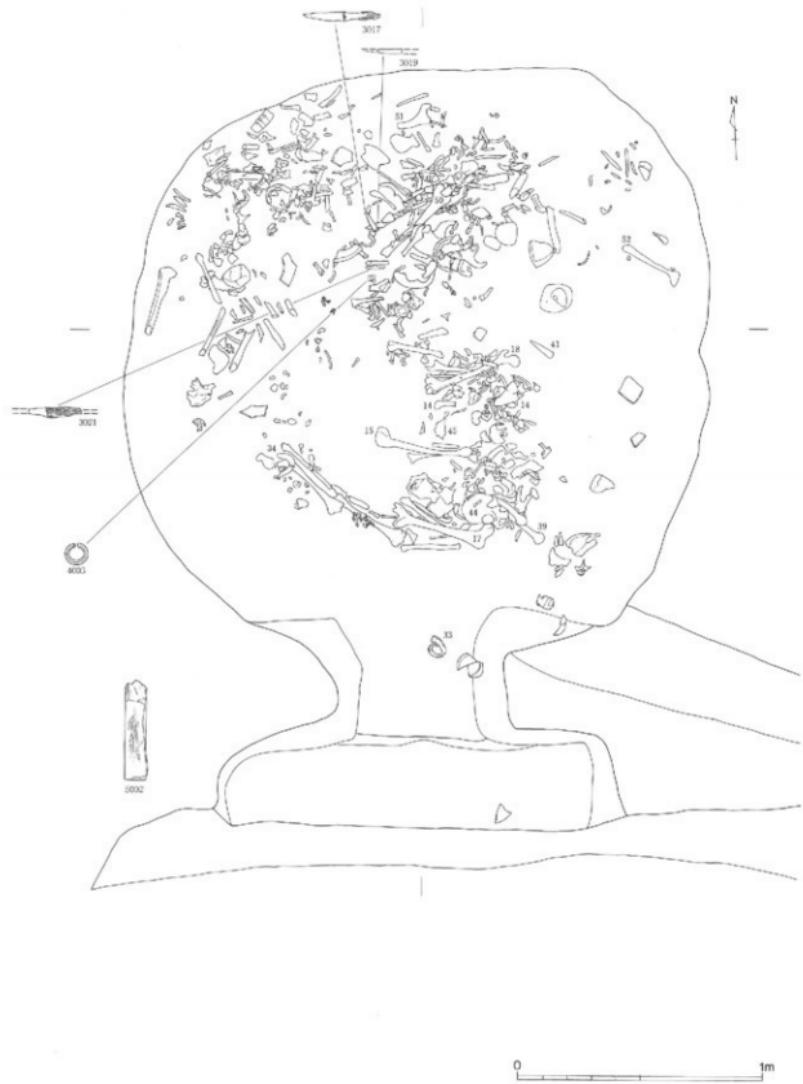
縮尺 1/20

図面二
遺構実測図



第15号墓全体図

縮尺 1/40



第15号墓遺物出土状態図[1]

縮尺 1/20

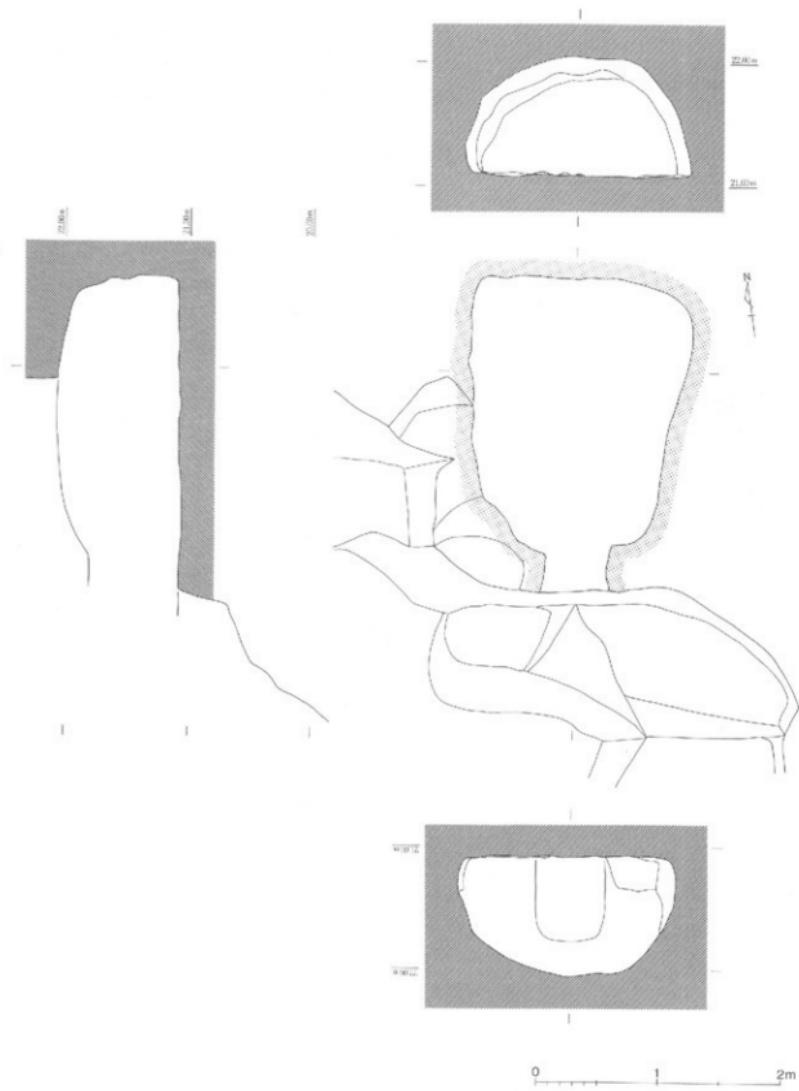
圖面一四
遺構実測図



第15号遺構出土物状況図[2]

縮尺 1/20

図面二五 遺構実測図

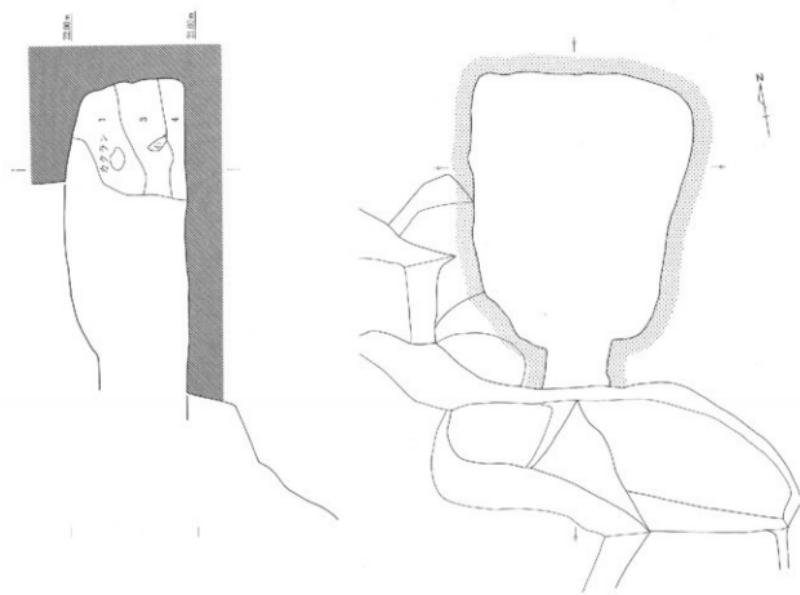
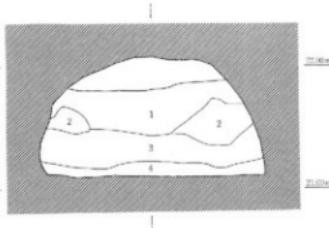


第21号墓全体図

縮尺 1/40

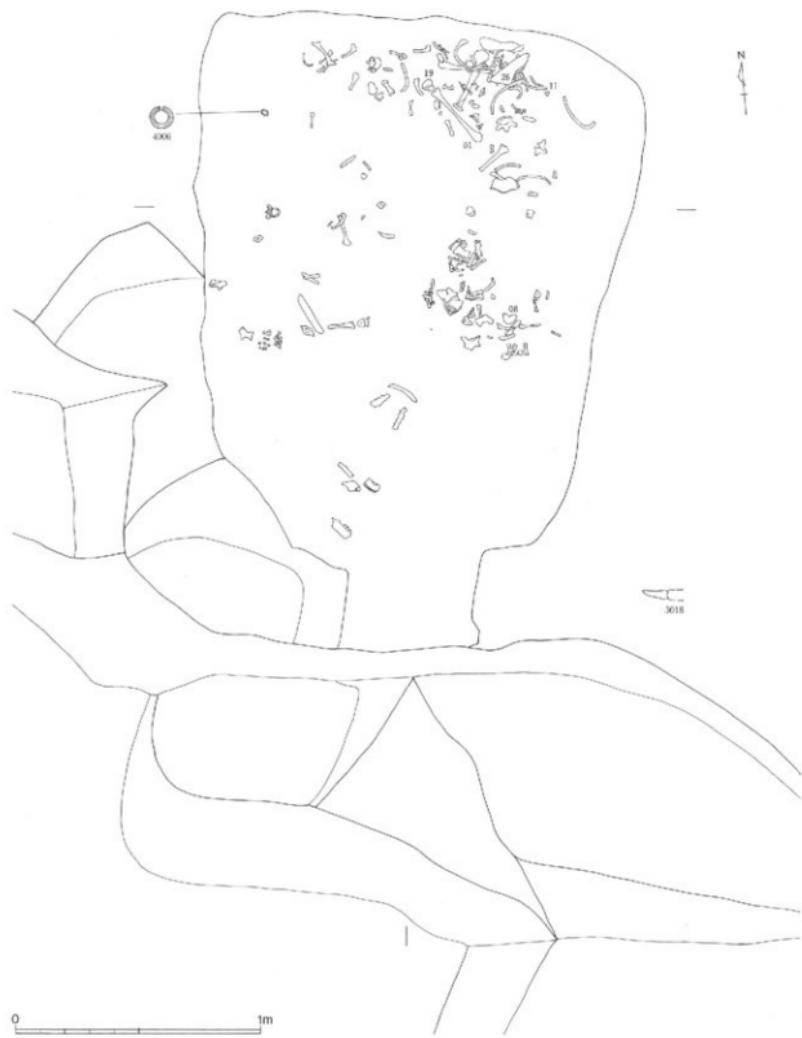
図面二六
遺構実測図

1. 褐色砂質土(岩盤ブロック混じり)
2. 岩盤ブロック
3. 暗褐色砂質土
4. 褐色砂質土



第21号墓土壙断面図

縮尺 1/40

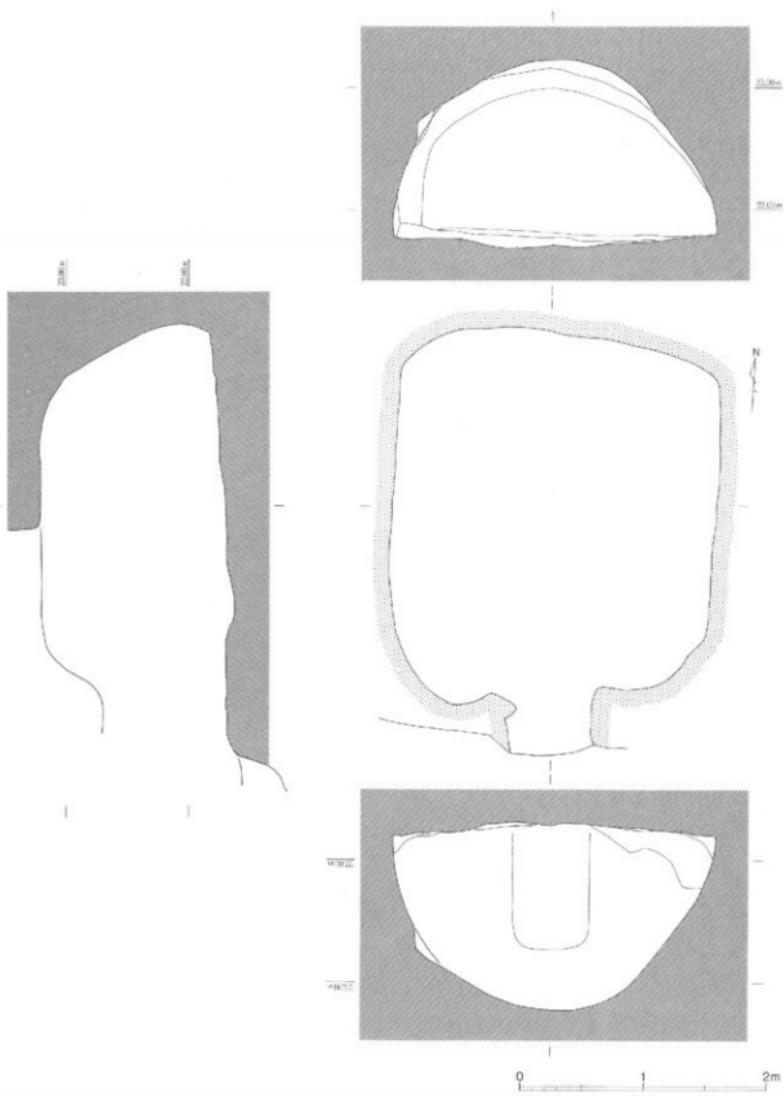


第21号墓遺物出土狀態圖

縮尺 1 / 20

図面二一八

遺構実測図

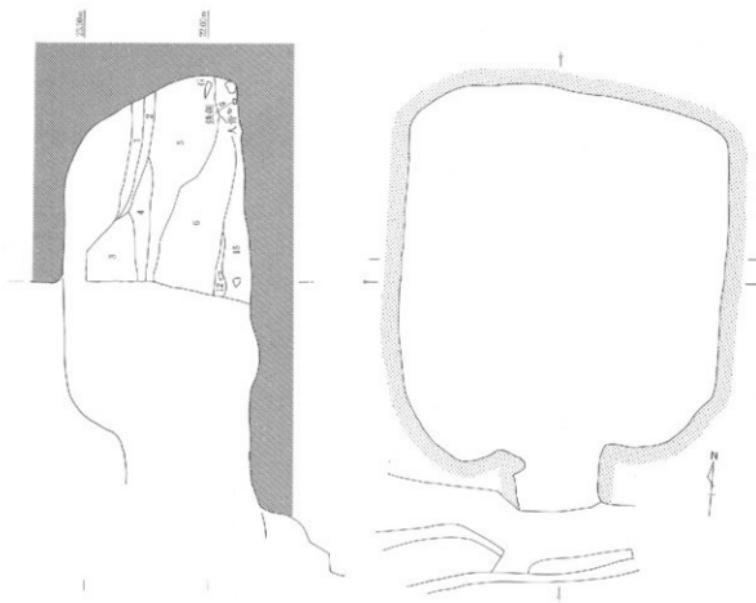
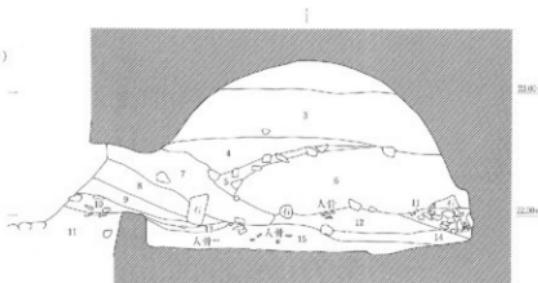


第22号墓全体図

縮尺 1/40

図面二九 遺構実測図

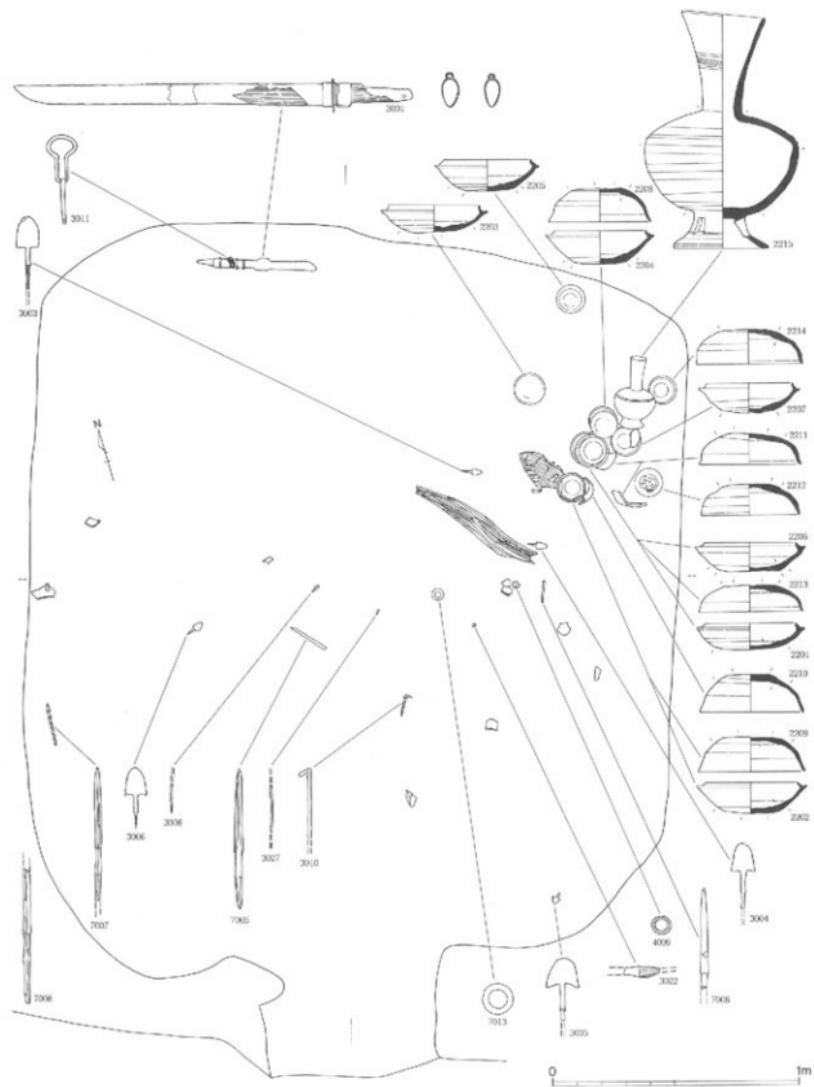
1. 灰褐色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土（岩盤粒混じり）
3. 暗灰褐色砂質土
4. 浅褐色砂質土
5. 赤褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土（赤黃褐色土粒・岩盤粒少量混じり）
7. 黄褐色砂質土
8. 灰色砂質土
9. 暗褐色砂質土（岩盤粒混じり）
10. 岩盤粒
11. 岩盤ブロック
12. 赤黄褐色砂質土
13. 暗褐色砂質土
14. 黑褐色砂質土
15. 棕褐色砂質土（岩盤粒混じり）



第22号墓土層断面図

縮尺 1/40

圖面二〇 遺構実測図



第22号墓遺物出土状態図[1]

縮尺1/20

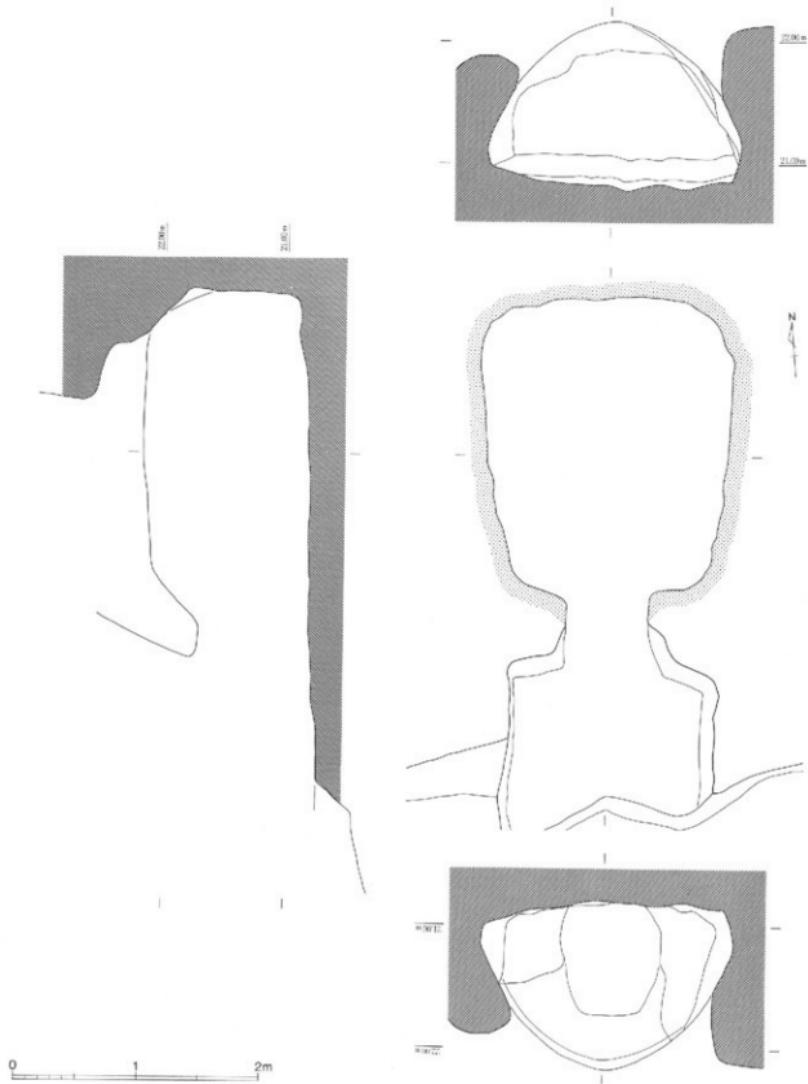
図面三一 遺構実測図



第22号墓遺物出土状態図[2]

縮尺1/20

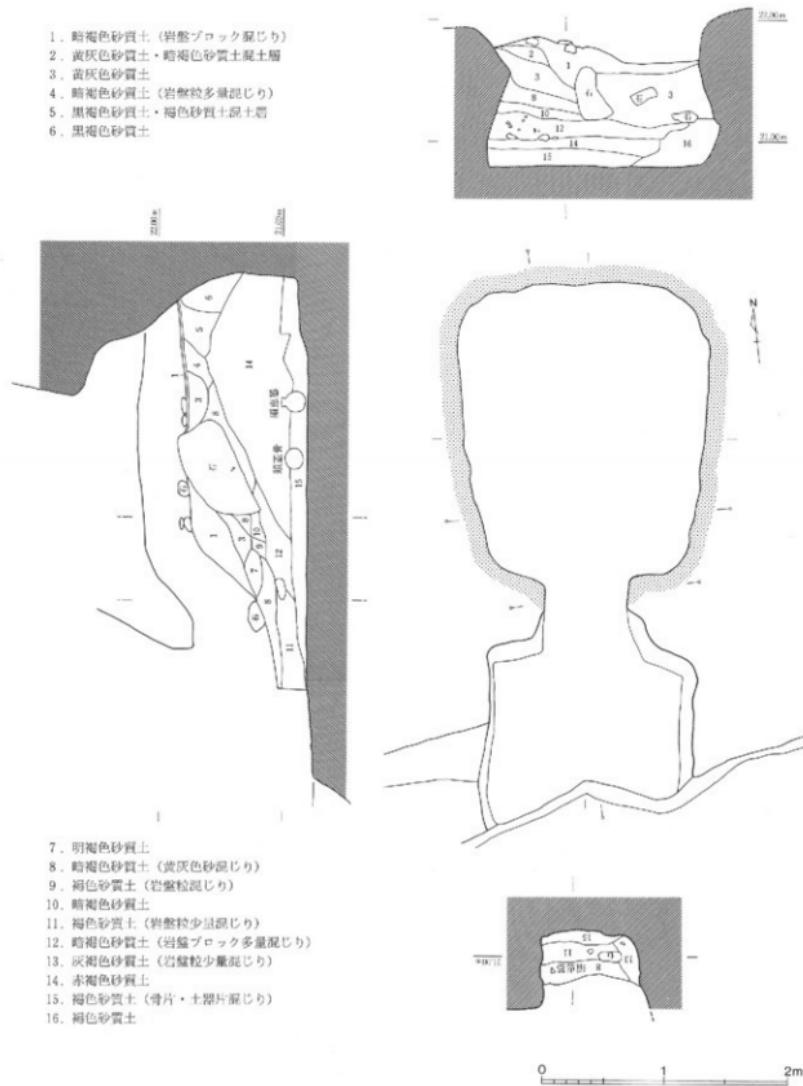
図面三二
遺構実測図



第23号墓全体図

縮尺 1/40

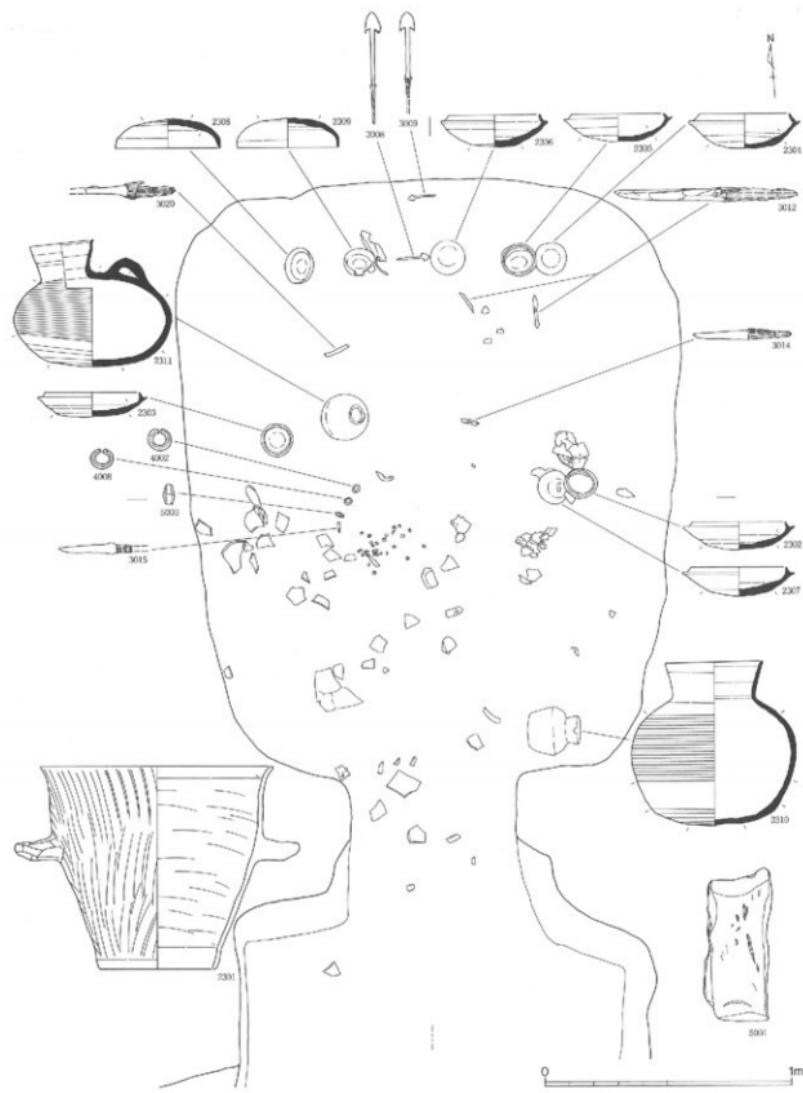
図面三三 造構実測図



第23号墓土層断面図

縮尺 1/40

圖面三四
遺構実測図



第23号墓遺物出土状態図[1]

縮尺 1/20

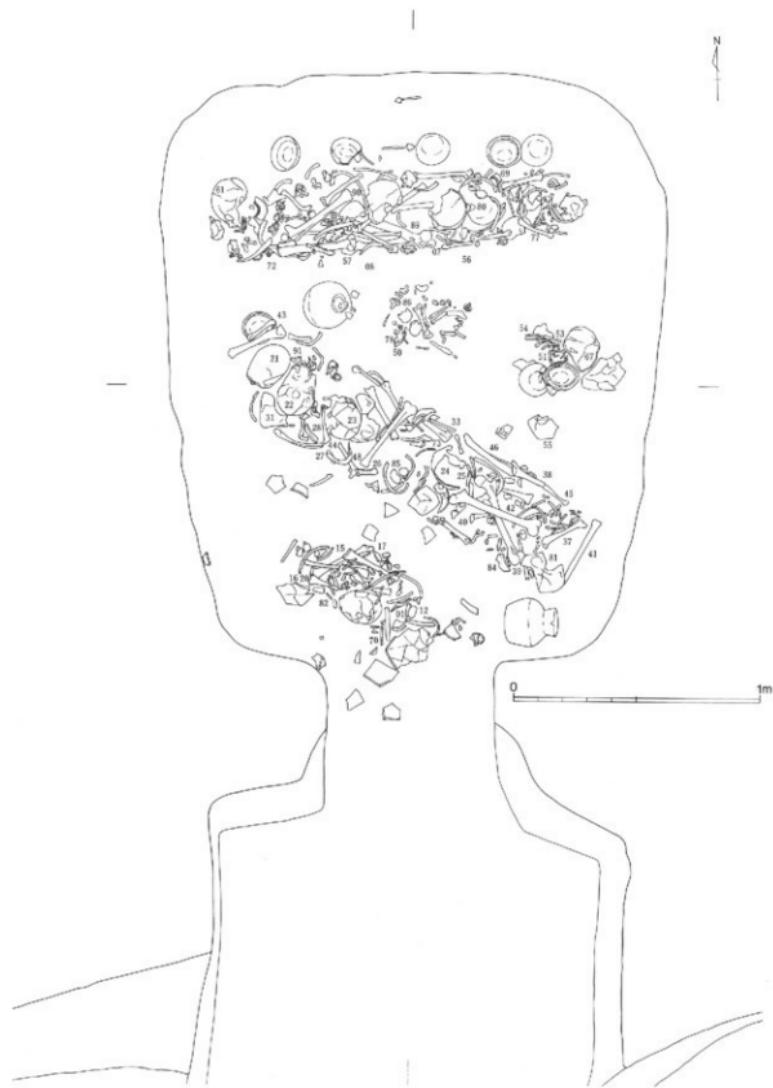
図面三五
遺構実測図



第23号墓遺物出土状態図[2]

縮尺 1/20

図面三六
遺構実測図



第23号墓遺物出土状態図[3]

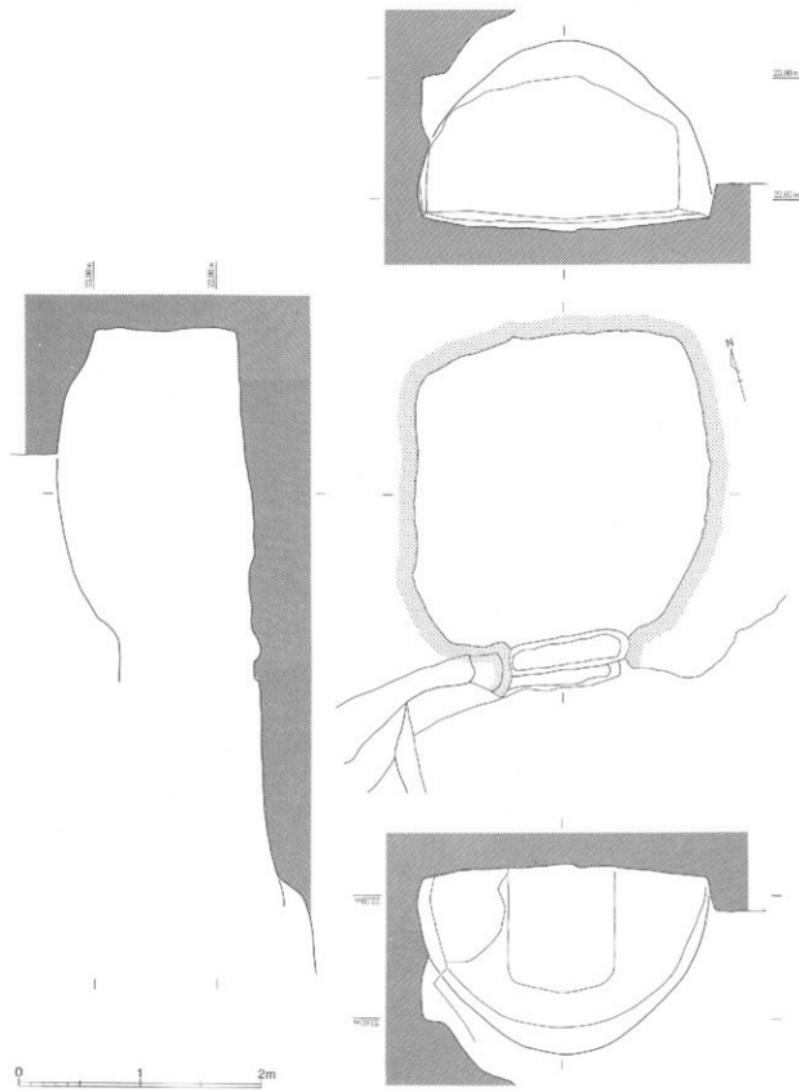
縮尺 1/25



第23号墓遺物出土状態図[4]

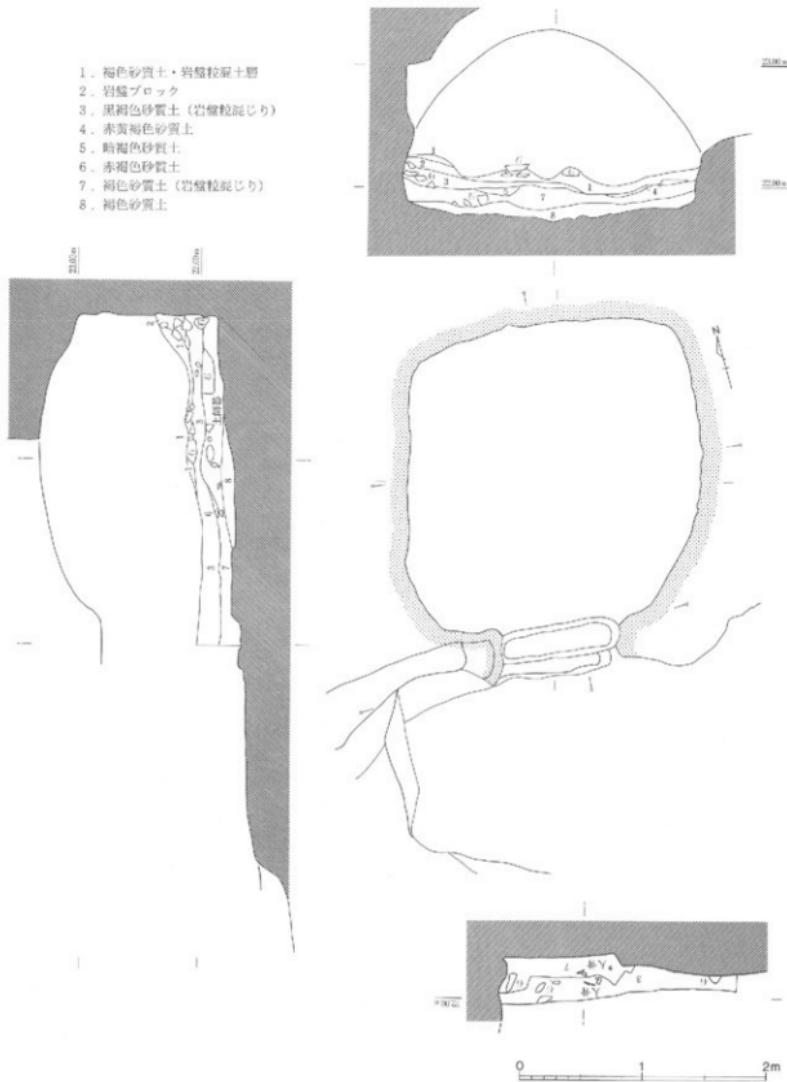
縮尺1/20

図面三八
遺構実測図



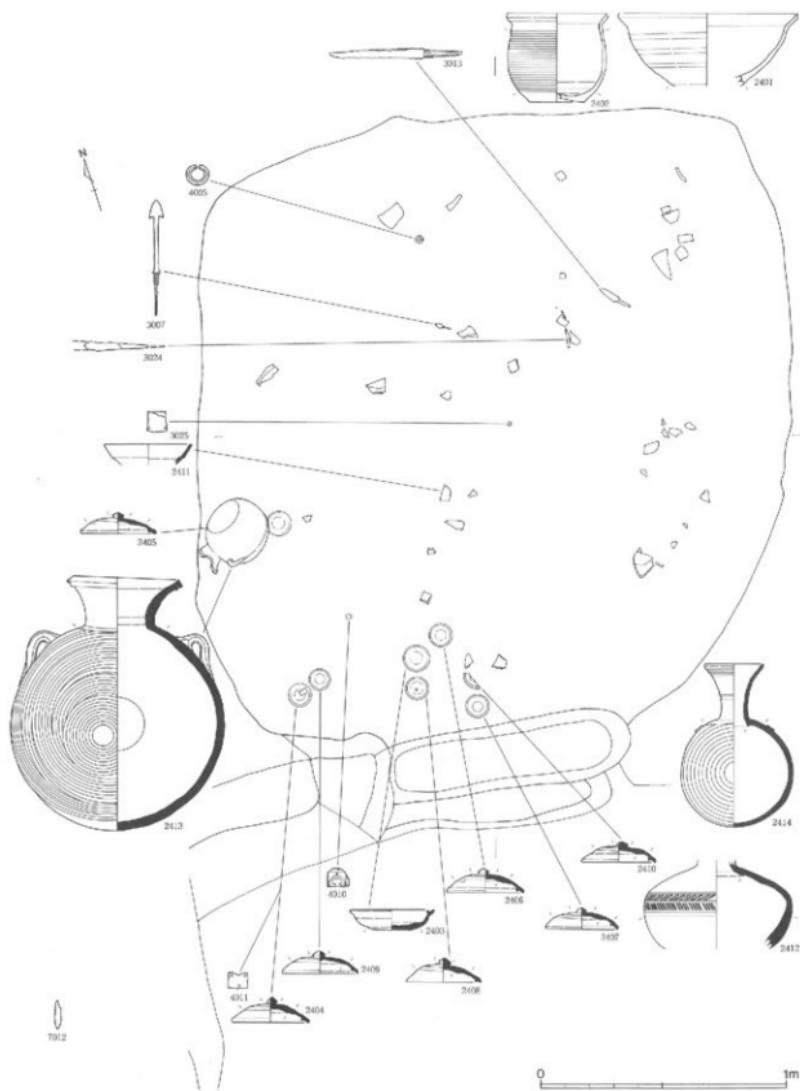
第24号墓全体図

縮尺 1 / 40



第24号墓土層断面図

縮尺 1/40



第24墓遺物出土狀態圖[1]

縮尺 1 / 20

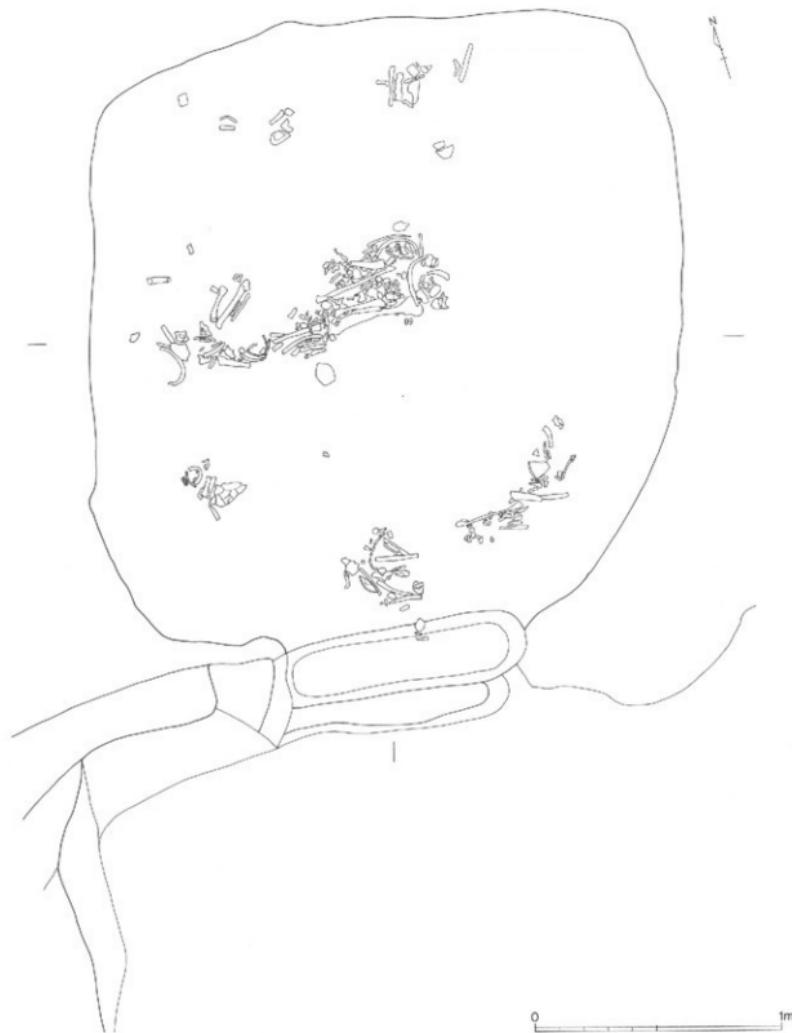
図面四　遺構実測図



第24号墓遺物出土状態図[2]

縮尺1/20

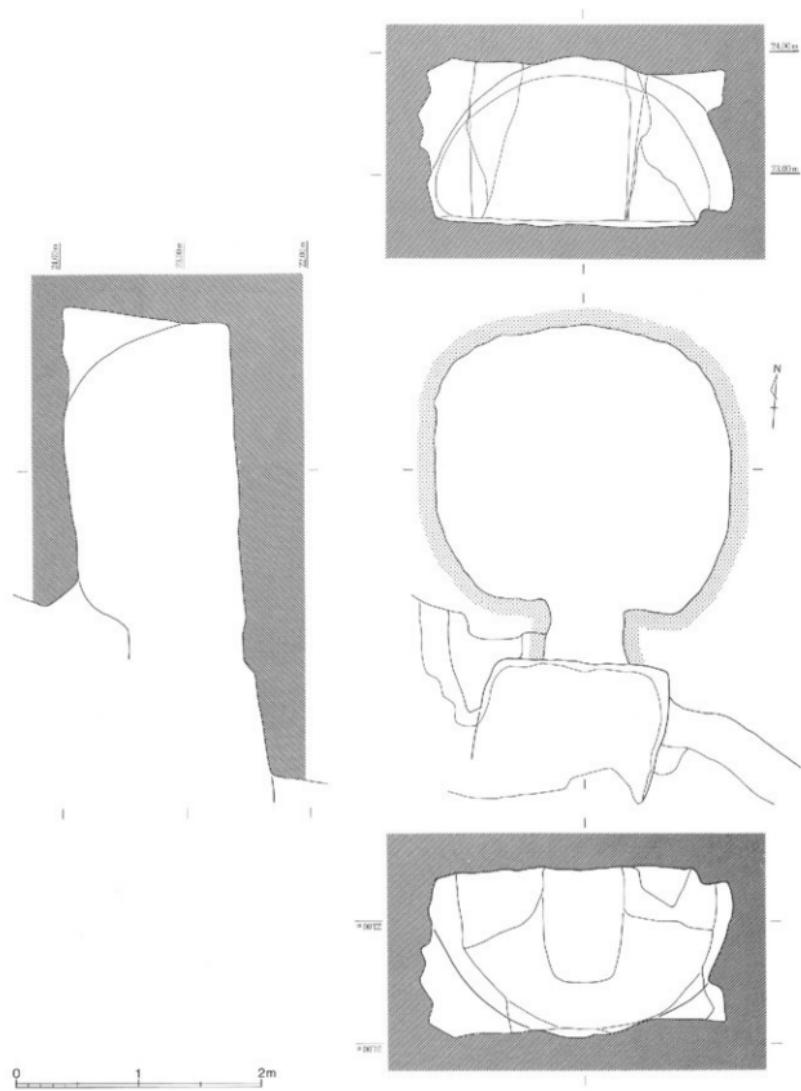
国面四二
遺構実測図



第24号墓遺物出土状態図[3]

縮尺 1/20

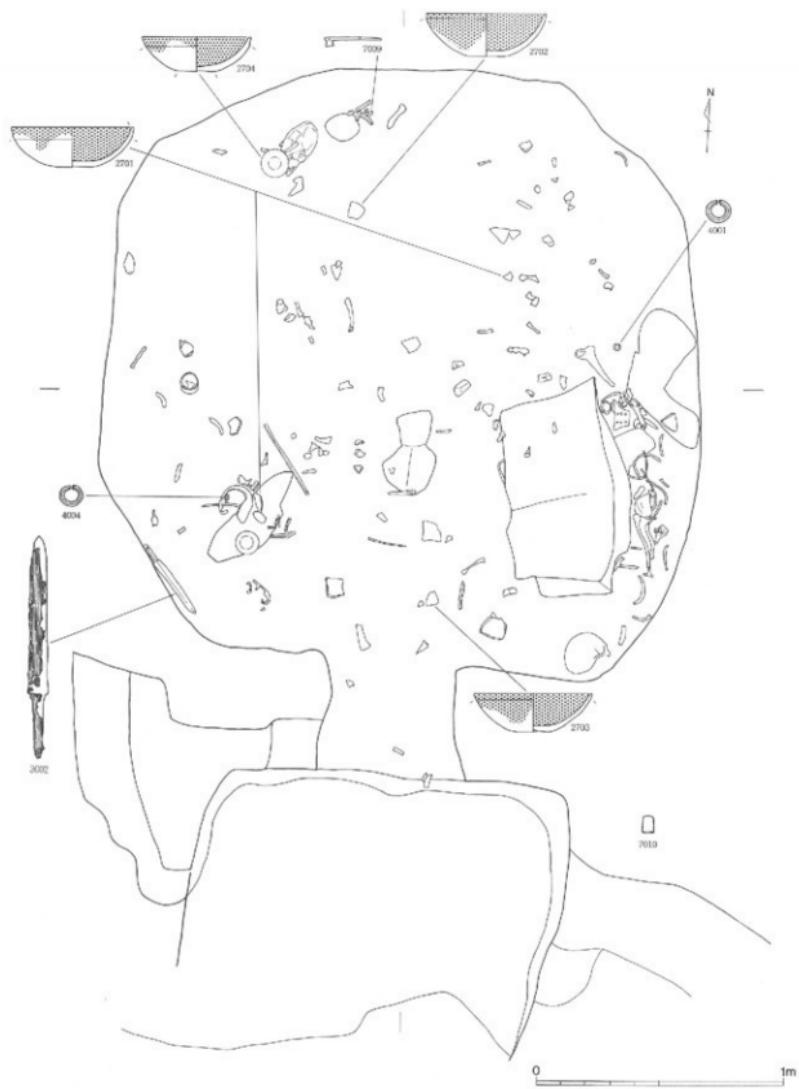
図面四三 遺構実測図



第27号墓全体図

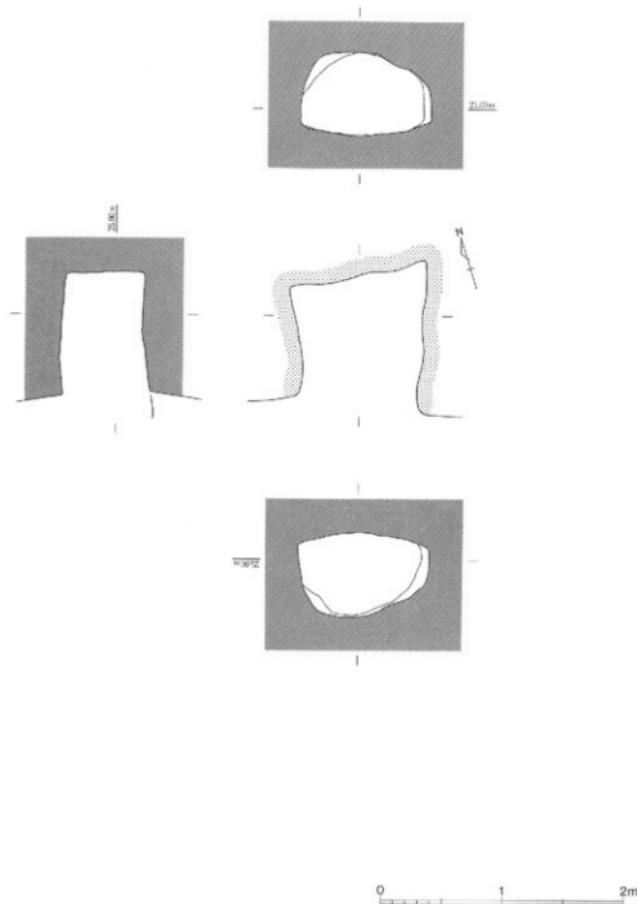
縮尺 1/40

図面四四
遺構実測図



第27号遺物出土位置図

縮尺 1/20

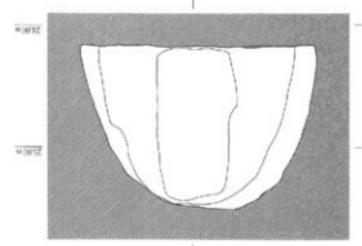
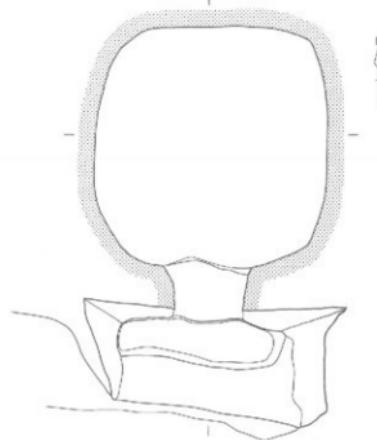
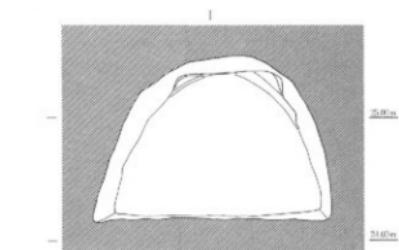
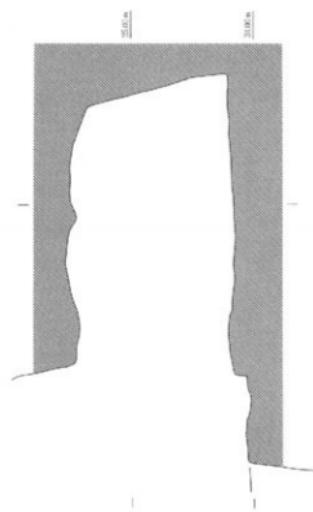


第28号施全体図

縮尺1/40

図面四六

遺構実測図

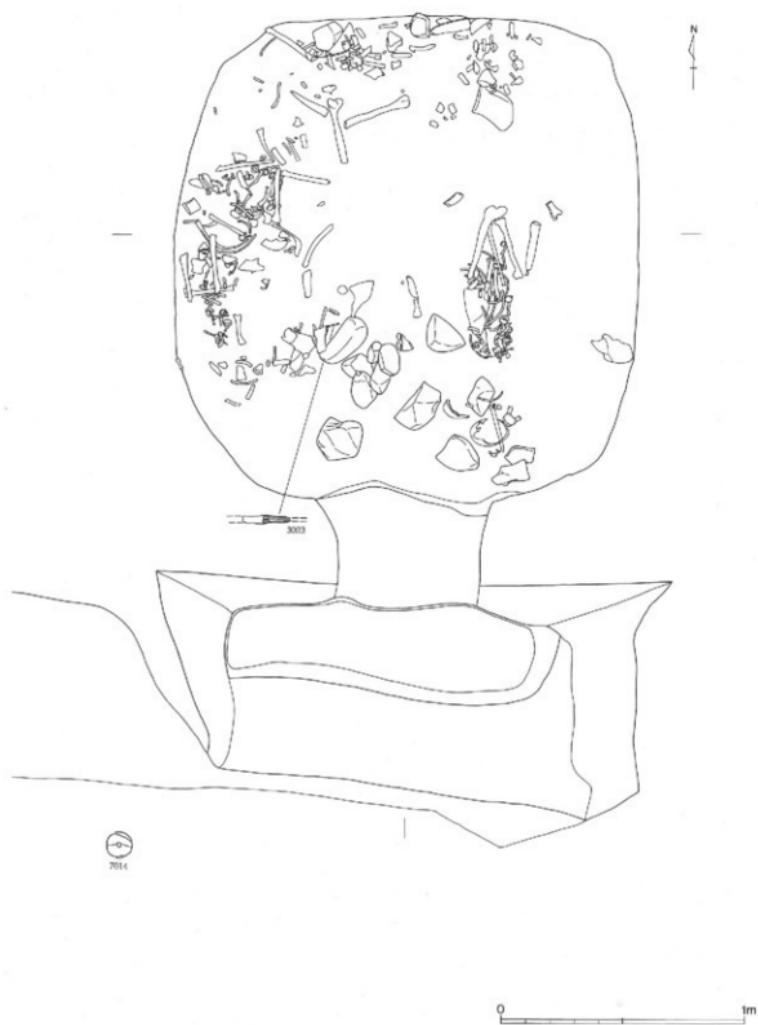


0 1 2m

第29号墓全体図

縮尺 1/40

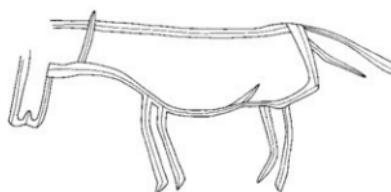
図面四七 遺構実測図



第29号墓遺物出土状態図

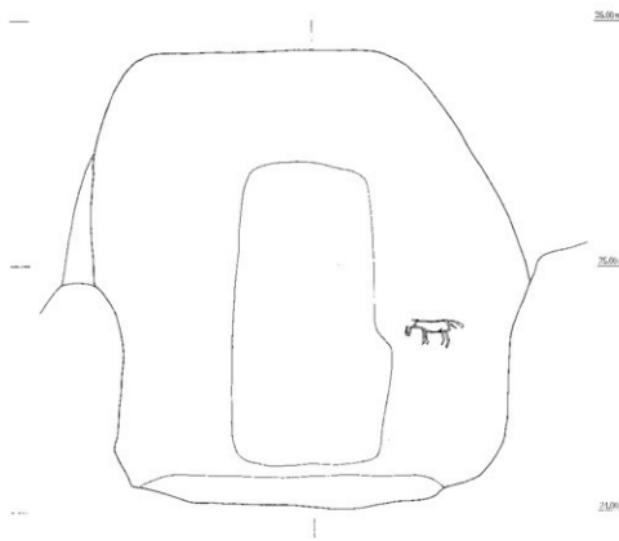
縮尺 1/20

図面四八
遺構実測図

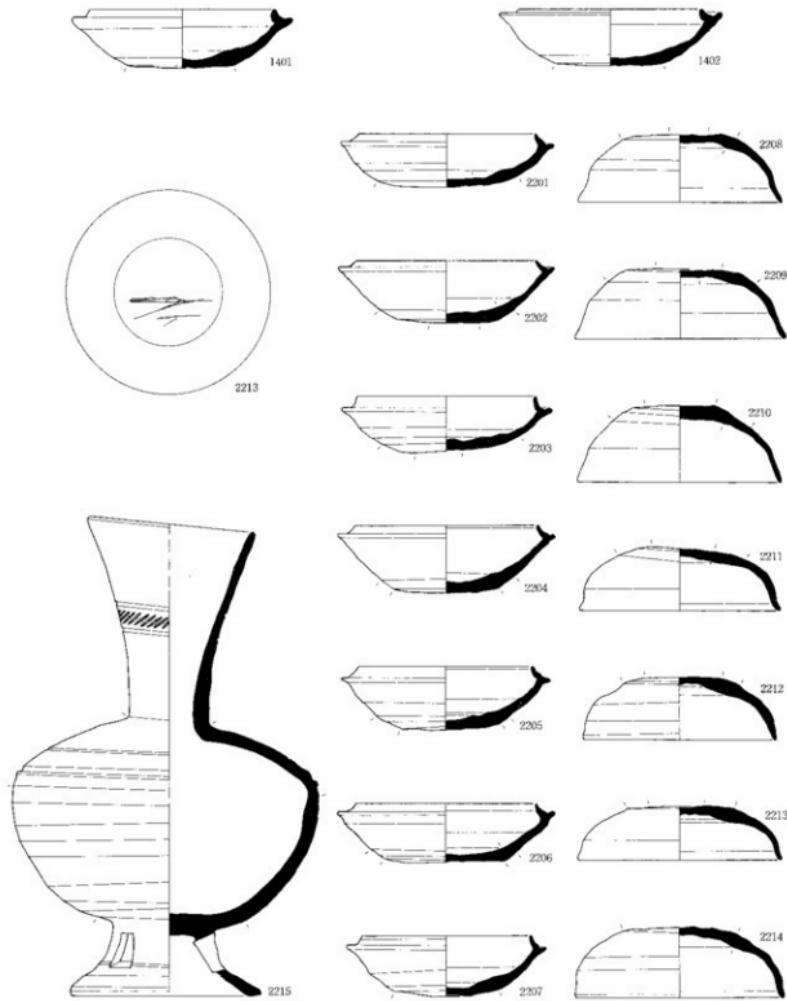


※縦断面詳細図(1/3)

0 5 10cm

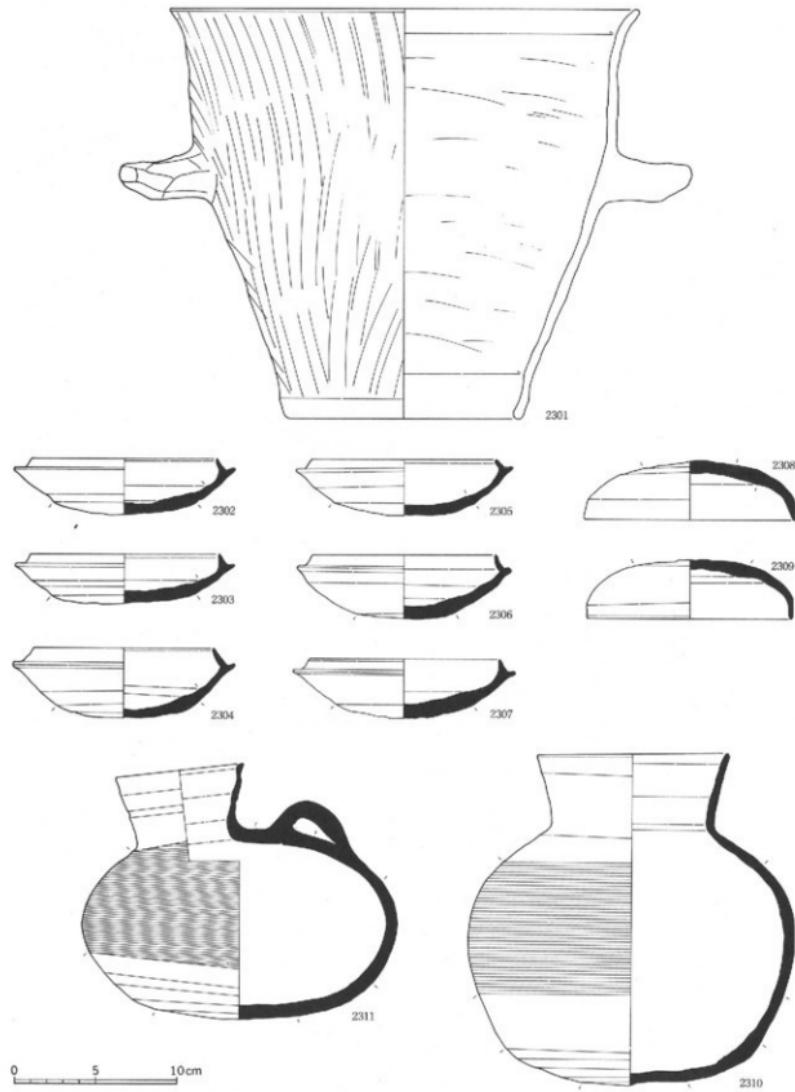


0 1m



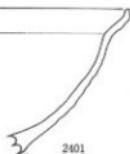
0 5 10cm

図面五〇
遺物実測図



土器類=土師壺；2301、須恵壺；2302～2311

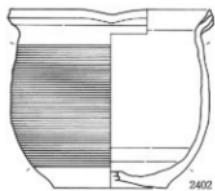
縮尺1／3



2401

2403

2407



2402



2404



2408



2405



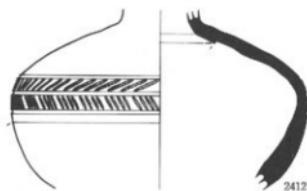
2409



2406

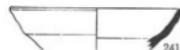


2410

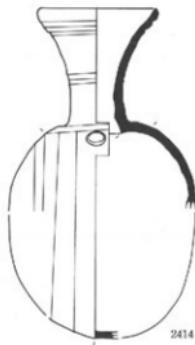


2412

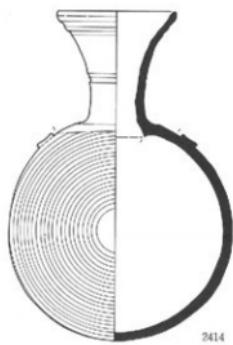
0 5 10cm



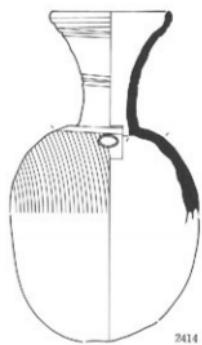
2411



2414

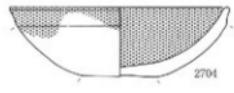
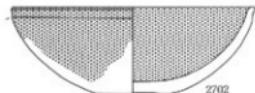
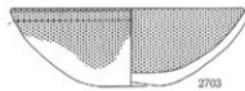
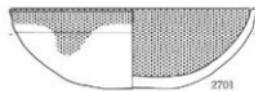
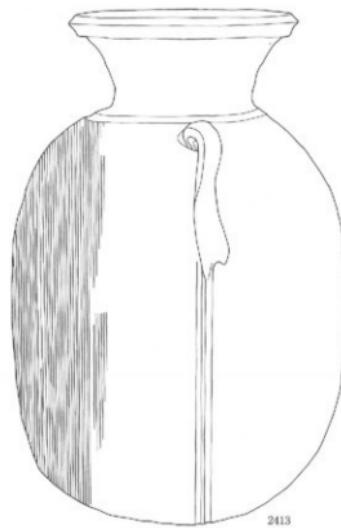
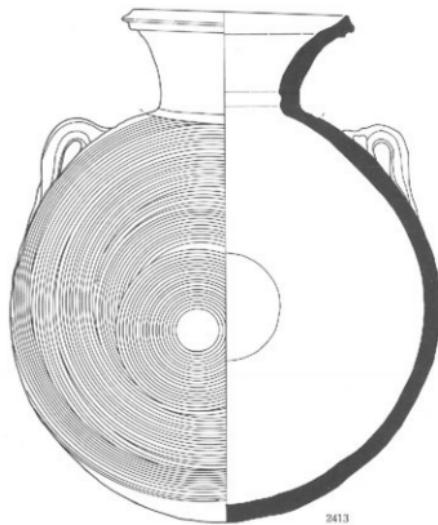


2414



2414

図面五二
遺物実測図

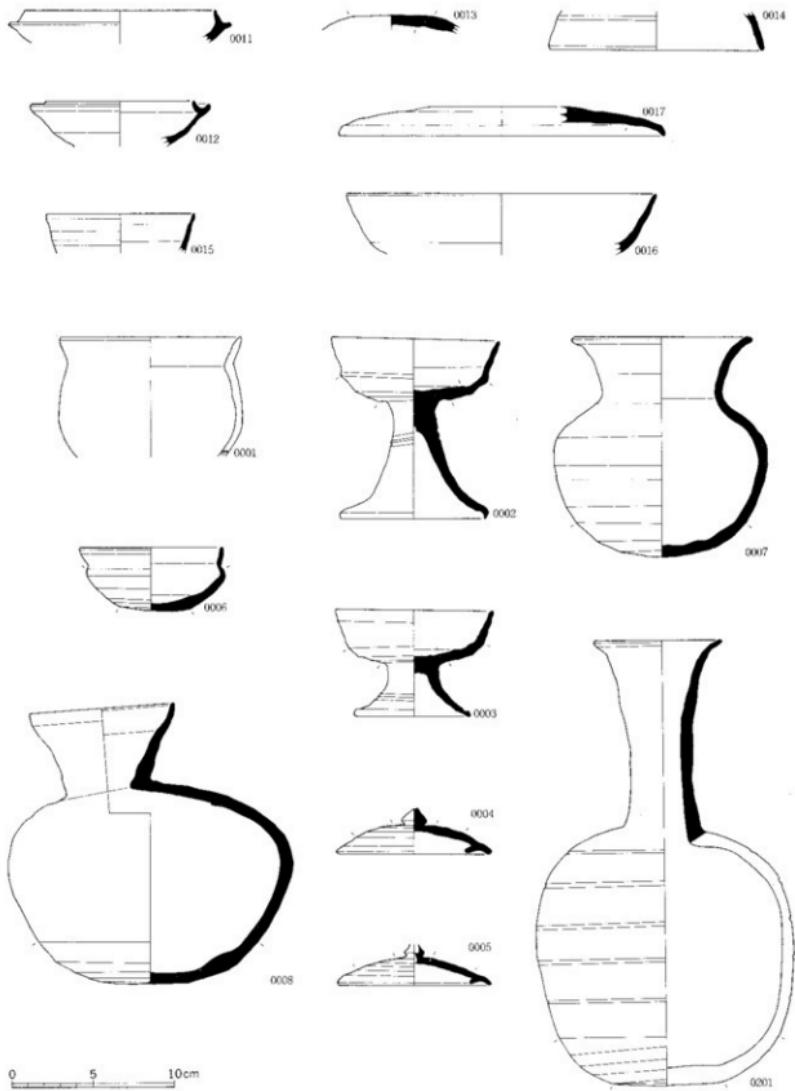


0 5 10cm

土器類=上部器：2701～2704、須恵器：2413

縮尺 1/3

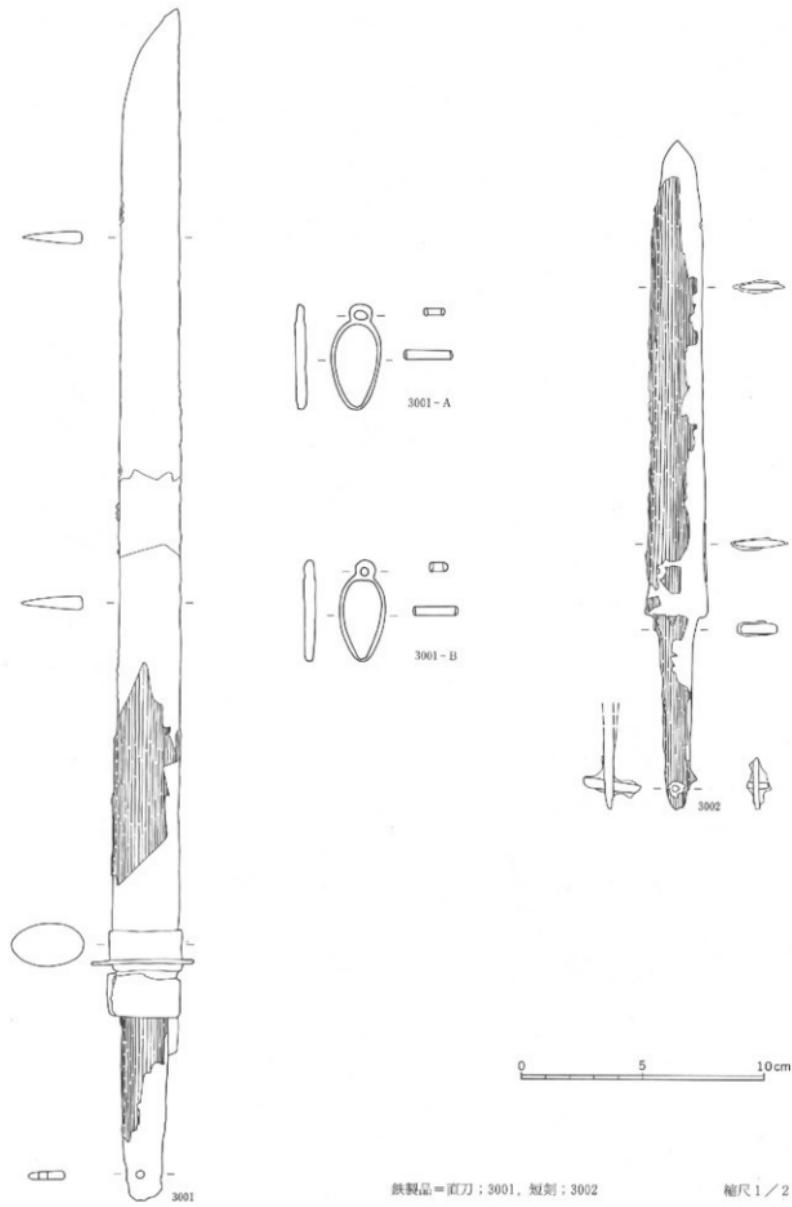
図面五三
遺物火割図

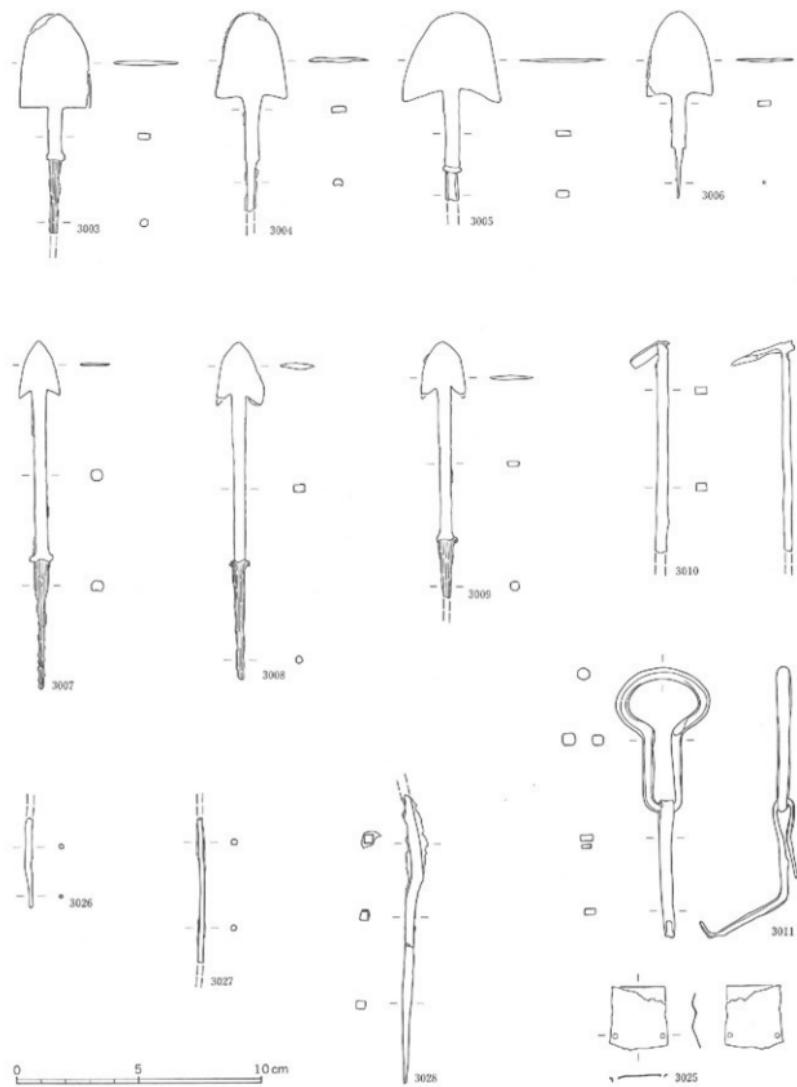


土器類=土師器；0001、須恵器；0011~0017・0002~0008・0201

縮尺1/3

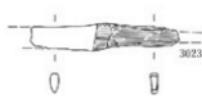
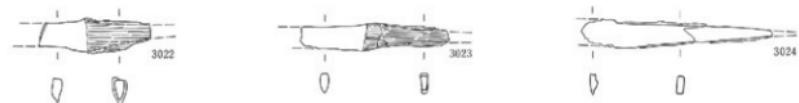
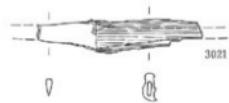
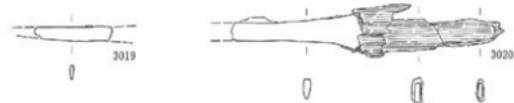
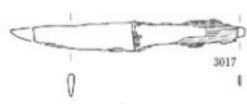
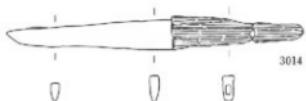
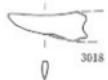
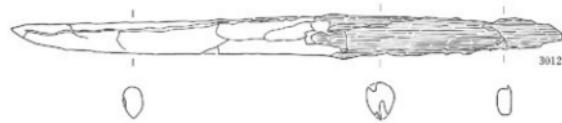
図面五四
遺物実測図





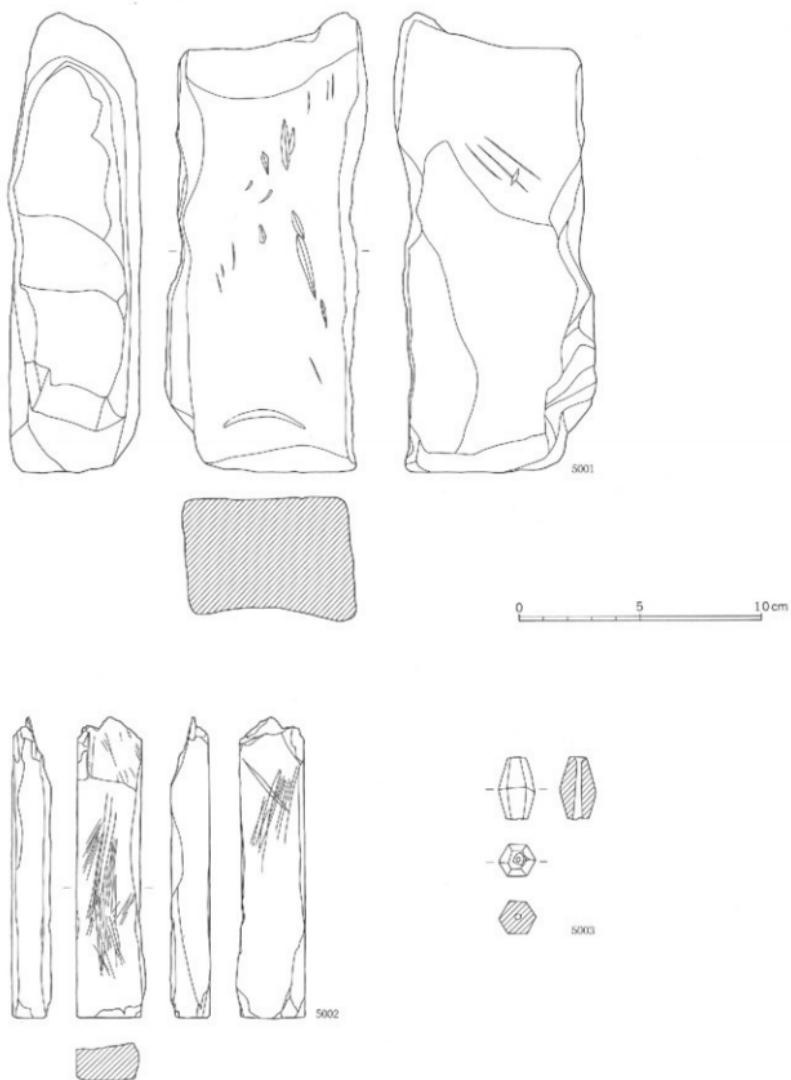
鉄製品—鉄鏟；3003～3010、馬具；3011、形態・用途不明鉄製品；3025～3028

縮尺 1／2



0 5 10 cm

図面五七 遺物実測図



石製品=砥石：5001・5002、切子玉：5003

縮尺 1/2

圖面五八 遺物実測図

- (○) - 6001
○ (○)
- (○) - 6002
○ (○)
- (○) - 6003
○ (○)
- (○) - 6004
○ (○)
- (○) - 6005
○ (○)
- (○) - 6006
○ (○)

- (○) - 6007
○ (○)
- (○) - 6008
○ (○)
- (○) - 6009
○ (○)
- (○) - 6010
○ (○)
- (○) - 6011
○ (○)
- (○) - 6012
○ (○)

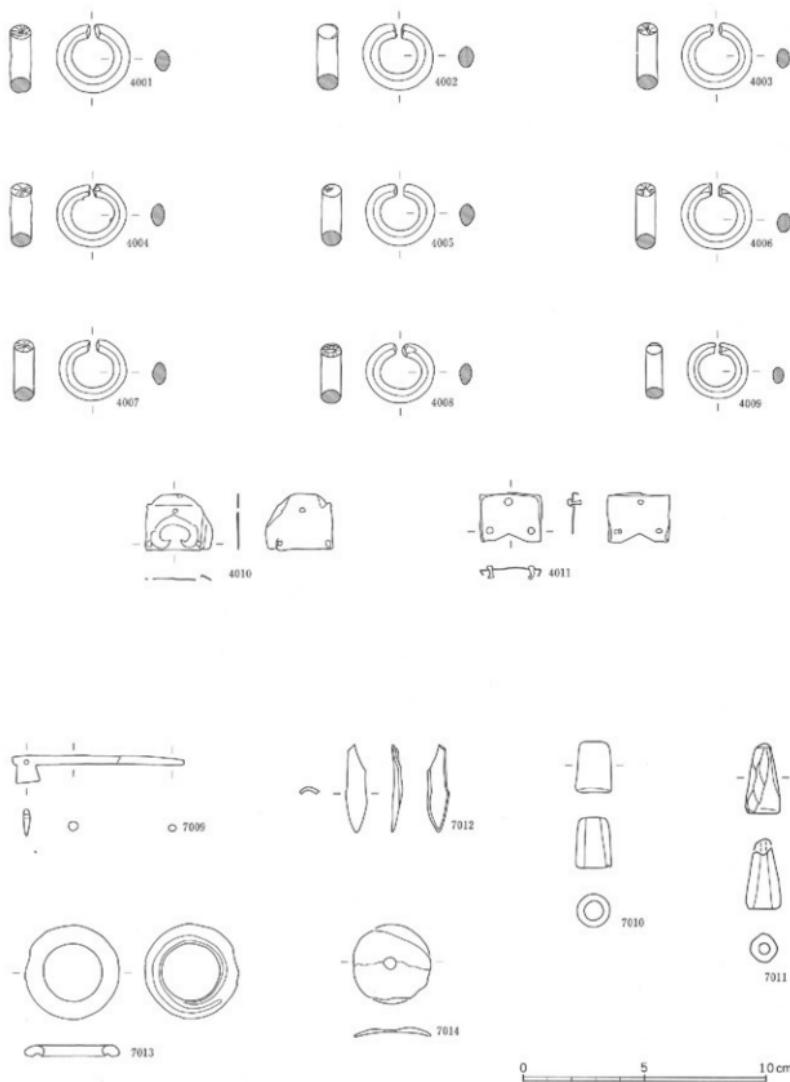
- (○) - 6013
○ (○)
- (○) - 6014
○ (○)
- (○) - 6015
○ (○)
- (○) - 6016
○ (○)
- (○) - 6017
○ (○)
- (○) - 6018
○ (○)

- (○) - 6019
○ (○)
- (○) - 6020
○ (○)
- (○) - 6021
○ (○)
- (○) - 6022
○ (○)
- (○) - 6023
○ (○)
- (○) - 6024
○ (○)

- (○) - 6025
○ (○)
- (○) - 6026
○ (○)
- (○) - 6027
○ (○)
- (○) - 6028
○ (○)
- (○) - 6029
○ (○)
- (○) - 6030
○ (○)



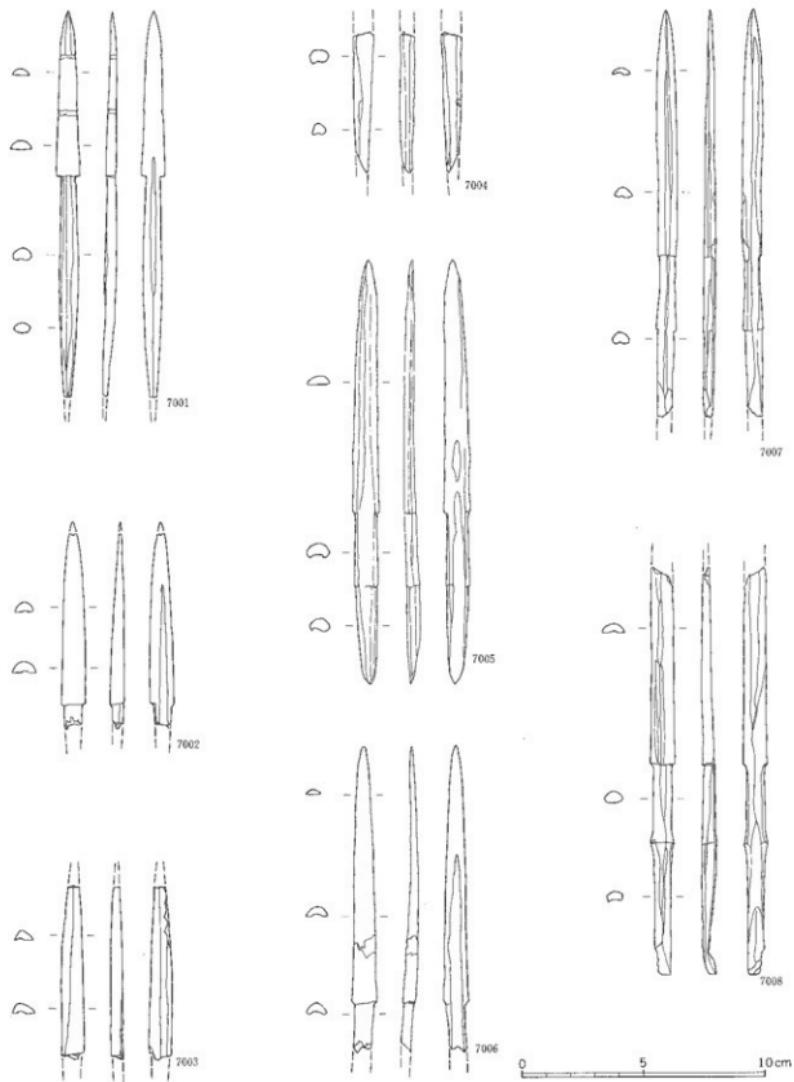
図面五九 遺物実測図



耳環品=耳環；4001~4009, 馬具；4010・4011, 骨角製品=その他の骨角製品；7009~7014

縮尺 1/2

図面六〇 遺物実測図



骨角製品=骨縫

縮尺1/2

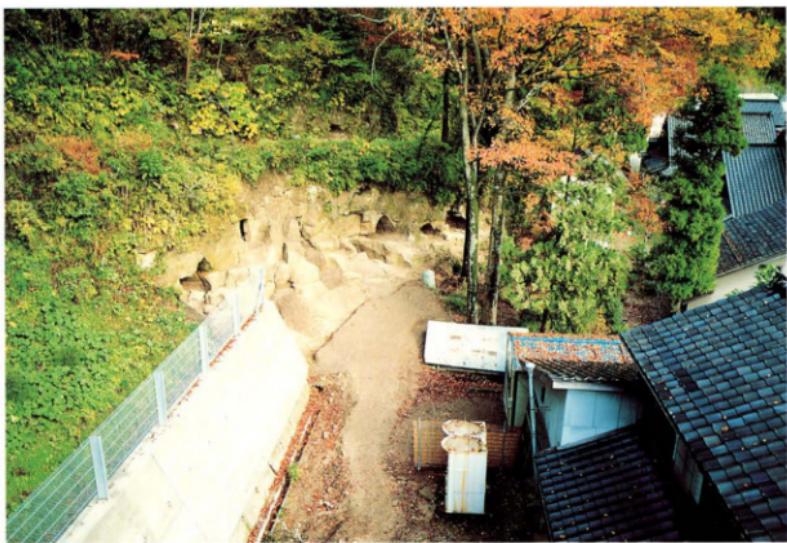
区
版



1. 遠景（東）



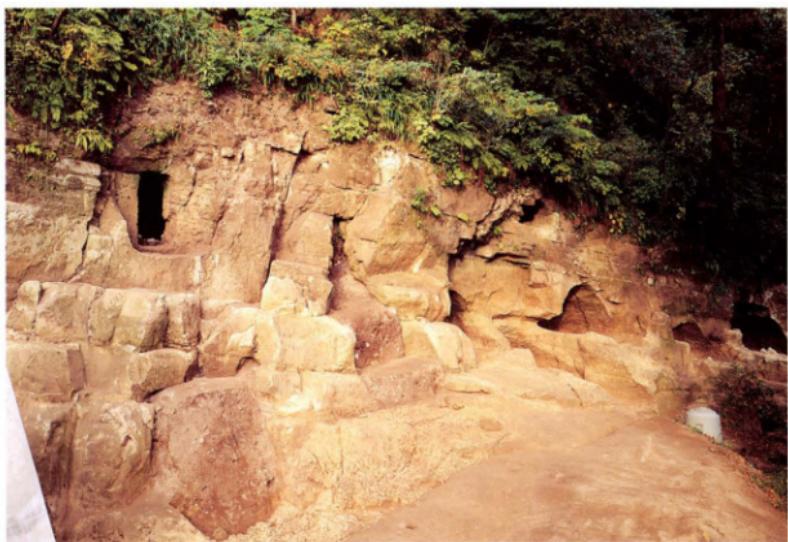
2. 遠景（西）



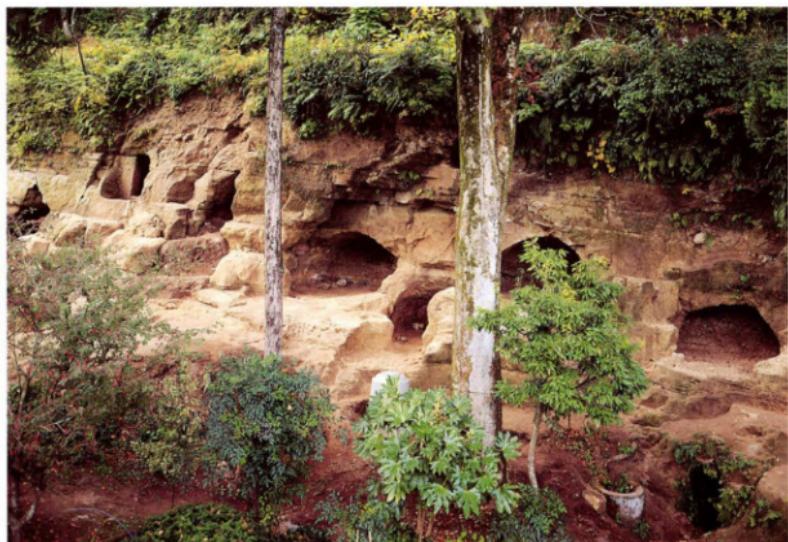
1. 下段地区全景（西）



2. 下段地区全景（南）



1. 下段地区近景（南西）



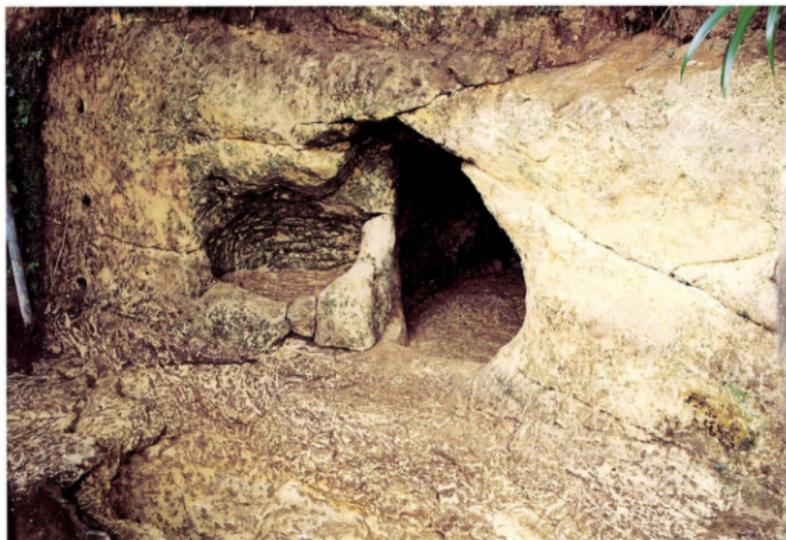
2. 下段地区近景（南東）



1. 第2～5号墓全景（南東）



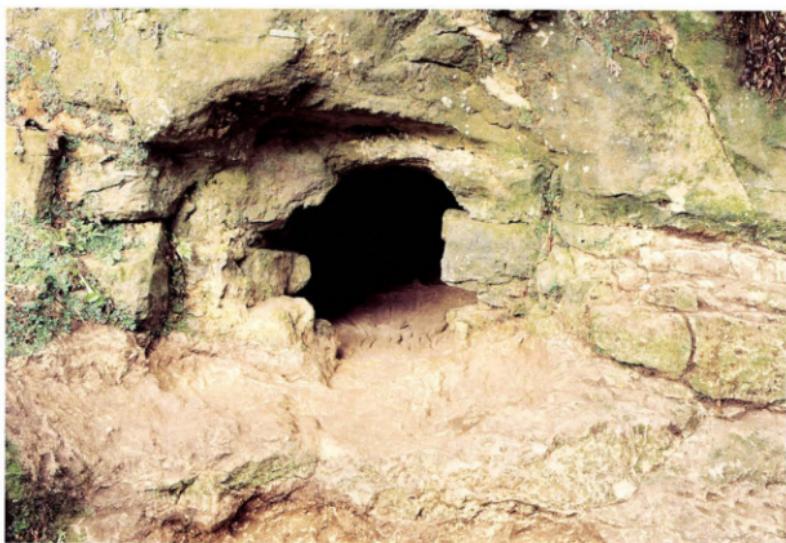
2. 第2～5号墓全景（南西）



1. 第11号墓全景（南東）



2. 第12号墓全景（南）



1. 第13号墓全景（南）



2. 第14号墓全景（南）



1. 第15号墓遺物出土状態（南西）



2. 第15号墓掘り上げ状態（南）



1. 第21号墓掘り上げ状態（南西）



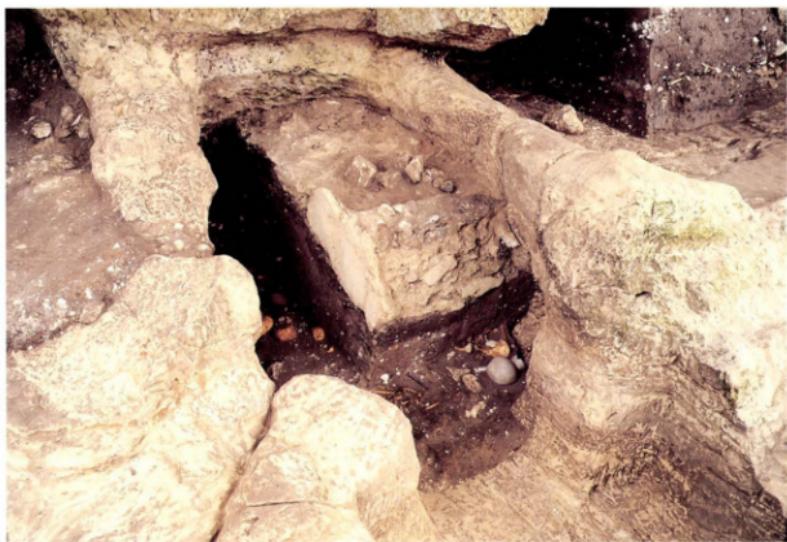
2. 第22号墓掘り上げ状態（南西）



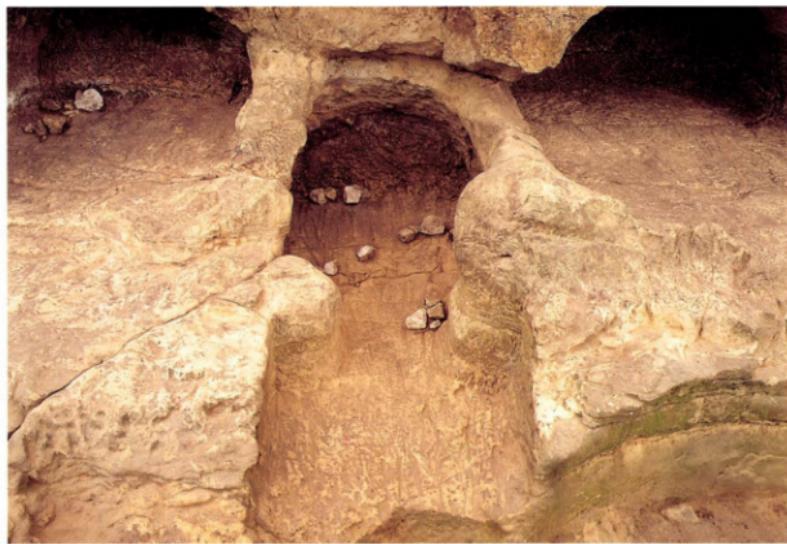
1. 第22号墓遺物出土状態（南西）



2. 第22号墓遺物出土状態（南西南）



1. 第23号墓土層堆積状態（南西）



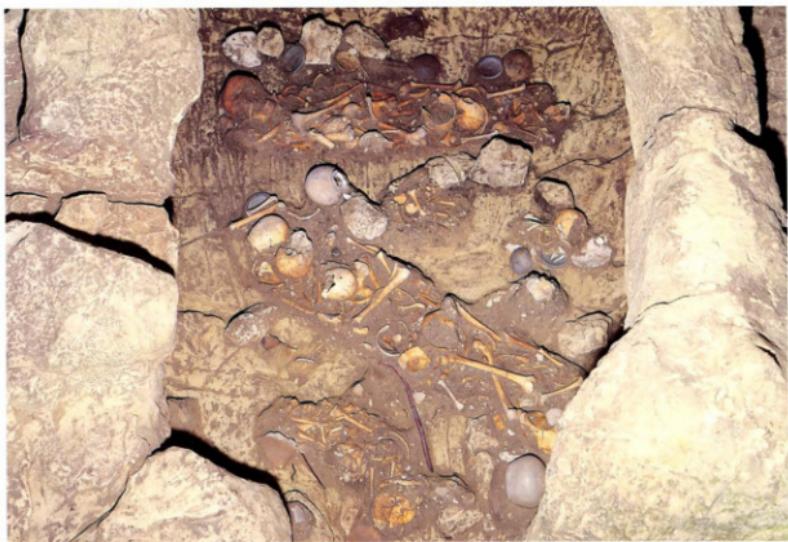
2. 第23号墓掘り上げ状態（南）



1. 第23号墓遺物出土状態（西）



2. 第23号墓遺物出土状態（東）



1. 第23号墓遺物出土状態（南）



2. 第23号墓遺物出土状態（南東）



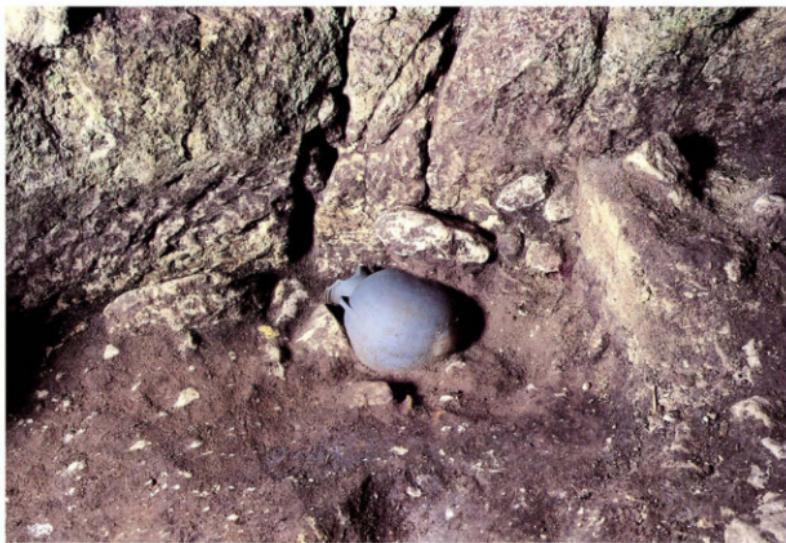
1. 第23号墓遺物出土状態（南）



2. 第23号墓遺物出土状態（南東）



1. 第24号墓遺物出土状態（南）



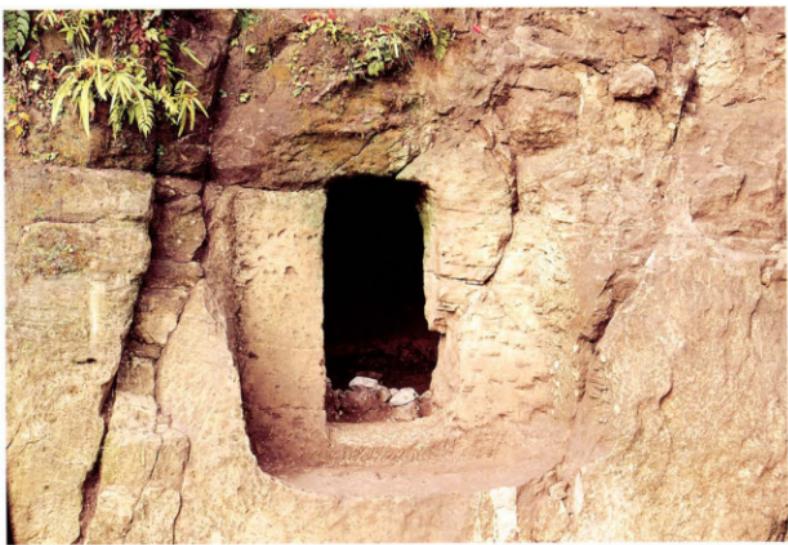
2. 第24号墓遺物出土状態（南東）



1. 第27号墓検出状態（南東）



2. 第27号墓掘り上げ状態（南西）



1. 第29号墓入口部近景（南）



2. 第29号墓線割面近景（南）



1. 遠景（南東）



2. 遠景（南西）



1. 全景（西南西）



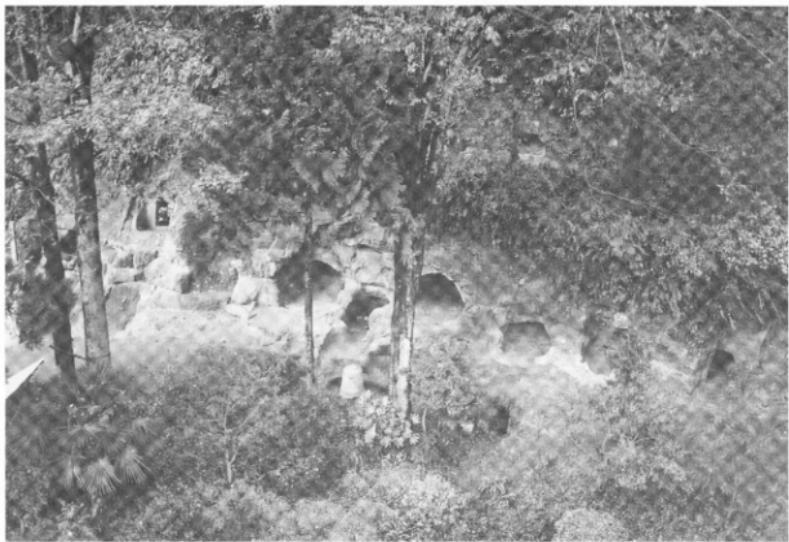
2. 全景（東）



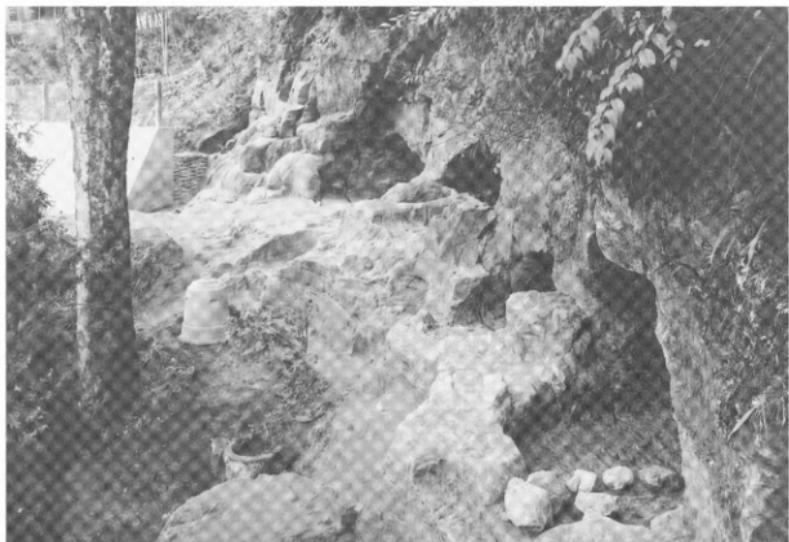
1. 下段地区全景（南西）



2. 下段地区全景（南西）



1. 下段地区全景（南）



2. 下段地区全景（東南東）



1. 調査開始時の状態
(南東)



2. 調査開始時の状態
(南東)



3. 調査開始時の状態
(南)



1. 調査風景、樹木の伐採
(南西)



2. 調査風景、樹木の伐採
(南西)



3. 調査風景、樹木の伐採
(南西)



1. 調査風景、覆土の除去
作業（南西）



2. 調査風景、覆土の除去
作業（南西）



3. 調査風景、覆土の除去
作業（南西）



1. 調査風景、開口している
横穴墓の清掃（南西）



2. 調査風景、埋もれている
横穴墓の検出（南西）



3. 調査風景、埋もれている
横穴墓の検出（南西）



1. 調査風景、写真のための
清掃（南西）



2. 調査風景、写真撮影
(南西)



3. 調査風景、写真撮影
(南西)

圖版二六 遺跡



1. 第1～5号墓全貌（南西）



2. 第2～5号墓全貌（南東）



1. 第1号墓全景 (南)



2. 第1号墓全景 (南西)



1. 第2号墓全景（南）



2. 第2号墓全景（南西）

圖版二九 遺構



1. 第3号墓全景(南)



2. 第3号墓全景(南西)



1. 第4号墓全景（南）



2. 第4号墓全景（南西）



1. 第5号墓全景（南）



2. 第5号墓全景（南西）



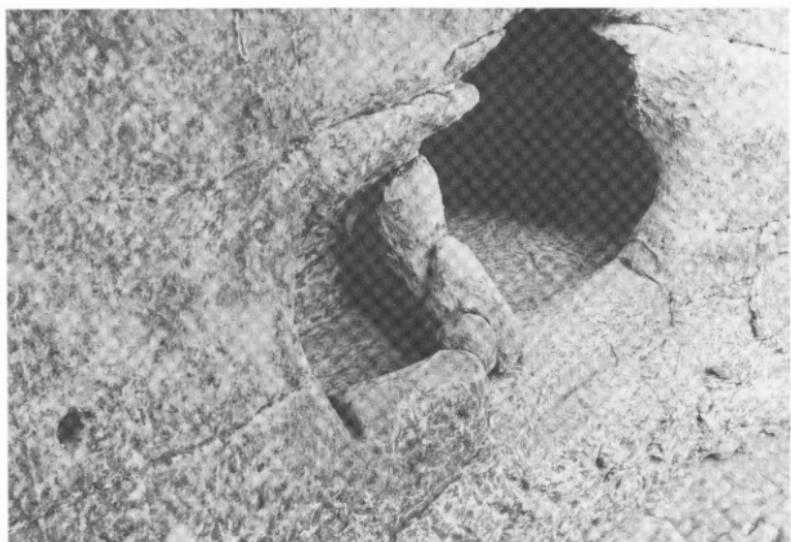
1. 第6号墓全景(南)



2. 第6号墓調査風景
(南西)



3. 第6号墓調査風景
(南東)



1. 第11号墓全景(南西)



2. 第12号墓全景(南東)



1. 第13号墓全景（南）



2. 第14号墓全景（南）



1. 第13号墓調査風景（南）



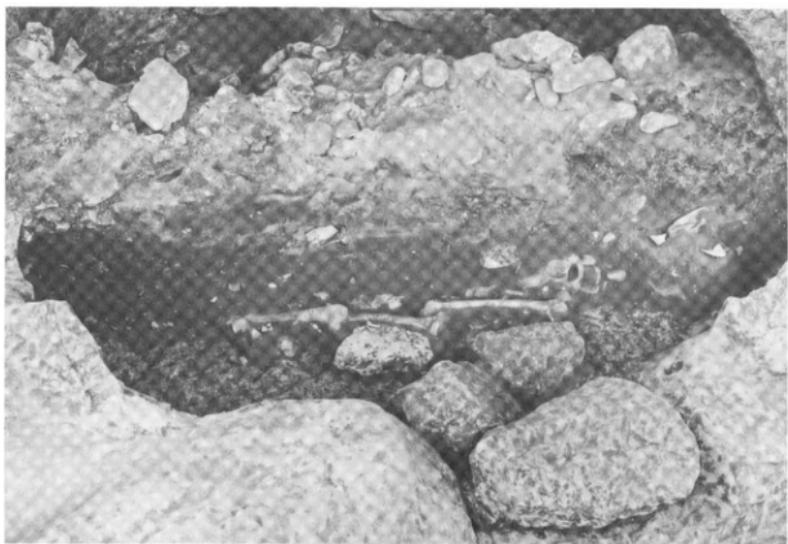
2. 第14号墓遺物出土状態、
須彥器杯身（南西）



3. 第14号墓調査風景（南）



1. 第15号墓候山狀態（南西）



2. 第15号墓候山狀態、前壁付近（南西）

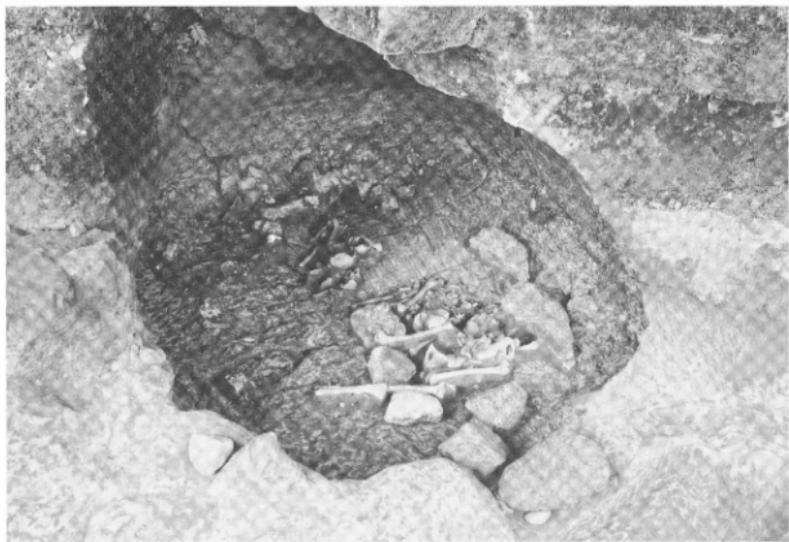


1. 第15号墓遺物出土状態、上層（南西）

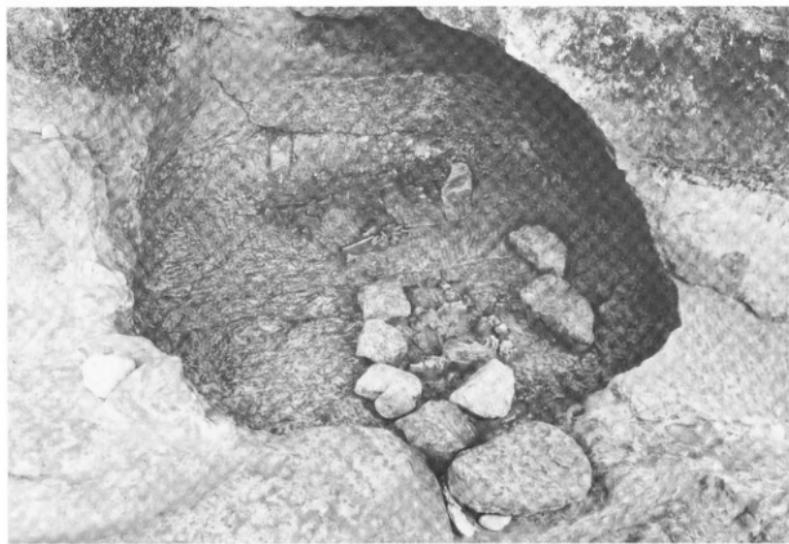


2. 第15号墓遺物出土状態、上層（南）

圖版三八
遺構



1. 第15号墓遺物出土状態、下層（南西）



2. 第15号墓遺物出土状態、最下層（南西）



1. 第15号窯遺物出土状態、耳環・刀子等（南西）



2. 第15号窯遺物出土状態、人骨（南西）



1. 第15号墓掘り上げ状態（南東）



2. 第15号墓掘り上げ状態（南西）



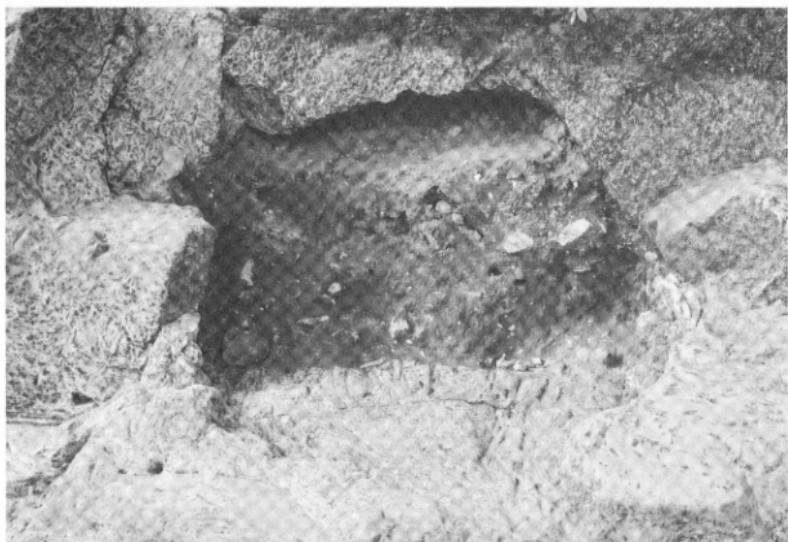
1. 第15号墓調查風景（西）



2. 第15号墓調查風景
(南西)



3. 第15号墓調查風景
(南西)

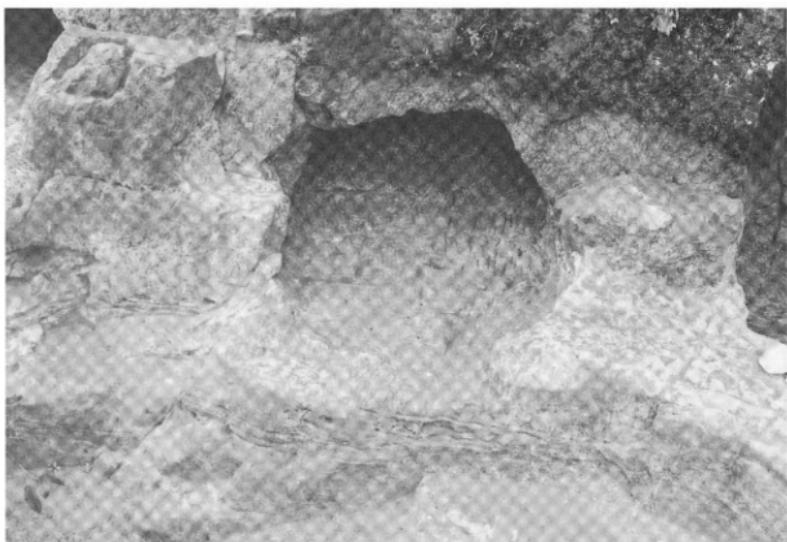


1. 第21号墓検出状態（南）



2. 第21号墓遺物出土状態、耳環（南西）

図版四三 遺構



1. 第21号墓掘り上げ状態（南）



2. 第21号墓掘り上げ状態（南西）



1. 第21号墓調査風景
(南東)



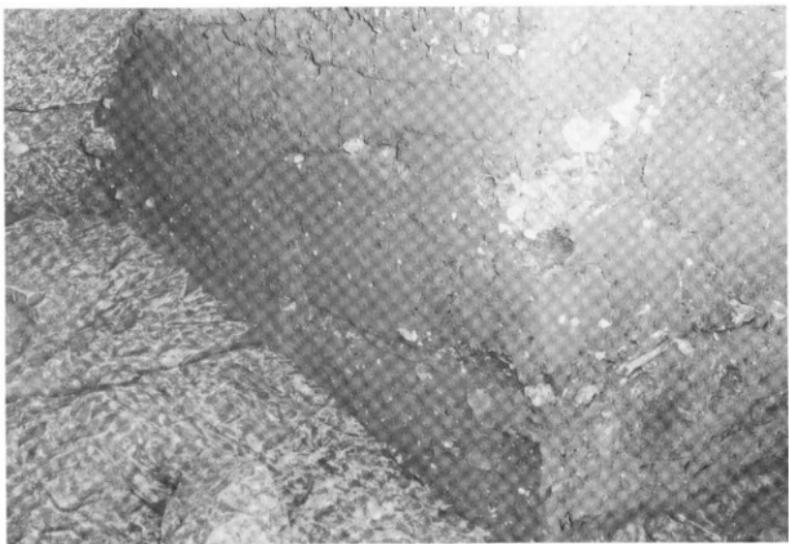
2. 第21号墓調査風景
(南西)



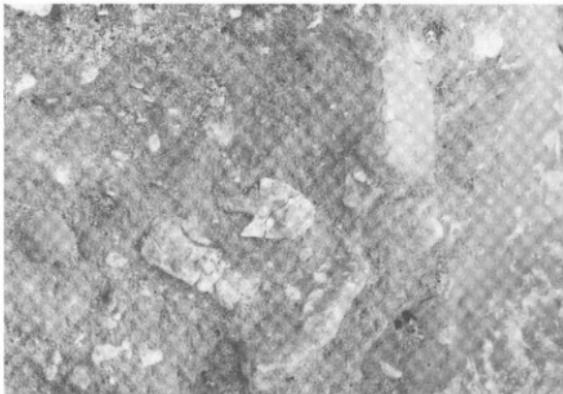
3. 第21号墓調査風景
(南西)



1. 第22号墓檢出狀體（南四）



2. 第22号墓土層堆積伏型（南四）



1. 第22号墓遺物出土狀態。
上層—北西



2. 第22号墓遺物出土狀態。
上層—玄室右側（南）



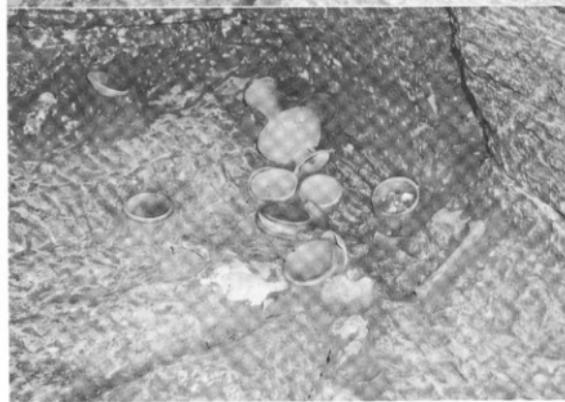
3. 第22号墓遺物出土狀態。
上層—玄室右中央（南）



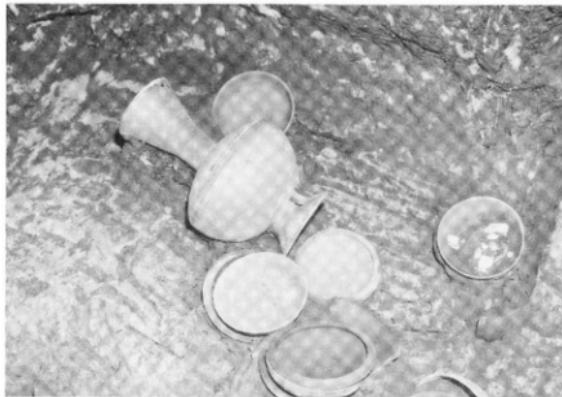
1. 第22号墓遺物出土状態、
須恵器等（南西）



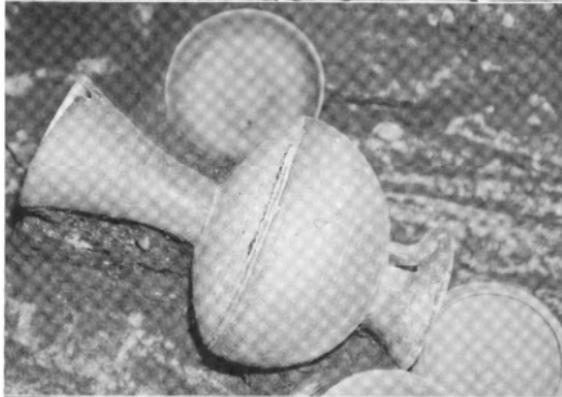
2. 第22号墓遺物出土状態、
須恵器等（南西）



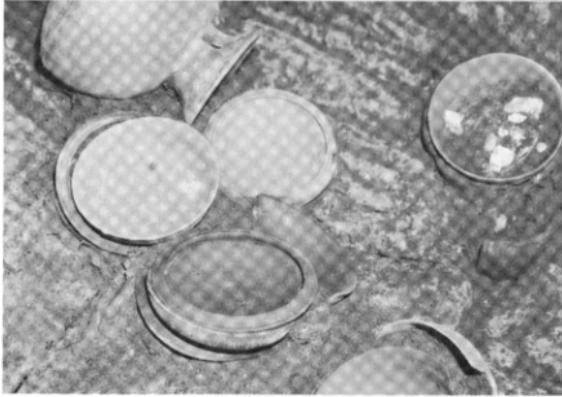
3. 第22号墓遺物出土状態、
須恵器等（南西）



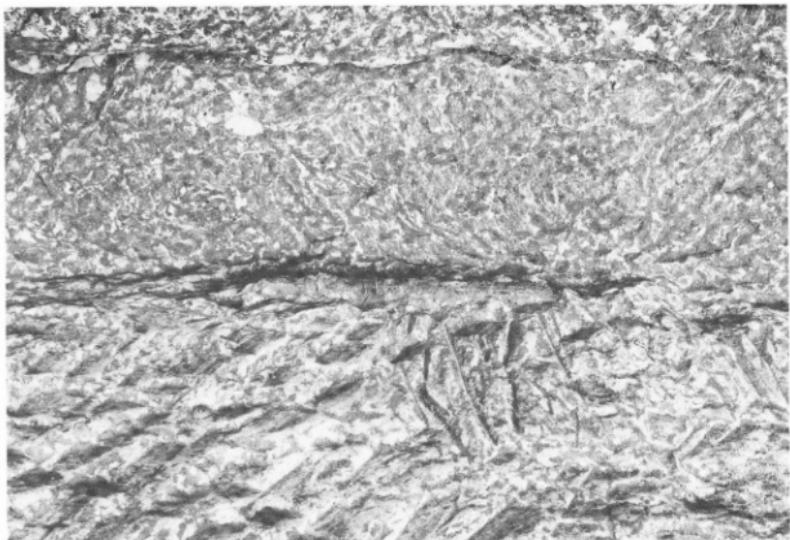
1. 第22号墓遺物出土狀態、
須惠器（四）



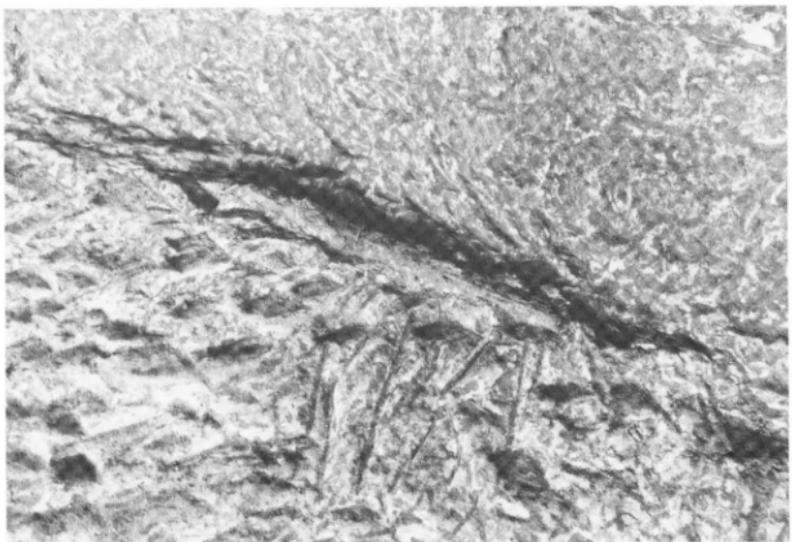
2. 第22号墓遺物出土狀態、
須惠器（四）



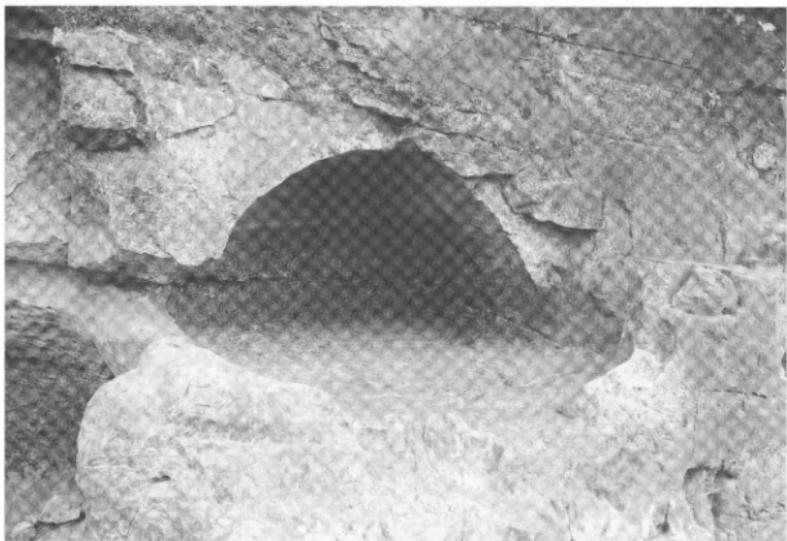
3. 第22号墓遺物出土狀態、
須惠器（四）



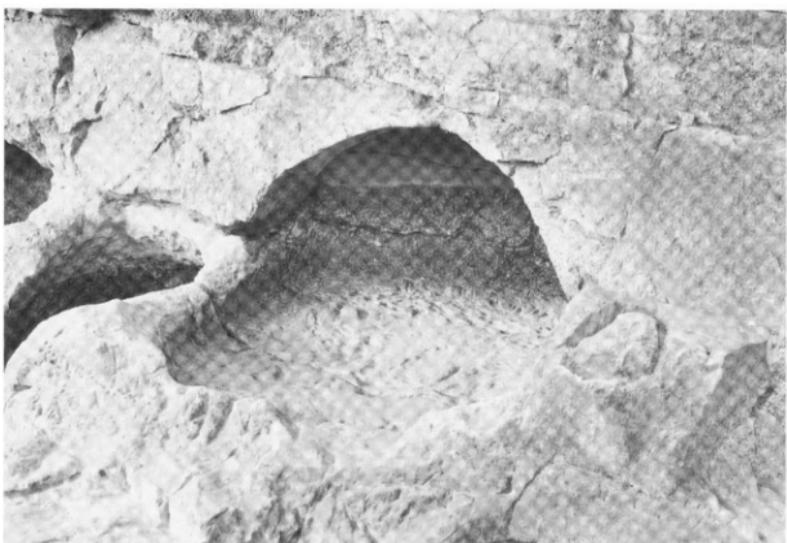
1. 第22号葬遺物出土状態、直刀（南）



2. 第22号葬遺物出土状態、直刀（南東）



1. 第22号墓掘り上げ状態（南）



2. 第22号墓掘り上げ状態（南東）



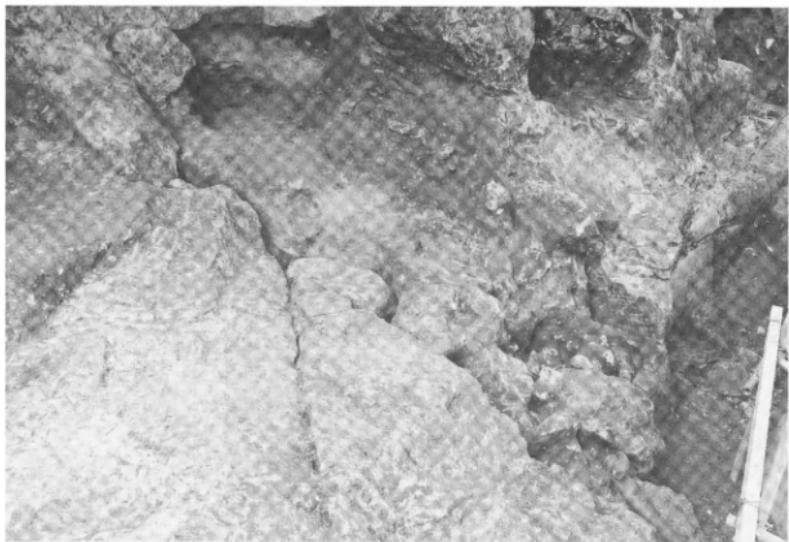
1. 第22号墓調査風景（南）



2. 第22号墓調査風景
(南西)



3. 第22号墓調査風景
(南西)



1. 第23号墓檢出狀態（南西）



2. 第23号墓土層斷面（南西）



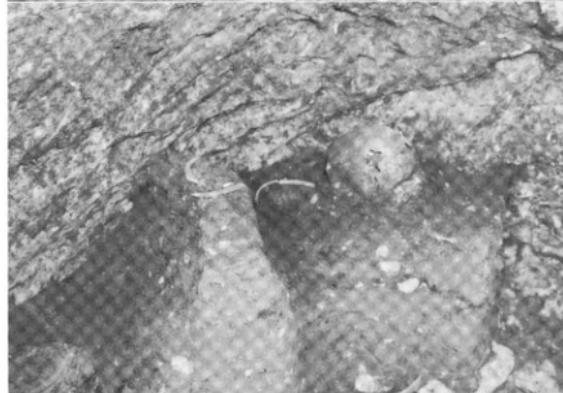
1. 第23号墓遺物出土状態、上層（南西）



2. 第23号墓遺物出土状態、上層（南東）



1. 第23号墓遺物出土状態、
上層（南）



2. 第23号墓遺物出土状態、
上層（南東）



3. 第23号墓遺物出土状態、
上層（南）



1. 第23号墓遺物出土状態、下層（南）



2. 第23号墓遺物出土状態、下層（南西）



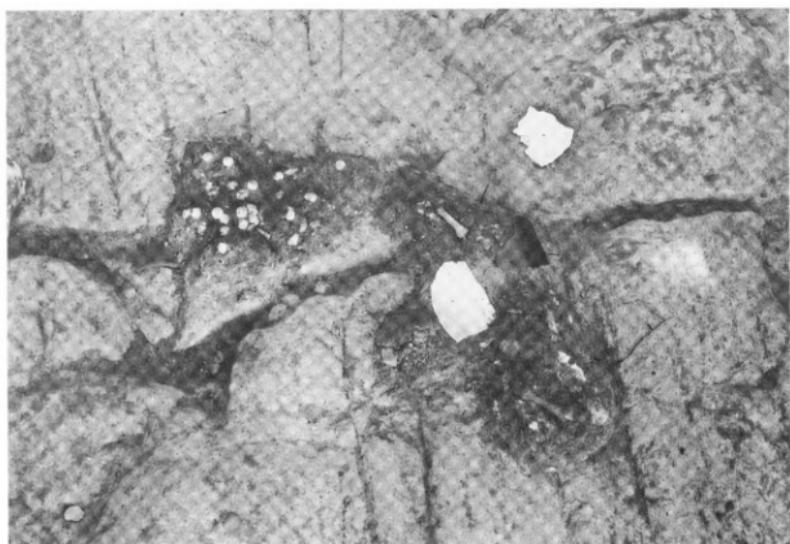
1. 第23号墓遺物出土狀態、最下層（西四）



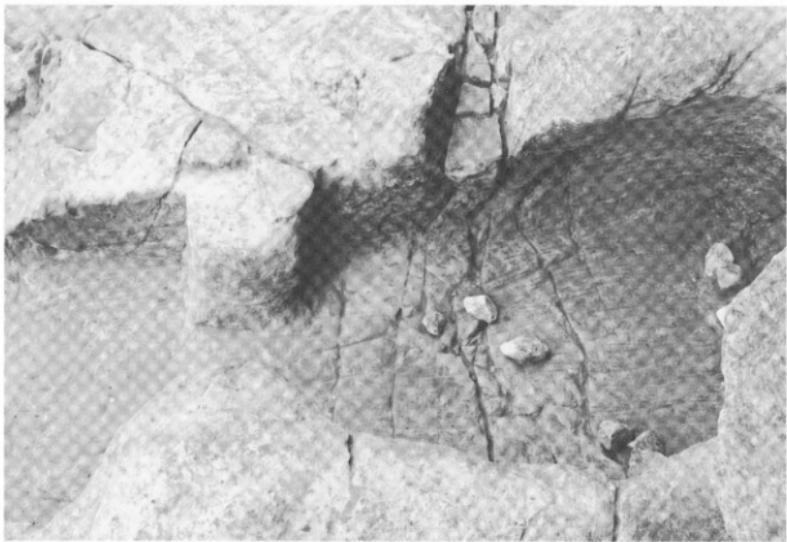
2. 第23号墓遺物出土狀態、最下層（南四）



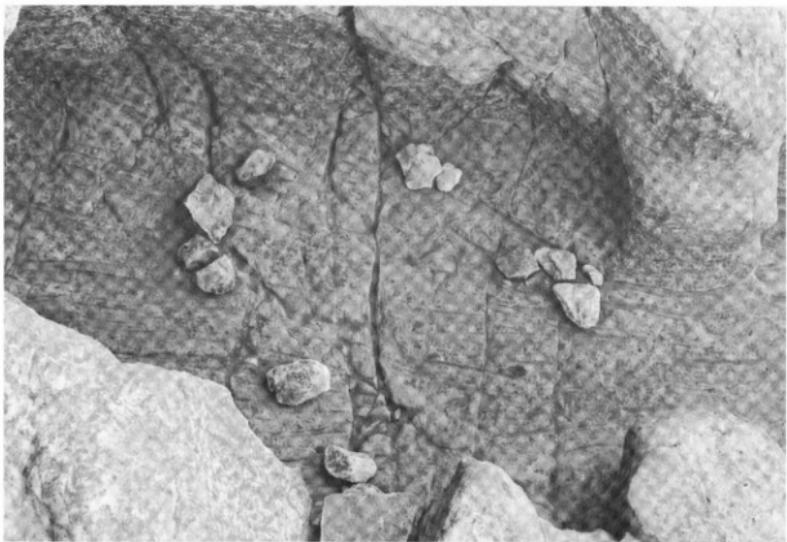
1. 第23号墓遺物出土狀態、最下層一耳環・切子玉等（南）



2. 第23号墓遺物出土狀態、最下層一丸玉等（南）



1. 第23号墓掘り上げ状態（東）



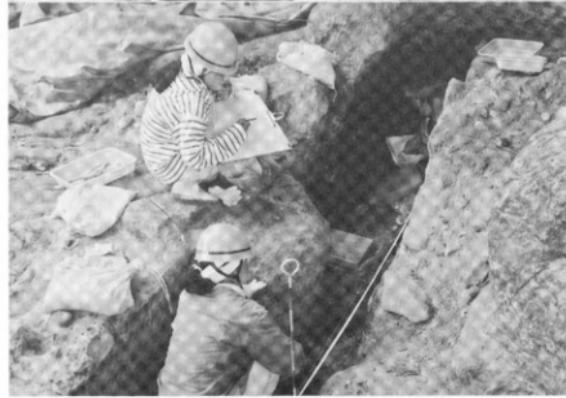
2. 第23号墓掘り上げ状態（西）



1. 第23号墓調査風景
(南西)



2. 第23号墓調査風景
(南東)



3. 第23号墓調査風景
(南東)



1. 第23号墓調査風景
(南)



2. 第23号墓調査風景
(南)



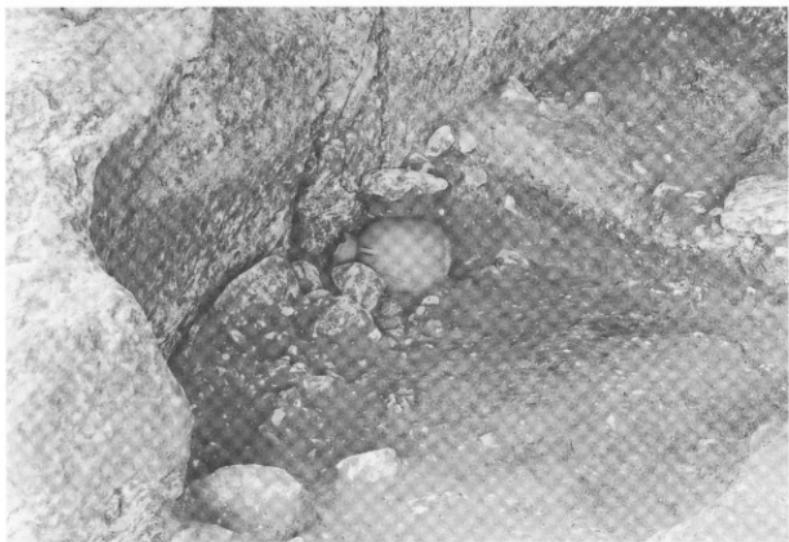
3. 第23号墓調査風景
(南西)



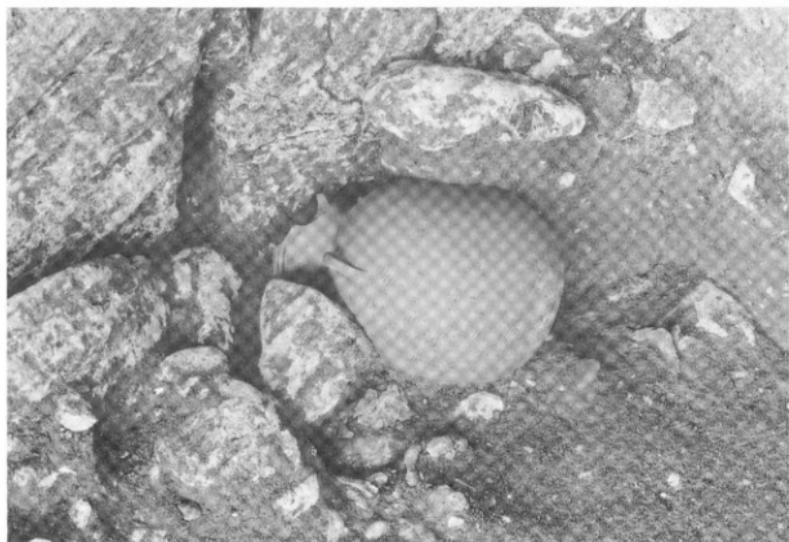
1. 第24号墓検出状態（南）



2. 第24号墓土肩堆積状態（南）



1. 第24号墓遺物出土状態、須恵器提瓶（南東）



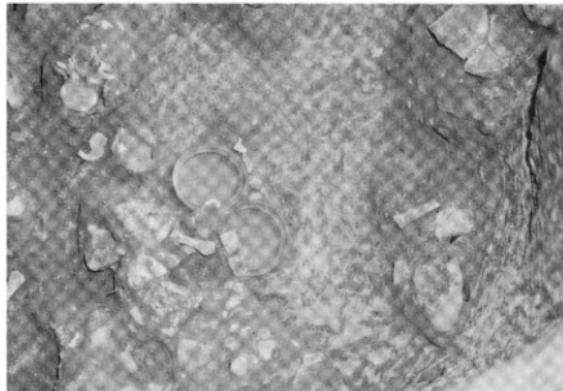
2. 第24号墓遺物出土状態、須恵器提瓶（南東）



1. 第24号墓遺物出土状態（南）



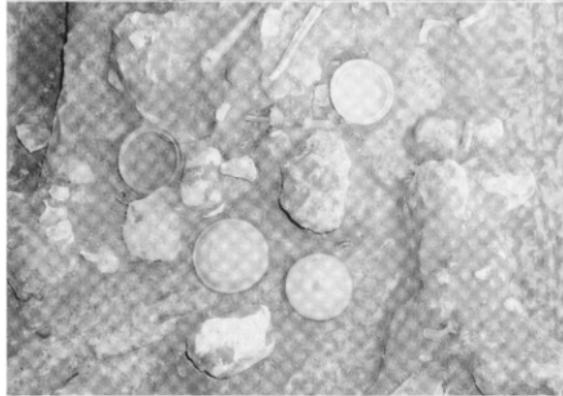
2. 第24号墓遺物出土状態（南東）



1. 第24号墓遺物出土狀態、
須惠器杯蓋等（北西）



2. 第24号墓遺物出土狀態、
須惠器杯蓋等（南）



3. 第24号墓遺物出土狀態、
須惠器杯蓋等（西）



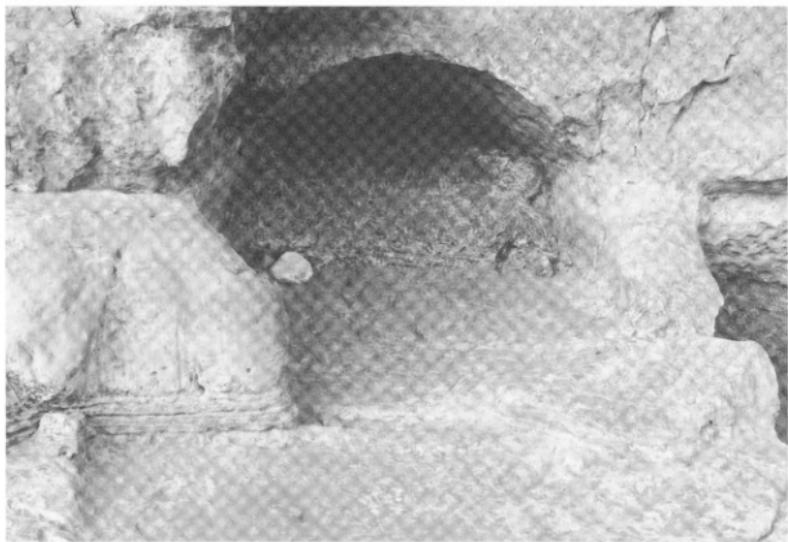
1. 第24号墓遺物出土状態、
人骨等（北西）



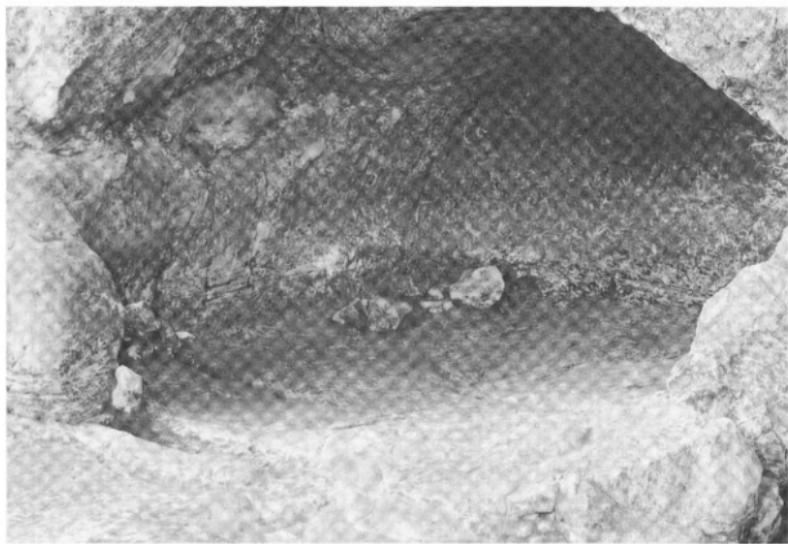
2. 第24号墓遺物出土状態、
人骨等（南）



3. 第24号墓遺物出土状態、
人骨等（南）



1. 第24号墓掘り上げ状態（南）



2. 第24号墓掘り上げ状態（南東）



1. 第24号墓調査風景（南）



2. 第24号墓調査風景
(南西)



3. 第24号墓調査風景
(南西)



1. 第24号墓調査風景（南）



2. 第24号墓調査風景（南）



3. 第24号墓調査風景（南）



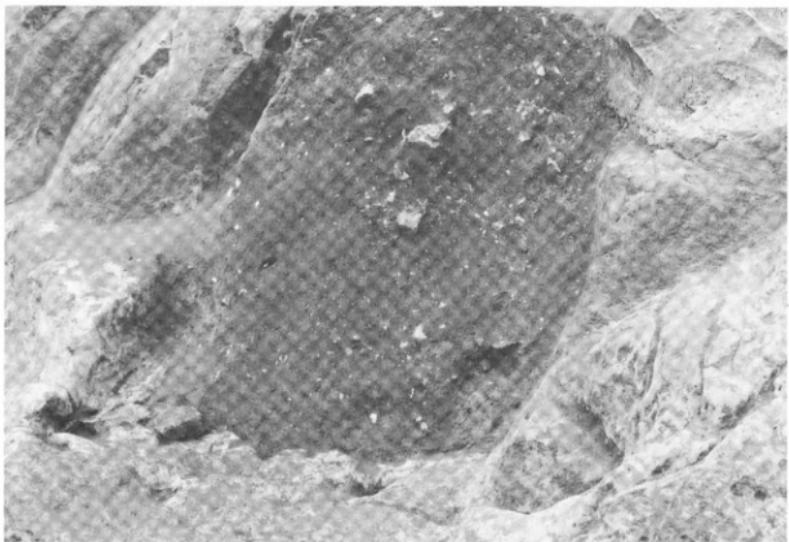
1. 第25号墓候出状態（南西）



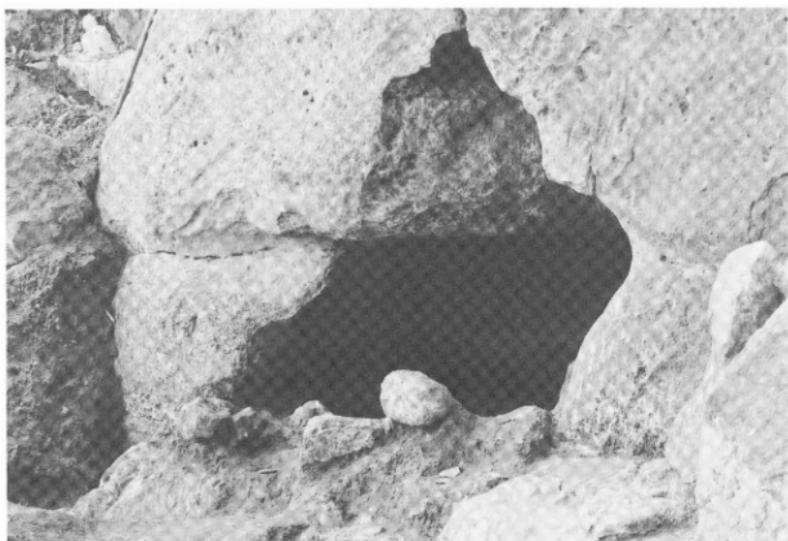
2. 第25号墓候出状態（南東）



1. 第26号墓出土状態（南）



2. 第26号墓出土状態（南東）



1. 第27号墓候出状態（南東）



2. 第27号墓候出状態（南西）



1. 第27号窯遺物出土状態（南）



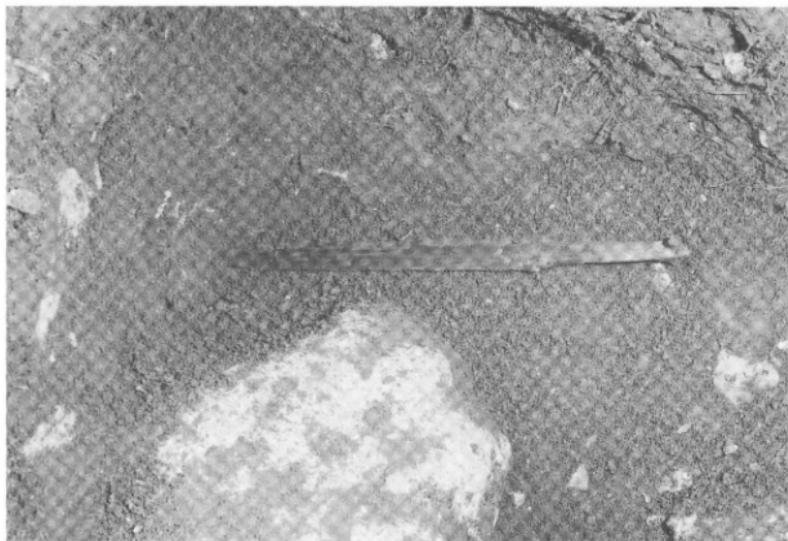
2. 第27号窯遺物出土状態（南東）



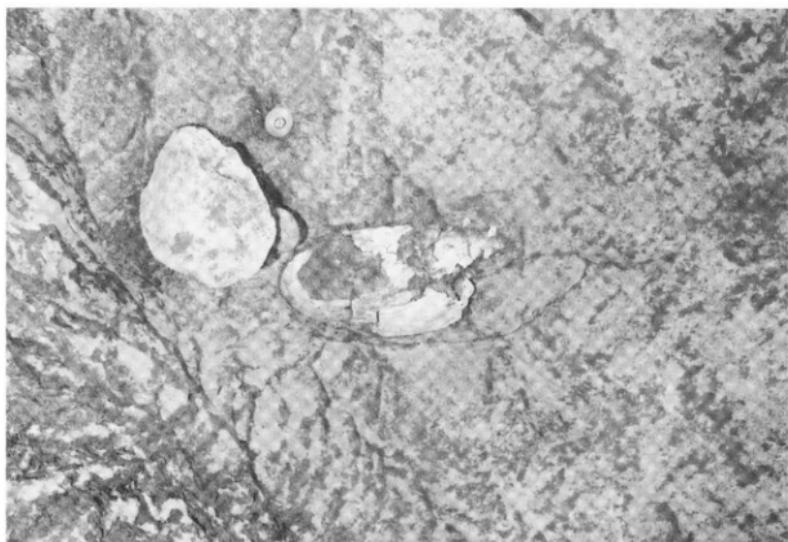
1. 第27号墓遺物出土狀態、耳環等（南西）



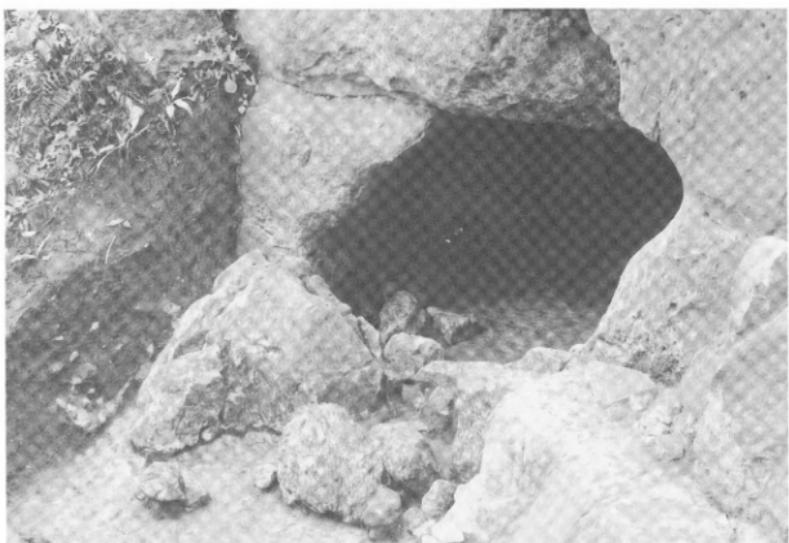
2. 第27号墓遺物出土狀態、耳環等（南西）



1. 第27号墓遺物出土状態、短剣（北東）



2. 第27号墓遺物出土状態、ドブ貝（南東）



1. 第27号墓掘り上げ状態（南東）



2. 第27号墓掘り上げ状態（南）



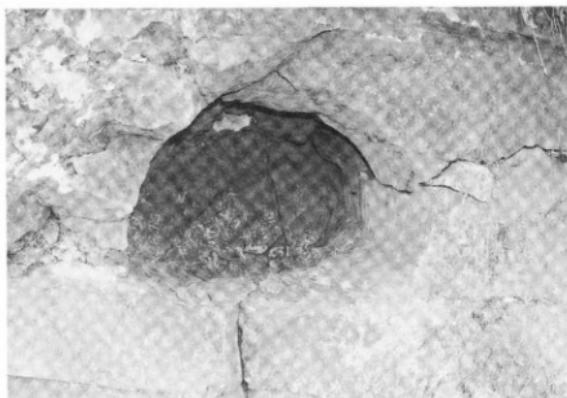
1. 第27号墓調査風景
(南東)



2. 第27号墓調査風景(南)



3. 第27号墓調査風景
(南東)



1. 第28号窓全景（南）



2. 第28号窓調査風景
(南西)



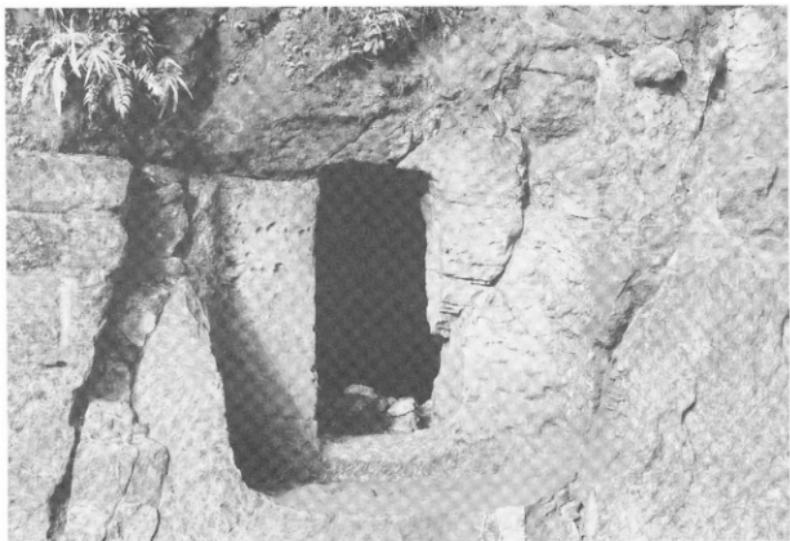
3. 第28号窓測査風景
(南西)



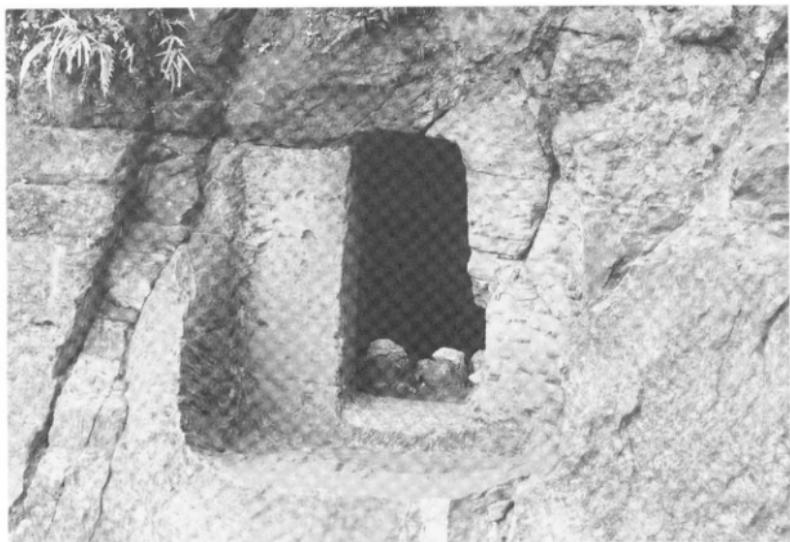
1. 第29号墓検出状態（南）



2. 第29号墓縫刻痕近景（南）



1. 第29号墓全景（南）



2. 第29号墓全景（東南東）



1. 第29号墓遺物出土状態
(南)



2. 第29号墓遺物出土状態
(南東)



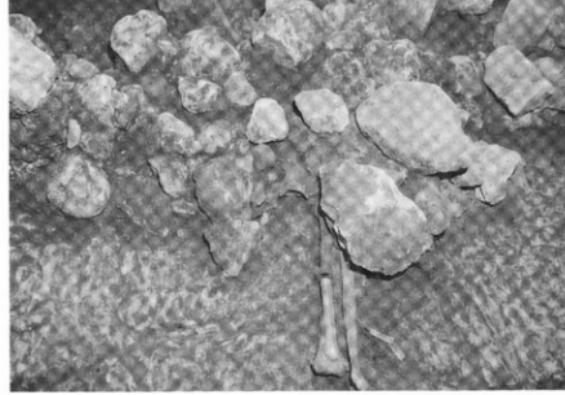
3. 第29号墓遺物出土状態
(南西)



1. 第29号墓見返り（北）



2. 第29号墓玄室前壁付近
(北)



3. 第29号墓玄室前壁付近
(北)



1. 第29号墓調查風景（南）



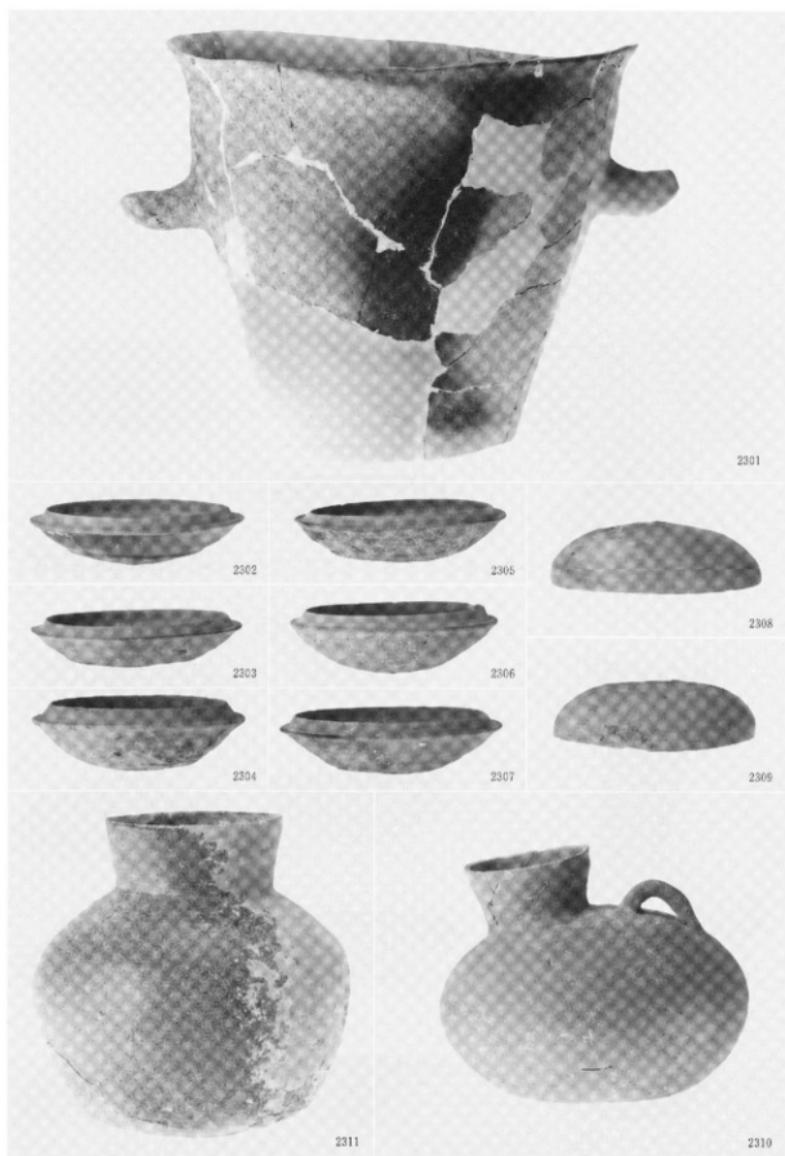
2. 第29号墓調査風景
(南東)



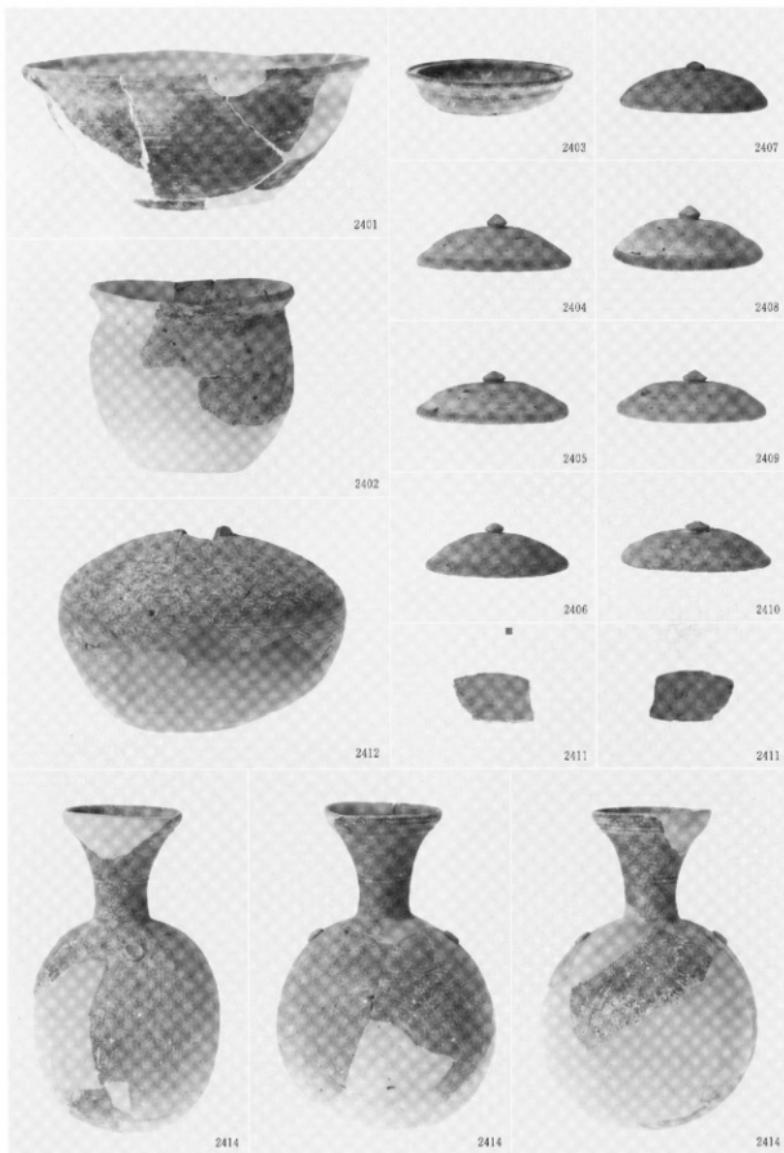
3. 第29号墓調査風景（南）



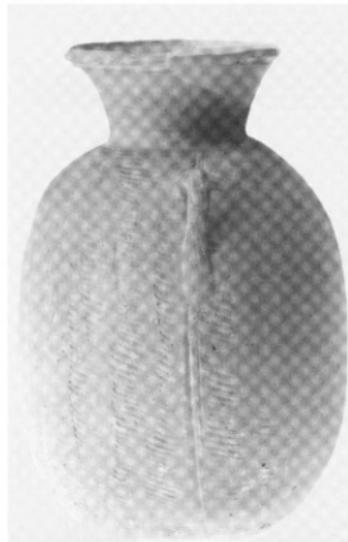
土器類



土器類



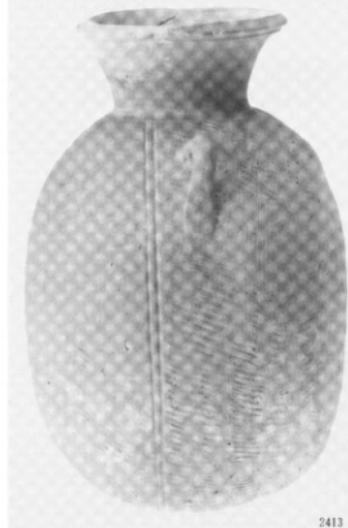
土器類



2413



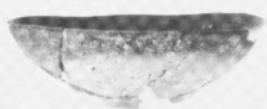
2412



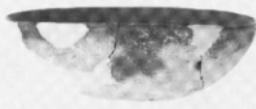
2413



2412



2701



2703



2702



2704



0011



0012



0013



0014



0015



0016



0017



0011



0012



0013



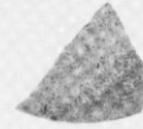
0014



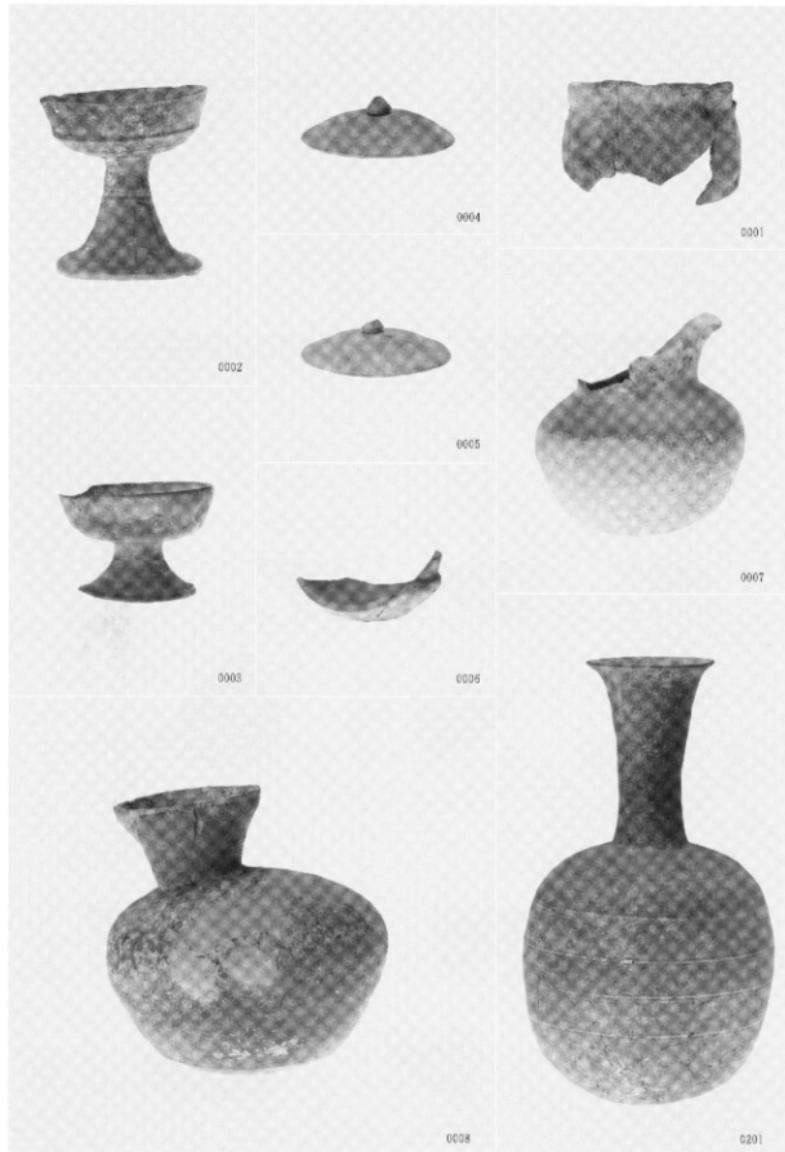
0015



0016



0017



上卷類



3001



3001

鐵製品



3001-A



3001-B



3001-C



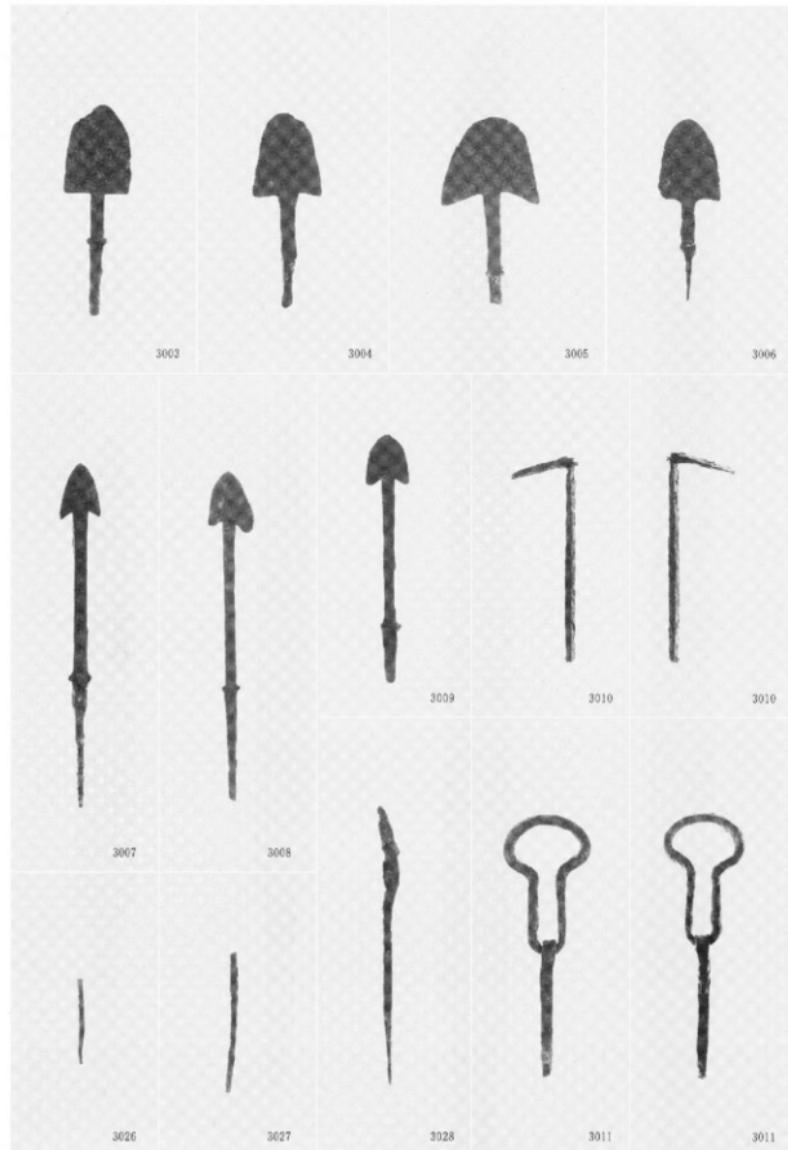
3001-D



3002



3002





4010



4010



4011



4011



3025



3025



3012



3018



3013



3014



3015



3016



3017



3019



3020



3021



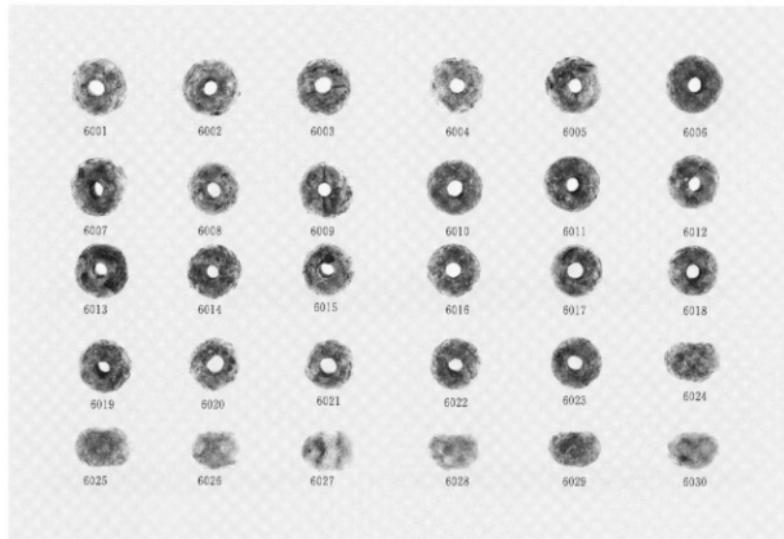
3022



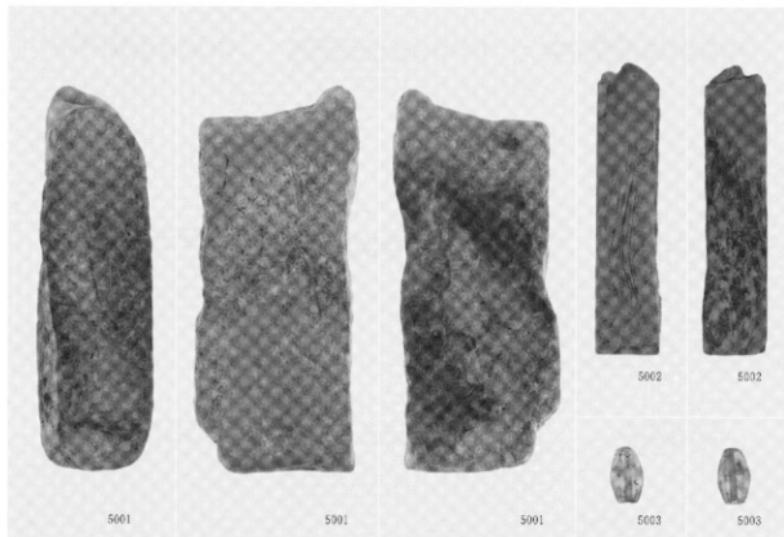
3023



3024



1. ガラス製品



2. 石製品



4001 4002 4003



4004 4005 4006



4007 4008 4009



4001 4002 4003



4004 4005 4006



4007 4008 4009

1. 骨製品



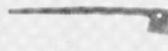
7009



7010 7011 7012



7013 7014



7009



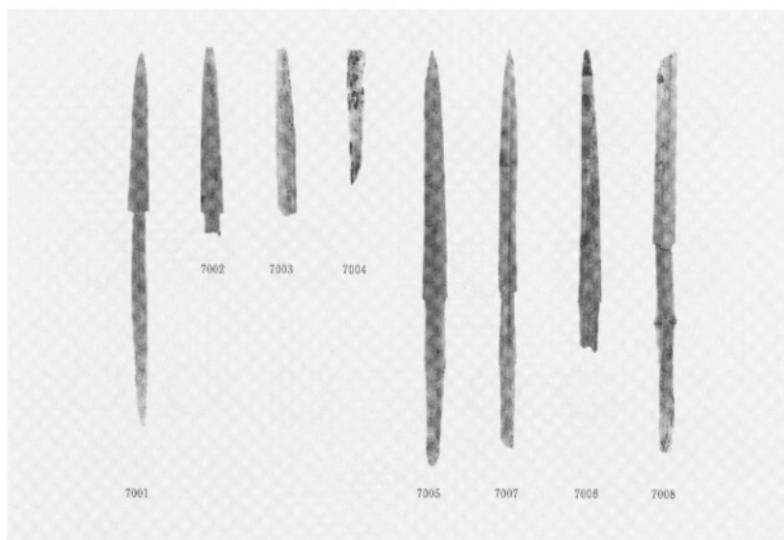
7010 7011 7012



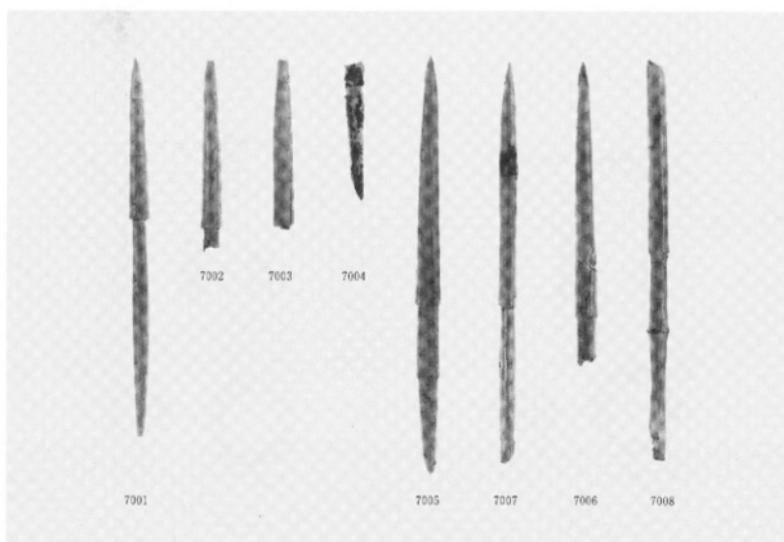
7013 7014

2. 骨角製品

圖版九四
遺物

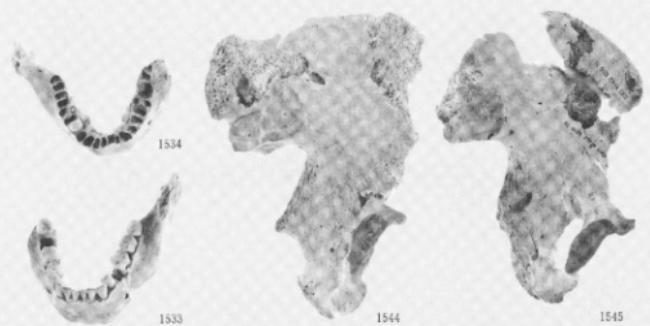


1. 骨角製品

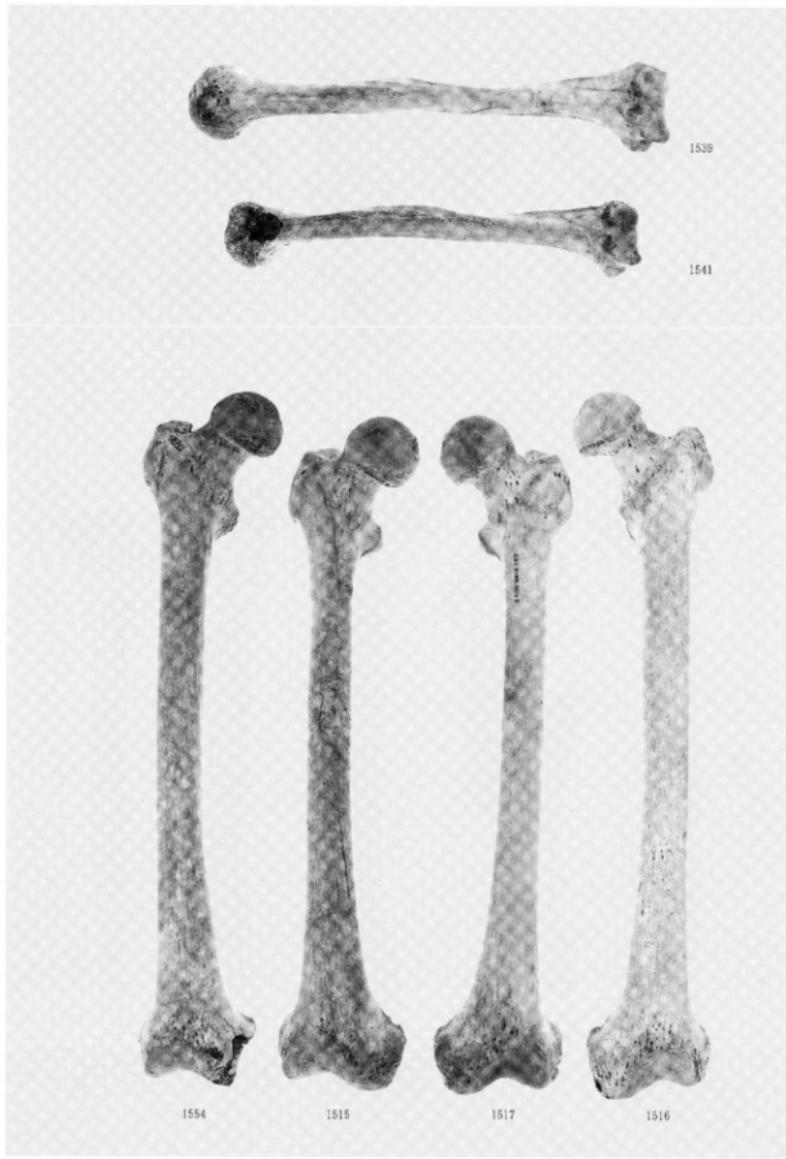


2. 骨角製品

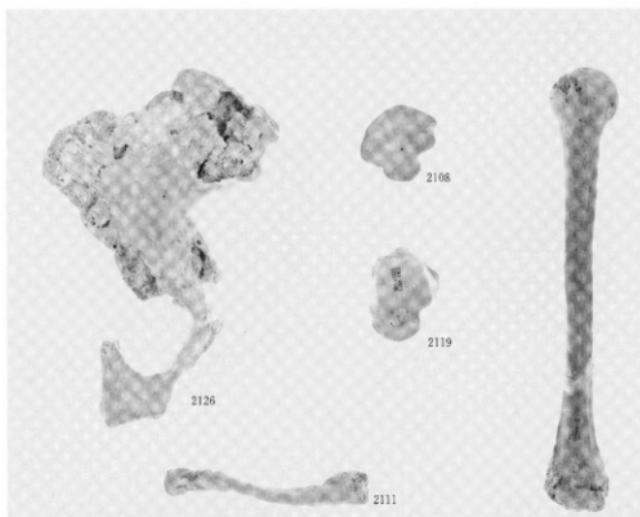
圖版九五
人骨



第15号墓出土人骨



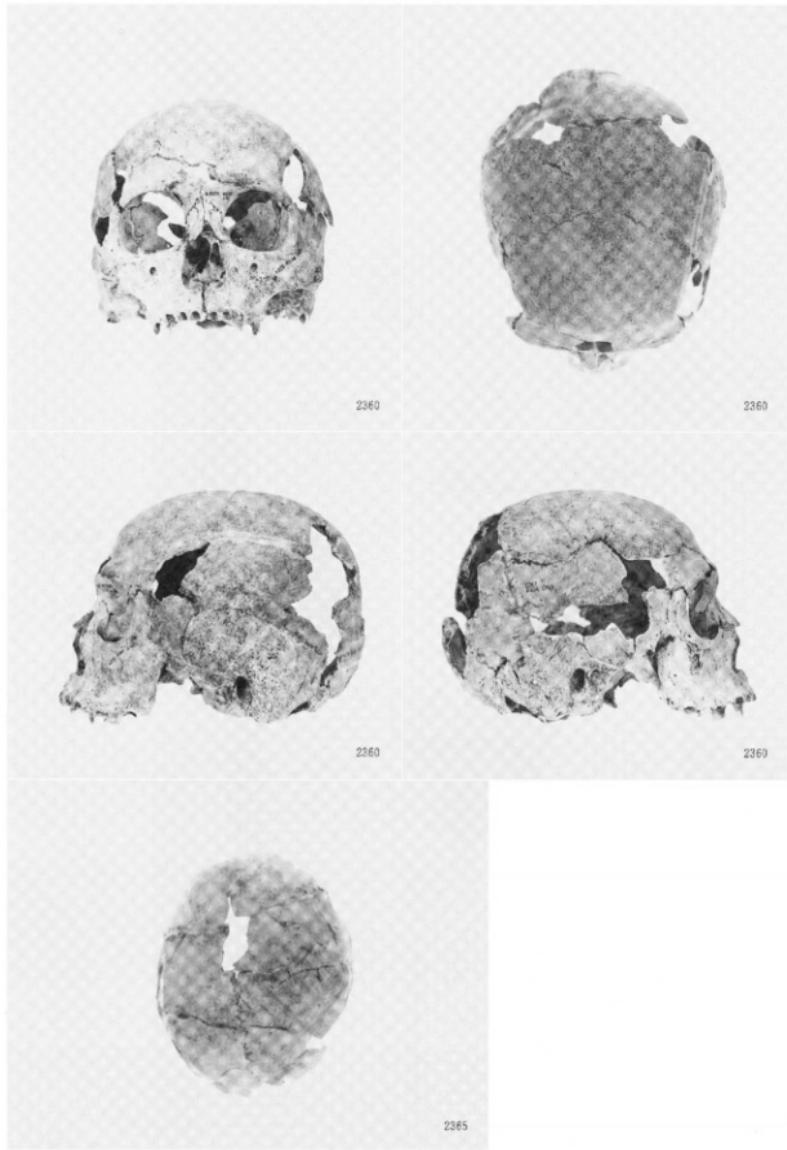
第15号墓出土人骨



1. 第21号墓出土
人骨



2. 第22号墓出土
人骨



第23号墓出土人骨（頭蓋骨）



2362



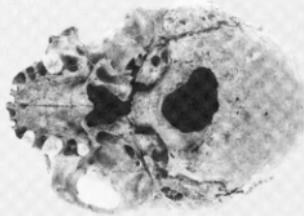
2362



2362



2362

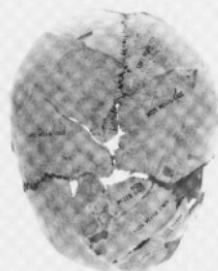


2362

第23号墓出土人骨（頭蓋骨）



2323



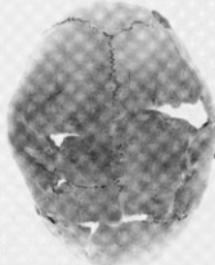
2323



2323



2323



2324

第23号墓出土人骨（頭蓋骨）



2322



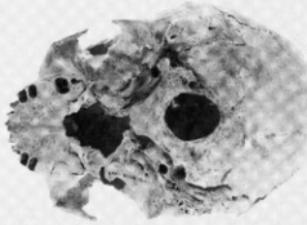
2322



2322

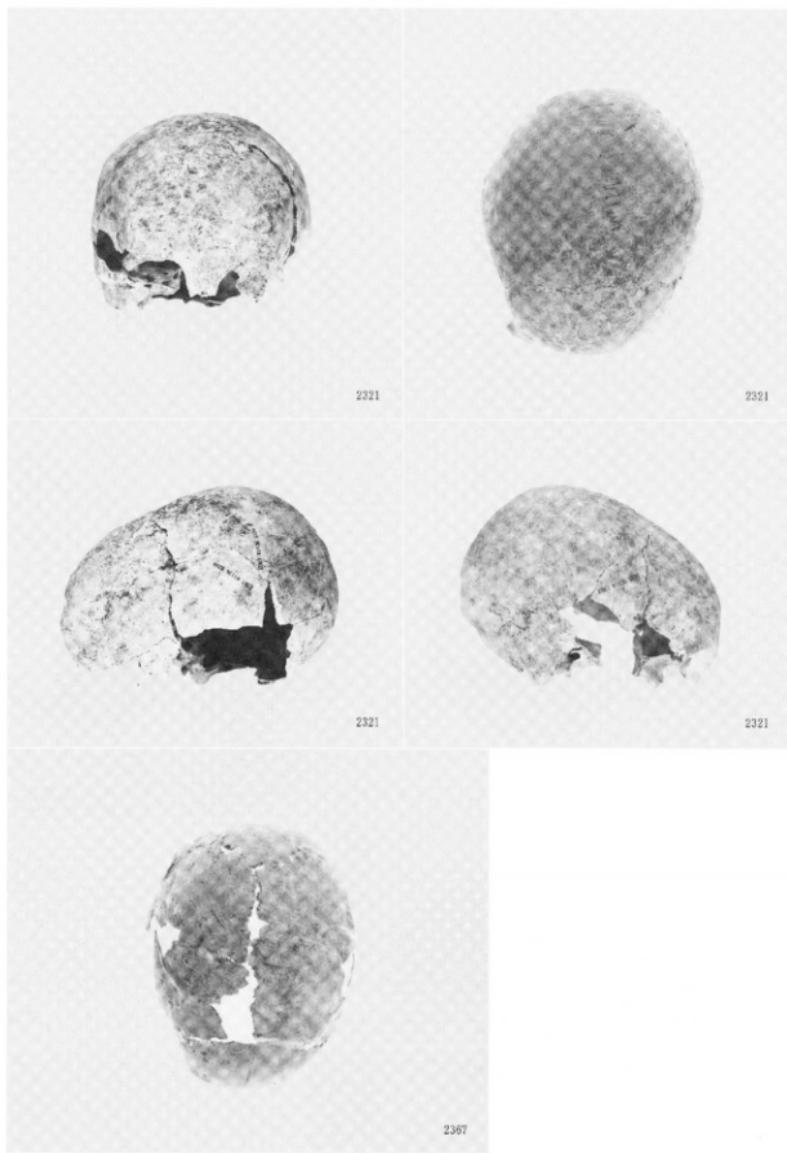


2322



2322

第23号墓出土人骨（頭蓋骨）



第23号燕山上人骨（頭蓋骨）



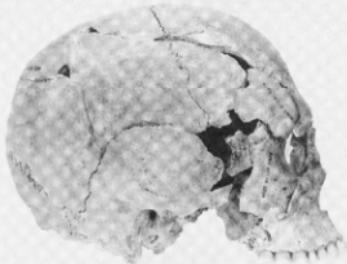
2361



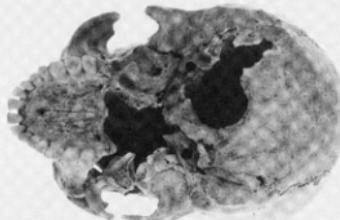
2361



2361



2361



2361

第23号墓出土人骨（頭蓋骨）



2370



2327



2368



2351



2325



2369



2326



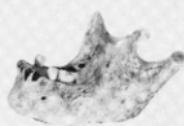
2371

第23号墓出土人骨（下顎骨）

圖版一〇五 人骨



2361



2328



2361

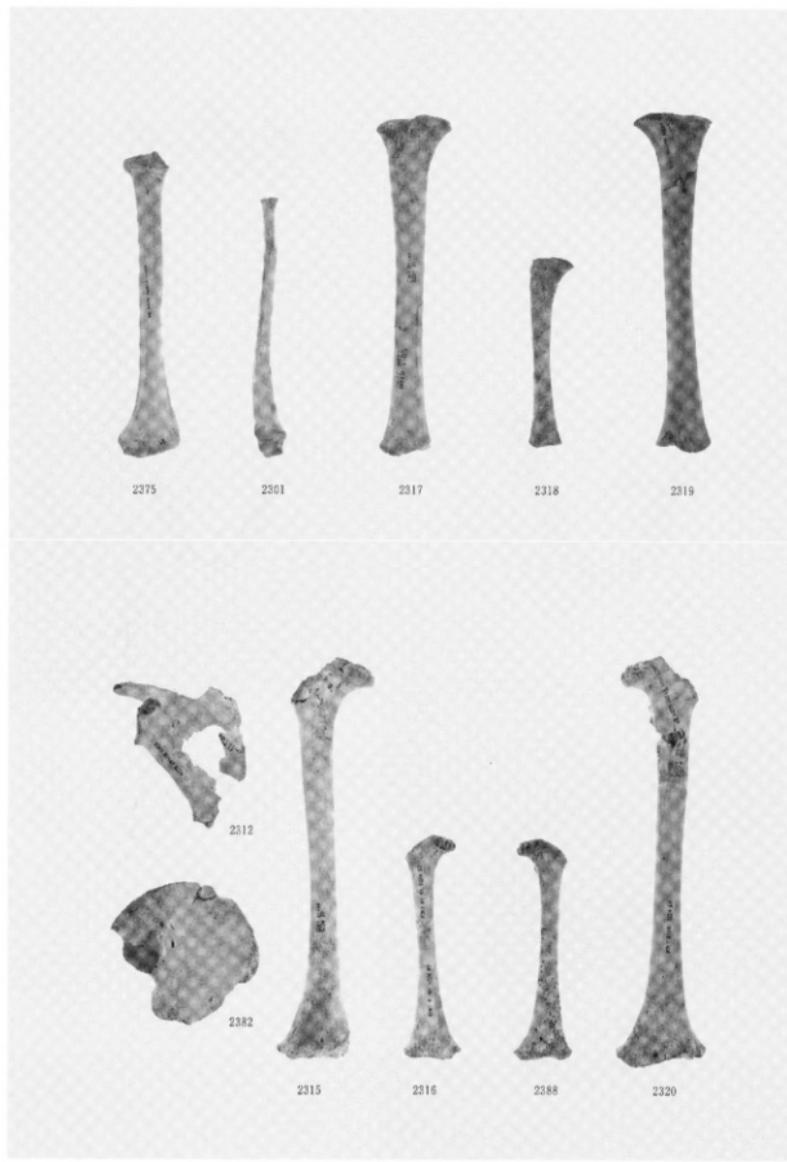


2328



2361

第23号墓出土人骨（下頷骨他）



第23号墓出土人骨（A群出土人骨）



第23号墓出土人骨（B群出土人骨）



第23号墓出土人骨（B群出土人骨）



2386



2378

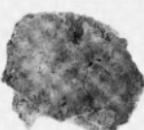


2359

1. 第23号墓出土
人骨 (C群出土
人骨)



2311



2355



2354



2353

2. 第23号墓出土
人骨 (D群出土
人骨)



2372



2377



2308



2309



2310

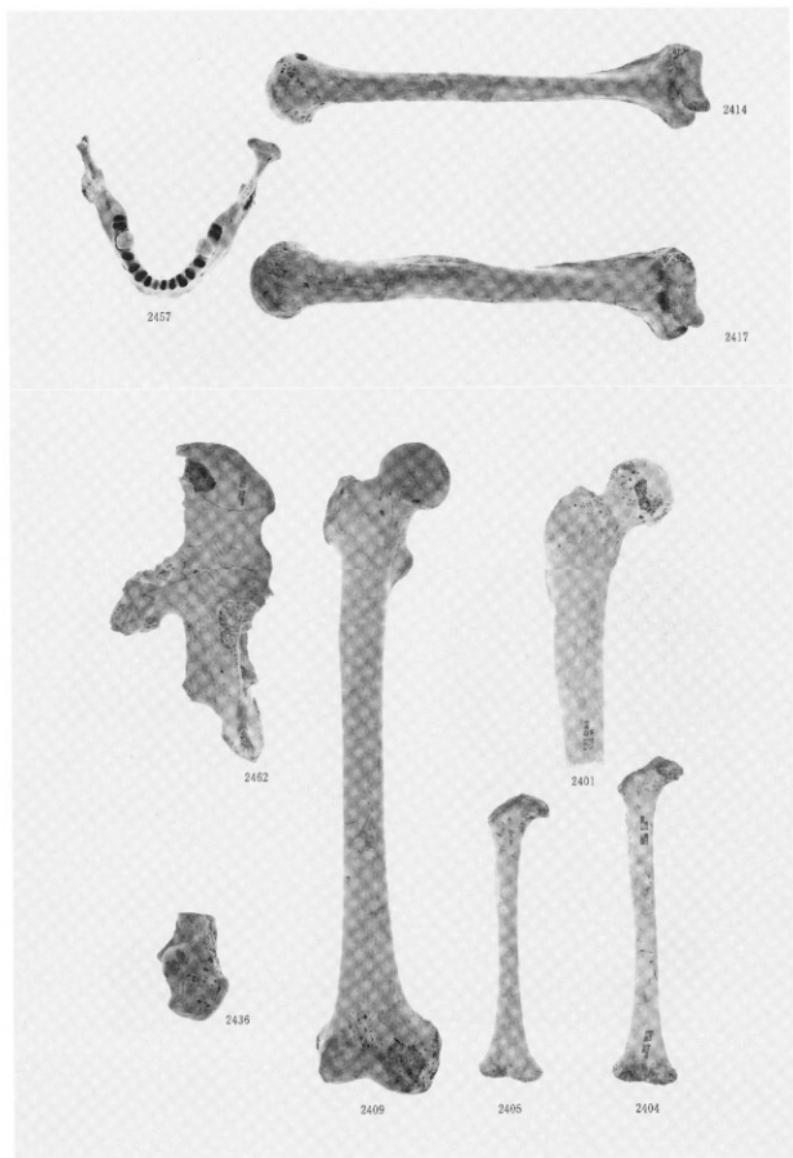


2307

3. 第23号墓出土人骨 (E群出土人骨)



第23号墓出土人骨（E群出土人骨）



第24号墓出土人骨



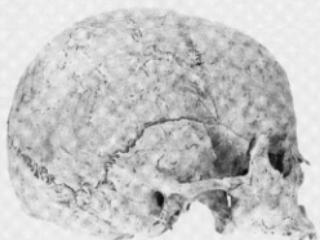
2702



2702



2702



2702



2723

第27号墓出土人骨

高岡市埋蔵文化財調査報告第3冊

江道横穴墓群調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1998年3月31日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市柴野内島710-3
